
蓮華はいつも泥沼に咲く

東雲暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蓮華はいつも泥沼に咲く

【Nコード】

N5525M

【作者名】

東雲暁

【あらすじ】

目的を失い、自分も失ってしまった少女「瑞樹 蓮」は結局、自分の命を捨ててしまう。そんな彼女が目覚めた所は何と魔法の世界、ハルケギニア。もう一度彼女に人生の機会が与えられる。自殺した事を後悔する彼女は今度こそ「ロティ」として寿命を尽くし生き続けると誓う。死亡フラグあふれるハルケギニアから送る頑張り屋で健気な少女のハードボイルドなサバイバル物語（多分嘘）。

*大抵5:5の比でほのぼのしたりシリアスしたりする予定

零話 地上から来た手紙

拝啓。

晩秋の木枯らしが凍りついた野原を走りつける今ごろですが、お母様がいらっしゃる天国は如何でしょうか。

もちろん、そこでは風邪など気をつける必要なんて無いでしょうけど気持ちの問題です。実は私がいるここも最低気温が二十度以上です。ので風邪の心配はありません。それでもこんな前文を長々と書いたのはいわゆる、様式美のためです。

お母様。今日は私の誕生日でしたので、素朴な誕生日パーティをしてみました。だれ一人祝ってくれる人がいなくてちょっと寂しかったけど、もう慣れました。

最早お母様が居なくなってから五年です。その間いろんなことがありました。化粧も習ったし、勉強も沢山しました。運動もサボらず続けてきました。五年前、ただ泣く事しか出来なかった私ですけど今じゃ有名人です。あつちこつちから仕事が入ってすごく忙しい日々です。そう、昨日も仕事を完璧に片付けました。本当に人生はどうなるか判らない物ですね。

お母様。いつか言ってくださったのですね。私の父の事。父はい人だと、お母様は今でもあの人の事を愛していらっしゃると。だから、どうか父を憎まないでねと。

でもですね、いくら敬愛するお母様のお願いでもそれは無理でした。だってね？金と名誉のためだけにお母様を捨てた人を好きに成

れるはずが無いでしょう。だから彼のことをすごく憎んでいました。だから、最後の仕事はあの人にと決めていました。そして昨日私の最後の仕事を終えました。

笑っちゃいますよ。あの人全然私のこと、分からなかったんですよ？ちよつと化粧して、誘惑したらすぐにのつて来ましたよ？もう自分の娘に欲情するなんて、人間本当に汚い生き物だと思いました。仕事も簡単。私の毒唇を吸った父は呼吸不能に落ち、あつさりくたばりました。情けない。先月の仕事対象のある社長さんは息が詰まった状態でも私に襲い掛かったというのに……（まあちよつと避け続けるだけでよかったけどね？）

本当に拍子抜けです。五年もがんばりましたのに。あの方は私の前で何も言えず、何も出来ず、虫けらみたいに死にました。本当何のためがんばったのかな。わたし。

でもいざあの虫けらを殺してみたら、何も感じません。それもそうですね。何せ生まれてから今に至るまで全く顔を合わせてないんだもの。ただ似ている他人。それを気づいた今では何もかもどうでもよくなりました。

だから終わりにすることにしました。何もかも捨てることにしました。もう目的は完遂したからこんな殺し屋稼ぎを続ける必要はありません。でもちよつと心配です。今じゃお母様に申し訳なくて合わせる顔がありません。

だからお母様の居ない所に行くことにしました。お母様はいつでも他人を気遣う天使のような人でしたからきつと天国にいらっしやるはず。私は他人を殺し自分も殺す人、地獄行きです。自殺した人

って本当に地獄にいけるかな？ でも私はいつぱいいつぱい人を殺したから多分余裕にいけるとおもいます。

あ、外が騒がしくなりました。それもそっか。後始末、全然出来なかつたし。

天国のお母様。さようなら。貴方の愛した人を殺してしまつてごめんなさい。そして逃げてしまう私をどうか許してください。それじゃお元気に。かしこ。

11月 12日、17の誕生日に 貴女の娘 『蓮』から

零話 地上から来た手紙（後書き）

プロローグです。

実は明るくかいてみようと思いましたがいつの間にかこう成りました。

手紙形式のアイデアは「まりあ＋ほりつく」から。

どうせ私は想像力足りてなくてほかのものから影響受けやすいし、
潔く最初から何処からをパグって来たか書いておこうと思います

一話表 幽明の間

実は死ぬのが怖いと思ってました。痛そうだったし、何も判らないから不安でもあったからです。仕事上、他人の死は大分慣れていたと考えていましたが、やはり自分の死は別問題だという事を気づきました。自分の死に慣れられる人って有るかな？ちょっと分かり辛い問題です。

とにかく私の自殺は本当に惨めなものでした。三回も毒杯を口元まで持つてきてはこぼしてしまうことを繰り返す。わたしは自分が怖がりだという事を改めに思い知ることになりました。青酸カリの入った焼酒を飲み干した後もテーブルにしがみついて泣き崩れながら暴れてたし。もう恥ずかしすぎます。恥ずか死ですよ。

でも、これでやっと開放されるんだと思ってました。でも、そうですね。神様ってわたしの言う事を一度も大人しく聞いてくれたことないし。予想はしていましたがね！

いま私の状態といえますと、簡単に言えば幽霊です。私が死んでる傍でふわふわ浮いてる状態です。足が透けて見えるから幽霊であつてだと思います。でも動けないし、話せないので想像してたのはちよつと違うかな。

それより幽霊（？）状態で見下ろしてみた自身の姿はもうアウトです。昨夜から着ていた白いドレスは着崩れて肌が丸見えだし、顔は涙と酒といろんな物でぐちゃぐちゃになってます。そう…ですね。例えるなら朝の街中で倒れてる酔っ払いみたいです。

…わたし、もう恥ずかしくて死にます。いえ殺してください。何

の拷問ですか。顔を背けたくても出来ないなんて。これが地獄の正体でしたか。甘く見てました。

それなのに私を捕まえにきた刑事さんたちはそんな私の恥ずかしい姿をじろじろと見るんですよ？調査してるとは分かってるけど、男たちが自分の体を覆したり、服を脱がしたりしてるのを見るなんて複雑な気持ちです。

なんですかあ、もう。女の子の恥ずかしい姿を大人の男たちが大勢集まってジロジロ見るなんて、ほんとぅ最低ですね。

とにかく、わたしは大事な教訓を得ました。

「自殺なんてするもんじゃなかった。」

あ。あの検死官さん興奮してトイレ行こうとしてる。もう危ないですね、本当。

それから自分の体は火葬されました。自分の姿をした何かが一握りの灰に成って行く事で一抹の切なさを感じました。お気に入りの体でしたから。

健康で仕事しやすい体だったのに…勝手に男から付いてきちゃうし。

それと想定外だったのが、幽霊の位置のことでした。なんだか体にくっ付いてるみたいです。だから人々が私の屍を運んだら私（幽霊）も付いて行けました。ちょっとありがたいと思います。今の私は全然動けませんから。一人で残されるよりはいいです。

でも焼却炉の中まで付いていけっちゃんなんて思ってたなくて、すごく怖かったです。扉が閉じられてね、目の前から炎がシュババって燃え上がり始めた時には炎熱地獄の事を思い出したりしていました。

でも不思議に熱いのは熱いですけど、耐えられないほどじゃありませんでした。幽霊って本当に不思議なことがいっぱい。

でも体が灰に成ってから、何だか意識が遠いです。もう本当に終わりが近づいて来たようです。

殺人、姦淫、親殺し… 本当私って大悪人でしたよね。誰かを憎むだけで自分の事さえ愛することが出来ませんでした。もし、もう一度生きられたらその時はもっといい子になれるかな。

そんなくだらないことを思いつつ私の人生は消えていきました

一話表 幽明の間（後書き）

幽霊って動けるもんかな？

私は多分動けないと思います。だってね、実体がないんだもん。

実は瑞樹さんのキャラってあまりシリアスじゃありません。プロローグのイメージは意図とは違い方向に行ってしまったが、これからちょっとずつ整えていこうと思います。

一話裏 黒蓮華の真実（前書き）

火付けは変わり12月23日。

彼女が死んでもう四十日が過ぎてゆく。

深まってゆく冬の合間、担当刑事が語る蓮の真実。

一話裏 黒蓮華の真実

二年間、四十の命を奪い去った稀代の殺し屋「ブラックロタス」。通称、「黒蓮華^{くろれんげ}」。僕は刑事としてこの二年間彼女を追ってきた。

言っておくが彼女は善人じゃなかった。悪人だけを殺す正義の味方でもなかった。むしろ彼女が殺した人はどちらかと言えば善良な人のほうが多い。そして彼女は稼いだ金を寄付したりする利他的の慈善家でもなかった。これから見て彼女はそこらの殺し屋とあまり違わないただの犯罪者だ。

でも彼女は特別だった

まず殺した人物も多様性だ。ある国の大統領から始まって、大富豪、技術士、犯罪組織の幹部、さらには神出鬼没なテロ組織のボスまで。それが誰であっても彼女は必ず殺し、必ず消えてしまう。そんな彼女の犯行は一般人にまで有名になっていた。

そして彼女の犯行の最大の特徴、それは必ず同じ手口で殺すということだった。彼女の犯行はいつも同じ手順で行われる。目標を設定して相手の居場所を探す、そして接触する。接触して四日に成ると目標と一晚を伴う。そして次の朝、彼女は消えて目標は死亡する。死亡原因はテトロドトキシン（フグ毒で有名な）。でも被害者の胃には何の食べ物も残ってない。だから彼女はその目標に純粹に毒だけを食べさせたのだ。

全くこんなものって有りなのか。僕が何も役に立たない検死報告書の破り捨てたのは数え切れない。後輩の青田君（25、童貞）が八

つ当たりされたのも数え切れない。結局、僕たちは何も出来なかった。彼女のことは何も知らなかった。

そういえば黒蓮華っていう名称を考えたのも後輩の青田君だった。ガーデニングが趣味だった彼は、彼女の行動パターンからどこか蓮華のことを思い出させたようだ。蓮華は四日だけ咲いて綺麗に散ってしまうらしい。彼女が目標と接近して四日の朝消えるように。

そう。僕が言いたかったのは僕たち警察が彼女について何の情報も握っていないこと。一月前の僕はただ青田君を八つ当たりする以外何もできなかった。だがそれは一月前のあの日からすべて消えさった。

「本名が本当に蓮だとは想像もしてなかったな。」

最近の僕は黒蓮華事件の報告書を書いている。そして時々ふっとあの手紙を――可愛い字面で書かれた手紙の事を思い出す。

「そうですね。驚きましたよ。あの黒蓮華が十七歳だって…高校生じゃないですか」

隣の席の青田君が僕の独り言に返事をしてくる。憎めないが、空気が読めない。だから君はいつも八つ当たりのターゲットに成るんだ。教えないけど。

「彼女は学歴が全無。十歳まで母親と二人きりペンションで生きていたそう。推測だが外界の知識はテレビで得たようだ。」

「へえ。そうだったんですね。まあ、いまは納得物ですね。あの姿を見ちまうと。」

青田君がにやにや笑う。たぶんあの光景を思い出しているだろう。実は僕だってあれは衝撃だった。僕たちが築いてきた「黒蓮華」っていうイメージを一瞬にぶっ飛ばすほどだったから。

白いドレス、白い肌、白い顔に桃色の唇。体から蒸し出して来る甘い酒の香り。この世の物とは思えないほどの美しかった彼女は涙を流しながらテーブルにしがみついていた。僕は自分も気づかないうちに彼女に近づいていた。そして彼女はそんな僕の服をつかみそのぼろぼろに泣き崩れてる顔を上向きこういった。

—痛いです。苦しい。刑事さん…怖いです。

このとき僕は何もかも理解することが出来た。この子、黒蓮華が何か特別なやり方を用いて今までの殺人をやり遂げていたんじゃない。ただ、彼女はそこに居るだけで周りの人の魂を抜き取っていたのだ。そりゃつかまらないのも仕方ない。この子を一体誰が捕まえるんだ。この美しく可憐で、弱い弱い生き物を。

現に僕はそのとき、黒蓮華の唇を犯したくて気が狂いそうだった。彼女の状態が如実に飲毒の兆候だと気づいてるのにキスしたくなる。苦しみながら怯えてる彼女の姿を見ていると意識の底から熱くて黒い欲望がこみ上げてくる。

—犯したい。汚したい。

自分に恐怖するってこの事か。僕は瞬間的に彼女を押しつけてしまった。そしてやっと周りのことが見え始めた。後ろの青田君と仲間たちは何のことも言えずにただ床に倒れてる彼女をぼうつと眺め続けてる。自分だけじゃなくこの場のすべての人が彼女に注目していたのだった。

「傍から見たら、さぞかし集団レイプに見えるだろうな。」

僕はまだ上手く動けてない脳みそからこんな事を思い浮かべてた。

「変なこと思い出すな。仕事だぞ?」

「でもあれは仕方ありませんよ。だってあの場のすべてがその体に視線釘付けだったんじゃないんですか。」

「それでもだ。」

「はい。でもすごかったな。屍なのに…温気を感じられるって。そして柔らか…」

「青田!君は最近殴られなくて欲求不満か?」

「ハハハ…ジョウダンデスヨ。」

多分、あれは僕たちの幻覚だと思う。体温計は正しく屍の体温を示す。だがそこにいた全員があの子の体を生きているものと感じれた。

「それで立花先輩、調査結果は出ました?」

「そう。君の推量のままだった。流石だな。刑事やめて占い師とかやって見たらどうだ?」

「いえ、それは遠慮しておきますよ。それにしても、へえ…本当にテトロドトキシンに耐性が有るなんて、すごいですね。」

「それだけじゃなく、大抵のアルカロイドが効かないそうだ。幼いころからアルカロイド系の薬は使えなかったらしい。実際、最後の自殺にも青酸カリを使っただけだ。」

「あっちゃ～大変だったね。」

彼女は特別なことは何もしてない。ただ、その唇に―その体に毒を塗りつけて目標の前に現れるだけだったのだ。昨日、この調査結

果を渡されたからもう黒蓮華事件は僕の中では災害のように思えてしかたがない。

「母と一緒に捨てられた子が自分の父に復讐する。これが真実だったんですね。」

「くだらない。それじゃ巻き込まれた人たちは一体何だって言うんだ。」

「でも、ドラマチックじゃないですか。」

「ドラマチックで人が死んでは目も当てられん。今回のことのように。」

青田君はその日から妙に黒蓮華のことを臆惧している。前の週末は直接、黒蓮華の火葬に参加し彼女の最後の道の手を見送ってきたようだ。それも喪主として。

「それでどうしたんだ。遺骸は。」

「撒きました。彼女が母親と過ごしたあの家の近くに湖があったので。」

「あ、そう。」

もうこの報告書もそろそろ終わりに近づいている。二年も引きずってきた事件だ。海外出張も茶飯事だったし、先月も急に香港行きが決まって、大事な約束（母からのだ。多分お見合いとかだろう）もキャンセルしてた。それももう終わり。すっきりしたような、寂しいような。

そんな事を考えていたらいつの間にか缶コーヒーを買ってきた青田がそのひとつを僕の机に置く。見上げてたらいつものようにニヤニヤ訳分からん笑みを浮かべてる。

「立花先輩。」

「なんだ。」

「明日、デートしませんか？」

「…善処する。」

やっぱり。寂しいんだ、僕。そして。

「瑞樹、蓮。」

「うん？どうしたんですか先輩。」

「なんでもない。」

だれもかも彼女の魅力に溺れてた。皆が彼女を愛した。でも、彼女は誰にも人として扱われてない。ただ、欲望の裁け口として彼女は体を提供しそのかわり命をもらう。

その心は何だったかな。夫殺しの螳螂？棘のある薔薇？もしかしたら…

「なんでもない…」

蓮。貴女、もしかしたら寂しかったんじゃない？母をなくして自分を愛せる誰かを求めた。それで…その父親に自分の事を分かってもらえなくて絶望したんじゃない？あんた、やっぱり可愛い人だな。

致命的に危なくて美しい、でも弱弱しく可愛い獣。私、貴女のとがそんなに嫌いじゃなかったよ。

いつか、どこかの世界で巡り会えたらその時はもうちょっと仲良くなりたいね。

一話裏 黒蓮華の真実（後書き）

「立花 恋^{れん}」

リアリストなエリート刑事。

シヨットの髪にデニムのジャンパがすごく似合うクール系美人。
特技は柔道、趣味はクレイニングゲーム（しかし下手）

「青田 准^{じゅん}」

靈感溢れる新米刑事。

どこにも居そうな外見で捜査に有利。

特技はマラソン（無限の体力）、趣味はガーデニング。

二話表 新しい産声

気がつけば夜でした。

空に星がいつぱい広がって、刺繍で飾られた黒い絹のようです。

時々、薄い羽みみたいな雲が星たちの間を走っていて、暖かな気持ちに慣れる美しい風景。

空には青いお月様と赤いお月様が浮かんでありましたし、空に浮かんでる星たちも色々違うけど確かなのは綺麗だということです。

「あら。ロティ、起きたの？御免なさいね。」

「あう？」

その星空に魅入られぼつとしてる私の耳元を優しい声が聞こえました。

そして、大きくて柔らかい手が私に向かってさし伸ばされる。ゆっくりと持ち上げられている感じがする。

―私、いま―抱きしめられている？

「うぐ…えう…う…」

「何でだろう？お姫様、今日は機嫌が悪いのかな？何で泣きそうに成ってるの？」

お母様？お母様？本当に？

声も違うけど、顔も違うけど、この匂いは確かにお母様です。それだけは私は絶対間違わない自信があります。

―え？どうして？お母様は天国にいらっしやるんじゃない？

「うぐ…うわああん～～」

「よしよし、いい子だから怖い夢でも見たの？」

—はい、とっても。怖い夢でした。

その日から、私は神様のことをちよつと好きに成れました。

□ □ □ □ □ □

はい。皆さん、こんばんは。

「みずき れん」こと「ロテジア・ド・ラ・メルフォゼ」です。

外国人みたいな名前でしょう？私もいまだにこの名前には慣れていません。

でも、生まれ変わってお母様から授かった大事な名前です。

それにほら、ここは普通、こんな名前だそうです。

私の姿もかなり変わりました。

瑞樹蓮

以前の私は黒い髪に背も凄く小さかったけど、今の私は銀髪で背もロライ同年代の子供たちと似てます。北欧人みたいです。

そして不思議なのは瞳が緑色だったことです。へえ～こうなんだ。でも髪色と瞳の色が違うなんてちよつとバランスが悪いです。

それでもお母様は可愛いつと言ってくれました。

—緑の瞳って特別だから大事にしなさい

分かりました！それからこの瞳のことが好きになりました。
何しろお母様の言うことだから間違いありません！！

てへへ〜お母様〜

はっ！いけない、いけない。

私は今大事な事を挑戦している最中でした。
それは即ち魔法のことです！

「ロティ〜ご飯、食べて！何処に行ってるの？」

「お母様！」

「だめでしょう、もう。メリルが困ってるのよ？せつかくのご馳走が冷めてしまうんだから。」

メリルさんは家のメイドさん。十八歳の大人っぽい人です。

ブロンドの長い髪をすごく上手に巻き上げて綺麗に纏めています。

仕事もいつもきっちりさっぱり。掃除から洗濯、料理全て上手なお手伝いさんです。

優しいし、それにすごい美人さんです。

町のパン屋さんちの長男のマルコさんとお付き合いしているんだって。

結婚はマルコさんが店を継ぐ三年後で行う予定らしいです。

マルコさんって運がいいな〜メリルみたいな人をお嫁さんにもらえるなんて。

「でも、お母様。わたしですね、魔法を使ってみようと思うんです。」

「はい、はい。もう、後になれば嫌でも頑張らなくては成らないんですよ？」

「うん、わたしもほかの魔法じゃなくてね、お友達を呼ぶ魔法だけやってみたいんです。」

「あら、そうだったの？でもお友達って町に行けば有るんじゃない？」

「…」

はい、何でそんな目で私を見るんですか。いじめですね！いじめですよね！

…ええ、確かに私は友達有りません。それはそうですよ？

此処ってちよつと辺境だし、元々私の年頃のお子様たちって余りありませんもの。

更に町で遊ぶとしたら何か避けられますので遊べません。

でも、これはお母様には秘密です。

お母様って天然ですからなぜこうなってるのか、ご存じないと思います。

だから貴族のお父さんといちゃいちゃしながら幸せですよ。

まあ、これくらい語ってれば皆さんもお分かり頂けたと思います。

お父さんはトリステイン？その国の貴族です。爵位は伯爵。

それなりお偉いさんらしいです。宮廷で仕えているからあまり家には来れません。

それなら家族全部トリスタニアで住めば良いのでは？って思つかもしれませんが…

でもお母様が平民だから身分に厳しいこの国の都に住むのは難しいです。

先に記したとおり、お母様「カトリーヌ・ド・ラ・メルフォゼ」は平民です。

まあ、それでもそこら辺の平民とは違うんですけどね。

美しいし、優しいし、綺麗な声だし、聡明ですし、お母様ですし……でも其れだけじゃなくて身分もただの平民とは違うらしいですよ？お母様のお兄さんが教会の枢機卿だそうです。

私も何度か見たことがあります。

何故かお母様とはあまり似てない方でしたけど（すごく骨っぽいでした）でもお母様と同じく優しい人でした。前の誕生日には私に沈香で出来た黒くて艶々なかんざしを送ってくれました。

今も挿してますよ？お気に入りだもん。

「とにかく、お母様。わたしはお母様が使ってた友達作り魔法がやりたいんです。」

「そう？使いも召喚は学校に行つて皆と一緒にしたらいいのにね。」

「駄目でしょうか？」

「もう……分かりました。でも面倒をちゃんと見るのよ？」

「はい！お母様って大好き！」

「あらあら。」

□ □ □ □ □ □

お母様と私は城の中庭に來ています。

お母様曰く使い魔が大きい場合に備えて室外でやるものらしいです。でもお母様は何時も室内でやってました。

「それはね？お母さんの使い魔は決まっているからだよ？ロティも見たこと有るでしょ？」

「はい。蜻蛉とんぼですね？」

「そうなのよ。だから室内でも大丈夫。」

お母様の使い魔はトンボです。春に召喚して、冬には死ぬ。だから次の春にはまた召喚します。ちなみに今はほぼ冬だから死んでます。私は精神を集中して呪文を唱えます。他の呪文はどうでもいいらしいですが、この呪文だけはあまりにもプロセスが複雑でブラックボックスが多く、お母様でも勝手に呪文を変えられないみたいです。お母様でも出来ないことがあるなんてちょっと感じ悪いですね。なんですかこの長くて変な呪文。ブリミルって悪趣味な人だったに違いありません。

「我が名は『ロテシア・ド・ラ・メルフォゼ』。無数な星々を司るアカシヤ。我の運命に従いし、”使い魔”を召還せよ」

ーポン

「あれ？」

「あら？」

煙に近い風が吹くかと思えば庭には幾何学的な記号が刻まれています。そしてその上には私がこの後の人生とともに歩む私の使い魔が有りました。

でも…何か変です。

「お母様、これって何でしょう。」

「種…かな？」

そうです、魔方陣の上ではやけに大きな目の種がひとつ置かれています。

丁度、お母様の親指くらいの大きさです。お母様、あれを持ち上げて日差しに照らしてみたり、においを確認したりしてます。もう可愛いんだから…

「でもお母様。これって、友達になれるかな？」

「どうかしら…やってみる？」

「はい。」

種は黒い艶を帯びてます。でもそれ以外は全くもって普通な種です。動くこともないし、話すこともない。ただそれだけでした。でも不思議にも共感してる感じがします。

「我が名は『ロテシア・ド・ラ・メルフォゼ』。無数な星々を司るアカシヤ。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

>>しかし何も起こらなかった。

「。。。」「

「。。。」「

>>しかし何も起こら…

いえ、それはもういいですから。

とにかく私が呼び出した種には何の変化も見当たりません。

「とりあえず植えてみたらどうか？」

お母様つてば、いつの間にか鉢を持って来てます。

手には移植ごてが二つ。手袋だって2双です。

完全に私と土あそびする気ですね？全くお茶目ですから。

二話表 新しい産声（後書き）

「文の形式」

本来、ひとつの段落はまとめてましたけど、可読性のため文章単位に分けて置く事にしました。

「精神年齢について」

私の考えでは精神は肉体に依存すると思います。

だからロティの精神年齢は多分十才くらいだと思います（17 + 5 / 2 = 11）

それじゃなくても、蓮は世間知らずで天然だったから精神年齢は低いと。

二話裏 育児日記

××年11月12日

一晚中続づいた緊張が解いたら後は目も開けられなかった。
助産のお婆さんに体を拭いて貰って、あとは休むことになった。

生まれた子は女の子だった。

ばやけた視界のせいでよく見えなかったけど傍から感じられる温気が心地よかった。

わたし、お母さんになれた。

不意に涙が流れた。生まれてくれた赤ちゃんに対しての感謝の気持ち溢れる。

こんなお母さんから生まれてくれて本当にありがとう…

「奥様。名前はどうしますか？お館様と事前にお決めになられたのでは？」

「あの人、浮かれ過ぎて変な名前ばかり言い出したから…」

「困りましたね。お嬢様の名前。」

実は、思っていたことがあった。

私、そして世界の汚れにも染めず美しく気高く育てほしい。だから

「ロテシア。この子の名前はロティです。」

沼に咲き、汚れなく美しく。穏やかな香りで人を癒す。
そう、貴女は蓮華^{ロトス}のように育ちなさい。

□ □ □ □ □ □ □

××年月12月21日

夜、ロティと一緒に夜の庭でいた。

庭には解け残りの雪が散らばってる。五日前に降った今年の初雪の名残だ。

空は綺麗に光っている。美しく輝く星たちで私はこの子の未来を占う。

率直、この子の未来は波乱万丈そのものになる確率が高い。

この子のアルムンテン（主星）は何時も危機と背中合わせになっている。

幸い、この子には特定できるアナレタ（殺星）がなく寿命は長いはず。

この先、わたしはこの子に自分が今まで得た全ての力を授けようとしてる。

もしロティの未来がただ平坦なものになるなら、これらの力は使われることもなく失われるんだろ。そう、そうなるよう願う。

そんな事を思っていると、揺りかこのロティが目を開けた。

あの子は不思議にも寝起きがいい。だから起きても余り泣かない。もちろん泣かなければ私的には助かるんだが、ちよつと危険。

赤ちゃんって言うのは一人で居るだけで事故が起きうる生き物だから。

何だかロティが空をじつと見ている。

見えもしないはずなのに、かわいいな。もう。

「あら。ロティ、起きたの？御免なさいね。」

「あう？」

今、私のほうを向いた。驚きだ。まだ生まれて一月だというのに。
(私も出産で調子が戻ってないのに)

ロティって成長早いのかな。よし、抱きしめてあげよう。

私はおくるみに包まれて芋虫みたいになってるロティを持ち上げた。それを私に出来る最大限の注意を払いながらそっと抱きしめた。私の胸でもじもじするロティ。赤ちゃんは弱い。私の些細な間違いでもこの子には災害に成り得る。だからこそ注意しなければならない。

「うぐ…えう…う…」

「何でだろう？お姫様、今日は機嫌が悪いのかな？何で泣きそうに成ってるの？」

ロティが泣きそうになる。

このくらいの赤ちゃんって顔がしわしわだから本来何時も泣いてるように見える。

でもわかる。私は母だから。この子は今、悪夢から覚めたのだ。

「うぐ…うわああん…」

「よしよし、いい子だから、怖い夢でも見たの？」

怖い夢。そう怖い夢は何時も私たち人間を苦しめる。
でもね、ロティ。安心してね。お母さんが守ってあげるから。

お母さん、いまでは魔法もひとつまともに使えない身になってるけど。

不思議にも全盛期よりも強くなれる気がするの。

この生活、この名前、愛しいあの人、そしてロティ…

この幸せの形は誰にも譲らない、奪われない、壊させない。
だから、私は今強い。

私はお母さんだから。

□ □ □ □ □ □ □

××年08月12日

魔女。

教義に背く魔術を以て世を乱す駆逐されるべきの悪。

私は長い間その「魔女」という侮蔑的な呼び名を背負っていた。
それもいまや夜明けの悪夢のように消えかけている水泡のよう…

「あうあうば」

「あらゝかわいいゝ本当にたゝれゝに似てるのかな？」

あの悲劇からも五年が過ぎた。

魔女と忌み嫌われた「カテリーナ・ストウレーガ」はもうこの世にない。

あの人に出会ってから、名前もトリスティン式に変えて苗字も貰った。

いまの私は「カトリーヌ・ラ・メルフォゼ」。平民出身で貴族の

正妻になった幸運の女。

夜中に起きて泣き続けたあの日を境に、ロティはすすく育っている。

まるで体という器に、魂が宿ったみたいに。

あのこはその日から私の顔を見ると必ず笑う。

そして長い間彼女の傍から離れると泣く。

今ではお座りして私の前で何かを見せようとしている。
生まれたときの弱さはもう感じられない。

もうすぐ彼女の初めての誕生日だ。

そう、町の人たちと宴をしましょう。

たくさんご馳走食べて、たくさん歌って、たくさん踊る。

いっそ、祭りの日にしようかな？どうせ収穫祭との日も近いし。

□ □ □ □ □ □

××年05月30日（ロティ四歳）

突然だが私の愛娘であるロティの事を記しておく。

ロティは可愛い。

「お母様」

—ほら、そうでしょう？

親バカという訳だけじゃない。（ある程度そういう所もあるって事は否定しない）

客観的にみてもロティの可愛さは際立つ。

あの人から貰った銀髪と傷ひとつなく綺麗な肌もそうだったけど…

何より行動とか仕草が一々可愛い。

人を対するときの目の移し方、顔の向け方、笑い方…

誰かに教わってもないのに、歩き方、座り方も完璧だ。

それは貴族たちのマナーをよく守ってるって事じゃない。むしろマナーは悪く、教えてもあまり変わらない。

でもその行動一つ一つのすべてが相手の心を揺さぶる。

嫌な例えだけど、まるで遊女とか娼婦のスキルを思い出させる。

「お母様、私、お母様と遊びたいな」

「でも、ロティ？自分のやることは全部したの？」

「はい！花に水もやったし、ロビン（薄茶色の斑の白馬）のご飯もやりました。」

「そう？偉いね、ロティは。」

「てへへ」

今もロティは自然に私の腰に抱きついて来ては色っぽい上目使いでお願いするし、そのまま花が咲いたように笑って、そっと離れるようにして私の身が無意識にそれを追いつくよう前に傾くと、くると身を翻すよう避け、今度は腕にしがみつく。

誰が教えたのこれ。私でさえ全然太刀打ちできない。お母さんなのに。

自分の娘の将来が本当に心配になってきた。

□ □ □ □ □ □

××年10月25日（ロティ五歳）

今日はロティが使い魔（？）を召喚した。

最近私はロティに色々を教えていて、魔法もそのひとつだった。こんなに可愛いロティ、でも自衛の能力が全くないロティにとつてその可愛さは自分を危機に追い込むものに過ぎない。

だから教えることにした。迫害された私の魔法も、長い間失われた星見の占いも、罠と毒の使い方と対処方法も…

本来はその筋の人だけが習う技術。これを教えることによってロティに余計な危機が迫る可能性もある。

でも自主性の問題だと思う。ただ怯えるだけじゃなく、運命を切り開けるためには力が要るものだから。

教えてみたらロティの暗記力は大した物だった。そして毒と罠に関してはまさに聞一知十の勢いで知識を吸い込んでゆく。

でも他のものは全くだめだった。一つを教えるためにはほぼ一月が必要でそしてそれを自分のものにするにも時間がかかる。

結局、魔法は諦める事になった。基礎理論だけは教えてあげたから後は学校に任せることにする。でも占いは教え続けて見ることにした。

幸いロティは意欲だけは十分だった。

この子、基本的に私とする全てを楽しむ傾向があつて私が難しい事を教えても勉強を嫌いに成ったりはしないらしい。

話は戻ってロティの使い魔だけど、とんでもない物が出てしまった。

使い魔って言うのは基本的に動物を呼ぶものだ。

それじゃないとゲートを潜り抜けないし。どうやったんだろう。でもロティが召喚したのは紛れもないただの種だった。

失敗とも思ってたけど使い魔との繋がりには確認できた。

だから正真正銘、あの種はロティの使い魔なんだ。

あとでロティと種を植えた。

二人で庭の土を掬い上げて鉢に入れた後、ロティの種を埋めるように植える。そして水もやり庭でも暖かな場所においた。

芽も出てないけどロティはその使い魔にスクスク（すくすく育つように）という名前をつけてあげた。

…無事に芽生えることが出来たら良いな。

二話裏 育児日記（後書き）

「カトリーヌ・ド・ラ・メルフォゼ」

魔女と呼ばれた占い師。

ブリミルの教えに反発し魔法理論を立て直そうしてた。

それが原因で迫害されることになり魔女と呼ばれた。

今の夫である「ジェローム」はそんな彼女に一目惚れし、彼女を追いかけることになった。

彼女は結局彼の熱意に負け、今後は普通な生を生きることにする。

本来はロマリア式に「カテリーナ」と言う名前だったが入籍する際にトリステイン式に変えた。

「占星術について」

そうです。おとボク2です。

これ書いたのがあれクリアして直ぐだから思いついてやったんです。でも、自分なりに勉強してみたけどやはり使いどころ難しいなっておもいます。

だから、これからロティが不思議な行動をするための逃げ口として使おうと思います。

なんで、みんな原作知識持ちの主人公を使うのか分かる気がします。

三話表 トリスタニアで昼食を（前書き）

時間を飛ばしてもうロティ十四歳。
そろそろ、学院に行く頃です。

三話表 トリスタニアで昼食を

それじゃ、出発前の最終点検します！

えっと。まずは杖にマントですね。魔法学院行くんだし…有ります。

次は身分を証明できる紋章付きの小さな短刀も…ありますね。お母様がくれた指輪は…右手の小指できらきらって輝いてます。そして学院の入学申請書は細長くて丸い文箱に入っています。庭師のおじさんから貰った接木用の切り出しナイフも有るし、予備の服、下着、etc…。

最後に私の使い魔、スクスクです。長旅に疲れないように先週、鉢替えをしました。鉢の上には鉄網も被せてあげました。これで安心。間違ってクロエ（愛馬、ロビンの娘）から落ちてもこれなら平気ですよね！

よし、抜かりなし！これから学院いきます！

町の入り口までお母様とメルルさんが見送ってくれました

メルルさんの子供のラルク君（8歳）も町で出会って一緒に見送ってもらいます。

ラルク君はちょっと内気ですけど、とってもいい子だから個人的にお気に入ります。

見送る際にお母様は凄く心配してくれました。

「私が言ったこと覚えてる？」

「はい！えっと、信頼できる友達作ることですね！」

「そう。道を示す友達、隣を歩く友達、背中を任す友達。そんな友達を作りなさい。」

お母様は指を一つずつ折りながら話してくれました。

「ああ、でも男は気をつけなさい。いえ、いつそ近づかないほうがいいのよ!」

「はい!男が来たら逃げます!」

「よし!それじゃ行つてらっしゃい。」

「お母様!行つてきます!」

クロエに跨つて手を振ります。

メリルさんもラルク君も手を振ってくれました。

「手紙送つてね!」

「毎日、書きます!」

私はそうやって生まれてからずっと(・3ヶ月)過ごしてた故郷を後にした。

□ □ □ □ □

「クロエ!クロエ!頑丈で勤勉だね!」

「ヒヒーン!」

やはりクロエはいい子です。休み休みで来たとは言え三日もかかる距離を嫌といわずに歩いてくれました。私のせいではば露宿だったにも関わらず機嫌もいいようです。

なんていい子！お姉ちゃん泣いちゃう（うるうる）

それも今日で終わり。私はついにトリステインの首都、トリスタニアに着きました！

入学式は確か明日になるはず、だったら今日はクロエと暖かい宿で夜を過ごすことにします。

「それにしても本当にトリスタニアはちっちゃいな」

それでも都だし、ちょっと期待してましたけどね。本当に小さく、臭う町だな

いつそ領地の町が綺麗ですよ！お母様は綺麗好きだから、町の掃除を何時もしてるし。

私も水の魔法が使えると掃除を一緒にできると思うけど。残念にも私、魔法は苦手ですね。

そうだ。私、宮廷いつてみたい！お父さんに会えるかも！

お父さん何時も忙しくて一年に二月ぐらいしか領地に戻れません。こんな時でも娘として、孝行すべきだと思います。

そして、まあ凄く忙しいとは分かってますが、伯父さんにも会ってみたいです。あれこれもう二年もあってません。

そんな訳で宮廷の前です。どうやってお父さんを呼べば良いでしょうか。

男の人はちょっと怖いけど、何だか都合よく女の人も居ます。えっと、衛士でしょうか？銃とか持っていて、他の人たちは皆、槍みたいな獲物を持ってるけど？

よし、それじゃお父さんに連絡入れてもらいます

「あの… 衛士さん。」

「なに？そんな怪しい服装なんかして？」

そうですね」

言っただけで、私はいま大きめのローブで顔まで隠してま
すよ。」

男対策だけど、こんなときには不便ですね。

「衛士さん。私、ここで働いているメルフォゼ伯爵に会いたいんで
す。」

「はあ？何言ってるの、君。気は確か？」

「そんな！わたし、こう見えても頭は大丈夫な方ですよ！」

本当、いくら私が田舎娘だとしてもそれはないです！

「ここはね？この国でも最も偉い人たちがいらつしやるところだよ。
君、宮廷ってしってる？」

「それくらい知ってますよ！全く失礼ですね！」

「そしてでね、メルフォゼ伯爵様はこの宮廷の物資の出入りを総括
する実務官長でいらつしやるんだぞ？洪くて優しい美男だよ？」

「うわ！お父さん、凄い！私ってお父さんいつも家では掃除してる
から掃除夫とかだと思いました！そしてさりげなく人気有る？」

「君、頭は大丈夫？医者を呼んであげようか？」

「心配されてます？私の頭？」

むっ。衛士さんが私のことを頭がかわいそうな人扱いしてます。

それでは、私の秘密兵器である、紋章つき短刀の出番ですね。

私はかばんの中を漁って短刀を持ち出しました。完全に印籠です
ね。

「私はロテシア・ド・ラ・メルフォゼです。お父さんに会いたいから連絡だけでもしてくれませんか？」

「え？」

衛士さん目が二倍に大きくなりました。今まで後ろでくくつと笑つてた人は咽て咳が止まらないそうです。

「だから。娘が、お父さんに、会いたいといっていますよ！」

□ □ □ □ □ □

「まったく、もう。酷い目にありました。」

「まあまあ。君のその姿つて怪しすぎるからな？お父さんがお昼を奢つてあげるから。」

お父さんはいい人です。お母様が好きに成れたことも理解できます。

なんていうか一途な方ですよ？だから、わたしも好きです。

この世で危なくないたった二人の男ですし。

ジェローム・ド・ラ・メルフォゼ。私の父の名前です。

銀髪（私の銀髪の元）の総髪でしてね、ひげは綺麗に剃つて優しい感じの顔です。

ちょっと、優柔不断に見えるのが玉の傷です。でも実際には相当決断力ある人です。

たつて、平民のお母様に惚れて結婚しちゃったし。領地も元はトリストインの中央だったけど辺境に移したし。

「お父さんがそうおっしゃるなら我慢します。」

「そう。ロテシアは優しいね。」

「ええ。お母様の娘ですから。」

「…僕の娘でもあるんだよ?」

「そういえばそういうことになってますね。」

「いや。真正正銘に君は僕の娘だからね? 誤解されるようなこと言
うんじゃないよ。」

お父さんって今日は忙しかったみたいです。

魔法学院って各国の人材が集まるから、それに伴ってトリステイ
ンの人口流入も多くなったので宮廷から監督の形で町の管理を手伝
っていたそうです。

忙しいのに呼び出してしまっただけで申し訳ないです。

「いいよ。どうせお昼食へに出ようとしていたから。」

「口に出しましたか、今?」

「いや。何かそんな感じでさ。」

お父さん、うれしそうです。でも勝手に心を読むのはご遠慮
させて頂きたいと思います。

そうして私とお父さんはカフェ? みたいな所へいきました。
考えてみれば私この世界で外食したの始めてかもしれません。

「いらつしやいませ。ご注文は如何なさいますか?」

「ボクは… 昼だし軽く済ませるかな。ガレット(クレープみたいな
ものにハムとかチーズとか添えて食べる料理)にしよう。そしてコ
ーヒーを。」

「コーヒーはウィスキー、クリーム入れて、よろうしいですね?」

「ああ。で、ロテシアは?」

なんか格好いい！あれってそうですね？いつものお願いしますってやつですね？

でも私は何を食えばいいのか分かりません。何せはじめてですから。

「どうしよう…困りました。考えてみれば外で食事してたことありません。」

「ふむ。だったら、家で食べた料理を注文すれば良いよ？流石に魚は無理だけど。」

「なら。わたし、鶏食べたいです。ワイン煮込みってできるかな？時間かかるし。」

「どうだい、ウェイトレス。」

「はい、丁度やっておりますので、直ぐに出来ます。」

鶏の料理はお母様の特技です。香辛料を使った辛いものもよく作って貰いました。

「そして、デザートでパイを食べよう。ロテシアはいいか？」

「菓子に関しては私よりお父さんの評価が確かです。異論は有りません」

「じゃそれで。」

「かしこまりました。少々お待ちください。」

お父さんって凄いい菓子好きです。ご飯の代わりにケーキを食べるのも見ました。お父さん曰く、お菓子は命の源だそうです。

本当によく食うので横から見れば胸焼けが酷いです。よくもまあ、そんな甘いものばかり食べられるよね。

料理は直ぐに出来ました。

お父さんはガレットをコーヒーで食べて、私は鶏ワイン煮込みを

ワインと食べます。

やはりお母様の料理には全然、敵いません。でも、それなりおいしいです。

あ、此処のワインってちょっとすっぱい。

後はデザートです。お菓子グルメのお父さんの選択だからでしょうか。かなりおいしいです。

クックベリーパイというらしいです。お父さんと仲良く半分っこして食べました。

ワインではこれに合わないので私もお父さんと同じもの飲むことになりました。

案外に酒ばっくもないしクリームもべたべたしません。後で作ってみようかな。

「それで、今日は何処で寝ようとしてるんだ？」

「適度に宿探してみようかと思ってます。いいところ有りますか？」

「そうかな。。。なら有るにはあるな。安全そうな所。」

「へえどこですか？」

「魅惑の妖精亭。」

聞くからに酒場ですね。綺麗なお姉さんいっぱいなの。

もぐもぐ。

もぐもぐ。

じーーーーー。

「お昼も奢ってもらったし、お母様には秘密にしておげます。」

「違うからな？接待でよく行ってるからに過ぎないからな？」

「でも娘を酒場に送る親心って一体何でしょう。こんな仕打ちこの世では初めてです。」

「あれって酒場だからこそ君に安全なんだ。」

「本当かな…」

お父さんは疲れた顔してます。

実は分かるには分かりますけど。

私って男の標的になりがちだからいつそ酒場がカモフラージュに成れるかもしれません。

もしもの時は「お客さん困ります」でどうにか成りそうだし。

「君は親の言う事を信頼すべきだ。」

「お母様のことは信頼してます。」

「僕は？ねえ、ボクは？」

「そんなことより本当に安全ですか？」

「そんなことなんだ、僕への信頼。」

お父さんつてば、フォークでパイを解体して落ち込んでます。やはりお父さんも大好き。や

三話表 トリスタニアで昼食を（後書き）

「ジェローム・ド・ラ・メルフォゼ」

能吏として重宝されている宮廷主席実務官長。

本来はデムリ卿の補佐が主業務だが、その他でも御用商人との交渉とかやってる。

凄いい甘党でお菓子好き。飴とか持ち歩いて誰かにあげる事もよくある。

城の平民出身職員たちに好かれているが、正統貴族勢力とはあまり仲がよくない。

風のラインで魔法に関しては優秀とは言えないの評判。二つ名は『そよかせ微風』

「ロティと衛士の対話」

化物語面白いです。まよいの慇懃無礼な言い方が好きです。

でもあれって上手すぎて参考にならない。まねしたらただの物真似になっちゃうし。

「題目」

言うまでもなく「ティファニーで朝食を」

オードリー・ヘプバーンはマジ綺麗だった。

いや老いてもその笑顔はまぶしすぎる。

「鶏のワイン煮込み」

コック・オー・ヴァンです。

ソースに入れて一晩寝かして、煮込むから事前に用意されてなき

や食べにくいですね。

いいのかな、設定。自分が美味しいから入れてみたけど。

「クックベーパーパイ」

一体どんな物でしょうか。クックベーパーってなに？

三話裏 とある父娘の肖像

忙しいときだけ仕事が雪崩れ込む。

こんな風に仕事が次から…

「状況はどうだ？」

「あ。メルフォゼ伯爵様。順調とはいえがたいけど、どうにか迎賓館にいく物資は維持できます。」

「そうか。ご苦労。」

次へと…

「実務官長！宮廷からの支援の方は…」

「まだ、頑張れるんだろう？衣服屋殿。南部に行く予定の豪商一行を足止めしてあるから、早く行って見なさい。」

「分かりました。」

こいつのギルドは本当に怠けているな。すこしは頑張りたまえ、まったく。

宮廷の物はすべて国家のものなんだぞ？

そんな事を思いながら僕はまだ足りないものはないか点検を繰り返してる。

魔法学院の入学式は基本的にトリスタニアに負担になる。

各地から集まった貴族の子息たちの消費もさながら、その連れたちがもたらす負担も大きい。

もし、トリスタニアの経済体質がもっと頑丈なものだったら、ただの儲け話になるが…

お気の毒だけどトリスタニアはそんなに強くない。

毎年こうなるけど根本的な解決を見出せなく、苦労を繰り返している。

僕はあいにくも宮廷だけが管轄だから、どうにも出来ない。

財務卿であるデムリ様は苦労なさってるけど、やはり平民の人々はあまり意識が蒙昧すぎる。

デムリ卿は平民に教育を施し、ちょっと政策について来られる様にと思ってたっしやるそうだが…果たして、どれくらい効果があるんだろう。

「お昼でも摂ろう。お腹がすいては何も出来ない。」

「食事ですか？」

「ああ。遅くなるから後は君たちで頑張れ。」

「はは…相変わらず手厳しいお言葉で…」

「知るか。元々君たちの仕事だろう？」

「申し訳ありません。私たちが不甲斐ないばかりで。」

僕の前で殊勝な態度を見せてるこいつは僕の苦労の黒幕である「ライナス」。トリスタニアギルド連合の代表である。機会あらば宮廷の人材や物資をくすねようとする大悪人だ。

顔は良いけど、笑顔が怖い。あれは蛇の目だ。なんていう目つきで貴族を見てるんだ、あいつ。

いつか不敬罪で首が飛んでも知らないぞ。

「心にもない言葉ありがとう。でも今日は本当にだめだ。なにせ僕の娘も魔法学院に入学しに来るからな。」

「おお。それはそれは。それなら早くご娘さんを迎えにいかないと。こんな所で油売ってる暇はありませんよ？」

「君が言うか。全く、いけしゃあしゃあと…」

ぼくがライナスの気持ち悪い笑顔を殴ろうと拳に力を入れたとき、
運よくも誰かが執務室に入ってきた。

あの制服はアニエス君の銃士隊のものだな。なんでだろう、今は
人力が足りないから一般兵士と一緒に宮廷衛兵所の警備をお願いし
たはずだが…

「失礼します。宮廷の衛兵所にロテシア・ド・ラ・メルフォゼ様が
いらっしゃると連絡が届きました。」

「うむ。じゃ一緒に行きこつ。」

「はい。」

いつ見ても軍紀ががっしりしてるな。そんな銃士隊に門番を遣ら
せるなんて僕も偉くなったもんだ。

僕はにくつたらしいあいつを残して彼女の後について衛兵所に行
くことにした。

門外に出てみれば僕の娘が衛兵所の待機室で座っていた。
完全にすねてる。どうなったんだらう？

「あの…私たちがメルフォゼ令嬢の事を分からなくて、とんだご無
礼を…」

「ああ、大体事情は分かった。」

わが娘ながら怪しさ全開だな。

灰色の大きなローブは身に余るほど大きくて顔も全く見えないし、
大きな旅行用の麻袋を馬に乗せて言うかあれクロエだね。大きくなっ
たな。ーに担がせてあるしな。怪しい薬売りの行商みたいだな。

「いいよ、気にしなくても。あれをそのまま宮内に通したらそれこ
そ懲戒ものだから。」

「そうおっしゃってもらえると助かります…」

ロテシアはすねても解けるのが早いし全然大したことないんだけど。

□ □ □ □ □ □

「まったく、もう。酷い目にありました。」

「まあまあ。君のその姿って怪しすぎるからな？お父さんがお昼を奢ってあげるから。」

クロエを引きながら歩くロテシアはどこか楽しそうだった。

やはり初めての旅行だからか？なにせ今までずっと領地に隠れて生活したものだ。楽しくも成るだろう。

実は僕自身ロテシアと多くの時間を一緒に出来なくていつもすまないと思ってるのだ。

これからは近くの学院に居るしちよくちよく顔を見に行こうかな。娘との交流を深めるために頑張ろう。

「お父さんがそうおっしゃるなら我慢します。」

「そう。ロテシアは優しいね。」

「ええ。お母様の娘ですから。」

「…僕の娘でもあるんだよ？」

「そっぴいばそっぴいことになってますね。」

「いや。正真正銘に君は僕の娘だからね？誤解されるようなこと言っうんじゃないよ。」

…何より僕の娘にとって、僕の位置はかなり低いみたいだし。考えてみれば呼び方もなんかへんだな。

何でお母様にお父さんなんだ？

はっ！もしかして、ケイト（カトリーヌの僕専用愛称）の陰謀か？
↑違います

でも何となく分かることなんだが、この子はずっとも思慮深い。
言葉と行動だけを見れば幼いように見えるんだが基本的に他人に
気を使ってあげれるいい子だ。

いままも何故か申し分けそうな雰囲気だ。

「いいよ。どうせお昼食べに出ようとしていたから。」

「口に出しましたが、今？」

「いや。何かそんな感じでさ。」

当てずっぽうだったけどな。

でもそれで正直に白状するあたり、まだ幼いかもしれない。

それにしてもロテシア、昔に比べてずいぶん僕に対しての態度が
柔らかくなっただな。

昔のロテシアは僕に懐いてくれなかったからな。

カトリーヌの事はそれこそ信仰の如き慕っていたけど、僕に対し
ては何処か余所余所しかったから。

確か：ロテシアが2歳のことだったな。

久しぶりに夏の休暇を貰って城に戻ってみたら、ロテシアが庭で
花冠を作ってたな。

小さな手で一生懸命に花冠を作ってるロテシア。僕はそれをぼっ
と眺めていた。

気がつけばロテシアは綺麗な花冠を完成させていた。
そしてその花冠をもち僕の前に近づいてきた。

期待してた。娘に愛されるお父さんというものに。
だから自分が娘にとって夏と冬二ヶ月ぐらいしか会ってない人
てことを忘却していた。

「貴方、お母様の事を本当に愛してるの？」

凄いい目だった。二歳の子供の目じゃなかった。

憎しみというか、いや嫉妬に近い視線だった事を今でも覚えてる。
僕がどう答えたか今では覚えてない。でもロテシアは一応納得し
て僕に花冠を被せてくれた

そしてそっと触れるよう、小鳥がついばむように頬つぺたにキス
をしては一人で戻ってしまった。

後でメルルを通して聞くと、ケイトからロテシアに僕が戻ったら
そうしたらどうって提案したそうだ。

「嫉妬って、普通同姓の親に持つものじゃ？」

まあ、初步の親である僕には分かりづらいものかな。
でもロテシアの失踪の事件以後はかなり懐いてくれてうれしいけ
ど。

こんなくだらない事を考えながら僕は田舎娘であるロテシアを連
れて常連の食堂へきた。

食堂に入ってからずっとときよろしてる娘の姿に満足しながら
注文を出す。

「ボクは…昼だし軽く済ませるかな。ガレット（クレープみたいな
ものにハムとかチーズとか添えて食べる料理）にしよう。そしてコ
ーヒーを。」

「コーヒーはウィスキー、クリーム入れて、よろうしいですね？」

「ああ。で、ロテシアは？」

ロテシアは慌てて何かを思い出そうとしていたが、結局しょんぼりして僕に助けを求めた。

「どうしよう…困りました。考えてみれば外で食事してたことはありません。」

「ふむ。だったら、家で食べた料理を注文すれば良いよ？流石に魚は無理だけど。」

「なら。わたし、鶏食べたいです。ワイン煮込みってできるかな？時間かかるし。」

「どうだい、ウェイトレス。」

「はい、丁度やっておりますので、直ぐに出来ます。」

そうだな。鶏肉の料理はケイトの十八番だし。家に帰ると何時も食べる。

そしてその料理は見たこともない香辛料が盛りたくさん入ってる場合が多い。

価額だけで物を言えば、僕の家庭料理はこの世で最も高級な料理になるだろう。

やはり、ケイトとの結婚は僕の人生最大の幸運だな。

そういえばロテシアは今日どうするんだろ。真っ直ぐに寮に入るのか？

「それで、今日は何処で寝ようとしてるんだ？」

「適度に宿探してみようかと思ってます。いいところ有りますか？」

「そうかな。。。なら有るにはあるな。安全そうな所。」

「へえどこですか？」

「魅惑の妖精亭。」

久しぶりだな、 ロシアのあの視線。

お父さんぞくぞくするぞ？

三話裏 とある父娘の肖像（後書き）

「ライナス」

トリスタニアの職人、商人ギルドの連合会の代表
その自身は皮屋出身で若い頃故郷から逃げてトリスタニアに来た
という。

ジェロームはいい悪友みたいな関係。

「銃士隊とジェローム」

ジェロームの差別しない性格と何時ももってる飴のせいでプチア
アイドル状態。

アニエス自身も色々と便宜を計らってもらっていて頭が上がりな
い。

軍隊にとって補給官というのは何時も大事な存在。

「魅惑の妖精亭とジェローム」

ジェロームは偉い人だから接待される側。
いつも高いお酒を頼むのでスカロンは満悦。
時々、二人きり娘のことで相談したりする。

四話表 入学式と部屋

ちよつと事件は有ったけど、「魅惑の妖精亭」で一晩は無事に過ぎました。

それにしても店主のスカロンさんって強烈な人だったな。あの人は無性でいいと思います。（キリッ）

とにかく、スカロンさんが気にしてくれたお陰で私も旅毒を解きゆつくりと休むことが出来ました。

クロエも屋根のある所での休憩は格別だったそうで、たてがみが艶めいてます。

露宿はこれから控えなければ成りませんね。

いくら森が安全だとしても限度があることを思い知りました。

携帯食のジャーキーをもぐもぐ、齧りながらクロエに身を任せます。

どうせトリスタニアから二時間も経たないんだって、魔法学院。そして、何だかどきどき立派な馬車が列を作りながら走ってますから道に迷うこともありません。（もっとも、私が森で道を迷うこと自体、有り得ないんですけど）

あ、あれって公爵家の紋章です。

お父さんが以前見せてくれたカタログの二ページにあったので覚えてます。

確か：ラ・ヴァリエール公爵でした。よく知らないけど凄い家門だそうです。お父さんよりも数十倍偉いんだって。

むっ、ちよつと腹が立ってきました。

そんな私の考えなどは気にも掛けず馬車は行ってしまいます。

御者の人が私を見つけて帽子のつばに手を伸ばし礼をただけでした。

でも、豪華な馬車だな。

私、鍍金の馬車ってはじめてみました。

「ちょっと、その君。此処が何処か知ってるか！ここはな…」

「またですか。」

いつの間にか私も学院にたどり着いたみたいです。

□ □ □ □ □ □ □

「我ら新人生一同は今このとき、始祖と名誉を懸けて誓う。これから三年、我らは学ぶ事を怠れず、貴族としての品位と義務をもって生活し、過失を犯さん事を誓う。」

誰なんだかよく知りませんが、ブロンドの女の子が新入生体表で宣誓文を読み上げてます。

まあ、試験も何もなかったし多分家柄で選ばれたのかな。でもちよつと舌足らずだし、声質も細かすぎて相手に信頼を与えるものではありません。

指導者になれるタイプじゃありませんね。

緊張してるみたいだし、かわいいのは認めますけど。

あと、なんかお爺さんとかが出てきて挨拶をしました。教員も一通り紹介されました。

入学式ってドラマで見たときは面白そうだったけど、実際には面

白くないんですね。

期待して損しました。でもこんなに年が近い人がいっぱいいるなんて私的には驚きです。

入学式が終わり、寮の部屋の割り当ての確認して自分の部屋を探します。

クロエとは馬屋でお別れしてきたので、一人で大きな麻袋を担いで歩き回る羽目に…

「あの…」

「はい。分かってます。妖しいですよ、ごめんなさい。場違いですよ、ごめんなさい。」

「いえいえ、ちがいますよ。重そうだから一緒に運びましょうって。」

天使さんの降臨です。

うつむいた顔を上げれば何だか懐かしい雰囲気のマードさんがあります。

なんと黒髪です。ブルネットじゃなくオリエンタルブラックです。

「あの…こつちを私が持つから、そつちを持ってください」

「有難うございます。凄く助かります。天使さん」

「ちがいますよ？私、シエスタといいます。」

面白い人ですねっと言いながら、手で口を軽く隠してくすくす笑いました。

黒髪もそうだけど、純朴そうで好感が持てる人です。

「私はですね。ロテシアです。」

「ロテシアさんですか。ふふ、変わった名前ですね。」

「そうでしょうか？なにせ私、自分の故郷を離れたのが初めてでよく分かりません。」

「あら、何処の出身ですか？」

シエスタさんはタルブつて所の出身らしいです。葡萄が有名でいいワインがここ魔法学院にも出荷されてるんだって。

そういえばあそこはなにが有名な？お父さんが開拓した町ですから、歴史もないし。元々隠れる事を目的に作られた町ですし。

秘密だけど、あそこではブリミル教の司教さえ有りません。教区にも入ってないらしいです。

「東にあるのコウンという田舎町です。国境地方で、商人もほとんど来ない寂れたところですよ。」

「ごめんなさい、よく知りません。」

「まあ、田舎ですから仕方ありません。隣の町に行くとしても馬で一日中行かなければないですし。」

重かった袋も一緒に持つと凄く軽いです。うれしいな、

助けてくれたありがたい人だし、これからも親しくしたいと思います。

「シエスタさんはどんな仕事しますか？」

「うん…主に厨房です。でもまだまだ見習いですから何でもしますよ？ロテシアさんはどうですか？」

仕事？

えっと。城では大抵メリルさんが何でもしてくれますし、私ってあまり仕事してません。

なんか、ちょっと恥ずかしいですね。シエスタさんって私と年はあまり変わらなさそうなのに。

いいえ、前の歳まで考えると私もしかして二トだったのでは！！

困りました、遊んでばかりだというとシエスタさんが軽蔑するかもしれません。

いや、シエスタさんはそんな人じゃないかもしれないけど、私の良心が痛いです。

「えっと。故郷では城の庭の手入れをしてました。」

そんなに間違ってもないと思います。スクスクのお陰でガーデニングは趣味だったし。

色々習ったから、大抵の事は私がやっていたんです。畑仕事もよくしていました。

趣味だったから仕事というにはちょっと苦しいかもしれませんが、でも、嘘は言ってません！

「まあ。それじゃ庭師ですね？」

「へへ。まだまだお勉強中ですよ。」

「でも、凄いことです。偉いですね〜ロテシアさんは。」

「わ、わっ。いいですよ。子供じゃないですから。もう今年で十四ですよ。」

背が小さいから？シエスタさんは私のことを妹みたいにほめてくれました。

でも嬉しいことは嬉しいです。お姉さんってなかったから嬉しいかも知れません。

そうだ。部屋に着いたらお持て成しをしましょう。旅行中とった果物しかないけど…

□ □ □ □ □

凄いことに一層でした。窓を開けて手を伸ばせば草と土を掴められる

なんてすばらしいことでしょう。これで窓越しでスクスクを育てることもできるかもしれません。

実はお父さんから私が使う部屋の下準備をするという書簡を貰ったので、もしできるなら一層にして下さいとお返事を書いた記憶があります。

お父さんってそれを覚えてくれましたんです。やはりお母様が選んだ人。

虚無の曜日でもプレゼントをもって礼を言いに行かなきゃだめです。ね。これは。

でもそれだけじゃなく私の部屋って凄く綺麗です。

だからここでちょっと私の部屋を紹介（自慢）してみようかと思っています。

大体、広さは長方形の八畳くらいです。

床はヒノキ材を敷いてワックスが塗られています。やわらかくて踏むたび木材が軋むような感じが薄く伝わってきます。私ってこのきいきいという感触が好きですよ。

まず右側にはベッドがあります。ベッドはダブルサイズにしました。お泊りでお客さんが着たら床で寝させるわけにはいかないですからね。

その隣には化粧台があります。ちょっと小さい。でも可愛い感じ。この世界では鏡は凄く高いんですけどお父さんが奮発してくださったお陰で私の化粧台には三面鏡があります。凄いでしょ？

左側には机があります。シンプルでシックな感じ。勉強をするよりは作業台みたいですな。

そして本棚もあります。三段だからあまり場所も取らないんです。部屋の真ん中には…三つ足のティーテーブルが置いてるんですね。椅子も二つです。

そして私が一番大事にするクローゼットが置いてあります。これは家からもって来ました。

12歳の誕生日プレゼントで、お父さんがくれたものです。チェリー木で作られて飴色に艶めいてます。上の部分のアーチ形ふちは私が好きな藤蔓模様が彫られてある、私の一生のだから物です。

ご覧の通り私の部屋のものは全て原木で作られています。だから、今かすかに木材の甘い匂いが部屋を漂ってます。なんて贅沢な暮らし！私、本当に生きてよかった。

「あの…ロテシアさん？ここは貴族様の部屋ですよ？勝手に入ったことがばれたら凄く怒られちゃうよ！」

シエスタさん、なぜか挙動不審です。忙しいのかな…はっ。それなら私とんだ失礼を！

「シエスタさん。もしかして凄く忙しいですか？せっかくだからちょっと遊んでいきませんか？」

「何いつてるんですか！ロテシアさん！貴方は田舎に住んでいたから、此処がどんなに怖いどころか分かってません！」

「そ…そうなんですか…！」

え？なんで？なんで？自分の部屋なのに！
お母様、やはり都会って怖い人が多いみたいですよ。どうしまし
ようー！！

「なんて怖い人たちなんだろう…自分の部屋でさえ心を休めない
なんて。怖い！都会っ子、こわい！」

「そうですよ、ロテシアさん。いくら自分の部屋だと…」

「シエスタさん！か…鍵をかけましょう！一緒にいてください！怖
いですよ」

「…」

「ねえ？シエスタさん…置いていかないで」

「自分の部屋？」

「うわあ…怖い人たちが来るんですよ！悪い子はいねえかと言う
んですよ、きつと！」

ナムアミダブツ…ナムアミダブツ…え？違うのかな？

「あの…」

「怖いよ…怖いよ」

「ロテシアさん？付かぬ事を伺いますが…」

「はい？なんですか？今、私は錠前を探すことでとっても忙しいで
すよー！」

「もしかして、ロテシアさんフルネームは…」

「ロテシアですよ？カウンのメルフォゼ伯爵っちのロテシア。ロテ
シア・ド・ラ・メルフォゼです。」

え？シエスタさん。なんで泣いてますか？

四話表 入学式と部屋（後書き）

「シエスタとロテシア」

シエスタさんは162サント、ロテシアは145サント。

ロテシアとしてはフードが深いから見上げなきゃシエスタの顔はみえない。

「麻袋」

いろんなものが入ってる。でも、大抵はがらくた。

剪定鋏とか移植こて、熊手、折たたみ式の紙鉢などが入ってる。

「クロゼット」

ワードローブともいえる。

多分ロティの所持品のなかで一番高い。

両側に開く形になっていて、その中に引き出しがある。

二つの扉全部、長い全面鏡が裏側についているから後ろを確認することも簡単。

「筆者」

進度遅すぎますね。

他の小説ではこれくらい来ると何か一つぐらい達成するはずなのに…

まだ原作キャラではシエスター人が出てきただけで…

話し一つに一人ずつ登場するようになってますが…

四話裏 メイドっていうのは、意外と大変な仕事なんですよ（前書き）

『萌え萌えいっていればいいってもんじゃないんです。本当、休む暇なんて全然ないらしいですから。この間、合コンで会ったとき聞いたから間違いありません。』

四話裏 メイドっていうのは、意外と大変な仕事なんですよ

「みんな！今日は入学式だ。貴族のぼんぼんたちがいっぱいやって来る。」

マルトーさんは一年の中で入学式を一番嫌ってます。事実、それは学院の全ての平民にとって同じです。

「確かに大変だ。そのことは俺もよく知ってる。でも、避けて通れない道でもあるんだ。」

その理由はどつても簡単です。

今まで自分のうちで蝶よ花よとちやほやされながら育った貴族の子息たちを迎えなければなりませんからです。

そんな世間知らずで高慢な小さな貴族たちは、良識が足りなくてすぐ怒るから平民の私たちにとって手に余ります。

「みんな、気を引き締めるんだ。分かったか！もし自分で解決できないときには、すぐに教師の方々に助けを求める事をしっっかり覚えてろよ！」

学園側でもそれは周知の事項ですから、教師の人たちが至る所に配置されるべくトラブルを減らそうとしています。

でも平民の私たちの負担はあまり減りません。

自分には自衛の能力がないと言う圧迫感と何時、何処で（良識足らずの）貴族さまの怒りを買うのか分からないストレス。

この全てが負担となって襲ってきます。

繊細な子の場合、この期間を前後にして胃薬を食事のように飲んでいる人も見ました。

「今年の入学生ではヴァリエール公爵令嬢、グラモン伯爵令息、メルフォゼ伯爵令嬢に特別注意するように！トリステインの屈指の勢力家だからな！俺では庇い切れん。」

そういう私だつて胃薬は常備薬です。いたたた…

昨年では私、経験が足りなくて先輩たちの悪戯にそのまま嵌りました。

あうゝ今思えば何であんなに見るから難儀な人に付いていたんでしょう。

それで貧乏くじを引いた私は、ねちねちと因縁をつけられてその晩はベッドで泣きっぱなしでした。

流石に酷すぎる仕打ちだったので、先輩たちも謝ってくれました。そしてお詫びに次の日から一週間当番を代わりにしてもらいました。

「それじゃ！健闘を祈る！以上、朝礼お終い！」

でも！今年は大丈夫！

もうこの学院も二年です。貴族方の見分け方法は一通り身に着けました。

もう二度とあんな事にはなりません！！

って思ったことが私にもありました…

□ □ □ □ □

「助かったわ。もういいのよ。帰って頂戴。」

「畏まりました。それじゃ失礼いたします。」

昨年は差し出がましい事に「後で歓迎会が本塔で開かれますので、ご了承ください。」とか言ってしまったて、「なによ！メイドの癖にこの私に命令してるの！」とか因縁つけられましたよね。

もうそんなことしません。私は無難な生き方を心得ました。人ってこうやって大人の階段を登っていくんですね。

それにしても今年は凄い人が多いです。

今の小さな貴族様って公爵家の三女でいらつしやる、ヴァリエールのルイズ様ですよ？お姫様ですよ？この国の王位継承権をお持ちになる方ですよ？（可能性はないけど）

その他でも名簿の名前を聞いた限り、有名な人はまだまだ沢山あります。（失礼が無いよう入学生の名前は事前にほぼ覚えておきます。メイドも大変な仕事ですよ？）

あのヴァリエール家と宿敵関係であるツエルプストー家に、陸軍元帥グラモン伯爵家、宮廷のメルフォゼ伯爵の娘さんも入学するらしいです。

その他でも名門出の人が多く、皆が心配していましたけど…

不思議にも今のところトラブルの気配が見えません。

いえ、寧ろ名門だから教育が行き届いてるのかもしれない。名も知らない教育係の人たちに感謝です。

このままだと、もしかしたら伝説の無事故の入学式の再来を見届けることが出来るかもしれません。

って、あら？

「よいしょ〜よいしょ〜」

これってなんだろう…

私の目の前を「分厚いローブを着て、フードまで深く被ってる妖しい者」が自分の体ぐらい大きな麻袋を担いで通り過ぎていきますね。心なしか、かわいらしい声まで出てるみたいだし。

サンドマンですか？眠りの粉を運んでいます？

「うう…おもいよ…おおきいよ…」

はっ！今の私ってなんか変な事を考えてました。そうですよ、そんなのが真昼から私の目の前を通り過ぎるとか有り得ないですよ。

「クロエ（雌馬、6才）…、貴方と離れても元気で過ごすと言った約束、早速も守れないかもしれません。」

それにしても、この人。相当面白いです。

幼い頃に働いている蟻の行列を眺めてた事を思い返させます。

あ。転んだ。疲れてるか起きれません。ぶるぶる震えてますね。かつわいい〜

「でも、がんばる！凄く頑張っちゃううう！！！」

起きていますね。そしてまた麻袋と戦い始めました。でも見るからに無理です。

仕方ありませんね。助けてあげちゃう！（あ、口調うつった。）

「あの…」

「はい。分かってます。妖しいですよ、ごめんなさい。場違いで

すよね、ごめんなさい。」

それにしてもこの人、低姿勢ですね。なにかあったのかな？

「いえいえ、ちがいますよ。重そうだから一緒に運びましようって。」

それを聞いたあの人はピタツと止まりました。そしてゆっくり振り向き俯いた顔を上げました。

不意に被ったフードが巻き上がり、顔が露になります

大きな緑の瞳に先転んだ所為でちょっと土が付いてる顔は驚くほど白く柔らかく、小さな唇が桜のよう薄く開いてます。

これは…本当に妖精さんかも？

「あの…こつちを私が持つから、そつちを持ってください」

自分も知らず唾を飲み込みました。喉鳴りが大きく感じられてびっくりです。

そして、私を見つめてた彼女がすごく嬉しそうに「ええ、それはもう花が咲くように笑いました。」

「有難うございます。凄く助かります。天使さん」

天使は貴女では？

□ □ □ □ □

話してみても分かったけど、この子はコウンっていう田舎から来た

庭師のようです。

この無駄に大きく重い麻袋の中身も庭を管理する際に使うものばかりです。

実はこの学園、敷地だけ広くて室内以外にはあまり飾られてません。

いつも私はそんな広々な草地をもったいなく感じてました。それだったのに、ついに学校側も美しい環境って言う言葉に気がついたみたいです。

庭師ですか。良いんじゃないですか？可愛いですし。

もう顔を隠してしまつて名残惜しいです。

でも、ずれたフードで顔が見られたことを知り、慌てて顔を隠す仕草は可愛い物でした。

この子、一部の人に見せてはいけませんね。特に隣部屋の女好きの先輩（女）には。

「へへ。まだまだお勉強中ですよ。」

声もかわいい〜

恥じらいで赤くなつてる顔が目には浮かぶようです。

後で家から送つてもらつた干し葡萄を与えてみましょう。

タルブの干し葡萄って言えば地元の人じゃないと平民では到底食べられない高級品ですよ？美味しいのは保障できます。

「でも、凄いいことです。偉いですね〜ロテシアさんは。」

「わ、わっ。いいですよ。子供じゃないですから。もう今年で十四ですよ。」

十四で庭師ですか。すごいですね。

庭師ってギルドのある職業ですよ？だからこの子はもう徒弟の期間を終えてるって話になります。

それにしてもロテシアってどこかで聞いたような名前ですね？

「さっき言ったクロエと言う人は誰ですか？」

「いえ。クロエは馬さんです。芦毛の凄く大きいんです。ペ…ペペロン？っていう種らしいです。」

「もしかしてペルシュロンでは？」

「それです！それぞれ。」

それならタルブにもいます。畑仕事を手伝ってくれる有りがたい存在です。

あれって凄く大きいからロテシアさんではぶら下がることも出来ます。

そうやって、心の中に大きな馬に抱きついてるロテシアさんを描いてるうちロテシアさんが立ち止まりました。

「ここですよ」

「へ？」

私が正気に戻ったときにはもう遅すぎて、ロテシアさんはもう部屋に入って窓を開けました。

そして床を立ち跳びしながら遊んでいます。その度にきいきいと床から音が鳴ります。

こ、こ、ここって！

女子学生寮じゃありませんか……！

それで一層の一番奥部屋って事は、メルフォゼ伯爵令嬢の部屋で

す！

ロテシアさん　　なんて事をしてくれましたか！

「あの…ロテシアさん？ここは貴族様の部屋ですよ？勝手に入ったことがばれたら凄く怒られちゃうよ！」

「シエスタさん。もしかして凄く忙しいですか？せっかくですからちょっと遊んでいきませんか？」

ロテシアさん、何も分かってないようです。

ロテシアさんがいたところの貴族さんは凄くいい人だったみたいですね。田舎の方ですしお年寄りの人だったかもしれません。

でもここではそう簡単にいきません。ロテシアさんも此処で生活するならば貴族の恐ろしさについては確実に認識しなければなりません。

「何いつてるんですか！ロテシアさん！貴方は田舎に住んでいたから、此処がどんなに怖いところか分かってません！」

「そ…そうなんですか！！！」

ようやくわかってくれました！

この子は世間知らずだから、私が守ってあげなくちゃ！

「なんて怖い人たちなんでしょう…。自分の部屋でさえ心を休めないなんて。怖い！都会っ子、こわい！」

「そうですね、ロテシアさん。いくら自分の部屋だと…」

「シエスタさん！か…、鍵をかけましょう！一緒にいてください！怖いですよ！」

自分…の部屋？

ほほほ、なんのことかな？

疲れたかもしれませんが。幻聴かな？もう。はやくここから出なくちゃ！

でも！

でも！

このまま逃げ出したいけど！

聞かなければなりません。私、メイドだから。プロですから！

「ロテシアさん？付かぬ事を伺いますが…」

「はい？なんですか？今、私は錠前を探すことでとっても忙しいですよ！」

「もしかして、ロテシアさんフルネームは…」

神さま、始祖さま。

どうか、どうか幻聴でありますように…

エプロンのポケットから胃薬を握り締めながら祈りました。

こんなに必死に祈ったのは昔、食中りで死にそうになった以来です。

でも私のこの切実な祈りを、ロテシアさんの可愛い声が粉々に壊してしまいます。

「ロテシアですよ？コウンのメルフォゼ伯爵家のロテシア。ロテシア・ド・ラ・メルフォゼです。」

うわあああん~~~~~

神さまも始祖さまも嫌いです！！！！！！

四話裏 メイドっていうのは、意外と大変な仕事なんですよ（後書き）

「メルフォゼ伯爵と学院」

学院はいつも物資不足で悩んでいた。

いくらトリステインの隣だといっても貴族の子女たちの浪費が酷くて物資がよく回ってこない。

そこでメルフォゼ伯爵が王宮に行くの物資の一端を意図的に学院優先で回してくれる様になり、物資不足を克服できた。

「マルトーとメルフォゼ」

最近、賄賂で貴重な香辛料をもらった。

マルトー曰く「あの方は人ができてる。」

「オスマンとメルフォゼ」

最近、賄賂で裸婦画集を買った。

オスマン曰く「メルフォゼ殿は真の男じゃのう」

「コルベールとメルフォゼ」

最近、脱毛に効く薬を買った。朝のたび枕の抜け毛を集めることもなくなったご様子

コルベール曰く「メルフォゼ様ほどの人物は未だに見たことがない。」

「ペルシュロン」

馬の品種の1つ。凄く大きく立派。

力も凄く強いので色んなところで重宝されてる。

「芦毛」

年を重ねるにつれ白くなっていく馬の毛色。灰色毛。

「タルブの干し葡萄」

奢侈品。地元の人は商品価値のない落ち葡萄を干して食べることもある。

シエスタの力の元。

「がんばっちゃうううう!!!」

「色に出にけりわが恋は」クリアしました。
そこそこ面白い。エロい。小町好き。

「修正日誌」

新キャラ、「ちえるぶすとー」が消されました。

マガツタルブの「だるふ」も「たるふ」も、もういません
厨房の親方「まると」さんは失った拍^{モーラ}を取り戻しました。

追伸（07月23日）

凄く修正しました。

脱字が多すぎて恥ずかしくります。

懇切丁寧に指導して下さいましたRORさまにこの場を借りて深く謝意を表します。

五話表 風薫る（前）（前書き）

ちよつと最近忙しくて文章の質が淒く落ちてます。

だから、いつそ此処で話を中断して残りは明日に持越しです。
少し文章を見直すべきかと。

そんなわけで五話は四段構成でお送りします。

（表前・後、裏前・後）

五話表 風薫る（前）

「ほ…、本当にお咎めなしですか？」

「シエスタさん、くどいです。」

案外に面倒くさい人でした。シエスタさん。

今ではティーテーブルに向かい合って座ってるのに未だに怯えます。

「だから、いいですよ。コウンは田舎だから平民と貴族の差って余りありませんでした。」

正直、あの町の貴族と言ったらわたし一人だけでした。それも血の半分だけ。

だから平民も貴族もなかったんです。でもやはり都会はそんな区別が厳しいみたいです。

さっきまでのシエスタさんの怯え具合はもう酷いものでしたし。

もう泣いて泣いてわたし、凄く慌てたんじゃないですか。

ポケットから変な薬を出して飲もうとしたのでびっくりしましたよ。自殺すると勘違いして、またもめました。今ではもう完全に疲れましたよ…

聞いた話では昨年の入学式で酷い貴族に目をつけられてしばらくの間、苦勞をしたそうです。

やはり、都会の貴族さんたちが怖い人なのは確かですね。わたしも注意しなきゃ。

結局、シエスタさんも時間が経つと落ち着いてくれてわたしとし

ては凄く助かります。

「でも…、メルフォゼ伯爵さまって宮廷貴族派の筆頭でいらっしゃるし。」

「それが、わたしも不思議ですね。休暇で家に帰ってきてはいつも掃除とか洗濯とかやってますよ。だから執事とかだと思ったんです。」

落ち着いたシエスタさんはすぐ役に立つ人でした。なにせわたし、田舎娘で都会のことは全然知らないんですから。

だから色々習いました。えっと

あ、そうだ。新人生代表をやったのがヴァリエールのルイズという方だそうです。わたしがここに来る路中ですれ違ってた、金ぴか馬車のなかの人はあの方でしたよね。

そのほかでもツエルプストー家とヴァリエール家は喧嘩するほど仲が良いらしいですよ？中睦ましい事は良い事です。
↑絶対
違います

本当にためになりますね。さすが、メイド。

後で学校のあっちこっちも案内してもらいました。

そしておいしい干し葡萄ももらいました。何故かは知らないけど三粒だけでした。

だからわたしはそれをもったいなくて少しずつモグモグたべました。

でもいくらなんでも三粒は少なすぎます。これでは物足りなくてどうしてもシエスタさんの方を見るようになるんです。仕方ないことなんです。両手を開いて差し出したのも仕方ないことです。

そうしたらシエスタさんがまた三粒ずつ取り出して両手のうえに

置いてくれます。こんな事を繰り返していたらシエスタさんが凄くいい笑顔になりました。

なんで物与えながら喜ぶの？やはりメイドさんだから世話好きなの？

それにしてもこの干し葡萄凄いですね！甘すっぱいようで味がさっぱりしてます。

もぐもぐ。おいちい。

□ □ □ □ □ □

おはようございます！

先週からはれて学生になったわたしことロテシアです。

最近は毎日が楽しすぎです。

なにせ14年（+17年）間、生きて来て初めての経験ですから。単に学院の事だけじゃなく、同年代の人と過ごす事が新鮮でうきうきしながらすごしてます。

まだ友達はできなくて一人でいる事がほとんどですけど、眺めているだけでも面白いことは多いです。

ふっ、わたしはもう以前までのロテシアではありません。
魔法学院、一年ソーン組のロテシアなんです！

ああ…、なんって感動的な響きでしょう…、ねだった甲斐がありました。

先に言ったとおり、わたしの学院生活は普通観察です。

シエスタさんとは入学式の以来、親しくなつて時々話したりしてるけど、クラスではあまり話す機会がありません。

だつて、だれも話しかけてくれません。

それもそうですね。いつもフードをかけて顔を隠してるし。これじゃ話しかけたくても無理かな？

「私から話しかければいいことじゃ？」って思いますよね。皆さん。

でもね、私は…、まああれです。友達がいなかったからどうやって話しかければ良いのか分からなくて。てへっ

だけど、それでも十分楽しめます。わたしって前世では学院もののドラマとか漫画とか好きだったんです。

憧れでもあったかもしれませんが。さびしかった？ふむ……。いいえ。お母様がいたからそれはあまりなかったかな？

ただ、すきでした。学院物語とか青春物語とか。

話を戻しますよ？

それですね、その憧れで大好きな話を外側じゃない内側から見れるんですよ。これって凄いことなんです。わたし的には。

だから毎日が楽しく感じられるかもしれません。

それですね？いまの私の注目人物は「胸の大きいツエルプストーさん」と「クールそうに見える小柄の青髪の女の子」です。

前者は男にもてすぎてトラブルを起こしてますね。

おとといかはツエルプストーさんに恋人を奪われた女の子たちがツエルプストーさんを囲って文句を言った事件がありました。

でもあの人かつこうよかったですよ？「そんなに自分の恋人が心配なら、部屋に閉じ込めておけばいい」っていいきったんです。

そうですね、恋愛にルールなんて無用ですね。でもその所為でツエルプストーさんは孤独な立ち位地になりました。一匹狼って感じがな？

後者の青髪の人は名前を知りません。だって、だれもあの人を名を呼んでくれないんだもん。だから分かりませんよ。

この子はずっと静か。いつも本とか読んでます。難しいそうな本も多いみたいです。

わたしも人と話さない方だけど、でもこの子の寡黙さは異常です。私が知る限り後の学院で一言も言ってます。呪文は唱えるし言葉が喋れない事はない筈なんです。

変な人だと思いますか？私はあまりそんなこと気にしないけど皆はそう思ってるようです。だから私生児とかいわれてますね。

私だけじゃなくこのソーンのクラスでは誰もかもこの二人の行動に興味津々です。

まあ、でも他人の話ばかり気にしてる訳ではありません。そして自分の事でも充実してます。

本を借りて読んだり、荷物を片付けたり、寮の私交場にお鉢を置いたり手入れたりしてます。

シエスタさんは「本当、ただの庭師みたいです。全然伯爵令嬢をやってませんね。」とか言ってましたけど、気にしない、気にしない。

そう、昨日は袋の荷物を片付けました。随分手こずってましたけど…

あれこれができる限り詰め込んだから何処に何かあるか全然分か

らなかったんです。

最初は明日に必要なものだけ取り出そうとこそこそと頑張って探しましたけど、昨日はいくら探しても出てこないものがあって、ついカッとなって中身を床にぶちまけてしまったものです。

後始末が大変でしたとだけ言っておきます。

残りの些細な整理とスクスクの引越しは虚無の曜日でやるとします。

あつ、もうこんなにおしゃべりしましたね。

もう、学院の時間です。早く用意していきましょう。

まず白いブラウス。学院指定の黒いマント。これはわたしの都合でフードを付け生地も分厚くしました。そして肩には鹿皮製のポシエットが、腰には杖がつけられています。

もう何処の誰かが見ても立派な学生さんです。

さて、今日はどんな面白い話がわたしを待ってるかな？

□ □ □ □ □ □ □ □

今日は『風』の初回の授業でした。担当の教員はギトー先生。

若い先生ですけど感じ悪い人です。何でもかんでも「風！最！強！」とか言っちゃうし。

つい先も「今年の新入生は不作」だの「きみらには何も期待しないがこれも仕事だ」とか言っていましたのよ？

でも実力はある人だと聞いてます。（メイド通信）

風のスクウェアメイジで実戦向きの呪文を多く扱えるらしいです。二つ名も「疾風」。

わたしの父も風のメイジですから風は親近感が有ったけど…
ギトー先生はだめでした。わたし激しいばかりの「疾風」より涼しく優しい「微風」の方が好みです。

でも、授業でみた青髪の女の子の『フライ』は凄いものでした。
いとも簡単に飛び上がって格好いいと思いました。

でもわたしは授業中、頑張りましたけど成功さえ来ませんでした。
にははは〜

まあ、ぼちぼちやっていきましょう。わたしはやれば出来る子
のほすです。

でも…、わたし。風の魔法は使いたいです。
だってお父さんの系統なんだから…、褒められたい娘心です。

「あのね？」

「…」

それでやってきました〜、風のエキスパートの正体不明の青髪ち
やんです！

相変わらず難しそうな本を読んでいますね。

どれどれ？『風魔法におけるマナ消費率の軽減』？

何のことやらさっぱりですね。自慢やないけど私って馬鹿だから。

「名前聞いてもいい？」

「…」

これは手強い。返事とはかく此方の方を向いてさえくれません。

「わたしはね。ロテシアって言うの。蓮華のロータスからとたんだ
つて。」

「……」

「お母様がくれた名前だよ？ 凄く好き。」

あ、こつちむいた。私の顔をじつと見てます。例えるならハムスターみたいですよ。

でも大きな発展です。私もこんなに他人に積極的に話しかけたことありませんし。この子が他人の言葉に反応したのも稀な事です。

「タバサ」

ついに出了しました。名前

でもへんですね。あれ。まるで……

「どんな意味か知ってる？」

「よく分からない。」

「あれは『ガゼル』って意味だよ？ あ、ガゼル知ってる？ カモシカのことだよ？」

「……凄い。」

私がびっくりですタバサさん。あなたそんな顔ができたのね。でも掴みはバッチリです。何だか本を閉じてしまってます。やっ
たね！

「でねでね？ わたし『フライ』魔法が使えないの。だから何だかコツとか聞いてみようかとね。」

「コツ……よく分からない。十歳にはもう使えた。」

「すごいな、私まだ魔法できないよ。」

「系統によつての向き不向きはあるはず。」

「てへっ、わたしはまだ系統さえよく分からないけどね。」

「そう……」

あ、また本開いちゃった。

惜しいけど今日は此処までかな。

私はタバサの隣に座ってぼっと中庭を眺めることにします。

あ、あそこには生け垣を作ってはどうか？コニファーとか良さそう。

そんな事をお考えてましたら…

「ミス、あなたに『風』をご教授願いたいのだが」

どうやら事件が起きそうですね！

五話表 風薫る（前）（後書き）

「タバサ」

タバサはバイブルに出てくる女宣教師の名前。

って言うかドラマに出てきた所為でアメリカの最もありふれた名前の一つだったとか。

アラム語で『ガゼル』って意。ギリシャ語に翻訳された『ドルカス』って名前もある。

バイブルの中では裁縫が上手で、復活の経験者。

「ギト」

トライアングルであってるかな？よく分かりません。

でもこの人をスクウェアにしたらコルベール先生より強くなるかも知れないから…

トライアングルにしました

「コニファー」

灌木の一種。常緑樹で育てやすい。

大抵放置しても死なない。そして育つのはやい。本当に経済的。

「ガゼル」

きれい。はやい。肉食べてみたい。

「フライ」

コモンだと思ってました。

「タバサの才能」

何時から魔法が使えたか分かりませんので適当です。

でも十二ではラインだったといっているのでその先じゃないかと。

「バイブルネタ」

筆者はクリスチャンなのでよくちよく使うかもしれませんが、必ずよい方面で使うのかは分からない。）

苦情があつたらすぐにでも取り消そうと思ってます。

私は小心ですから。

「筆者」

週末に出張しなきゃならない。五日も…（24～28）
やめたい。本当に。でも働かなければ電気止められる。

追伸（7月22日14時）

驚くことにギトーのがスクウェアであることを確認しました。すごい。だから仕方なくスクエアに直します。

追伸（7月23日）

これまたすごく矯正しました。

今度はりーれさんから大事なご意見を貰いました。
有難うございます。

そして申し訳ありません。

五話裏 凍て解くる（前）（前書き）

一人で留学生やることは本当辛いですね。

知らない土地、知らない人々、見慣れぬ文化。

だから、誰かが少し善くしてくれただけでつい勘違いしちゃう。

「この人は、なぜ私に構う？」

向うは全然関心なんてないのにね？

それじゃ十四の留学生少女、タバサの言葉ででお送りします。

五話裏 凍て解くる（前）

最初は無視する気だった。

無碍に情報を引き出されては困る。私はこの子との話に使えるカードが何も無い。

これではどっちに転んでも私の有利にはならない。

「わたしはね。ロテシアって言うの。蓮華のロータスからとたんだって。」

「…」

「お母様がくれた名前だよ？凄く好き。」

なまえ。母さまがくれた大事な大事な名前。

わたしはもう失っていて、二度と使われないかもしれないなまえ。あなたはそんな私に自分の名前を自慢するんだね。酷い。

90

胸の痛みが甦る。

母さま。名前。タバサ。人形。

よく分からない単語の並列。何の意味があるの？

だめ、これは引っ掛けかもしれない。話しては…

「あのね？」

うるさい。

あなたはうるさい。

もう…、話しかけないで。

貴方のことは無視すると決めた。だから話さない！

でもそんな理性を無視して口が開く。
母さまって単語はそれ程の力があつた。

「タバサ」

嘗てガリアのシャルロットが自分の人形に付けた名前。

どう。あなたの大事な名前とは全然違う。
人形の名前なんだ。人形の。でも、私の運命を示す言葉そのもの。
貴方はどう言う？変わったものだとか嘲笑う？

「どんな意味か知ってる？」

…意味？人形の名前に意味？

そんなのあるはずがない。どこかの絵本でも見たかも。
そういえば、そのときシャルロットはその名前を一晩中悩んで決
めてた。

悩んで、悩んで…、何を悩んだの？

「よく分からない。」

失敗。無視する予定だったはず。

この子の言葉は調子を狂わせる。危険人物。そう。危険。

「あれは『ガゼル』って意味だよ？あ、ガゼル知ってる？カモシカ
のことだよ？」

優しい声色はいつか聞いた何かを思い返せる。
でも、知らなかった。タバサって意味がある言葉だったこと。
母さまは知ってたかな。ううん、やはり知らなかったかも。ロテ

シアは凄い事を知ってる。

「…凄い。」

「そうね〜すごいね〜」

ロテシアが私のすぐ隣に座った。

まるでわたしが招いてそうした様に自然。

不思議にもそこまで嫌ではない。これも才能といえそうかも。

「ガゼルって早いんだって。一時間に九十リートを走り続ける子もいるんだって。」

「それならはい。」

「うん。と〜ってもはい！風のようにね！」

「ねえ、母さま。タバサにするの！この子の名前！」

はしゃいで寄り添う幼いシャルロット。

「いいなまえね？どうしてそう決めたの？」

笑顔で迎える母さま。

「実はね！タバサって物語に出てる子だよ！凄く足が早いんだって！」

笑うシャルロット。羨ましい。

「風のように？」

笑い返す母さま。いけない。涙が出ちゃう。

ーうん！かぜのように！

母さま。母さま。母さま...

「風のように...」

「あ、だから風魔法、上手いんだ。凄い偶然だよ。」

だから、わたしも自然に話せる。

でもロテシア、あなたのほうがもつとすごい。
これが...ロテシアって子の中身かな。優しく、聡明。

私はてっきりトリステインのからの監視者じゃないかと思ってた。

□ □ □ □ □ □

ロテシアは不思議な子。実は入学式から気になってた。

初めて彼女に関心を向けたのは友好的な目的じゃない。

メルフォゼは『王家の懐刀』って呼ばれた家門。宮廷貴族筆頭。
だから、トリステインの実情を探らねば成らない私にとって接近
すべき存在だった。

元々、メルフォゼ家は確認しておくべき秘密が多すぎる。

二十年前にトリステインの中央に位置する領地を処分し消えた家
門。

でも十五年前には宮廷戻っている。それなのにやっってるのはただの物資の管理。

伯爵は有能だが、仕事はさほど重要じゃない。聞くには商人の真似事までやってるみたい。

要は、何が目的で何をしてるのかまるで分からない。そもそも何処に住んでるのかさえも知られてない。

領地はどこ？家族は誰？本当に倉庫番？

それでメルフォゼはもう一つ疑問に思えるものあった。それは紋章だ。

一般の人には知られてなくて、私も偶然に騎士団の昔の記録で見つけただけの紋章。

百合の花が添えられてる銀色の杯を貫く黒い鉄の杭。不気味なその紋章こそがメルフォゼ家の象徴。

その紋章のモットーはそれより酷い。

- Nos liberat metu neminem /
我らは誰をも恐怖から解放しない』

まるで脅し文句のようで一度見た以後、頭から離れない。北花壇騎士団さえそんな物騒な言を紋章に書かない。

だから、知りたかった。

それは純粹に仕事を憂えてこそその行動だった。

□ □ □ □ □ □

観察結果。彼女は不思議な生き物だった。

いつも被ってる大きく分厚いマントにフード。

本来、学院のマントはペンタゴンの止め具をもちいて胸元で固定してるから、前が開きやすい。

でも彼女はそれをずらし、肩のあたりで固定してる。

だからマントがまるで長いポンチョのように見えて、その中がどうなっているのかわからない。

それに加え、一度も捲れたことの無いフード。

これを以てかなり妖しい。いや凄く妖しい。

だから彼女に近づく人なんていない。

男たちはもとより下痢マニア…、ケフンケフン。

失礼、噛んだみたい。けして、わざとじゃない。悪しからず。

ゲルマニアのツエルプストーに目を奪われ、メルフォゼみたいに地味にしてる子なんか全然気にも留めてない。

それに女もそこらへんは似たようなもの。くだらない嫉妬ばかり。

でも彼女はそのことにあまり関心が無いみたい。

わたしが人の注意を避けてるのはまた違う感じだった。

話しかければ普通に答える。でも自分からは話しかけない。

そして男が近づけばさり気無く消える。

いままで男が彼女に話しかけたことは無いからそれに対してどんな反応を見せるかは不明。でも少し気になる。

そして魔法が苦手なようにみえる。

魔法学院だといってもおおよその学生は実家から魔法を習ってる。だから移動に『フライ』を使うとか、物の遣り取りの際『レ

ビテーション』を使うのは普通だ。

でも未だ彼女が魔法を使うところを見たことが無い。

これだけをみれば彼女はただの落ちこぼれの変わり者かもしれない。
い。

でもわたしは違うと確信している。

そう思わせるのは他でもない。彼女の態度だった。

彼女はいつも周辺に目を向けてる。顔は見れない。でも感じられる。

その視線は人々の行動を全て暗記してるような。そんな視線だと思う。

特にあの視線は留学生に集中する傾向がある。

ゲルマニアから来たツエルプストー、ガリアから来たタバサー即ち、わたしのこと。

時折、読書に疲れた目を休めるため遠くの方を見る。そしてその先にはいつも彼女の姿があった。

それが余りにも自然で心臓がとまりそうになったときもあった。

監視者。その言葉が頭を打つ。

なにもしない。ただ見てる。怖いと思った。

□ □ □ □ □ □

「『ドット』にしてはなかなかやるではないか」

こいつ、目が腐ってる。

どうみてもこれは『ドット』の実力ではないのに。

こんな形でもスクウェア。多分、『正式な決闘』なら私が負ける可能性が高い。

世界はこんな不条理に満ちてる。

適当にやろうと思ってたのについてこの先生の馬鹿さにあきれて計画以上に力を出してしまった。

「クラスの一学年若い少女に負けて悔しくないのかな?」

授業なんて早く終わってほしい。読書がしたい。

そう思ってた小さくため息をする。そんな私をメルフォゼが眺めている。

笑ってるの? そんなことでも揺れてる弱い私を?

顰めてるの? 余計な事をしてしまった私を?

フードに隠された彼女の表情は以前と同様。何一つ読めなかった。

昼食を済ませて庭に足を運ぶ。

ベンチに座り、本を出す。面白い本じゃない。ただ必要。

本っていうのは知識を積む事以外でも使い道がある。上手く他人を避ける。

また、視線を向けばメルフォゼがあつた。もう慣れてしまった。どうせ何も感じれないから対応できない。無視。無視。

だから彼女から話しかけられては凄く驚いてしまった。

色んなことが頭に浮かんできた。

積極的な干渉? 情報の収集? あいにく私に有利なものは全然無い。

だから本に逃げた。でもそれはただ私の誤解だったみたい。

ロテシアは話しやすくてやさしい。

「でねでね？わたし『フライ』魔法が使えないの。だから何だかコツとか聞いてみようかとね。」

「コツ…、よく分からない。十歳にはもう使えた。」

「すごいな、私まだ魔法できないよ。」

そうか、実力を隠してるんじゃないかった。本当に苦手なんだ、魔法。

でも彼女の父は多分風のメイジだったはず。

普通、親の系統の魔法はすぐ使えるようになるのに…

「系統によつての向き不向きはあるはず。」

「てへっ、わたしはまだ系統さえよく分からないけどね。」

そうやって彼女は手足を伸ばす。恥ずかしいのかな。

それは悪いことをいつてしまったかも知れない。

ごめん。わたしが口下手で。へんな事を言ってしまったかも。

「そう…」

こんなときはなんて言う？

御免なさい？気にしないで？自己卑下は醜い？

だめ。言い出せない。

だからまた逃げてしまう。本を開いてしまう。

この本あまり好きでもないのに。間違い多いし。説明は下手だし。

「へえ、あそこはコニファーとかが似合いそう。」

でもロテシアはそのまま座ってじっとしてる。

返事を急かす事もなかったし、代わりの質問をしてくる様子もない。

身を引くのが早い人。ちょっと位は粘っても…

いや、違う。私が望むのはそんなじゃない。

何もない生活が私の望み、いつか訪れるその日まで身を潜め待つ。それが望みのはず。

でも、また聞きたくなる。彼女の声を。彼女の物語を。

理由？知らない。分かりたくもない。今大事なものはそれじゃない。

だから私は勇気を出してみる。

「ロテ…」

「ミス、あなたに『風』をご教授願いたいのだが」

でもいつも私の願いは裏切られる。

招かざる客の少年の影は、私とロテシアを区切りつけるようだった。

五話裏 凍て解くる（前）（後書き）

「ガゼルの速さ」

調べたけど、正確ではありません。

トムソンガゼルは70?/hほど?

モンゴルのある種は90?/hまで出せるみたいです。

でも馬が80くらいなんじゃ?ガゼルってそんなに早い?

そんなわけで情報収集中です。

あと数値が変わっても気にしないでください。

「モットー」

紋章の盾の下あたりに書いてるなんか分かりづらいフランス語とかラテン語の標語です。ぐるぐる巻きに書いてる。

ぶつちやけて、あれですね。家訓。

英国の王室紋章のモットーは『Dieu et mon droit / 神と我が正義』

「メルフォゼのモットー」

元はルキウス・セネカの言葉。

『Multos fortuna liberat poena, metum neminem』

- 運命は人々を罰から見逃す、だが誰一人恐怖からは見逃さない

「毒舌のタバサ」

荒れてます。

いくら精神がアレだとしても母という方が異郷よりはいいとおもいます。

「タバサの名づけ理由」

実際はどうですか？

そこらへん全然分かりません。だからオリジナルに成っちゃいました。

「噛みました、てへっ」

本当に誤字です。

昨日見直しながら発見しました。

だからタバサさんに噛んでもらいました。

それにしてもマヨイは可愛い。

「筆者」

留学生生活マジ辛い。

私はご飯奢って貰うとそのまま惚れてました。

恋多きことは辛いことですね。（餌付けとも言っ）

追伸（7月23日）

これまたすごく矯正しました。

今度はりーれさんから大事なご意見を貰いました。
有難うございます。

そして申し訳ありません。

五話裏 凍て解くる（後）（前書き）

（注意）

このヴィリエはすごいクズです。
ヴィリエに好感を持てた人の気分を害するかもしれません

五話裏 凍て解くる（後）

「ミス、あなたに『風』をご教授願いたいのだが」

そう。貴方は…

「おっと、名前の紹介が遅れてましたな。ぼくの名前は風の魔法の名門、ド・ロレーヌのヴィリエだ。」

知っている。一応、クラスの注意すべき人物は確認済み。

貴方の家門は確かに名門。トリステインの風の名門。軍人も多く魔法で活躍した人も多い。

でも貴方自身は違う。普通。

私が貴方に対して下した評価は甘ったれの坊ちゃま。

大抵の一年生がそうだから貴方だけが特別に落ちこぼれではない。寧ろ貴方は新人生の中でも数少ないライン。エリート。

だから、そっちから干渉して来ない限り、こっちからも貴方に構うつもりは全くない。

「人がものを頼んでいるのだ。顔も合わせないで聞くとは、無礼ではないかね？」

軽くいらだっている粗暴な声。でも私もすぐ怒っているから。

貴方はきつと分かってない。今、貴方が何をやらかしたか。多分、私自身もよく分かってない。何を失ってしまったか。

この怒りは出所がわからないから。きつと目的も、往く所さえも。

だから、制御しきれない。怒りを。

「なるほど、やはり試合となるとどうにも勝手が違うようだ！ そうだな、試合となれば、これはもう命のやり取りだからな！ 授業で飛んだり跳ねたりするのはワケが違う！」

笑える。貴方が命のやり取りをわかる？ そもそも命が何だか分かる？

でも、ここで怒ってはだめ。制御が利かない。制御し切れない状態の魔法なんて諸刃の剣、そのもの。

しかし、本当に何故か解らない。わがまま団長の前でもこれほど怒れなかった。おかしい。

私は何故かロテシアの方を見てしまう。でもさっきまでのやわらかい雰囲気じゃない。もしかしてロテシアも怒っている？

私のために怒ってくれた？ 本当に、少し話していただけの私のため？

勘違いかもしれない。いや、勘違いのはず。でも、そう思い込むことで荒れた気持ちが落ち着いていく。

「ふん！ なるほど、きみがどうやら私生児というのは本当のようだ。」

前の少年はまるで私に聞かすように鼻をならす。そして卑劣な笑みを浮かべる。

見なくても分かる。その低俗な風がすべてを語っている。

でもなんともない。

ロテシアが私のために怒ってくれると思うとド・ロレーヌなんか…

「おそらく母の顔さえ知らんのだろう。は！ きつとどこかの身売りとかだろう。そのような卑しい血筋のものに嫉妬すれば、ぼくの家名に傷がつく！」

「ひどいことをいいますね！ ミスタ・ロレーヌ！」

ロテシア？

「おや。これは、これは。ミス・メルフォゼ。ご機嫌斜めのようにですな？」

「とうぜんですよ！ なんてこと、言いますか！ あなたは！」

ロテシアはいつの間にか私とド・ロレーヌの間に立っていた。なにしている？ ロテシアはいつも中立を守るのではなかった？ ただ見るだけで。聞くだけで。そんな人じゃなかった？

「そういえば…、君にも聞きたいことがあったな。」

ド・ロレーヌが手を顎に当ててロテシアの姿を頭から靴まで見回す。

それはまるで何かの商品を確認するようなものだった。

ロテシアが身じろぐ。握り締めた手が震えるのが見えた。

「きみは、魔法が使えないのだと聞いたが？」

「そ…そうですけど、それがどうしたと…」

「なに、一つ確認するだけだよ。このぼくは昨日、たいへん興味深いわさを耳にしたのだ。」

このときのド・ロレーヌの顔は賭け事にでも勝ったように得意げで…

「君の母は卑しい平民だというつわさだよ。ミス？」

醜いものだった。

□ □ □ □ □

「魔法が使えないのは君の中の血が汚い平民のものだからじゃ？
ははは！」

ロテシアからはなんの返事もない。

「たしかにメルフォゼ伯爵は平民にも寛大な方らしいですからな？
平民との子を正式に認めるくらい、平気でしたかもね？」

「うつ…」

「ミス？ どうだ。出来るならこのつわさを否定して頂きたいのだが？
君の母は、平民だな？」

「…」

ロテシアは何も言えずにその場所に立ち尽くしていた。

「どうだい？ なぜ言えない？」

「それは…」

「認めるのだな？ 自分が貴族として欠陥品であることを？」

そのときだった。ロテシアは小さなこぶしに力を込めて…

「欠陥品じゃないです！ わたしのこの体はお母さまからもらったものなんです！ 世界で一番、誇れるものです！」

叫ぶ。

中庭の隅々まで彼女の声が澄み渡る。

もう彼女の震えは分厚いマントの上からも確実に見ることが出来ていた。

膝ががくがくと笑っている。

さすがのヴィリエも驚いて口が塞がらないみたい。それはそう。

彼女はどちらかと言えば地味で、静かなイメージだ。

大人しいと思った女の子がこんなに大きい声で叫んだらきつとだれでも驚く。

「と、取り消して！ お母さまは卑しくない！ 私の体は欠陥品じゃない！」

「え、えいつ。なにを暴れている！ この！」

「いや！ 貴方なんかだいきらい！ 取り消して！ 取り消してよ！ 平民でなにが悪いの！ お母さまは私にとってこの世で一番大切な人だから！」

ロテシアは震えながら、ド・ロレーヌに抗議する。

精一杯。弱い自分を励ましながら。

みつともないぐらい震えているのに。今でも倒れそうなのに。

魔法も使えない。腕力もない。武器もない。

そつにも拘らず大切な人の名誉のために抗っている。

今、この子が戦っているのは単に彼一人じゃない気がしてきた。
いままでどれほど、多くの人に同じことを言われた？

そのたび、貴女はこのように立ち上がったんだ。終わらない戦いを続けて来たんだ。

・貴女は、そうやって、この世界と戦い続けるんだ。

「この！ いい加減にしまえ！ まがいものの癖に！」

瞬間的にロテシアの気迫に押されてはいたが、ヴィリエも貴族だった。

魔法も使えない人相手にいつまで下手に出る訳もない。

ド・ロレーヌがロテシアの手首をつかみとる。ロテシアの身がビツクと強張る。

「なにをする、身の程も知らずに！ ぼくがだれだと思って齒向かう！」

「いや…、痛っ！」

私と同じく小柄である彼女はド・ロレーヌの手から離れようとがんばるけど、弱い彼女としてはそんなことができるはずもなく彼の力のまま振り回されるだけだった。

「そもそもこの不気味なフードは何だ！ 顔を隠しての登校だと？ 無礼も程々にしまえ！ すぐ脱がないか！」

「い…、いや。これは！ だめ！」

ド・ロレーヌの手がロテシアに向けて迫って来た。
そして、ついに私の中で何かが切れてしまう。

「なんだ。邪魔だ！」

「君の相手は私だったはず。」

私はロテシアをかばった。

フードに近づくド・ロレーヌの手をつかんだ。

そして一瞬彼が固まったすきにロテシアの身を拘束する、彼の右手を風の鞭でたたく。

「うっ！ いまなにを…」

突然の痛みに、ド・ロレーヌはロテシアの手をつかんでいた手を振りほどく。

解放されたロテシアはその反動で地面に転んでしまう。
最後までロテシアの身を案じない乱暴な身振りだった。

射抜くような視線はド・ロレーヌに釘付けたまま、手だけを動かして彼女にハンカチを渡す。

つかんだド・ロレーヌの手を力いっぱい握り絞める。でも腕力ではやはり足りない。

「そうか、卑しい身分のものがお互いをかばい合うと！ いったい、どこまで貴族を愚弄すれば気が済むというのか！」

「…」

「いいだろう！ 君たちに礼儀というものを教えてあげよう。」

私は投げる様に本をベンチに置く。その後、振り向きもしないで開けた場所に向かった。

ド・ロレーヌもそれについてくる。息使いがあらう。相当興奮しているみたい。

でも私の心は波紋一つなく静寂に満ちている。

不思議。

人は怒りすぎると、かえって冷静になるみたい。

もう凍り尽きてしまったと思ったのに、私の心はまだ凍れるんだ。

□ □ □ □ □ □

「ひっ！」

カンカンカンカン！ と、乾いた音を鳴らし、私の冷たい怒りが
ド・ロレーヌのマントと服を壁に縫いつく。

ド・ロレーヌの恐怖に満ちた顔は先までの卑劣な表情と変わらず
醜かった。

・なぜ、あきらめる。

ロテシアは弱かった。力もなく、魔法も使えなかった。だけど自
分の大事なもののため立ち向かった。

でも、貴方はそんな彼女を乱暴に扱っていた。

それなのに、なぜ貴方は立ち上がらない。

ねえ、起きてよ。

起きないと倒せない。

立ち向かってこないと叩き壊せない。

希望を持ってないと絶望に落とせない。

いつの間にか彼の前には大きな氷の杭。

ただこいつを解き放すだけで頭をつぶし彼を消せる。このまま突

き殺す？

「死ぬ！ 助けて！」

でもそんな気持ちさえ彼も泣き声の前で冷めてしまう。

そうだね。

ロテシアはまだ彼の謝罪を受けてない。

このまま彼をいじめてもなにもかわらない。

だから、氷を溶かした。彼の目の前のも、彼を壁に縫いつけていたのも。

その後のド・ロレーヌの行動は貴族では有るまじきもの。

杖をも放り出し、這い蹲って逃げ出す。

そう、それでいい。もう、目の前で消えてほしい。目が汚れる。でもこれも持つてから消えて。

「忘れ物」

杖を渡した後、もう用がなくなったこの場所から去る。

私はド・ロレーヌを殺してない自分を褒めながらベンチに戻った。手荒く投げていた本は汚れ一つなく綺麗にぬぐわれてベンチに置かれていた。

本の扉には綺麗に折り畳んでいるハンカチ。使われてはないようだ。

そして本には見覚えのない樹皮で作られた可愛しおり。かすかに匂うそれは確に私が読んでいた所を示していた。

・見てないようでちゃんと見ていたんだ。

そしてその裏側には、可愛い字面で小さく一文——『ありがとう、タバサさん』と書かれていた。

周辺を見回す。少し離れた場所から彼女のマントのすそが見えて、すぐ消えた。

・ここで追いつくのは無粋かな。

本が保つほのかな温もりが私の胸まで伝わるように、私はぎゅっと本を抱きしめた。

まるで、寂れた心に春が訪れるように。

そう。この凍て解く春の緑が私の中にも訪れるように。

五話裏 凍て解くる（後）（後書き）

「ロテシアの魔法」

使えません。虚無じゃないから爆発しません。

ただの修行不足です。園芸のほうが楽しくて魔法勉強していません。

「しおり」

ロテシアがタバサさんを釣るために準備したもの。

スクスクの樹皮の柔らかい部分を乾かして作りました。

だから茶色じゃありません。むしろ萌黄色です。

「ロテシアさんは欠陥品なんかじゃありません！」

わたしの親友なんだから……っ！

「ロレーヌのヴィリエ」

クズ。噛ませ犬。

「MSワード」

これに誤字チェック機能があつたなんて初めて知りました。

だから、使ってみました。

誤字が減ればいいですが…

「筆者」

出張です。だから多分28日まで投稿はむりです。

そんな訳で今日は二編投稿します。

五話表 風薫る（後）（前書き）

正解はこっちです。

正直にむりがある展開だとは自分も痛感しております。
でも、そこら辺はお許しください。

五話表 風薫る（後）

「ミス、あなたに『風』をご教授願いたいのだが」

どうやら事件が起きそうですね！

何の物語でしょう。ライバルかな？ それとも恋愛？

恋愛！ これはいいものです。

多分これですね。まずは試合から始まる関係ですね！

今まで自分のうちでちやほやされて何も知らないお坊ちゃん。
そこで現れたのが異国からきた小さな少女。

『この魔法水準はひどい。もっと精進すべき。』

そしてその少女は授業で天才的な材質をみせて皆の注目を受けま
す。

何だか腹が立つ少年！ いつも人々の視線の中心は自分に向けて
いたのに！

幼い劣情はやがて爆発し、少女に決闘を申し込むのですよ。

『ミス！ 僕のこの思いを受け止めてくれ！』

でも少女はすごく強い。

少年もそれなり強くて同年代に敵なしだったけど少女にはまるで
歯が立ちません。

少女はこの少年をこてんぱんに倒してしまいます。

『くっ、この僕を負かす女子があるとは……。』

『それ程でもなかった。（キリッ）』

『まって！ 行かないでくれ！ もう一度機会をくれ！』

『もっと強くなったら考える。』

『そうか！ 強くなれば振り向いてくれるんだな！』

ああ、それで少年は辛い修行を続けるのです。

夜毎に庭で自分を酷使しながら修行の日々を送るのです！

それを窓越しに見つめる少女。時々見上げる少年。

そんなありふれた日々が過ぎ去ってゆく。

ある日、戦争が起きる。

ざわつく学園の雰囲気。そして少女の姿を探す少年。

でも少女はもういない。だって敵国出身だもん。

少年はすごく傷心するのです。

今なら分かる。自分は少女を恋していたと！

『ああ、ぼくはなんて愚かな男だ！ 失って気づくとは！』

でも少年はあきらめない！

奇跡を信じ、軍に身を投じます。

一般の人は敵国にいけない、でも軍人としてならと思ったのでしよう。

『敵でもいい。六十億分の一の確率だとしても。出会えるなら！その時は！』

『奇跡を信じる。もう一度彼女に会えると。』

でも軍に入った少年はすぐ偉い人になります。

だって、すごく努力してきたのですよ。強くなければうそです。誘惑する女も多くなります。でも、その心の主人はただ一人。

そして奇跡は起きます！

だが、それは神の悪戯だったのでしょうか。

少女は敵国の王女さまでした！

お互いの軍の先頭で邂逅する二人。

『聞いてくれ！ このぼくは！』

『言葉は要らない。』

『だが！』

少女は微笑みます。そして

『強くなった？』

『ああ、そうとも！ もうだれにも負けないぞ！』

『なら、勝負。どれくらいの男になったか確認する。』

嗚呼、戦闘は無情にも始まってしまいますよ。

少年は自軍の勝ちなど気にも掛けません。ただ、少女を探し戦場を駆けつけます。

ああ、憎い！ 運命の悪戯はなんて残酷！！

わたしは自分で思いついた設定に怒ってしまいそうです。

ハッピーエンドになってほしい！でもドラマチックなものもいい！
この遣る瀬無い気持ちをどうしてくれませんか！

はっ！妄想の海で海水浴を楽しんでいたら、現実世界の時間がた
いぶ過ぎています！

「ふん！なるほど、きみがどうやら私生児というのは本当のようだ。」

え？何だか雲行きが変ですね？何のことでしょう？

これ、もしかして険悪な雰囲気ですか？

でもでも、まだ可能性はありますよ？

さあ、早く謝りなさい。いまならまだ修復できるかもしれません。

「おそらく母の顔さえ知らんのだろう。は！きつとどこかの身売りとかだろう。そのような卑しい血筋のものに嫉妬すれば、ぼくの家名に傷がつく！」

そうきますか！空気読んでほしいです！

「ひどいことをいいますね！ミスタ・ロレーヌ！」

他人の母親を辱めるなんて、貴方正気ですか？

見なさいよ！貴方が今しかしたことを！

タバサさんのあの無表情を！↑ロテシアさん、あれは元々です。貴方は今……

恋愛ルートを折ってしまったのですよ！

どうしてくれますか！

わたしのドラマに貴方みたいな人物は要らないのですよ！

甘すっぱい、面白話を所望しているのですよ！

貴方みたいに憎まれキャラが物語を荒らすのは許しませんよ！

「そういえば…、君にも聞きたいことがあったな。」

……でもわたし何だか忘れていませんか？

えっと、確かにわたしは甘すっぱい未来をぶち壊してくれたこの少年に怒っていますね。えっと少年？

「きみは、魔法が使えないのだと聞いたが？」

「そ…そうですけど、それがどうしたと…」

「なに、一つ確認するだけだよ。このぼくは昨日、たいへん興味深いわさを耳にしたのだ。」

少年？

少年？

おとこ？

ひひひひひ！

お、お、おとこ…。

そういえば、わたし言っていないませんでしたね
わたしがすごい男性嫌悪症だったことを。

□ □ □ □ □

ああ、記憶にも鮮やかに残っています

『いや！近づかないで！この痴漢！！！』

『ちがあああう！ 君のお父さんじゃないか！』

アレはわたしが五歳の頃でしたね。
すごいひげの太った人が来てびっくりしました。

『うそだ！ わたしのお父さんは死んだもの！』
『死んでない！ 宮廷で仕事してただけだ！』

それでこれは八歳のことでした。

お母さまと昼食を食べたけどある骨つばいハゲがお母さまの隣に座るのですよ？

驚くのも無理じゃないと思います。

『貴方はだれですか、わたしのお父さんは鯨にまたがって空に飛び上がりましたのよ？』

『どいつだよ！ そんな人は聞いたこともないぞ』

『違いました？ わたしの槌に殴られて土に戻ったのかな？ あ、これ面白い。槌で土か』

『前者の方にしよう。お父さん鯨、大好き。』

これが十二歳です。このときのお父さんは女装していたから少しはましでした

ごめんなさい、もうお父さんは信用できますから〜

親不孝だったロテシアをお許しください。もうしません〜

だって…、ねえ？ 男の人って近づいただけで反吐が出るし。

顔なんてよく見るはずないでしょうが！（ぶんぶん）

写真は大丈夫ですよ？ 肖像も大丈夫。物語の王子様とか普通に好き。

でも実物はだめです。匂いもだめ。なんていうかアウラがだめで

す。

だから一定距離を置けばいいです。

わたしも全然理解のない人じゃありません。

男も人間の亜種であることだけは分かります。でもね…

わたしの半径1メートル以内の男はもう理性を期待するだけ、ばかなことです。

あれはただの獣です。け！も！の！

だってね？ 危険ですよ？

急に飛びかかるよ？ 服とか脱がすのよ？

二人きりになればすぐ襲い掛かりますのよ！

あ、でもたくさんいても襲い掛かるか、って本当男って手に負えませんね！

前世ではどうせ男を飛びつかせる仕事でしたからよかつたけど……

もうここではいい子に成ると決めたから。

『無下に男を殺しちゃだめ、殺しちゃだめ。』とか、『男にアレを使っちゃだめ、わたしは良家の娘。』とか寝る前に百回唱えています。

もう日課です。はじめです。

そんなことを見抜いたお母さまは、『お互いのために男には近づかないようにしなさい！』って言うてくれました。

ご慧眼、恐れ入りますよ。これが親のパワーなんですね。

とにかく、男は無理です。

そんなわたしが今はどんな状態かと言うと。

「だしかにメルフォゼ伯爵は平民にも寛大な方らしいですからな？
平民との子を正式に認めるくらい、平気でしたかもね？」

「うっ……」

すぐ目の前に男がいます。

うわぁ、においがきつい。汚い。怖い。消したい。

うええええゝ もう許して！

「ミス？ どうだ。出来るならこのうわさを否定して頂きたいのだ
が？ 君の母は、平民だな？」

ひいいい！！ 顔！ 顔が！

近いよ！ 近すぎる！

なに体をなめまわすようにみるの！

もういいから離れて！！

「どうだい？ なぜ言えない？」

「それは……」

きゃあ！ いま、吐息が頬にあたったよ！

もう、これ以上刺激しないで！ もう限界だよ！

嗚呼……、わたし、もう今日はお休みしたいです。

「認めるんだな？ 自分が貴族として欠陥品であることを？」

カチンと来ました。なぜ私がこのきたない生き物にそこまで言われ
なきゃダメですか！

もついや。押しのけてでも逃げなきゃ！！

えいっ！こんな時は勢いです！勢いで押せばなんとかなるはずで

す！

「欠陥品じゃないです！ わたしのこの体はお母さまからもらったものなんです！ 世界で一番、誇れるものです！」

ほ、ほらね？

わたしはやれば出来る子だからね？

□ □ □ □ □ □

「それで、どうになりました？」

「もう！酷かったですよ！殴っても、殴ってもびくりともしませんでした！」

シエスタさん遊びに来てくれました。

お茶はわたしが用意します。持ってきたものがまだ残っているから心配なく飲めます。

そのかわり、シエスタさんが淹れます。シエスタさんはすごく腕がいいので安心して任せられます。

「さすが、名門家のロレーヌ。腐っても鯛でした。この私のストリートを耐えられるなんて。」

「それは違うと思いますけど。」

その夜、わたしは今日あったことをシエスタさんに話しました。

タバサさんが大きな氷を飛ばしたとか。

あの汚い男がお漏らししたせいで庭全体が男臭くなったとか。

だから気が遠くなって逃げ出してしまったとか。

「タバサさんに挨拶も出来ませんでしたよ。」

結局、タバサさんにはあえませんでした。

でも折よく持っていた本のしおりを渡せてよかったです。

臭いが届かない遠くからタバサさんを見ていましたけど、わたしが残したメッセージも呼んでもらえたみたいです。すごくドキドキしました。

本当、わたし、青春しています！

「それにしても、ロレーヌ様は大変困った方でいらつしやるみたいですね？」

「それはクズです。生きることが罪悪です。きたない糞尿おしりです。」

「そこまで言わなくても……」

「まさか！ シエスタさんあんな奴を狙っています？　だめですよ！　わたしの目が黒いうちには！」

「ロテシアさん。目、緑色ですね？」

「だめええ！　シエスタさんが糞尿おとこのお嫁になっちゃう！」

「なりません！　いや、お嫁さんには成ってみたいですけど！」

シエスタさんが『もう、お茶にしましょう？』と言いながら、ティーポットを傾きカップを満たしてくれました。

見事な色です。濁ってもない、薄くもないアンバーの色です。キヤラメル食べたいです。

今日の茶菓子はコウン森特産品、花梨カリンのハチミツ漬けですよ！
え？　どっちが特産品かって？

もちろん、両方ですよ？カリンにレンゲ蜂蜜。売りませんけど。これ知っていますか？レンゲ蜜はくせがなくて食べやすいです。

あまい。」

「これ、あまいですね。もしかしてロシアさん、甘いのが好きですか？」

「残念ながら血は争えません。」

これもお父さんの好物です。もちろんわたしもです。だからここに来る際に持ってきました。

本来は手よりすこし大きい壺で二口持ってきたけど、一つはトリステインでお父さんに差し上げました。

そのときのお父さんの喜び様は筆舌に尽くし難いです。

「うーん。あまい。」

「もう、甘いものを食い過ぎて虫歯が出来ても知りませんよ?」

「いいです。虫歯が怖くて、甘いものがたべられるか!です。」

「そうですか? ちょっとあゝしてみてください。虫歯が有ったら抜いてあげますから。」

「いやです……」

食べた後、しっかり歯磨きをしました。

それにしても木綿で歯磨きするのは気持ち悪いからいやです。

でも歯磨きは大事だからしっかりします。

べ、別に隣のシエスタさんとペンチが怖くてじゃありません!

本当ですから!!!!

五話表 風薫る（後）（後書き）

「ロテシアの海」

妄想力たくましいロテシアは時間さえあれば妄想しています。
その素材は前世のドラマ。

でもドロドロな昼ドラ展開は好きじゃない。
酷い奴が主人公を虐めるのも好きじゃない。

「糞尿^{おとし}」

ロテシアが変な男だけ会ってきたってことはありません。
これの原因はすべてロテシアにあります。
自分も知らず男を誘ってましたからです。
でもロテシアはそれがなぜか気づいていません。

「ロテシアの腕力」

事実、女にしてはロテシアの腕力は強い方。
でもヴィリエは汚くて触りたくなかったのが正解。
無意識に力を抜いてしまったようです。

「だって、お父さんに興味ないし」

WORKING！！の伊波さんネタです。 ほぼ似てます。

「六十億分の一の確率」

おまえと結婚してやんよ！
ハルケギニアの人口がすごい勢いで増えています。

「騎鯨飛上天」

湖の底から月を掬い取ろうとして船から落ちたんですね。
酒は程々に。でも李白みたいに詩が書けるならやってみたい。

「お父さんの日替わり姿」

仕事の後は変装を解いてください。
変態じゃあるまいし。

「花梨^{かりん}」

喉にいい。香りもいいし。

晩秋くらいに蜂蜜漬けて追々食べる。

留学していた時にはお茶で飲んだ。これもすごくいい。

「レンゲのハチミツ」

しつこくない甘さがうり。

特徴がないといっちゃだめ。

「歯磨き木綿」

歯ブラシあるかな？あの時代。

ハルケギニアはちよつと不思議だからわからない。

「ペンチ」

歯医者さんは苦手です。

だから娘を連れていく時は自分が緊張してしまいます。

「筆者」

出張で更新は来週の木曜になると思います。

飛行機は嫌です。怖いし。

近いから機内食くれませんし。

追伸（7月24日13時）

信じられない。

ワードの誤字チェック使えない。また出た。

六話表 ガラスの靴（前書き）

昔話ではいつもシンデレラばかり舞踏会に行っちゃいますね。
魔女だって時には舞踏会に行きたいです。

でも、魔女はだれからガラスの靴を貰うのでしょうか。

六話表 ガラスの靴

地球では一週が7日でしたよね？

わたしは別に暦には関心がなくて『客が多ければ休みの日』とか『番組編成が変わったら祝日』とかくらいしか考えていませんでした。

でもここ、ハルケギニアは一週が8日です。だから曜日も八つあります。

そしてその最初の日。それが虚無の曜日です。

地球の日曜日にあたります。すなわち休日ですね。

私は基本的に怠け者ですから虚無の曜日は遅くまで寝坊することになっていますけど、今日は朝早くから起きました。

なぜなら……

来週に開かれるフリッグの舞踏会、そこで着るドレスがないからです。

ここ、魔法学院はメイジたちが集い魔法を習う場所でありながら、それと同時に未来のハルケギニアを導く人材たちの社交場でもあります。

だから学院は学生たちが社交界を学ぶ機会を与えるためのためにこの様な行事は欠かせないのです。

とくに入学して間もない春には大規模のダンスパーティーが二つもあります。

それは入学してすぐ開かれるスレイプニル舞踏会、そして学院最大規模を誇るフリッグの舞踏会です。

スレイプニール舞踏会は、面白いことに魔法の鏡を使って自分が一番あこがれているものの姿になって参加できるのです。

言わば仮装舞踏会。だからドレスがなくてもごまかせました。

あ、どのような姿になったか気になるのですか？

ふふん、当然、お母様の姿になりました。

魔女

でもお母様の今の姿じゃありません。ストウレーガのお母様です。

以前、古い倉庫を^{探検}掃除していた時、昔お母様が占い師をしていた頃の服を発見したのです。

紫色のベールが幾重にも重なり合って不思議な雰囲気を漂わせるもので、気に入ったからお母様にお願ひして譲ってもらったのです。でもあの服はさすがにわたしの体では無理です。似合わないです。残念なことに。

それでも――着ることは出来なくてもあの服は私のお気に入りなので、学院に来る時も持ってきました。

だからスレイプニール舞踏会で着ることができてすごく満足でした。

あれはカッコイイですよ

話を戻し、次の舞踏会、フリッグ舞踏会を紹介します。

ある程度学院になれてきた新入生がどの人と交友を深めるか決めて仲良しグループを作る場面です。まあ、派閥ともいえますね。

メイド通信によると親たちの勢力図をそのまま小さくしたようなものだそうです。

時には例外で敵同士が仲良しになったりもするらしいけど、そんなことはごくまれです。

それで、私を困らせている原因―フリッグ舞踏会では仮装が禁止のことです。

正式な社交の仕方を習うためのこの行事は、必ず正装で盛装するように決められています。

だから自分のドレスが要るのです。それも正装で。

でもわたしは正装なんてもっていません。田舎の作業服とかで出席しては恥をかくだけです。

そしてドレスにフードを付けるべきかの問題も悩みの一つです。お母様の言いつけもあるし。

困ったわたしは朝早くから起きてクロゼットと眺めっこしていますけど、魔法のクロゼットじゃないから見つめるだけで中身が増えたりはしません。

……クロゼット君、本当に増やしてくれませんか？

□ □ □ □ □ □ □

「そんな訳でトリスタニアです。」

「それで父親にお小遣いをせびりに来たと。」

「正解です。お父さん。」

「もっとましな理由で面会することを所望するのだが？」

以前と同じく城の衛兵所でお父さんの呼び出しをお願いしました。今日もあのお姉さんの当番で助かったのです。またあの寸劇を遣らずに済みました。

それでちょっと待っていたらお父さんが出てきました。

お父さんは昨夜も仕事だったそうです。
眼の下のクマがひどいですね。娘の私には心苦しい光景です。
だから、早くもらうものだけでもらってさようならしましょう。
お父さんはお休みが必要ですから！」

「聞こえるんだが、娘さん。」

「それは当然です。口に出してるんだもん。」

「労いまでは望まなくてもね？　こんな時、父としては娘のかわい
いおねだりを期待してしまうものなんだよ。」

「うるさいです。早くお金を出すのです。わたしが探して出てくる
と銅貨一つに付きクロエの蹴りが一発ですよ？」

「一発で死ぬぞ！　まったく、どこで教育を間違ったんだろう……」

「元気出してください。少なくとも、お父さんは何も教育していま
せん。」

「それって慰めているのか？　それとも貶しているのか？」

お父さんは涙ぐみながら懷から紙を取り出し二百エキユーの手形
を一枚、即席で作ってくれました。

かなり疲れ切った顔でした。ちよつと良心が痛みますね。

「お父さん。」

「なんだ、不良娘。」

トボトボと帰るお父さんが振り向きます。思い切りすねています
ね。

わたしはその背中をギュッと抱きしめてあげます。

お父さんの体はすごく筋肉質でこりこり。背中はびっくりするほ
ど広くて温かい。

顔をお父さんの背中にそつとつずめてしばらくじっとしました。
お父さんは察しがいいからそのまま何も言わずに背中を貸してくれます。

ちよつと恥ずかしいから、多くは言わないけど…

「ありがとう。大好き。」

偶にはサービスもいいでしょう？

あゝあゝ、暑いですね！春なのにこんなに暑い！頬が焼けちゃいますよ？

まわした手を解きそつと身を離します。

そして顔をあげればお父さんの笑顔が迎えてくれます。頭も撫でてもらいました。

「そつ。一緒に服買いに行けなくてごめんな？またあとで買い物に行こう。」

「わかりました。約束ですよ？」

今のわたし、まるでお父さんっ子みたいです！なんですか今のやりとり。

これではアイデンティティの危機です。だから一言言っておきます。

「この先は追加料金ですよ？ またせびられたくないなら早く戻って休みなさい。」

「おつと。それは大変だな。お父さんも給料で生活している身だからな？」

「ふん！ ちゃんと休むですよ！ 夕方に確認しに来るからね！」

□ □ □ □ □ □

トリスタニアはそれほど広くありません。

でも町が狭くて人々が多いせいかすごく混んでいます。スリも多いらしいです。都会の病弊っていうやつです。

もう、どこに何があるのか全然わからないのです。

もう回りくどい言い回しは要らないですよ。

即ち、わたしは今、迷子になっていますよ。

こんな男の多い場所で迷子になるなんて、すごく危険ですよ！親切を装ってひっそりした裏通りとかに連れて行かれますよ。どうしよう。

「ふええ、助けて」

「あら、そのあなた？ どうしたの？」

大きな胸、葛色の肌。ツエルプストーさんでした。

それにしても迫力ある人ですね。

ツエルプストーさんがそこにいるだけで周りの人々がただのギャラリーに変わります。

なんていうか圧倒する美しさと言えいいでしょうか。

「つえるぶすとーさん？」

「キュルケよ。あなたはロテシア・ド・ラ・メルフォゼよね？」

「わたしのことを知っていましたか？」

「気づいてないの？ あなた有名よ。」

キュルケさんはそう言つと柔らかく笑いました。

でもその眼はいいものを獲った肉食獣のものです。

でもそれがまた妙に様になっていて不快じゃありません。キュルケさんの美貌はそれほどのものです。

「ゆうめい？ え、キュルケさんがそんなことを言つちや駄目ですよ。キュルケさんこそ有名じゃありませんか。」

「あなたも有名と言っているの。あたしは。」

キュルケさんは『とぼけっちゃつて』とか言っています。でもわたしは有名なはずなのに……

「あら。本当に知らなかったの？ あたしはてつきり分かっていると思つたけど。」

「すみません。身に覚えがないです。」

「ふゝん。そうか。そうだったんだ。」

「あの……、一人で納得しないでくれませんか？」

「いいのよ。あなたは気にしなくてもいいこと。」

「はあ。」

なんかすごく気になりますけど、そんなことを言われると。

「それで？ なんでこんなところにいるのよ。」

「あの、ですね、ドレスを買いきたいけど何処に行けばいいのかわかりません。」

「ドレス？ あなたが？」

あ、いじめっ子みたいな顔になった。

「もしかして、そのドレスにもフードを付ける訳？」

「それはどうでしょう、やはり付けると思っただけです。」

「おっほほ！やめときなさい。見つとも無いわよ？きつと。」

「むっ。予想していた反応ですけど。」

でも直接に言われるとそれは傷つきます。

わたしも女の子ですよ。

きれいに着飾ってお出かけとかしたいです。

それで『きれいだね』とか、『似合うよ』とか聞きたいですよ。

でも仕方ないんだもん！

わたしが着飾ったらだれもそんなことを言ってくれないのだもん！
ただ、怖い人が多くなるだけだもん！

「いいです！ 仕立屋さんは私一人で探しますよ！」

「そう？ いいの？ ここの道ってすごく複雑よ？ そしてね？」

キュルケさんは長くて綺麗な指先であるところを指しました。
その先には見るだけで目眩がしそうな男の群れがありました。
湿っぽい汗の臭みがひどいです。

「あなた、男の人は苦手じゃなくて？」

「うぐう。キュルケさん。助けて〜」

「そう。いいこね。」

キュルケさんは強いです。勝てる気がしません。

□ □ □ □ □ □

わたしはもう二度とトリスタニアでは迷わない自信ができました。
今のわたし、仕立屋さんのところに居ますけど、ここに来るまで
本当に長かったです。

キュルケさんに振り回されながらトリスタニアをほぼ一周したん
じゃないでしょうか。

そして今何をしていると言えば……

「脱ぎなさい。」

「いやです。」

キュルケさんに迫られてます。

「いいの？ あたしは抵抗のある方が燃えるのよ。」

「キュルケさん、キャラが違いますよ！」

その視線はやばいですよ！

わたしは男嫌いですけど、そっちの人じゃありませんのよ！

そこ！ 仕立屋さん！ 笑ってばかりいないで助けてくださいよ！

「なら観念しなさい。本当に脱がすよ？」

「いや！！ 犯される！！」

「その位でこのツエルプストーが引くと思えば大間違いよ！！ 見
くびらないでちょうだい！」

「ひいっ！ 逆切れ？」

分かりました。キュルケさんひるまない人ですね。何が何でも攻め
る気ですね！！

普通はここで引いてくれるのが人情の常で有るのですよ！

「その芋虫みたいなマントとフードを脱がないと採寸できないのよ！」

「わかっていただけますけど、でもこれはだめですよ」

そうです、今は採寸中です。

……採寸中といったら採寸中です。突っ込みは受け入れていません。

「はあ、まったく。なぜそこまで抵抗するの？ただマントだけ脱げばいいのよ？」

「でも駄目です。こわいです。」

「なにが？」

「人々の視線が。」

本当です。女の人はそのままで怖くないけど、でもまったく怖くないと言う訳でもないです。

だって、女の人なのにわたしを襲った人もいるのです。

「もしかして、大きな火傷のあとが残っている？」

「失礼ですね。わたしの肌はつるつるです。」

「それじゃ、貧相な体だから恥ずかしい？ いいの、あたしの前ではだれでも貧相なのよ？」

「うわ、なんて説得力。でも違います。キュルケさんのタイプじゃ無いけど、わたしの体もいいものです。」

キュルケさん、今後の仕立て屋さんが泣きましたよ？

その発言は問題ありだと思いますけど。そこらへんどうですか。

「そう？ ならいいのよね？」

「え……？」

「ウル・カーノ（発火）！」

「きゃあああああ！！！」

キュルケさんは何一つためらいなくわたしのマントに火を付けました。

って、のんきに解説とかする暇なんかありません！ あっちちちち！

わたしは急いでマントと服を脱ぎました。そして一所懸命に踏んで火を消します。

危なかった〜

「もう！ なんてことするんですか！ 本当に怒りま……」

「あ……、あなた。その姿は。」

「え？」

なぜでしょう。今までの人とは違う反応です。

キュルケさんの顔がすごく険悪になりまして、わたしは自分も知らずに後ずさりしてしまいます。

そんな私を追ってキュルケさんは近づいてきます。

ーもしかして本当に危機ですか？

「ロテイ。」

なんか愛称で呼ばれてる！！ だ、誰か許可したというのですか！

「キュ、キュルケさん。落ち着いて。わたしたち女同士だからね？」

「はあ？ 何を言っているの、あなた。」

「え？」

「それより……」

キュルケさんがわたしの肩をガブリと勢いよくつかみます。
ちよつと痛い。でもキュルケさんが怖くて言えない。

「飾るのよ。あたしがあなたをフリッグ舞踏会のヒロインにしてあげるわ。」

その必要は全くないですよっうっう！

六話表 ガラスの靴（後書き）

「スレイプニール舞踏会」

たぶんこれは新入生が入る入学式と、使い魔の召喚の儀式の間にあるみたいですね。原作は6巻までしか読んでないのでよくわかりません。

「作業服」

オールインワンの服で整備服とにっています。
持って来たけど学校では着る機会がありません。

「ジェロームと手形」

ジェロームはトリスタニアでも信用度が高い人なのでその手形はどここの店でも取り扱ってます。
中では、投機のために使う商人もあるようだし、ほぼ銀行券みたいな感じですよ。

「筆者」

戻りました。

暑かったです。田舎の日差しはさすがに暑かったです。

今日からは連載を続けたいと思います。でも備蓄分も無くなったし速度は落ちるかもしれません。

六話裏 クイーン・オブ・ザ・ヒル（前書き）

女王は孤独でした。旦那も娘も民もみんな敵。だつて女王さまは人々の望みは如何でもよかつたからです。

貞淑？ そんなのゴミ箱に捨てました。

倫理？ そんなのカビ臭いだけです。

魔女のレッテルは彼女の勲章。

真っ赤に焼けた鉄の靴は彼女のトウシューズ。

死ぬまで踊る、でも媚びない、曲げない。

でも……、時には友達くらいいいですよね？ 鏡くん。

六話裏 クイーン・オブ・ザ・ヒル

面白くない。

『あなた、いいかげんにしなさいよね。何人恋人をつくれれば気がすむわけ？』

ここは本当に面白くないわ。

『恋をするにもやり方というものがございますわ。』

こんな間抜けなおぼこたちと競つても、全然面白くないわ。

トリスティンの女はもうちょっと骨があると思っただけど、これじやまるで駄々をこねるだけの幼児ね。

皆にして待つているばかり。運命の人を、幸せを、未来を。

でも、あたしは違うのよ。

待つているばかりなんて、そんなバカなことをやってる暇はない。

欲しいものはなんだって手に入れる。つかみ取る。そう生きると決めたの。

だれかが敷いた道を、その端に咲いた花の数しあわせを数えながら歩く、そんな人生はタダでもないのよ。

いくら運命の流れが早くて激しくても、あたしはその流れに逆らいながら生きる。

それこそがあたし。

破壊を司る火のメイジであり、命をも燃やす情熱で生きる、微熱

のキュルケよ。

□ □ □ □ □ □

退屈な日々だったわ。

何も特別なことは起きず、ありふれた一日を繰り返すだけの毎日。家の決定に抗うためとは言え、留学を選んだのは間違いかもしれないと思っていたのよ。

あの日もそう。

ナルシシストを気どっている風の先生はつまらないし、授業中でも群がる男もバカばかり。

だから昼食を摂ってから庭の花壇でも鑑賞しようと思って中庭に出たわ。気分転換にね？

そしていつものように接近して来る男を適当に放置して優雅なティータイムを楽しんだの。

でも気分は憂鬱なままだったのよ。

聞きあきたセリフのパレード。

どこかの時代遅れのロマンス小説にでも書いてありそうな陳腐さ。機嫌は悪くなる一方で、春風さえ鬱陶しかったの。

もう耐えられなくなったあたしは立ち上がったわ。

『もう新人生は面白くないわね』と思いながら本塔にでも行こうと思っていたその瞬間。

「欠陥品じゃないです！ わたしのこの体はお母さまからもらったものなんです！ 世界で一番、誇れるものです！」

そんなに大きい声でもなかったのに、不思議にもあたしの耳にはまるで刷り込んだように確実に伝わったのよ。

心の芯が震える、熱くなる、そんな声だったと。今でもあの場面は鮮明に思い出せるもの。

声を追いかけて、あたしは振り向いたわ。

そこには長くて太いマントをまといフードを深くかぶった小柄の少女がいたのよ。

―他のクラスの子かしら。全然見覚えがないね。

「あの子は？」

「アレが気になるかい？」

学園というのは展覧会よ。

他人の価値を計らうべく、お互いに向かつて視線が雨霞のように降り注ぐのよ。

あたしは人々の視線が好き。それはあたしが特別であることを示す証拠よ。

だからあたしは露出が多い服を好むの。

男子の情欲で淀む視線だけじゃなく、女子たちの羨望と嫉妬に満ちた視線もたまらなく好きよ。

でもあの子の姿はあたしと正反対よね。

あの子はその視線の隙間を潜りながら過ごしていた気がするわ。

あなたは潜み、隠れ、沈むことを選んだのね。

本当に似てないわ、あたしたち。

でも感じるわ！ 言葉にできない親近感！ あの子が、ただの有象無象とは違うとね！

だからね。いつの間にか見入ってしまったのよ。いつも惑わせる側だったあたしが。

「いや！ 貴方なんかだいきらい！ 取り消して！ 取り消してよ！ 平民でなにが悪いの！ お母さまは私にとってこの世で一番大切な人だから！」

ほら。ぞくぞくしてきたわ。

昂る胸の手綱を引き、沈着を装ってみたけど、これは相当なものよ。ほとばしる興奮を隠せないわ。

今まで守る人生なんて退屈なものだと思っていたけど、考えを変えなくちゃ。

世界に反する思いを守ることとはとっても燃えることだと。

「全く、品がないな。それにしても本当に平民だったとは……。」

「あなた、あの子がだれなのかご存じ？」

「メルフォゼ伯爵の一人娘だよ。美しいキュルケ」

「ふん。」

「母親が平民だと言うつわさは事実だったようだな。よくあのメルフォゼ伯爵の名をもらったものだ。」

「平民……」

「まさかあのなりで伯爵の爵位を襲うつもりか？ 全く笑わせるな。ははは！」

貴族の身で平民の親を持つことはどんな気持ちかしら。

平民の片親を持ちながら、伯爵家の後を継ぐことはどんなも

のかしら。

きつと、猛烈に燃え上がる焚火のように熾烈な人生だわ。
きつと、密かに焼き続ける炭火のように魂を焼かす路程だわ。
でも、あなたは選んだわけね。

ただ、生かされるだけ、流されるだけの人生じゃなくて荒滝を遡る人生を。

なんだ。面白い子、またいるじゃない。
燃えること、未だ残っているじゃない。

「平民か。あなたの輝く美しさには似合わない下劣なものだな。」
「ねえ、あなた。」

「ああ、いくらでも時間は出せるぞ。この後も、それからずっと。」

あれを見て何も感じてないなんて、色気なんかに惑わされているから大事なものを見逃してしまうのよ。

惑わした本人が言うのもなんだけど、本当にばかな男ね。

「むげに人の一番を貶したらね……」

「お、おう。」

「そのうち死ぬのよ？ 足りない頭でも持ち続けたいなら、覚えておくことね。」

「心しよう……」

さあ、それじゃどうやってあの子をいじってみようかしら。
こんなに楽しいなんて！ここにきて本当によかったわ！

□ □ □ □ □ □

「それで？　どうなの実際。」

「あの……、話が見えませんか」

「あなた、あのメルフォゼと仲がいいと聞いたわ。あの子の話をし
てちょうだい。」

「はあ。（貴族さまって本当に暇を持て余していらっしゃるのね。）

」

だから調査よ。

本来は直接に会っていじってみようと思ったけど、あの子は案外
に素早くてなかなかつかまらないのよ。

あたしは元々追いかけるのが苦手だから潔く諦めたわ。

その代わり外側から詰めていこうと思って調査をしているわけよ。

まあ、あたしの流儀じゃないことだけは確かね。

「なにかないの？　普通どこで出没するかとか。」

「えっと……（モンスターが何かですかロテシアさんは）」

「難しく考える必要はないのよ。主食とか、ふれあいの方法もいい
わね。」

「主食ならチョコレートですね。毎日、一杯だけは必ず飲んでいま
す。果物も好みます。」

あら、なんかそれっぽい。でも感心できないわね。

食べ物好き嫌いはだめだわ。あたしとて美容のために栄養の偏
らないう気を使っているのよ。

それであんなに小さいのかな？　何歳？

「それと、園芸を嗜んで……、いや、園芸が趣味です。」

「うん？ 何で言い直すのよ。」

「ご覧いただけると、直ぐお分かりになると思います。あれは嗜むとかそんな高尚なものじゃありません。平たく言えば土遊びです。」

「そう。かなり詳しいのね。あの子のこと。」

「メルフォゼさまにはご懇意にして頂いていますので。（手のかかる妹分だし）」

それにしてもこのメイドは話しやすいわ。なんか力を感じるのよ。生徒からの質問を受けた場合、普通のメイドたちは緊張して態度が硬くなりがちなのにな。

むしろこのメイドは不遜とも見えるわ。

「まあ、ちょうどあそこにいらっやいますね。」

「あら、そう？」

廊下の端にある窓のむこうにあの子の姿があつたわ。

彼女は大きなハサミを持って庭の手入れをしていたけど、姿のこともあり（芋虫みたいなポンチョ姿）これ以上ないくらい……

「庭師よね」

「おっしゃる通りです。」

「もしかして中庭のアレ、全部あの子が手入れしているの？」

「元来、あれはメルフォゼさまが手ずからお作りになったものです。自分で手入れするのは当然だと思いますが……」

「え？」

「ちなみにツエルプストーさまのお気に入りのムスカリ——私交場の花鉢もメルフォゼさまのものです。」

これは、驚きだわ。あれってすごくきれいよ？

しかもその青い花が見栄えするよう、細心に気を使って構成した

のがすぐわかる優れたものだわ。

最初に見た時は造花かと思ったもの。

メイド曰く、それ以外でも学院の花という花は全部あの子の所有物だそうだわ。

中庭にも生け垣とか、花壇とかを作って回っているそうね。

その庭園の構成にはいつも感心していたけど、あれってあの子の作品だったのね。

とくに女子寮のすぐ近くに植えている大きな木と、それを包むように飾られた小さな花壇は他のものとは格が違うのよ。

鮮やかな色取りをしているのに全然浅はかな感じがなくて気品があふれる。

とってもあのスッポリポンチョを着ている人が作ったとは思えないものだわ。

「それにしても随分まめめしいね。」

今でも、窓越しに見える彼女は大きなブリキのジョウロを運んでいるわ。

重くてよろよろしているけど、それでも休むことなく働いているのよ。

今だけでも彼女は大きなハサミで自分の背丈よりも大きい生け垣の形を整えて、スコップで水の道を作って、いろんな花を植えているわ。

「本当、あの小さい体のどこからあんな力が出るのか不思議よ。」
「そうですね。」

あら？ 仕事しているあの子にだれかが近付いているよね。

あれってタバサって子ね、確か。

「タバサさまですね。最近、よく一緒にいらっしやいますよ。」

「仲良しかしら？」

「たぶんそうだと思いますけど……」

「たぶん？」

難しそうな表情をするのね。このメイド。

「何が問題でも？」

「互いに何も話さないのです。ただ一緒にいるだけです。だからどんな関係かは……」

「え？」

メイドはそう語尾を濁しながらあの子たちの方を指した。
そこには何も話さず自分の仕事に没頭している二人の姿があったわ。

ロテシアは時々汗を拭いながら土をいじり、タバサは静かにペー
ジをめくりながら本を読んでいる。

それでいて、ときたま視線が合うとニコニコ笑いあう。

なにあれ、本当に初々しくて見てられないけど？

「なにあれ、まるで付き合い始めた恋人じゃない！」

「でも、当事者たちはあれでいいみたいですょ？横槍を入れる訳にもいきません。」

「そう？」

「はい。それじゃわたしは仕事の途中だったので……」

そう言いながら黒髪のメイドは洗濯かごをもって行ってしまった

わ。

名残惜しいけど、また時間を見ているいる聞いてみようかしら。

□ □ □ □ □ □

それから幾らかの時間が経ち、今日、トリスタニアで彼女に出会ったのはただの偶然だったわ。

あたしは前に注文しておいた紅いドレスの試着があつて、虚無の曜日を機会にこの街へ来たのよ

人はあまりロクなものがないトリステインだが、このトリスタニアの美しさだけはあたしも素直に認めているのよ。

あたしはこのまちが嫌いではないわ。

トリステインの優雅な建物たちと、それと対照をなしている生き生きした人々の群れがまたいい。

そんなことを思いながら歩くと、人混みの前に立ち止まって泣き声を出しているロテシアを発見したわ。

こんなにかわいい声だったわよね。

少女のように純粹で、少年のように茶目っ気があふれる声。

つい、いろんな言葉を言わせたい気持ちになるわ！

この子は生粋のいじめられっ子かもしれないわね。

「あら？そのあなた？どうしたの？」

「つえるぷすとーさん？」

あたしの呼ぶ声に応じ、ロテシアは振り向いたの。

やはり深くかぶっているフードのせいで顔は見えないわよね。ち

よつと残念だわ。

「キュルケよ。あなたはロテシア・ド・ラ・メルフォゼよね？」

「わたしのことを知っていましたか？」

「気づいてないの？あなた有名よ。」

少なくとも、あのとき中庭にいた人は全部あなたのことを覚えて
いるはずよ。

そうじゃなくても、あなたは今あたしの一番お気に入りだもの。
あたしにとってあなたはこの国の姫様より名人よ。

「それで？なんでこんなところにいるのよ。」

「あの、ですね、ドレスを買いきたいけど何処に行けばいいのかわか
りません。」

「ドレス？あなたが？」

そういえば、あたしは今までこの子の顔さえ見たことがなかった
わ。

いつもマントでグルグル巻かれていたから、それがデフォルトだ
と思っていたわ。先入観って怖いものね。

だから、つい脱がしてみたかっただけよ。

それで強引にマントを脱がそうとしていたし、魔法まで使ったの
よ。（マントは弁償する気だったわ）

でも、彼女の本当の姿はあたしの想像をはるかに超えていたわ。

「あ……、あなた。その姿は。」

「え？」

透き通る銀の髪——それは沈み始めた夕の日差しを反射し、色っ

ばい赤みまで足して名状しがたい何かを雄弁していたわ。

少女のような幼さが完全に取り除けてもいないのに、淫売のような妖艶さを併せ持つその眼差しは——これまた息をする事さえ忘れられるほどで……。

つばみから開き始めた花卉のようにすこし開かれた桜色の唇、その隙間から見える小さな歯並び、花蕊^{かすい}みたいな紅色の舌。この全てがたまらなく愛しく、キスを誘っていたのよ。

小柄なのに程よく括れている柳腰は力いっぱい抱きしめたら折れてしまいそう。

象牙色のチュニックブラウスのなかで自分の存在をてらう小さな胸はしっかり半球型になっていて、ちょうどよい大きさ。

小ぶりの尻は恥じらうようにスカートのなかで隠されて、彼女の身が動くたび仄かにちらつく。

そしてそのすべてを一つでまとめる——これほどの美しさを持ちながら恥じらいで紅くなっている乙女の頬。

「ロティ——」

ああ——これが！ これこそが人に見惚れるってことね！

目眩までしたわ！ 心臓が止まると思ったわ！ 陸に持ち上げられた魚のごとく息ができなかったわ！

だから隠していたのね。

自分ではどうしようもない芸術品のような体を持て余していた訳ね。

「キユ、キュルケさん。落ち着いて。わたしたち女同士だからね？」

だが、それはあなたの事情よ。
ねえ。あたしはあなたが欲しいの。

『あなたとは一緒に居たくないわ。比較されるもの』—— 友達は
いなかったの。

『ツエルプストーさん、あなたは私たちの気持ちを知りませんの。
きれいだから。』—— いつも高みで一人。

あたしはあなたが欲しいのよ！

今まではあたしと肩を並べる美人は居ないと思ったわ！

でも見つけたのよ！ 自分の全力を以て競える相手を。

見てなさい！ 舞踏会では見事に視線を両分してみせるわ！

「飾るのよ。あたしがあなたをフリッグ舞踏会のヒロインにしてあげるわ。」

六話裏 クイーン・オブ・ザ・ヒル（後書き）

「ムスカリ」

藍色の花が咲きます。春に咲く花で地中海の周りではよく見られるみたい。

日当たりだけ気にしてあげればよく育つ。

「チュニツクブラウス」

太ももの付け根くらいまでの長さ。ウエストにはリボンがついてちよつと締められている。

そつえばこのふくもスツポリの服になるかな。

「一杯のチョコレート」

知る人いるかな。でもロテシアは他のものも食べられるからネタでもなんでも無くなっちゃった。

どちらかというと、ロテシアってローラの役に近いし。

「シエスタ ver 1.2」

ロテシアと過ごすうちに貴族とか平民とか如何でもよくなっている今頃です。

最近は何りがびつくりするほど肝が据わってきています。

「登龍門」

ツエルプストーさんは龍になりたいのかな。

元来はサケをイメージしようと思ったけど、あれは太平洋の魚らしい。

まあ、チョコレート飲んでいる時点でアウトですけど。

六話表 赤い靴（前書き）

女の子は時々、綺麗に飾ってお出かけしたいものです。

おしゃれな靴を買って履いたのがそんなに悪いことだったかな？

綺麗に見られたいって願望はそんなに間違ったものかな？

そう。また足が生えてくるんだとしてもカーレンは赤い靴を履く。

今夜は舞踏会だもんね。

六話表 赤い靴

『逃げたら承知しないよ。分った？』

『全く聞きたくないですけど、一応聞きます。逃げたら？』

『公衆の前で剥がすのよ。』

『なにをですか！ キュルケさんもう発言が犯罪ぎりぎりですよ！

！ ひどい！ 悪魔！ 鬼畜！』

『ありがとう。でも私なんてまだまだよ。』

『すんなり認めないでくださいよ！ 怖いじゃないですか、ってまだまだ？ その上があるというのですか？』

『あなたって、本当々にいじり甲斐があるのね。つついやり過ぎてしまうわ。』

『拳句の果てに責任転嫁ですか！』

□ □ □ □ □ □ □

酷い思い出が追加されました。

そのあと、仕立屋での攻防はすごかったのです。キュルケさん目が怖いし、何でもかんでも着せたがるんですよ。

結局、自分の試着のせいで離れることになりましたけど……

「なんで、あんな約束してしまったかな。」

そうです。わたし、フリッグ舞踏会でキュルケさんと同行する事になりました。

「今度こそタバサさん誘ってみようと思ったのに……」

そういえばタバサさんはどうするんだろう。

やはり綺麗に着飾ってくるのかな？ それともシンプルなドレスで本持参？

食堂で見かけた時にはいつもよく食べていたから、舞踏会でもご馳走の方に興味あるかな。

それにしてもわたしはタバサさんのことあまり知りませんね。

あの事件以来タバサさんとはよく会っていますけど、未だにあの時のお礼さえできなかったのです。

幾度、言おうとしたかしれませんが。でもいざ言おうとしたら勇気が出なくて、ただ笑ってしまうんです。

タバサさんもすっかり誤解しているようで、一言も言ってくれないし……

時折薄く笑みを浮かべるだけです。まあ、可愛いですけど。

「それにしてもキュルケさんとか」

適当に飾ったら確実に迷惑ですよ。

たって肩を並べているのですよ？ 比較されまくりじゃないですか。わたしがみすばらしい格好でキュルケさんに伴うと、まるで宝石キュルケの瑕わたしのよう浮いてしまうのです。

むしろ目立ちまくりですね。後日からは学院にいきません。登校拒否です。（やってみたいけど）

『あ、そう言えば言って無かったね、変な格好してきたら容赦しないからね？』

がくがくぶるぶる

しかたありません。こうなったらわたしも本気です。

キュルケさん綺麗だから、たぶんわたしも最善を尽くすべきです。

↑そこまでしくないんじゃない？

だけど今はそれよりこれをつ突っ込むべきですね。

「採寸するのになぜお尻、揉んでいますか。もしかしたらわたし食べられる寸前ですか？」

「も、申し訳ありません！！！」

そんなに畏まる位なら最初から揉まないでください。

□ □ □ □ □ □ □

「マーメイドでビスチェにしましょう」

わたしも思い切ったものです。あんなに露出多いデザインを選ぶなんて。

あれじゃそれですね。胸とか脇とか色々見え過ぎますね。

でもここでくじけちゃ駄目です。

きつとキュルケさんのドレスもビスチェに違いありません。

だからそれに伴うとしたらわたしに選択の余地なんてないです。

「足が動きやすく、こうやって、両側に開くように。」

「畏まりました。二重にして股のあたりから開かれるようにしたらいいでしょうか。」

脚を見せるドレスなんて、この時代にはまだ遊女しか着ませんね。

でもこれ位の努力は必要だと踏んでいます。

「これは、バランスが崩れると見つとも無いですよ？ 頑張ってください。」

「それは勿論でございます。職人としてのすべてを賭けてでも完璧に仕上げて見せます。」

「でも来週の今日には完成してください。」

「わかりまし……、え？」

そうです。一週でドレス一着を仕上げなければならないなんて。

これって相当無茶な要求ですね

だって、ミシンもないし、すべて手縫いですよ？

「一週しかないです。」

「むりですね。」

「わかるけど、できてください。」

「ああ……、でも布の仕入れにも3日はかかります。それを徹夜で縫い上げるとしても二日は必要です。」

「それにこのドレス、体にフィットするものですから、試着を繰り返すことになるんでしょうね。」

「それで、それが終わったら仮縫いをまた……」

「分りましたから、もう言わなくてもいいです。」

実際、今日はドレスを仕立てたくて来たんじゃないやありません。

店を回りながら見本とかを譲ってもらって、それをわたしの体に合わせて詰めようとしたのです。

「わたしが反物を用意したらいいですよ、本日の中に。」

「無理ですよ！ トリスタニアの布はすべてギルドから出ますよ。順番待ちです！ 王家の倉庫をかつばらわない限り、布はありません

「！」

生地調達中……

「素晴らしい！ 職人歴10年で初めてお目にかかる品物です！」

「えへん、わたしにかかれればこれ位のこと、お茶の子さいさいです。」

「

なにせアルビオン王家から進呈された優れモノです。一般人が見る機会なんて一生ないでしょう。

素人の私が見てもキラキラ光るように見える立派なウールですもの。

これがどこから来たのかは事情があつて言えません。でもこれだけ言っておきます。

「お姫さまが大事ですか、わたしが大事ですか！」

「君はそんなに僕を絞首台に立たせたいのかね！」

城の前で叫んだのはちょっと拙かったかも知れませんが。

隣の衛兵さんたちの顔が真っ白でした。お父さんなんて真っ青でしたよ。

「一疋を丸ごと持ってきましたから十分ですよね？」

「それは勿論です！ 生きている間にこの様な生地をつかってドレスを作ることができるなんて……」

仕立屋さんは感極まって布を拝み始めました。なんのご利益を求めているのでしょうか。

□ □ □ □ □ □

「シエスタさんは着つけも出来たんですね。すごいです。」

「はい、一応習いました。経験は少ないですけど。」

こうやって謙遜していますけど、なかなかの腕です。随分慣れている手つきでした。

「でもすごいですね。ファウンデーション要らずなんて。」

「あつ……恥ずかしいですからあまりジロジロ見ないで下さい。」

「いいじゃありませんか。ちょっとくらい見せて下さい。」

「あつあつ」

シエスタさん見過ぎです。

もう恥ずかしくなってきました。やはり無理しすぎたんじゃ。

「せつかくですから、ね？ 偶にはおめかしもしてみないと、いざという時できませんよ？」

「うう。勇気が必要です。オズの魔法使いさんはどこですか。勇気が出るシロップが要ります。」

「すっかり駄々っ子になりましたね。ロテシアさん」

あの時のわたしはどうにかなっていたんです。

後でよく考えてみたらここまでする必要はなかったのです。

着てみたらわたしがどんなことをやらかしたのかよくわかります。

確かあのときの、わたしはキュルケさんの熱さに当てられて、か

なり際どい服を要求しました。

でも、ここまでやれとは言わなかった気もします。試着の時もこうじゃなかった気が……

「この胸の方を見て下さいよ！ もう半分は曝け出されていますよ！」

「可愛い胸ですね。張りもばっちりですよ？ 何処に出しても遜色ないと思います。」

「ちがいます！ わたしは良家の娘としてこの姿はどうかと聞いていますよ。そしてわたしの胸を勝手に出さないでください！」

本当、シエスタさんは強くなられたのです。

もうすっかりお姉さんみたいになって、叱ったりもするのですよ？

「案外こんな服ってあまり着崩れしません。腰をしっかりと締めているんじゃないですか。」

「そこも問題です。なんですか。へその形が見えるかもしれませんか？ こんなにぴったりじゃ。」

「えー、いいじゃありませんか。減るものじゃないし。」

「減ります。わたしの精神力とか、気力とか、そのほか諸々」

シエスタさんは話をしながらも、せっせと手を動かし髪の毛を梳いてくれます。

心地よくすぐったさを覚えながらも、緊張で力チ力チになった体はそうそう溶けてくれません。

「ならこんなのどうですか。シルクのショール。」

「そ、そうですね。いいかもしれません。」

綺麗に梳いた髪の毛は、首筋の辺りでピンクのリボンに纏められ、

そつと左の肩を越して体の前の方に置かれました。
肩の曲線を沿いながら胸元のコサージュに届き、ベビーピンクの
バラを彩ります。

鏡の向こうのわたしはいつもよりおしとやかで……

「ほら、こんなに綺麗。」

シエスタさんはそつと耳元で囁いてくれます。
ちよつと冷えた肩を温めるシエスタさんの手はすぐく暖かったで
す。

□ □ □ □ □ □

「ねえ、スクスク。本当にいいのかな。」

『わたしホールの給仕をします。必ず来て下さい。』

シエスタさんは戻りました。

元々、シエスタさんはわたしの専属でもありません。

それでもこうして気を使ってくれるのは、ただシエスタさんの好
意に因るものです。

お母様と離れて、誰かに甘えたいわたしを甘やかしてくれますし。
いい人です。

「ねえ、スクスク。でも、シエスタさんは本当のわたしを知らない
よ?。」

ちよつと大きめのお椀みたいな鉢に植えられているわたしの使い魔、スクスク。

クヌギのスクスクは話すことができません。あるのは二つの枝、五つの葉、一つの実、一筋の花だけです。

とても素晴らしくて有能な使い魔だけど知性が有りません。時にはそれが耐えられないくらいさびしくて。

「答えてくれる使い魔が欲しかったかも知れません。」

心なしか、葉っぱの艶が減った気がします。

「ごめんなさい。わたしわがままなご主人ですね。」

シエスタさんはわたしのことを好いてくれます。

でもそれって、わたしの何にひかれているのかな。やはり外見かな？

わたしは一見、純潔な少女のようで、人々を惑わせてしまいます。だから、わたしはこのからだを心のどこかでは嫌っているかも知れません。

「わたし、人殺しだもんね。」

誘い——殺す。

誰かのためではありません。金のためでもありません。

自分の歪んだ鬱憤を吐き出しただけ。

男は嫌い。だから殺す。

お母様の居ない世界なんて認めたくなくて……

ふと振り向くと、鏡の向こうでは妖艶な笑みを浮かべたわたしが

いました。

足には赤い靴、胸にはスカーレットA。
目を背きたいぐらい怖い姿でした。

これこそがいつもわたしが恐れているものです。即ち昔の自分。

「怖いです。昔の自分に戻るのではないかと。」

「わたしは生まれつきの悪人で、今はただ演技がうまくなっただけじゃないかと。」

「人を誑かす自分は怖い、それにたかる男は嫌い。でも……」

スクスクの梢で付いていたクルミがテーブルに落ち、乾いた音を出しました。

玉虫色のクルミ。スクスクしか作れない特別なクルミ。小指の爪よりちよつと大きい。

時間ですね。勇気をくれるシロップの用意が終わったようです。

「負けたく、ありません。昔の自分に。わたし決めたから。」

一杯のブランデー。一個のクルミ。

「どんな困難があっても生きると。楽な道に逃げないと。」

飲み込む。勇気を出す。

ガラスの靴がないなら、自分の靴で踊るしかありません。
それが罪の赤い靴でも。

□ □ □ □ □ □

舞踏会場に入る入口でシエスタさんと会いました。
わたしを待ってくれたのかな。うれしい！

「ロ、ロテシアさん。」

「シエスタさん？ どうしたんですか。」

「き、綺麗です。」

「ふふっ。あ、り、が、と。」

軽くウィンクしてみます。

久しぶりでうまくできませんでしたが、気にしません。

「あ……っ！」

「あら？ シエスタさん顔が紅いですよ？ 大丈夫ですか？」

「は、あひー！」

「それじゃ、給仕の仕事頑張ってください」

さあ！いきましよう！

元々ですね、欲望渦巻くこんなパーティなんて、わたしの専用
フィールドでしたのよ？

ゲブ……、それにしても酒が強すぎたみたいです。くらくらする
くく

六話表 赤い靴（後書き）

「マーメイドドレスとビスチェ」

マーメイドドレスは体のライン丸出し。

フリルを付けると体に自信無い人も着られるけど、ロティのドレスはそのまま胸から腰、股の線まで丸出し。

それでビスチェは肩を完全に出す形。

とにかく際どいドレスを思い浮かべて下さい。

「品物の調達」

横領はいけないことです。いい子は真似しないでください。

業務上横領は10年以下の懲役です。

「仕事が大事ですか、わたしが大事ですか！」

多くの社会人の男にとって最悪の質問。ジレンマとはこれを指す。でも、このセリフが出る場合って、大抵仕事を選ぶしかない。即ち最初から選択肢なんてない。

それは女も分っているけど……、でも言う。

「一疋」

反物の一反は大抵12メートルだったかな？ 一疋は二反、即ち25メートルくらい。

「アルビオンのウール」

きつと羊とか多いはず。

トリステインのせいでガリアと百年戦争なんかしそう。あ、もう終わっているか。

「ファウンデーション」

服の下に着る補正用衣服。コルセットとか、色々ある。
ブラジャーもファウンダーシヨンの一種。だからロティはブラなし。
（どれだけいい体してるんだ。）

「オズの魔法使い」

あれは面白い。わたしのお気に入りはトトとニック。
わたしはたぶん二人目のわたしを欲しがるはず。代わりに働いてくれる。

「シヨール」

ワンピースでもこれ一つでエレガンスになる不思議アイテム。
ロティの物はニット白いシヨール。三角形で相当長い。

「夏の思い出とクヌギ」

あれにはいつも虫でいっぱいでしたね。樹液を飲もうというんな
虫が寄ります。

昆虫採集にはもってこいですね。カブトムシ獲ったこともあります。

「一筋の花」

雄花です。クヌギの雌花ははっぱの付け根にあるけど全然花らしくない。
突起？

「赤い靴」

なぜ教会には赤い靴駄目でしたでしょうか。そして、それって足を
切り落とすほどの罪でしょうか。

「スカーレットA」

緋文字。姦通――Adultery

でも蓮は結婚なんてしなかったし、
厳密には姦通じゃありません。

—話— ロートファージ（前書き）

ロートファージ《Lotus eater》は好戦的じゃなかった。
ただ食事を共にしようと誘った。

わたしの隊員たちは彼らと一緒にになって一斉にロータスをむしゃぶりつき始めた。

そして、そのあまりにも美味たるロータスの味に惑わされた彼らは忘れてしまった。

自分たちの目的を、自分を待つ故郷の人々を。

（オデュッセイアイX、バトラー英訳を筆者が意訳）

—話— ロートファーギ

「きゃあああああ！」

ツエルプストーの悲鳴ではなかった。

悲鳴もあげないなんて、さすがのツエルプストーだな。

ぼくは袖の中に杖を隠しながらつぶやいた。

そう。すべてはあの生意気なまがい物たちに復讐するため。

ツエルプストーは今や生まれたままの姿。

個人的に恨みはないが目的のために恥をかかせていただこう。

どうせ、外国人だ。野蛮なゲルマニアのものだ。あれくらい平気だろう？

それにしても本当に胸は大きいな。

いつもちらちらと見せびらかした物が全部、晒し出されている。

教師も含め会場のすべての男があの子の恥ずかしい姿を見つめる。

だれも一言も言えない。僕は会場に満ちたその背徳感に沈み身震いをする。

いまからぼくがあの子のツエルプストーを騙す。

だれも手に入れること出来なかったあの傲慢な雌を手玉に取ろうとしているんだ。

そう、名門たるド・ロレーヌの男はこれ程の者だ。道端のあちこちに散らばっている糞シイナたちとは違っぞ。

「はあ、不覚をとってしまったね。」

今、ツエルプストーがこっちの方を見てなかったか？
いや、そんなはずがないぞ！ 掩蔽はぬかりなかった。ただの偶然だろう。

その間にツエルプストーは悠々と歩いて壁際に向かい、そこに置かれたソファに腰をかけた。

赤い靴のほか何も纏って無いことにもかかわらず、堂々たる姿だった。

下着も着てないのに足を組む。その浅黒い体を自慢でもするようだ。

「災難だったね」

つばを飲み込む。乾いた唇を舌でなめる。

「いったい誰が、こ、こんなことを……」

声が震えてしまったことに気がつかないほど、わたしは緊張していたんだろう。

でも、心配することはない。計画は完璧なものだ。顔に血がのぼって熱く感じられる。

そんな僕をこのツエルプストーはただ眺めているだけだ。ぼくはついに目を避けてしまう。

「だいたい見当はつくわ」

顔を見合わせ、くすくすと笑いながらこっちを見ている女子の一人をキュルケは見つめる。

そして…… 僕を。

「でも、理由が足りないわ。何故かしら。」

「あの……、カーテンの陰に犯人らしき影を見かけたんだが……」

その燃えるような視線が僕に向く。まただ。もしかして疑っている？

そ、そんなはずないぞ！

はは、そうだよ。そんなはずないって。僕はただ緊張しているだけだからな。

「……小さな女の子だった。きみの方を見て、杖を振ったから間違いないと思う」

「ほら、そのあと、ドレスが布きれになってしまったきみに注意がそれたもんだから。あいつの仕業か？　と思つて振り向いたら、もうその場にはいなかった」

「こんな色した髪の持ち主、そうそういるってわけじゃないよね」

必死だった。出来る限りのことをした。人を騙すつてことはこれほど難しかった？

でもツエルプストーの表情はあまり変わらない、ただぼくの言うことを聞き『ふん』とか『へえ。』とか相槌をするだけだ。

「あなた、あの子——タバサと決闘しなかった？」

「ああ。恥ずかしいけど、こてんぱんにやられたよ」

そう、そう。彼女を疑うんだ。

「そいつと、もう一つの貴族まがい物があまりにも無礼な態度をとったもんだから、母親の顔がみたい、と言ってやったんだ。」

「あら、あなただったのね。」

「うん？なんのこと？」

「何でもないわ。」

「とりあえずそう言ったら逆上したよ、不意を突かれてしまってね。」

笑みを浮かべてツエルプストーを見つめる。

そしたら彼女の顔にも笑みが広がる。

決まった。騙したのだ。ぼくが！あのツエルプストーを！

「ありがとう。全ての辻褄が合ったわ。感謝しなくちゃね？」

そうだ。感謝しろ。

「じゃ、ぼくとデートしてくれるかい？」

「ええ。でもね？ 先客がいるみたい。」

え？

ツエルプストーの指がわたしの背後をさす。

そういえば、なぜ……こんなに静かなんだ？

音楽は鳴らないのか。 皆は話しくしてしまってもう話せないのか。

その回答が自分の後ろにある。

「ミスタ・ド・ロレーヌ。久しぶりです。」

振り向いた。

そして固まった。

考えが——止まった。

「キュルケさん……、すごいです。わたしもすごく奮発したのに。まさか全裸とは……」

「どう？ いいでしょう？ この胸を見てね？」

声が、カナリアの鳴き音みたい。内容が耳に入らない。なんだ。

「すごいですね。大きいのに全然垂れてなくて。やはりキュルケさんは綺麗です。」

「ありがとう。悪い気はしないね。それにしてもあなたもすごくきれいよ？」

胸には淡いピンクの薔薇のコサージュ。それを包む銀色の髪、象牙色の乳房、乳白色のドレス。

彼女は花だった。歩く花。

周りを見回す。人々は微動さえない人形に化していた。

目を戻したらツエルプストーはいつの間にか彼女のショールをスカートのように纏っていた。

白いニットの隙間から見える浅黒い肌はもうそのまま一つの紋様みたいに思えた。

胸はテールブルの布を使って即席に隠したようだ。もうツエルプストーはそれが元のドレスのように様になっていた。異国の踊り子のようにだった。

そしてその隣には肩をさらけ出した彼女がいる。

しろい。しろい肌が、肩が、首筋が目には焼きつく。

彼女が近付いてくる。

「多分、聞こえてないでしょうね。でも言っておきます。」

甘い体臭が鼻を通し脳を犯す。

「ミスタ、この学院から逃げるなら今夜しかありませんよ?」

もつと、もつと、もつと

ぼくは無意識にその小さく柔らかそうな唇へ手を伸ばす。

でもその手は彼女によってさまたげられてしまい、彼女は僕の手の届かないどころに離れてしまう。

「いけないですよ? いい女はね、心と熱意だけじゃ手に入りませんよ?」

「いいこというのね。ならどうやったら手に入るの?」

小悪魔みたいな頬笑みでそつと耳元にささやく。

あれ、ぼくは何がしたかった? 彼女は知り合いだっけ? 今何を……

「お金 犠牲ダイヤと血肉です。覚えて置いてくださいよ。」

―話― ロートファージ（後書き）

「オデュッセイア」

話は面白いけど授業では最悪のテキスト。
とにかく難しく長い。

「ロートファージ」

名の通りロータスを食べる人。
幻覚作用をするロータスを食べて幸せな感覚で生きる。
オデュッセウスはそれにおぼれて故郷を忘れてしまった隊員たち
を縛ってあの島から逃げ出す。

「意識といい訳」

原文はもつと説明文みたいな感じです。ながくて難しい。
だから、勝手に変えてみました。

「筆者」

更新遅くてすみません。
誤字チェックできませんでした。
あつたら先に謝っておきます。すみません。

なんかシリアスになりましたね。

だから次の話はまたロティになります。

六話の構成はこうですね（舞踏会）

ロティ（表） ↓ キュルケ（裏） ↓ ロティ（表） ↓ ヴ

イリエ（幕間） ↓ ロティ（表）

面白くもないのに長引かせてすみません。

追伸（8月6日）

すみません。話が長引くので六話を分割しようと思います。皆さんからわざわざわしいと意見も貰ったし。

七話表 紳士は銀髪がお好き（前書き）

男は恋のために命を賭けると言いますね。
だから決闘なんかして戦う。

でも女はそんなことどうでもいいみたいですょ？

ローレライは死ぬより生きていて、自分に宝石を貢ってほしいみたいだし……

ロテシアはどうでしょうか。

七話表 紳士は銀髪がお好き

「ど……どなたさまでしょうか？」

「名前を聞かれました。うわ……」

わたしは今、会場のまえで名前を聞かれるすごい経験をしています。

もう入学して一月になってるだけ、ショックは大きいです。自業自得ですけど。

この人あれです。『どこのだれだれさま、おな〜り〜』とか言うひとです。

普通は参加するひとの名前をあらかじめ覚えておくんですけど、わたしは今まで顔を見せたことさえありませんから。

「わたし、ショックです。もう泣きます。ええ、泣きますとも。今から。しくしく〜」

「申し訳ございません。本当にとんだ御無礼を！……」

「なら許してあげます。でも一度だけですよ〜 よく聞いてください。」

「お魔女さんです。招待されなくても勝手に来ました！」

□ □ □ □ □ □

「えーっと。招待されずの魔女さま、おな〜り〜。」

なんて間抜けな紹介なのでしょう。

お茶目でやったことだったけど、いまでは後悔しています。

とにかく、わたしは会場に入りました。

もうすっかり雰囲気は盛り上がり過ぎていて、多くの人たちが酒飲んだり話したりしています。

何処となくざわついている気もしますが、そこそこ賑やかです。

でもわたしが入ると全てが台無しになりました。

ちよつと。音楽を止めないでくださいよ。

無音の入場ってどれだけ恥ずかしいかわかっていますか？

「奏者さん、手が止まりましたよ？」

でも、反応遅し。仕方ないな。指をこうやって唇に当てて

「わたし音楽が聞きたいな」

「そ、そうですか！分りました！死ぬまで奏で続けます！」

「いや、死ぬ前には止まってくださいよ。」

燕尾服の指揮者は再び燃え上がり始めたし。なんかすごい気迫で曲の打ち合わせをしています。

それでは約束の人を探しますか？ うん、あそこね。燃える赤髪は見つけやすくて助かります。

「ちよつと、皆さん。道をあけて下さいよ。マネキンみたいに立っている迷惑です。」

その一声でモーゼの軌跡が起こりました。会場が真つ二つです。うわ……、久しぶりだから引いちゃいそうです。

昔の私って尊敬しちゃいそうです。これを日常と思えるなんて、今では考えられません。

分れた人海の中を歩いてキュルケさんの元にたどり着きました。そこには、なんか見覚えのある人がキュルケさんに変なこと言っています。

「ぼくとデートしてくれるかい？」

これって、あの糞尿おんじですよ。本当良く会います。

それにしても衆人の中でお漏らしまでしたのに学院に残っていたなんて……。

図々しいな。彼は顔の皮だけ特別に厚いに違いありません。

わたしなら髪刈ります。修道院直行です。人生、神様に捧げます。

それに！　どういう神経しているのでしょうか。

全裸の女を前にのうのうとデートを申し込むなんて。

はっ！　聞いたことあります。これって紳士ですね！　紳士という名の変態ですね！

これはまた死罪です。もう廃棄物処理班を呼びたい気分です……

とりあえずこの男をどうにかしましょう。

「ミスタ・ド・ロレーヌ。久しぶりです。」

あ、固まりました。

自分のやっていることが恥ずかしい行為だということは自覚していたみたいですね。

ふん！　でも、もうばっちり見たからね！

本当！　最低！　盃に鼻を浸して溺死でもしたらいいのに！

あの男のことはもういいです。

それにしてもキュルケさん。あんまりです。

わたしはこれを着るためにクルミまで食べたのに。

「キュルケさん……、すごいです。わたしもすごく奮発したのに。まさか全裸とは……」

「どう？ いいでしょう？ この胸を見てね？」

うわ……、全裸なのに戸惑いなく胸を張っています。もうわたしの負けで結構です。

「すごいですね。大きいのに全然垂れてなくて。やはりキュルケさんは綺麗です。」

「ありがとう。悪い気はしないね。それにしてもあなたもすごくきれいよ？」

えへへ、今日は二度も綺麗って言ってもらいました。

これは勇気を出した甲斐があるかもしれません。

「でも、全裸じゃ踊れませんよね？このショールを進呈しちゃいます。」

「そう？ なら貰おうかしら。」

「このテーブルクロスも貰いましょう。」

白いショールをスカート代わりに、テーブルクロスを上着の代わりにします。

なかなかそれっぽい。もう大丈夫よね？

それにしても皆さん薄情だな。ちよつとくらい助けなくてもいい

いのこ。

ほらあの糞尿、また固まっている。使えないな。

でも、あんな変態。キュルケさんが許すわけありませんし、わたしが出るまでもないです。

自身はピンチなのに頭悪そうな男にのうのうとデートの誘いなんてされたら、聖女さまでも怒ります。

この糞尿は本当にこれでデートを受け入れてくれるとも思ったのでしょうか。

「多分、聞こえてないでしょうね。でも言って置きます。」

でもこんなやつでも人間です。目の前で流血沙汰になったら気持ち悪くなります。

だから警告だけはしておきます。

「ミスタ、この学院から逃げるなら今夜しかありませんよ？」

でも、さすがこの馬鹿には届かないみたいです。

それだけに止まらず、なんか朦朧な眼をしながら手を伸ばしてくるのですけど？

でも、遅いし力もないものですね。だから避けちゃいます。わたしの体は安くありません。

「いけないですよ？いい女はね、心と熱意だけじゃ手に入りませんよ？」

「いいこというのね。ならどうやったら手に入るの？」

キュルケさん聞いていました？ちょっと恥ずかしいです。

だって、女性性の化身みたいなキュルケさんのまえてこんな偉そ

うなこと……

えいっ！ 答はこのクズにだけ聞こえるよう小さく言っちゃおう。
恥ずかしいから。

「不屈の誠意ダイヤときすな血肉です。覚えておいてくださいよ。」

□ □ □ □ □ □ □

「あなた、化けたね。」

「なんですか、人を魍魎みたいに。化けてません。」

「気が強くなった？って意味よ。」

「そうですか。それはちよつと裏技です。教えてあげません。」

「そう？ならあの人形たちの魔法を解くにはどうすればいいかしら？」

え。まだ会場は固まっています。

わたしが通った道もそのまま残っています。皆さん動きませんね。
いばら姫の城みたいな感じになったのです。音楽だけはなんかす
ごく熱情的に響いていてシニールです。

動いて下さいよ。よく訓練されたアレですか。撃ちますよ？

「みなさん！もういいですよ！舞踏会を楽しんでください！」

そしたら、みなさん動き始めました。

でもなんか近づいてきますよ。イメージはゾンビーです。うじゃ
うじゃです。

お互いの様子を窺いながら、少しずつわたしたちとの距離を縮め

ています。

多分これは、キウルケさんとの上昇効果です。
塩素系と酸素系漂白剤の効果です。混ぜるな危険です。

「どうするのよ、これ。あたしもさすがに怖いわ。」
「わたしも考え中です。」

よし。最初に飛びつくやつはこのワインの瓶で頭をなぐります。
誰でもこいですよ！

そしてその時、人の群れから一人の男がわたしに飛びつきます。

「ミス~~~~~~~~~！」

「出ましたね！！えいつ！」

—カァァン！

わかります。これはクリティカルです。

手に響く感触が『パーフェクトだ。相棒。』と語っていますよ。
これは確実に殺やりましたね。

「ミス、名前はなんじゃ？ 老いた身の長い夜を共にしてくれない
かのう」

「ひいっ！ピンピンしています！-！」

ロン毛爺、強し！

頭からは血が噴いているのに、ぴんぴんです。

「オールド・オスマンじゃありませんか。」

「お……、ミス・ツエルプストー。いやはや、本当に素晴らしいド
レスじゃ。さぞかし多くの男子が…」

「あら、ありがとうございます。でもわたしよりロティに話しかけるなんて、傷つきましたわ。」

「おお、なんてことを！花が二つ、身は一つ。そうだった、偏在、偏在がおった！」

「それで本体はどっちらに？」

「のう~~~~」

殴っておいて何だが、この人こそがこの学院の最年長者であり、もつとも偉い人であるオスマン氏です。

噂では二百近く生き続けているそうです。

「評判を一言で言うと、老害。」

「ちがうぞい？わしはちゃんと若者にも機会を与えているのじゃ。」

「ある人曰く、お亡くなりになって頂きたいエロボケ老人」

「ボケてない！いまでもわしは現役じゃ。」

「エロも否定してください、老いぼれさん。」

ご覧の通りになかなか愉快なお方で、学生たちの間でも人気が高いです。

好感持てる教員ランキングで総合一位だそうです。（メイド通信より）

でも実際に見ると本当に爺さんですね。すごい何かを期待したわたしがバカでした。

まあ、しかたありません。入学式に転ぶ人ですし。

「別嬪だのう。いままでどこに隠れておったのだ。」

「別に隠れていたわけじゃありません。隠してはいたけど。」

エロ爺ですね。

でもいいバリアーです。現に他の人たちは見物にまわりました。

「そのドレスがまたすばらしい！　その歩くたびにチラチラと内股が見えるのがたまらのう」

「それはわたしも思っていたのよ。本当あなたはセンスがいいね。」

「そうだぞ！　このスカートのデザインは、制服にすべきかもしれない。もうちょっと足開いてもらえないか？　もうちょっとで下着が見れそうじゃ。」

オスマン氏。また殴りますよ？

「下着は見えないから下着ですよ。オスマン氏。」

「おお！そうじゃった、そうじゃった。自分の力で見えるからこそ！価値あるものじゃった！いいこと言うな！おぬしは。」

「キウルケさん、さっきの瓶は割れてしまったのでまたひとつ下さい。この老いぼれを天界に送ってきます。」

□ □ □ □ □ □ □

「ミス、是非このぼくと……」

「いや。おまえは彼女がいるだろう。そっちに行きたまえ。」

「てめえらは年功序列という言葉を知らないかね。この場では最上級生であるこの俺に……」

「はいはい、わかりましたけど。そんなに迫らないでください。」

オスマン氏は担架の上に乗せられ荷物みたいに運ばれています。秘書の美人の姉さんはわたしの両手を握りしめ『本当によくやってくれました。本当にすつとしました。』と感動したのです。

その後はこの通り人々が群がってきました。でも、オスマン氏の

捨て身のギャグのおかげで、雰囲気は少し柔らかくなりゾンビーからただのモツブになりました。

それでも助かったのは、キュルケさんが自分の宣言通りに群がる人の半分を受け持ってくれたからです。

「ミス・ツエルプストー。その姿も素晴らしい。まるで舞姫のようにではないか。」

「あら、見る目はあるね。気に入ったわ。」

「おお！それじゃ一曲踊ってくれるのか！」

「それでも、まだまだね。もっと頑張りなさい。つぎ」

まさに一刀両断。男を切って投げ、切って投げ……

キュルケさんはまるで戦士のようです。わたしもやろうかな？

「さあ！このぼくと是非……」

「おれの黒い服の傍に立てばミスのピンクの可愛いドレスがもっと輝くぞ？」

「きみは葬式でもいきたまえ。それより。」

あゝあ。知性なさそう。それじゃわたしの十八番——泣き落とし、行きますか。

「あ、あの。みなさん。こ、こわいですう。わたし、こんなところ初めてで……」

「」「うっ！」「」

先ずは語尾を少し伸ばします。でも鼻音が鳴りすぎないように。言葉は濁しながらも、声は銀の皿にガラス玉が滑るように爽やかな音色を出すことがポイントです。ちょっと切なげにね？

「それなのに、皆さんは怖い顔で見るし、こことか、こことか恥ずかしいし。」

「「「ごくり」「」」

胸に両手を当てて恥ずかしそうに身を竦ませます。

この時の腕は乳房を抱くようで実は谷間を強調するように仕立てます。

なにより怖がっているように見せることですよ。ちよつとぶるぶる震えれば効果は抜群です。

「ゆるして、もう。わたし怖くて。えう、えう。」

「ど、どうするんだよ。」「君が泣かしたんだろっ!」「ああ、泣いてる顔も愛しい……」

いい女はいつも自由自在に涙を出せるようにすること。前世のお母様の言葉です。

でもボロボロ泣いちゃだめですよ?ちよつと、涙で瞳に艶氣がでる位だけです。

そうしないと化粧とか台無しです。アイシャドーでも崩されたら逆に皆が引きます。だって、涙が黒くなるもの。

しかーし。わたしは今日、アイシャドーとかしていません。

だから、秘儀『一筋の涙』が使えるのです!!

「優しく、してね?」

「「「キュン~~~~」「」」

上目使いです。定番だけど使いどころは難しいです。

ここでは斜め下に顔を向けたまま視線だけを移した上目使い。頬

に残る涙の後を見せびらかしましょう！

ちよつと距離を置いて、興奮した男たちが抱きついて来ないようにするのが最後のつめです。

ほら、チエックメイト。わたしの一人勝ちです。

「き、き、きみたち！ 決闘だ！ レディーを泣かすなんてこのぼくがゆるさん！」

「んだと！ そう言うおまえこそ、そのスケベな視線でこの可憐なミスを散々犯していたじゃないか！」

「よし。ミス、待って下さい。この俺がこのクズたちを駆除します。」

「守るよ！ このぼくが！ きみを！ 一生！」

要らないです。それよりお互い戦ってください。それで適当に戦闘不能になってください。

そうやって男たちが争っている間にわたしはそつと抜けだしました。

ひゅー一息つこうかな。喉が渴いてきました。

そのとき隣から水のコップの差し入れです。本当に気がきく人がいますね！

「お疲れさま。」

「ありがとうって、タバサさん？」

小さくこつくり。青いショットの髪が揺れます。

そしてこのつぶらな瞳！ 間違いなくタバサさんです。

□ □ □ □ □ □

「タバサさんは何処にいましたか。」

「うん。ハムと戦ってた。」

そう言いながら手に持っている皿を持ちあげてみた。

これは……多すぎじゃありませんか。ざっと見てもタバサさんの可愛いお腹に収まる量じゃありません。

もう、大きさより、重さが心配になる量です。

「もう、これだけにする。」

「先まではもつと食べたのですね。見てみたかったかも。」

タバサさんのドレスは素朴な感じのワンピースみたいなドレスです。

緑色のドレスでラウンドネックになっています。全体的に地味に見えるけど、タバサさんがもつ本然の可愛さを引き立てるいいドレスです。

「タバサさん可愛いです。抱きしめてもいいですかあ？」

「……」

あ、紅くなっただけ。照れてるんだ。

わたし、タバサさんの表情を読めるようになりました。

最初は難しいかなと思ったけど、思いのほか、タバサさんは情緒豊かな乙女でした。

あ、それ知っています？タバサさんの一番お気に入りの本って『イーヴァルディの勇者』という英雄叙事ですよ。もしかしたら密か

に囚われのお姫さまに憧れているかも？

まあ、それはないかな。タバサさん強いもんね。

むしろ格好いい勇者さまが似合います。あの時も私のことを守ってくれましたし。

「ロティも……」

「はい？ ごめんなさい」 よく聞こえませんでした。」

「何でもない。」

あら、いじめてしまいました。

うつゝ、タバサさんとの会話の機会なんて滅多に訪れないのに。まさに一期一会なのに……

「お勧めの食べ物がありますか？ あの紳士^{変態}さんたち、口説き心はあってもお持て成しの心はないみたいです。」

「うん。なら、これがいい」

タバサさんはサラダーを持ってきました。

えっと、これは……、エゴマの葉？ なんかそれっぽい。

聞いてみれば『ハシバミ草』だそうです。

ちょっと待って下さい。ハシバミはアレじゃありませんでした？

ヘーゼルナッツの木。

あの、葉っぱ食べられるの？！ 新鮮です……。

「苦くておいしい。」

タバサさんゝ、そんな瞳で見られると断れないじゃありませんかゝよし、女は度胸です。

「なら、食べてみます。えいっ！」

もぐもぐ……

もぐもぐ、もぐもぐ……、ごっくん。

「ど、どう？」

「お……、おいしい。」

そんなに苦くなかったです。

この世界の人たちは基本的に肉食をするからこれが苦く感じられるかも知れませんが、わたしは平気です。

むしろなんか香ばしい感じもします。

「おいしいです！これ本当においしい！」

「よかった。」

タバサさんすごくうれしそうです。

そうです。わたしもお母様に褒められた時よくあの顔になったものです。

その時、キュルケさんが戻ってきました。その後ろには死屍累々の男たち。魂が抜けています。

キュルケさんはこっちに近づいては、わたしとタバサさんを交互に見ました。

そして、なぜかは分らないけど、顔に苦笑を浮かべながらタバサさんに話しかけました。

「ちょっと失礼するわ。あなたがタバサだね。あたし、あなたに聞きたいことがあるのよ。」

「……、奇遇。聞きたいこと、わたしにもある。」

タバサさんはそう言いながら小さなウェストバッグから何かを持ちだしました。

えーっと。本の焼けカス？何だろう、タバサさんに限って本を焼くことはないと思いますけど。

「夕食後、部屋に戻ったらこうなっていた。」

え……、タバサさんの本が誰かに焼かれたってこと？

でもキュルケさんは全然、驚いてないみたいです。『残りかすね。まったく、中道半端だわ。』とか言ってます。

まさか、タバサさん、このことでキュルケさんを疑っています？そんなはずなのに。

でもタバサさんの眼差しはかなり複雑です。どうやらこれ他にもなにか抱え込んでいるみたいです。

「さっき、ある男がわたしを訪ねて来たのよ。」

「……」

「その男が言うには、わたしのドレスを切り裂いたのがあなただそうだわ。」

「わたしじゃない。」

タバサさんは表情一つ変えずに淡々です。

「キュルケさん！それってきつと誤解ですよ！タバサさんはそんなことをする人じゃありません。」

「まあ、そうだとは思っわ。この子の人なりは分らないけど。」

それに比べてキュルケさんは相当涼しい顔です。

でもわかります。その奥で燃え始めている何かを感じ取れるので

すよ。

「でも、わたしたち、どうやら一戦、戦わなきゃだめみたい。」

「……」

「あなた、あたしに嫉妬しているでしょう。」

「そっちこそ。かばってもらってない。かわいそう。」

二人はお互いのことをにらみ合います。

キウルケさんはいつものような自信たっぷりの笑顔で、タバサさんはいつもより少し激昂したようにみえる無表情で。

え？わたし、今の会話、全然追いつけませんけど。

何がどうなっているの？ ドレスのことも、本のことも誤解でしょう？

なんで一触即発のオーラをだしているのですか！

「場所は？」

「どこでもよろしいんじゃないくて？」

「時間は？」

「今、部屋に帰って服を着替えてくるわ。」

「わかった。」

「ええ、そうこなくちゃね。」

つまり……。これはアレですね。

「決闘~~~~~?！」

「あ、ロティは参観人だからね？でも服はそのまま。」

「来て。おねがい」

タバサさんにお問い合わせまでされています!? 『初めてのお願い』

がこれ？

なんでしょうが。今のわたしは完全においてけぼりです。

「いくわよ！　いつまでそこにいるつもり？」

「いそぐ。時間が惜しい。」

二人で話進めて、二人で決闘決めて……、なのにわたしはこの恥ずかしい姿でそれに伴うんですね。

「あゝあ！　わかりましたとも！　今日はとことん付き合いますよ！　終わったら理由聞かせて下さいね！」

七話表 紳士は銀髪がお好き（後書き）

「紳士は銀髪がお好き」

アメリカのミュージカル風映画は好きです。

なんか楽しそうだし、いい曲も多く出ますよね。

でも俳優は歌の練習大変そう。モンローは自分で歌ったそうだし。

「スクスクの玉虫色クルミ」

滋養強壮剤。食べても変身しないし、覚醒もしない。

ただ息切れとか動悸とかに聞くようです。成分は大抵ゴオウと同じ。

「ダイヤは女の最良の友」

そうかな。

歌詞の通り、美とは朽ち易く、恋心とは信じがたい。

命短し、恋せよ乙女。

でも弁護士費用は稼いでおくことね。

「動くやつはベトコンだ！」

戦争は悪い。人々を狂わせる。

「混ぜるな危険」

怖くて実際にやったことはありません。

「はしばみとヘーゼル」

ハシバミ草はどんなものか考えてみました。

一応ハシバミは分っているけど、実以外を食べるとは聞いたことがありません。

悩みの果て、結局はっぱにする事にしました。

なんかエゴマの葉と似ているから食べられるかなと思ひまして。
実験するにしても、残念なことに近所にハシバミが有りません。

「ドレスにウエストバッグ」

ミスマツチとはわかっています。でも仕方ありません。

焼けカスをほかの何処に入ればいいのですか。舞踏会にくる服装で。

「筆者の弁明」

キュルケさんの一人称は『あたし』でした。すみません。

七話裏 北風と太陽（前書き）

巡礼者は疲れていました。

道は長く長く、目的の場所は遠く遠く。

体はおもく、疲れは取れない。

だから、渴いた喉で空に向かい叫ぶのです。

《助けて下さい。体が重くてもう動けません。》

七話裏 北風と太陽

— 北風^{雪風} —

— 《あそこに巡礼者がいます。こんな荒涼な地に珍しいですね。》 —

友^{アミ}。

知識としては知っているけど使ったことのない言葉。

いつも読んでいる本は友？——なんか違う

城のメイドたちは友？——たぶん違う。

下町でみた女の子は友？——これも違う。

いつも一緒だった母さまは友？——友ではない。

イザベラは……、あまり深く考えたくない。

『友』ってどんなものかな。

助けあう関係かな。それとも慰めあう関係かな。

友達が居たらわたしの生活は変わるかな。友達が居ればこの絶望感
は消え去るのかな。

なら欲しい。でもどうしたらいい？

わたしは冷たい雪風。人を追い払ってしまう。

だから、わたしは『友』っていう言葉を使う機会がなかった。

これはそう——まるで天使や神さまみたいに、抽象語だった。

言葉はあっても実在がない。それって幽霊と同じ。

そんなわたしにとって『友』とはただの記号にすぎなかった。虚
像のシミュラクルだった。

「てへへ」

「……」

この子と会おうまでは。

――
微熱
太陽――

――《あそこに巡礼者がいます。こんな嶮しい高地に珍しいですね。

》――

フロイン
ト
朋。

そんなもの、出来るはずもないって諦めていたわ。
ぬるま湯みたいな関係、それはこっちからごめんだったのよ。

あたしにとつては友情も恋と同列のものよ。
熱くならない恋なんて嘘、だから熱くなれない友情だって嘘だわ。
お互いの肩を並べて競い、時には助けて、時には諫めあう――そ
んな友情を欲しがっていたのよ。

でも、違ったわ。

あたしには『朋』になれる人がなかったのよ。

『火のトライアングルメイジ』、『格が違う美しさ』、『誰にも
屈しない強気な心』

そうよ。取り巻きはいっぱいできたけど『朋』なんて一人もい
なかったわ。

みんなして、あたしを褒めて――そしてそんなあたしの知人であ
る自分を自慢するだけ。

そんなの『朋』じゃないわ。

あの子たちと友情ごっこしていても、自分の中にある熱情の灯が

衰えるだけよ！

だから、あたしにとって『朋』とはただの理想に過ぎなかったわ。
論理世界でしか存在しない不可能事態だったのよ。

「やはりキユルケさんは綺麗です。」

「ありがとう。悪い気はしないね。」

この子と出会うまでは。

―― 北風 ――

―― 《誰が巡礼者のコートを脱がせるか賭けをしましょう。》――

ロテシアは花が好き。花たちもきつとロテシアが好き。
だって、彼女の花たちはみんなキラキラ輝いている。

本を見るふりをしながら彼女を見つめる。

ロテシアは、大きな鋤スキを使って畝うねを作った。

スキは彼女より重そうに見えるほど大きかった。

でもそんな大きなスキをロテシアはうまく使いこなしている。
ずいぶん慣れた手つき。家でもそんなことをしていたのかな。

深くかぶっているフードの隙間から時々白いなにかが見える。

端正な肌作りをした首筋だった。そして汗が滲んで艶めいている。

暑いなら、脱げばいいのに。

わたしは静かに呪文を唱えて風を吹かす。冷たい風になるように
水の元素も混ぜる。

彼女の分厚いマントが揺れるたび優しい色のブラウスと丈夫そう

なズボンが見える。

なんかいけないことをしているみたいでドキドキする。

「へへ」

風に気付いたロテシアは振り向いて笑った。

それにつられてわたしも笑う。温かい空間。

誰かに感謝されるのがこんなに気持ちいいことだったなんて……。

でも、なぜ彼女はマントを脱がないのかな。

ただ恥ずかしいだけなのかな。ううん、それなら一人で仕事している時には脱ぐはず。

だったら大きな傷の跡でもあるのかな、もしそうだったら大変。こんなにいい子なのに……。

水の魔法は使える。自分の力で母さまを助けたかったから練習した。

でも治癒の魔法は考えているより難しかった。

なにより、エルフの薬を打ち消すほどの魔法は存在しない。だから途中でやめてしまった。

だからわたしにできる水の魔法はそんなに多くない。

ましてや人の傷跡を消すことなんてできない。ちよつと後悔。

わたしはそれが気になっていた。

絶対脱がないマントとフードを疑問に思いつつも、一步を踏み込めずにこうやって風だけを送っている。

『勇気を出す』

それはシャルロットがタバサになって、初めて得た呪文だった。

もっ、だれもわたしを助けてくれない。わたしは守ってもらえない。

でも、わたしはこれから母さまを守らねばならない。だから立ち向かう。

最初の任務では怯えるばかりだった。そして無我夢中に魔法を乱発していた。

結局、目標は殺すことができた。

そしてウサギも死んだ。リスも死んだ。シカも死んだ。ヤマドリ
のタマゴは全て割れた。

その辺りの全ての生き物が死んだ。

わたしはこの地に降りた破壊の使者になっていた。

そのあと、わたしは『勇気を出す』という呪文を得た。

動揺してはいけない、怖気ついてはいけない。

立って、しっかりみる。魔法を決め、撃つ。そして見届く、とどめを刺す。

この一連の工程を心揺らすことなくやれるようになった。

鏡のように静かな心。

それこそが多くの危険な任務を乗り越え、今、この瞬間、ここに
わたしを存続させたものだった。

でも今のわたしはだった一步を踏み込めず、ロテシアの周りに留
まっていた。

勇気を出す。でもこの場合の勇気はちょっと違うみたい。
わたしはまた新しい呪文を求めてしまう。新しい勇気を。

「らららら、あ！団子虫だ！ごろごろ」

でも、ゆっくり考える。今、この瞬間、ロテシアはこうやって私の傍にいる。

この子の時計は人より遅く、緩やかだ。だから臆病なわたしでも追いつくことができる。

休みの時間はいつもの場所で会えるし、逃げたりもしない。急ぎ立てたりもしない。

そう、少しずつ、親しくなる。なんかこれも楽しい。

―― 太陽 ――
微熱

――「先日、帽子を脱がす賭けはあなたの勝ちでしたね。先を譲ずります。」――

またあの子といるのね。土遊びしてるし。

あたしは取り巻きの雀たちから自由になろうと中庭にでたわ。

ロティはこの時間、だいたい中庭の花壇の手入れをしているから、ここではいつもロティの姿を見ることが出来るわ。

そして、その隣でくつろいでいる小さいあの子も。

あたしは虚無の曜日の以来すっかりこの光景がお気に入りになったのよ。

だって、面白いよ？

ロティはロティなりになんか言いたそうだけど言えないし、あの子もなにかをやりたいのに踏み込めないみたいだし。

ほら、今も見てみなさい。

あの子――タバサが風を送り、あの子の汗を拭いているでしょ？

それに気付いたロティはお礼をしようと振り向くけど、なんか恥ずかしくて笑ってしまったわ。

タバサはそれに満足してまた本を読みはじめるのよ。でもチラチラロティの方を見ているわ。

なんて、微笑ましい光景かしら。

でも——いくら当事者たちにはそれでいいとしても——あれでは駄目かもしれないね。

最近はやつと心配だわ。二人の時間は緩やかでも、世界の時計はそんなに遅くないのよ？

機会はいつもある訳じゃないし。あの子たちは見るからにして人間関係に奥手みたいだし。

それにしても、相当な芸当だわ。

そよ風に氷の粒を混ぜるなんて、あの子は一体なにものかしら。

ロティ自体が特殊な人間だから、その周りに集まるのも特殊な人々になるの？

いくら低く見積もつても、『風のライン』。あの応用力を考えれば実戦向きの遊撃タイプよね。

あたしよりも幼そうなのに……、興味がわくのも当然のことだわ。あゝ、この子はあれね、魔法の友達ライバルにぴったりね。

なんてお得。

ロティを釣ったらあの子も付いてくるのでしょ？
なにこれ、すぐく燃えてくるけど？

みてなさい、あなたもきつと手に入れて見せるわ。

まあ、先ずはロティとフリッグの舞踏会を楽しむことだけを考えることにするわ。

「暑いです、まだ春なのに日差しが強過ぎます。」

ロティはそう言いながらマントをハタハタとあおり始めたわ。
いくらタバサの風が涼しくてもあのマントじゃ……。

あ。そう言えばあのマントはマジックアイテムなのよ？

あの時——あたしが仕立屋の前であのマントに火を付けたことがあつたよね？

そのあとロティが採寸をしている間、ちよつと気になってあのマントを見たのよ。

だつてね？あたしはツエルプストーよ？

物を中度半端に燃やすことは絶対ないわ。

だから、あの発火の魔法は本来、あの子を傷つけずマントだけを一瞬に燃やしつくす予定だったのよ。

でも、実際にはそうじゃなかったよね。

ただ、火がついただけ。それもすぐ消されてしまったわ。
だから気になって一度見てみたかったのよ。

そして、後悔してしまったわ。

アレはあたしが勝手に見ちゃ駄目な品物だったのよ。

そう、その裏地には——もうこれ以上なにも書き込めない位に多くの魔法陣が縫い取られていたのよ。

試しに火を撃つてみたけど、まるで霧の海に溶け込む森のよう、吸い込まれてしまったわ。

でも、なんでこんなマントが必要なのかしら？

これじゃあたしが本気で魔法を撃ちこめない限り破れないのよ？

あの人畜無害そうなロティが着るには違和感があるものだわ。

「あ！団子虫だ！ごろごろ」

はあ、この子があのマントを着ている理由が思いつかないわ。

こればかりは容易く聞けないわね。

だって、危険な香りが漂うもの。あたし、そんな面倒なことに首を突っ込みたくはないわ。

――
北風雪風――

――《なぜでしょう、いくら強く風を吹いても巡礼者は服を脱ぎません。なぜでしょう。》――

「あ……。」

無残に焼かれた本棚。

焼け臭い空気が部屋に満ちていた。天井は煤で真すすつ黒くなって、ベッドも少しだけ焦げていた。

『これって、悲しいってことだよね。』

わたしは泣きなくなった。多分、シャルロットなら一夜は泣きつくしたはず。

「これは、火の魔法。」

でも相当荒いものだった。

着火点がおさまらなくて何度も火を放ったようだった。

これほどじゃ実戦では使えない。

的はいつも動く。だから大抵、勝負は一瞬でつく。

わたしが今まで出会った火のメイジたち――総じて彼らは一度の攻撃で確実に的を燃やし尽くすよう魔法を使っていた。

だから、学生の仕業だと直ぐわかる。実力は高くない。

そんな憂鬱な気持ちで舞踏会に参加した。

ちよつと遅くなったのはクロゼットから無事な（煤から）ドレスを探すのに時間がかかったからだった。

掃除をメイドに任せた。気は進まないけど犯人が学生なら舞踏会にいるはず。だからいく。

元々は参加したくなかった。だって、ロテシアは出ないから。

さすがにフリッグ舞踏会はフード付きのマントでは出席できないから、たぶん部屋で花をいじっているはず。

わたしが会場に上がると、そこはもう賑やかで（ちよつとざわついていたけど）わたし一人が悲しみに暮れる。

ロテシアもなかった。急にさびしくなった。

わたしは、さっきの犯人を探すべく周りを気にしながら会場の隅で、食べ物を食べた。

その時だった。

「招待されずの魔女さま、おなーりー。」

ふざけた紹介だったので振り向いた。

興味？ちがう、条件反射みたいなものだった。

そして、眼を疑った。

―天使さま。実在するなんて初めて知った。

先ずは音楽がとまった。

静粛に満ちた会場――人々はすべてが固まった。

ゆるく結んで前に持つて来た銀髪をさらさら揺らしながら彼女が歩く。

白いドレス、でもただ白いだけじゃなく薄いピンク色のプリルがついて、まるで薄ら咲いたつばみを逆さにしたようなシルエットだった。

そう、きつとあのドレスは――彼女の胸を飾っているコサージュのバラを大きくした物に違いない。そんな気までしてきた。

でも、あの花は不思議にも見覚えが有る。何処からだったかな。

「ちょっと、皆さん。道をあけて下さいよ。マネキンみたいに立っていると迷惑です。」

え？ この声って……

そして、思い出した。あの薔薇はロテシアが育てているものだったことを。

『メルヘン・ケニギン』。

それがあの薔薇の名前。株の前に置かれた名札にはそう書かれていた。

おとぎ話の王女さまって意味で、印象にのこる名前だった。

ならあの天使のように綺麗な子は、ロテシア……？

わたしは一言も言えずにあの子がツェルプストーに向かっていくのを見つめていた。

そして、気付く。ロシアの鎧を脱がしたのがほかでもないあのツエルプストーリーだったことを。

泣いてしまった。

表情は変わらなかったけど、涙は出なかったけど。

本棚は焼かれたし、ロシアはツエルプストーリーと話している。

きつと、今のわたしは泣いている。

――
微熱
――
太陽――

――《巡礼者のコートを脱がせました。しかし巡礼者は幸せそうじゃありません。どうしましょう。》――

「こんな色した髪を持ち主、そうそういるってわけじゃないよね」

もういいわよ。

少なくともタバサの魔法はあんなものじゃないことだけは知っているつもりよ。

あの子の風はもっと涼しく、そして速い。

それにしてもこの男は何者かしら。

なんでこんなにもタバサを誘うことに懸命かしら。

あ、そう言えば。

とある馬鹿がタバサに挑戦してコテンパンにやられたと聞いたことがあるわ。

「あなた、あの子――タバサと決闘しなかった？」

「ああ。恥ずかしいけど、こてんぱんにやられたよ」

やはりね、それであたしとあの子を戦わせるという魂胆ね。

「そいつと、もう一つの貴族まがい物があまりにも無礼な態度をとったもんだから、母親の顔がみたい、と言ってやったんだ。」

あんたがああ怖いもの知らずの勇者だったのね。

冴えない顔して、なかなかの勇気じゃない。おつむはまだまだみたいけど。

え？ ちょっと、それじゃこの男がロテシアを侮辱して、そのあとこれとタバサが戦ったの？

ならタバサって子がロテシアをかばって戦ったってこと？

すごいじゃない、ロティ。まるで白馬の王子よ？ 女どうしだけど。

でも、なんか面白くないわ。

なんかロティってお姫様みたいになっているじゃない。それじゃあたしの友達になれないのよ。

だから、モノじゃなくヒトになって？

囚われのラプンツェルは好きじゃないわ。

その時だったのよ。

音楽が止まり、人の群れが二つに分かれたわ

そしてその道をゆったりした足取りで近づいてくるのがロティ。

素敵なドレスを着込んだ彼女は最早、会場の支配者だったのよ。顔はおさない、背は低い、いつもの可愛い彼女だったけど……。

でも、違う。あの表情はいつものように男の前でおどおどしていた時の顔じゃないのよ。

あれは、君臨する者がする表情だわ。

それでロティの姿はいつもよりも輝いていたのよ。

「あなた、化けたね。」

「なんですか、人を魍魎みたいに。」

ロティはそう言いながら、華やかにほほ笑んだわ。

そう、いつものような逃げ腰じゃなくてね。

この時あたしの喜びは凄かったよ。『これだわ！』って叫びたかったわ。

ロティはもう、完全にあたしと同じところにあるって確信したのよ。

そのあと、ロティが見せる行動の数々はすごく面白かったわ。

あの『泣き落し』はなかなかの腕ね。まあ、どこことなく娼妓みただったけど。

男たちから抜け出して来て、あかんべをするところがまたあの子らしかったわ。

そのとき近づいてきたのがタバサだったわ。

右手には大きい皿いっぱい食べ物、左手には水のコップを持ってきたわ。

たぶん食べ物で二人で食べたかったのね。って、あら？

いま、彼女がこっちをにらんだのね！ なぜ？

……、あ！ そうか！ ロティのことだわ！

おっほっほ！ なに、あの子。自分が出来なかったことを先に取られてすねているのだわ！

いままで、多くの恨みの視線を受けたことが有るけど……。女の子から女の子を奪った嫌疑をつけたのは初めてのことだわ！

でも、こつちだつてあなたには話があるのよ。

『舞踏会と一緒にいくことにしてね。』

『ええ？ いやですよ！ 今度こそタバサさん誘ってみようとしていたのに。』

『まあ、あなたにそんな勇気が有って？』

『むかむか！！ 確かにそうだけど！』

そうだったわ。たしかにそう！

タバサ、こつちもあなたには興味津津よ。

あなたの魔法の実力にも、そしてロティの心を魅了するあなた自身にも。

「そつちこそ。かばってもらってない。かわいそう。」

それにしても言っじゃない。この子。

七話裏 北風と太陽（後書き）

「ボードリヤールのシミュラクル」

それを指す名詞（記号）は有るのに実在はないもの。

でもその影響力はすごく強い。

神様もシミュラクルの一種（？）

「アミ フロイント
友と朋」

ガリアはフランス語、ゲルマニアはドイツ語。

友は情緒的な意味が強い友人で、朋は同等な関係のパートナーな感じ。

もちろん自己解析です。

「ロテシアの大きなスキ」

長さは150センチくらい。重さは約三キロ。

木材の作りで刃の部分だけ鉄で補強されている。

実際はそれほど重くないけど——ロテシアの背丈より高いので重そうに見える。

「冷たい風の正体」

独自設定です。もし原作設定が有ったらずにでも直します。

「ツエルプストーはパイロマニアック？」

違います、

「ロテシアのマント」

カトリーヌが作ってくれました。

大事な一人娘を守るため頑張った結果です。

ロティは世間知らずなので拉致でもされたら大変だし。

実は金属の糸も混ぜて織ったものだから刃物にもつよいです。

「メルヘン・ケニギン」

薄い桃色のバラで綺麗です。 いや、可愛いが似合うかな。

意味は本文で語った通り、おとぎ話の女王。絶対姫が似合うのに。

「ラプンツェル」

人の頭髮の強度について考えさせる話。 ついでに彼女の腕力も。 囚われの身で趣味が無いからね。 筋トレでもしたんじゃない。

「筆者」

恋愛関係には持ち込まないよう注意しているつもりです。

それにしてもこの舞踏会イベントは中々おわりませんよね。

あと、決闘のシーンを一つやって……。

この舞踏会が終わればスキップします。 つぎはおなじみの使い魔の召喚です。

そして一年生の事は外伝として書きます。

そうでもないしと原作の話もしないうちに飽きてしまいます。

七話終 ファントム・オブ・ザ・ガーデン（前書き）

エリックの声は神から授かったもの。

でも、神はその彼に人並みの容姿を恵まなかったのです。

忍んで生きるエンジェル・オブ・ミュージック。

彼はこうつぶやきました。

『我は問う。なぜ我はこんな陰険な場所に閉じ込められているかと。』

『それは、我が犯した罪のせいじゃない。』

『すべては、この醜き顔のせいだ。』

『焼かれた——忌々しいマスクの向こう顔…』

『クリスティーヌ。我を救ってくれ。』

『かつて我が君に栄光を与えたように。』

『我が君を愛したように、我を愛してくれ。』

七話終 ファントム・オブ・ザ・ガーデン

三人で来たヴェストリの広場。

今夜は満月で月もすごく明るかったです。

あの二つの月はいつ見てもロマンチックでいいです。

青い月と赤い月はいつも一緒に、その仲良しの二人を彩る無数の星たち。

『夜空には無数の星の数だけ、無数の物語がある』、お母さまの言葉です。

そして、『上の如く下も然り（A s a b o v e , s o b e l o w）』。

たった今、私の眼の前でも同じく無数の物語を秘めている二人が向かい合っています。

タバサさんは青い月のように深い静寂をその身にまとい、キュルケさんは赤い月のように滾る躍動を宿らせています。

舞踏会の音楽だけが風に乗る幽かに響いていて、周りにはわたしたちを除いて誰もいません。

この広場はステージで、二人はプリマドンナのようです。ならば観客はわたしですね。

なら最高の観客になってあげようじゃありませんか。

刃の如く研ぎ澄まされた審美眼を持って最高の賛辞を用意しましょう。

でも、舞台の始まりより先にやっておくべきことがあります。

元々、このヴェストリの広場は学院の西側にあるせいかいつも影

がかかっています。

だから昼でも人はあまりいなくて、わたしはここを勝手に私物化して庭を作っていました。だから……。

「そのグラウンドカバーはアジュガです。いまは暗くて見えなくても青い花です。」

「あら、あれが？」

「本来は、ただの芝だけが敷かれていたので、勝手に敷きました。もちろん壁に沿って作った花壇だけですけど。」

「窓から見たことある。いい色。」

さすが、タバサさん。分ってらっしゃる。

「そして、あの火の塔の入口の傍に樹の苗が並んでいますね？」

「そうよね。ちょっと、なんか包帯でくるくる巻かれているけど？」

「あれはツバキです。接ぎ木中です。夏には花芽を出せたいので今は大事な時期です。」

「ツバキ？はじめて聞くわ。へんな名前ね。」

日本語だから変に聞こえても仕方ありません。

でもわたしはカメルじゃないので、このツバキもカメリアにはならないのです。

ツバキっていい名前だと思うんですけど。

それにしても本当に長かったです。

スクスクが東の方にお便りを送ってからあれこれ五年。ようやく返事がきたのが先週のことです。

そして出来たのがこのツバキの苗。このために尽力したスクスクはもう半月は療養です。お疲れさま。

「まあ、当然のことです。この国にこのツバキはあの四つしかありませんから。」

「そんなにすごい樹だったの?!」

「そうですよ。だから、ね?」

私は人差し指を立てて断っておきます。

「絶対、あの子たちは傷つけないようにすること!わかりました?」
「はい。」

「うん。わかった。」

皆さんがいい子で助かります。

□ □ □ □ □ □

ついに二人が対置しました。

決闘なんて野蛮なことだと思っているわたしですけど、あまりにも二人が格好いいのでドキドキしちゃいます。

「大きな杖よね。あなたの体格に合わないのではなくて?」

「……問題ない。」

「あら、そう。」

そう言いながらキュルケさんは自分の杖を掲げます。優雅な手つきだなんて感心してしまいます。

「そう言えば、あたしが以前あなたの名前をからかったことが有ったわね。それ、今、謝罪申し上げておくわ。悪気はなかったの。ほ

ら、あたしってこんな性格してるじゃない？ っいつい人の神経を逆なでしちゃうのよ。」

「……。」

「なによ、その驚いた表情は。まさか、あたしが謝り一つできない高慢なだけの女だと思ってたの？」

「……。」

「なぜ眼をそらすの。」

タバサさんも自分の杖を構えます。なんか槍でも構えるような低い姿勢です。

「まあ、いいわ。今日はそんなことでここに立っているのではないし。あなたも分っているでしょう？」

「うん。」

「そう。なら、あなたの魔法を見せてもらうわ。あなた、あたしをただの色ボケと思って、腕前を勘違いしてないでしょうね？」

「油断しない。」

「ならあたしも遠慮なんてしないわ！」

キウルケさんが先に動きました。

それは、銃のトリガーを引くようなものでした。まるで指揮者がタクトを振るように手首を捻り、杖をタバサさんに向け、そのまま大きな火の玉が飛び出します。

あれって、いつ呪文を唱えたのでしょうか。本当に速いですね。

でもタバサさんの沈着な眼差しは変わっていません。

炎の球が迫る瞬間、後ろに跳び退りながら呪文を唱えます。

そして目の前に氷の壁を作って炎の球を受け止めました。

炎と氷はぶつかり合いやがて深い霧と化しました。なかなかの壮観です。

タバサさんはそれには何の興味も無いみたいで、すぐさま攻撃に転じました。

空気の中の水が氷と矢のなり、タバサさんはその矢をキュルケさんに撃ちます。

以前、タバサさんが氷の杭を打ったことを見ましたが、それよりもっと早いものです。

でもその矢たちはキュルケさんに届かず溶けてしまいます。

キュルケさんはいつの間にか自分の周りに火の輪を作っていたからです。

それは赤い鞭のようにも見えるし、蛇のようにも見えました。

たった一瞬でしたが、二人の攻防は凄まじいものでした。

メイジとして、わたしは多分あの二人の足元にも及ばないはずですよ。

でもそんなすごい二人はなんか変な戦い方をしていました。

なんか、本気で本気じゃないみたい。そんな感覚です。

そしてその違和感の正体は戦いが進むうち露見しました

それは、二人がお互いに受け止められるよう魔法を撃っているからです。

最初、魔法を放った時にはその強力さにすごく驚きましたけど、そのタイミングは何となく少し遅いものでした。そして、必ず受け止められる角度で撃つのです。

そんな、二人の攻撃は見栄えはするけど実際にはそんなに危なくありません。

だからこれは、力比べです。

決闘なんかじゃありません。ただ溜まった鬱憤を相手に訴えているだけでした。

□ □ □ □ □ □ □

「もういや！わたしの望みはいつも！目の前にあって届かない！」

「嫉妬なんてみつともないわよ！」

「違う！悔しいだけ！あなたはわからない！」

何が彼女たちをあんなに攻め立てていたのでしょうか。

「そつちこそ！あたしのはわかっているかしら？」

「興味ない！」

「それよ、それ！みんな、『あたし』という人物には関心がないのよ！」

いつの間にか二人の足は止まっています。

ただ精一杯魔法を飛ばし、それを受け止める。

タバサさんの前髪は少し焦げていますし、キュルケさんの肌には細かい傷が出ています。

子供の喧嘩みたいになってしまった今は、魔法より言葉が先走ります。

「たくさんあっても、その中で本当に欲しいものがないなら、それってしあわせかしら？」

「少なくとも、選択肢がないわたしよりはまし！」

「そうだわ。わたしはなかったことがないもの。わからないわ！」

でも少しずつお互いを理解し合っていくように聞こえるのはわたしの錯覚じゃないはずです。

□ □ □ □ □ □ □

どれくらいの時間が経っているのかはわかりません。

一刻かもしれないし、もう夜明けが目の前かもしれない。ぼうつと眺めているだけのわたしはただ待つしかありません。

そのうち二人の勢いは弱くなって、やがて魔法が止まりました。そして、どちらが先だかわからないくらい同時に地面に倒れてしまいます。

「はあ、はあ、やる、じゃ、ない。」

「はあ、はあ。すごく、強かった。」

キュルケさんは肩で息をしているし、タバサさんも顔に汗が滲んでいます。

でも、二人ともすっきりした顔です。すごく気持ちよさそうです。これがあの、河川敷で夕陽に照らされながら倒れている二人の図ですね。

今は夜だけど、それはそれで趣が有り、素敵な絵になっています。

じつは、こんな風になってしまうことは予想できていました。

だから二人が戦っている最中、わたしは部屋に戻って飲み物とタオルを持ってきました。

疲れた時にはすっぱいものもいいかもって思いましたから、ライムジュースです。

ふたりはあんなに真剣に向き合っているのに、部活のマネジャー気分になっている自分にはちょっと落ち込みました。

そんなことを思っているうちに二人は起きました。服についた芝や土を払い落して、杖をしまいます。

タバサさんは焦げた前髪が気になるみたいで、それをいじっています。

キュルケさんも頬に残った血の跡を手で拭い、ペロツとなめました。なんか、ねこみたいです。

「タバサ、あたしはあなたが気に入ったの。」

「……。わたしも。」

キュルケさんはいつも思っていることをストレートに言っています。

そのせいでキュルケさんは敵が多いけど、わたしは内心それが羨ましいです。

わたしもあのように思っていることを言えるなら、タバサさんとももっと仲良くなれたかもしれません。

「言っておくけど、本の事はあたしじゃないわよ。あたしは欲しいものは奪うけど、その人にとって一番大事なものは奪わない主義だから。」

「どうして？」

「だって、命のやり取りになるじゃない。そんなの、面倒じゃない」

そう言いながら笑いあう二人です。

さっきまで殺さんばかりの魔法を撃ちあっておいて、どの口が言いますか。

でもそんなキュルケさんの不敵さも格好いいです。

「友達になってあげるわ。」
「……。」

ああ！

わたしより先に友達宣言ですうゝ
でも雰囲気がよく過ぎて割り込めません！！！！

「いや、違うわね。」

「？」

「友達になりましょう。タバサ。」
「うん。」

□ □ □ □ □ □

あとで思い返してみれば、その時のわたしは本当に不注意でした。

「もう、拗ねないでよ。そんなことで」

「知りません。」

「あゝん、拗ねた顔も可愛いじゃない。この」

「えうう、ほおおづえららいえうあさいおゝ（訳：頬を抓らないで
くださいよゝ）」

わたしは使い魔のスクスクを召喚してから、植物と感覚を共有する能力を得ました。

多分、使い魔との意思疎通のために出来た能力でしょう。
だから、わたしはその気になれば、殆どの植物と感覚を繋げることが出来ます。

そのおかげで、わたしは森では道を迷うはずもないし、飢えることもありません。（果実の所在が分かるのです。）

この学院に来る時もそうでした。

下手に宿なんか取るより、森でいる方が安全だったので、野宿をしながらここまでに来たのです。

「キュルケさんのいじわる！ 取っておいたケーキのいちごを横取りされた感じです。されたことないけど！」

「ロティの家ではケーキの上にいちごを乗せるのね。」

「見た目も大事。」

だから、その気になればこの庭の全ての草たちと感覚を繋げることで出来たのです。

ただ、そうしたらすごく気持ち悪くなるので、やらないだけです。考えてみて下さい。自分は一人なのに数十、いえ数百のひとが話しかけていると。

疲れるでしょう？ いやでしょう？

「そう言うことじゃありません！ わたしは、わたしは！ ふええええ〜」

「あら、泣いちゃった。よちよち、泣かない。泣かない。」

「もうやめてあげて。ロティが本気で泣いてしまう。」

「いいです、わたしが駄々っ子なだけです。わたしなんて団子虫がお似合いです。しくしく。」

「本当、あなたといたら退屈しないね。ってあら？」

でも、今では後悔しています。

仮定なんて全く無用なものでしかないけど、こう考えずにはいられないのです。

わたしがもつと早くその人たちに気付いていたら……。もし、わたしがマントを持っていたら……。

「ロティ！ 危ないわ！」

「っ！」

振り向いたその先、見えたのは襲いかかってくる火の波でした。

全てがスローモーションみたい。

わたしを庇おうとしているキュルケさん、何かの呪文を唱えようとするタバサさん。

でも届くことはありません。

キュルケさんとタバサさんは次の瞬間、何かに取り押さえられたように身が固まってしまいます。

「拘束？！ 解除が間に合わないわ！」

ふだんの二人なら、こんな魔法なんて何ともなかったはずですが、いいえ、そもそも攻撃を許すはずがありません。

でも二人は疲れていました。全力を出し切り心の鬱憤を吐き出しました。

それと、みんなが友達になり、いい結末を迎える事が出来て気も緩んでいたかもしれません。

そしてわたしも——素顔を晒したからにはこうなってしまうのを予想しておくべきでした。

「ロティ！ だめ……！」

タバサさんの叫びは炎の唸り声に飲み込まれてしまいます。

キウルケさんの必死な姿も火炎の揺れに遮られ見えなくなりました。

そして、わたしはただぼうっとしていて、炎の熱いキスを——その烈火の抱擁を受け入れてしまうのでした。

□ < > □ < > □ < > □

ただ、あのいけすかないツエルプストーを懲らしめてやりたかったの。

「ミス・シャラント。あのドレスの女に火の球を撃つて。」

「なんで？ あの子は関係ないでしょう？」

二人の決闘には見知らぬ女の子が一人いたの。

舞踏会でみた子じゃない？ すごく綺麗でかわいい子。

男たちが群がってきたけど、怯えて逃げてしまったことが印象深かったな。

女の私でもあれほど綺麗な子は初めて見たし、男たちにはさぞかし可愛く見えたのでしょ。

「考えてみたまえ……。あの二人はドレスの女に夢中なんだぞ？」

「なによ……。それと、あの子を攻撃する事となんの関係が有るのよ。」

「は！ 今の二人は疲れていてぼくたちの攻撃を塞げない。」

「それはそうかもしれないけど……。」

ミスタ・ロレーヌは普通、プライド高く気が強いけど、女性に関

しては礼を守る人。

でも今夜のミスはすこし怖かった。血走った目も、荒い息使いも。ちよつと怖かった。

私はド・ロレー又と二人きりでここに来たのを後悔していたの。

「目の前で大事な友達が痛い目にあえば、これからはそんな不遜な態度を見せなくなるかも知れないぞ？」

「そう……、かな？」

「そうだ。そうだぞ。だから、撃つのだ。」

「なんか、釈然としないけど。いいよ。」

その時はこう思っていたのよ。弱い魔法でちよつと驚かせようと足元を狙っていたし、火玉も服を少し焦がせるほどの小さいものにしたの。

「きゃああああああああああ！……！！！」

だから、火の球が急に大きくなったのも——まるで燎原の勢いで——、それが方向を変え彼女の顔に向かったのも。

そして、ド・ロレー又が三人に同時拘束魔法を使えたのも。

私にはまったく理解できない事。

「ははは！……これだ。これだ！これが見たかったのだ！」

「あ、あなた、今何を。」

「三人をいっぺんに拘束できるなんて、さすがぼくだ。なんか今夜は頭が冴えて、何でもできそうなんだ。」

「はやく！あの子を助けて！火を消して……！！！」

哀願をしたの。

自分の罪が怖くて？ それともあの子が可哀そうで？

わからない。わからないよ。こんなつもりじゃなかったのに。

「なぜだ？」

「え？　だって、あのこ！早く助けないと！」

「美しいじゃないか。燃える彼女も。」

「あなた！　何を言っているの！」

ド・ロレーヌの顔がこっちを向いたの。

そしてその瞳はもう光が消えていたことに気付き、私は体の底から震えたの。

私はしてはならないことをやってしまったんだ。

怖くて、震えて、齒がカタカタと音を鳴らして…。

そして確信したの。

「ミス・シャラント。あの清^{みよ}かな泣き声が聞こえないか？」

「あ……」

一生、私はこの頬笑みを忘れることができないと。

「まるで、天上の歌声じゃないか。」

□

< >

□

< >

□

< >

□

「きゃあああああああ……！！！！！！」

手が動かない。体に力がない。
助けたいのに、助けられない。

ロティが目の前で燃えていた。
両手で顔を包み、身を悶えて苦しんでいた。叫んでいた。泣いていた。

そして、斧に切られた樹のようにゆっくりくずおれた。
火はまるで残り滓さえ残さんとはかりに燃え続け、火傷だらけの彼女の体だけを残し消えてしまった。

やがて静寂だけが残る世界。
そのあと、初めて聞こえてきたのはキュルケが力なく座り込む音。
二つ目の音は、

「いやああああ……!!」

久しぶりに聞いた声——わたしの泣き声だった。

七話終 ファントム・オブ・ザ・ガーデン（後書き）

「ファントム」エリック

オペラ座の怪人のファントム。

天上の声を持ちながらも、火傷で人々の眼を忍びながら生きる。
魅入らせる美とは欠如から来るもの。エリックの声は忍ぶ生活の
中で磨きが掛ったんじゃないかな。

「上の如く下も然り（As above, so below）」
占星術のモットー。バイブルから来た言葉。意味は全然違うけど。

「アジュガ」

春に花が咲く背の低い植物。

花壇の土が剥き出されていては美観上よくないから植えてみました。

「ツバキとカメラリア」

カメラリアはヨーロッパにツバキを紹介したゲオルク・カメルの名
前から。

もともとヨーロッパにはツバキがなかった。でも伝わってから
その魅力にみんなメロメロ。

「ツバキの花ことば」

そのうちお気に入りには『気取らない美しさ』

「スクスクのお便り」

風に乗り伝わる遅いもの。でも確実に届いて、確実に受けられる。
何かの情報も得ることができるかも。

「戦闘風景」

原作のをそのまま使ってみたけど、自分には戦闘描写が駄目みたいです。これからは書かない方向で。

「ヴィリ工覚醒」

なんで、主人公でもないやつが覚醒したのかな。

「火傷に注意しよう」

火傷の本当の恐ろしさは、体が溶けてしまうことです。

全身火傷はそれだけでもほぼ死に至りますが…。

九死に一生を得たとしても、網膜は痛んで見えないし、耳もおかしくなるし、触覚なんて無くなるし…。

「タバサさんの心労」

タバサさんの心労が心配になってきました。

でも、この物語の本当の意味での主人公だし、頑張ってもらうしかありません。

タバサさんのファンの皆さん。すみません。

「筆者のいろんな弁明」

私とて、ロテシアを焼きたくはありませんでした。

でも、ここでロテシアの能力をタバサとキュルケに明かしておきたくて……。 やっちゃいました。（声明がほぼ犯罪者ですね。）

でも火傷は綺麗に消えますので心配無用です。障害も何も残りません。これだけは確実です。

そして今度の更新が遅れたのにはやむを得ない理由があります。知人が、知人が……。『スタークラフト2』やれって……。

レイナーさんが格好いいのが悪いのです。
タイカスとのツショットが良すぎるのが悪いのです。
気が付いたら5日が過ぎていました。

―話― メフィストフェレス（前書き）

これは契約だ。

我が『時よ止まれ 汝は美しい』と言えるその瞬間までの。

（ファウストより）

―話― メフィストフェレス

『三つの望みをかなえてあげよう。』

「やさしい詐欺師さん。わたしはそんなに多くの事を望みません。」

『違う、これらは君にとって施しでもあり、そして戒めでもあるのだ。』

「施しなのに戒め？ 変ですね。」

『直にわかる。我は光に背くものだから、我からの力で幸せになれるはずもないだろう。』

「そんなものですか？」

『そうだ。だから言ってみろ。』

「うん」 好かれないのかな。人々から愛されたら幸せなんじゃ？」

『そう、なら君の望みは叶う。君は全ての有象無象から好かれるだろう。』

241

「またですか？ なら次は…、そう！ 健康になりたいな！ 痛かつたら全てが台無しだもの」

『そう、なら君の望みは叶う。君の体はいつ、いかなる時にも朽ちる事ないだろう。』

「最後は、決まっています！ もう、これが大事ですよ？」

『……。愚かだな。』

「なんで？」

『破壊を好むこの我にそんな言葉を言っではならないものだ。』

「そんなものですか？」

『最後の望みを言え。』

「わたしはお母さまが欲しいです。」

「……なに？」

「お母さまがほしいです！」

「取り戻したいのか？ 死んだ人を？」

「いいえ、ちがいます。わたしはただお母さまが必要なだけです。」

「そうか。面白い。なら君の最後の望みも叶う。」

「君は母に恵まれる。いつも君が必要な時、そこには母が有る。」

「ありがとうございます！ もう何も望むことはありません！ わたしの幸せの条件が全て揃えました！」

「なに、感謝は必要ない。これはそういうゲームだからな。あの博士から始まった人生のゲーム。」

「あの人は勝ちましたよね。」

「それ以後は我の一人勝ちだったことも忘れずに。さて、いつになるかな。君が我に向かい「死にたい」と叫ぶ日は。」

「そんな日は来ませんよ。ぜひぜひ頑張ってください。悪魔さん。」
「きつと来させて見せるぞ。ぜひぜひ頑張れ。小娘。」

―話― メフィストフェレス（後書き）

「ロテシアの火傷の理由」

彼女の属性一つ。『誘い^{いざな}』

契約の一つ、『好かれる』の結果、彼女は人々に好かれるような魅力を得る。

でも、それは人に限らないもので、すべての生命体、モノ、魔力にも好かれる。

シャラントの魔法は彼女に誘われその力も大きくなり、その狙いも変わった。

「残りの契約」

おいおい説明する。

「筆者」

短いです。次は使い魔召喚編です。

小話一 初めての夏の話（前書き）

ちよつと行き詰っているので、小話でも書いてみようかと……。

使い魔の召喚はなしにロティの出番をどうやって作るべきなのか困っています。

小話一 初めての夏の話

『夏のロテシアその1』

「夏は忙しいです。」

「そうなの？」

「はい、基本的には草薺りですね。園芸とはおおむね人と自然の闘いみたいなものですから。」

「それで休暇期間なのに、一日中、花壇にいる訳ね？」

「そうですよ。スクスクが助けてくれなきゃこれもできません。」

「なら残念ね。一緒に遊びにでも行こうと思っていたのに。」

「え？」

「タバサ〜 ロティは駄目みたいよ！」

「あ！あ！ 行きます、行きます！ 置いていかないでください〜」

『夏のロテシアその2』

「臭いわ。ロティ。」

「…………。ちょっと遠回しな言い方はできませんか？」

「臭^{にお}うわ。ロティ。」

「なんか、セリフだけをみれば一文字しか変わってないような気がします。」

「それで？なんでそんなに臭いの？」

「キウルケさんに勝てる人がいれば見てみたい……。あ、これですね。肥料の匂いです。」

「肥料？ それってどんなもので作るの？」

「牛糞です。」

「ぎゅうふん？ なにそれ。」

「なにそれって、牛の糞じゃありませんか。」

「……………。その肥料まさか。」

「隣の牛舎から貰ってきました。オガクズと落ち葉と混ぜて発酵させています。」

「冬にまた会いましょう。ロティ。」

『夏のロテシアその3』

「しくしく。さびしいです。糞なんて自然なものじゃありませんか。なんでみんな避けるのですか。」

「でも、においキツイ。わたしも苦手。」

「牛糞はむしろ人糞より臭くありませんよ。」

「……………。お願いロティ。その天使のような容姿で糞とか言わないで。」

「？」

「その肥料は何処に使うの？」

「あ、バラです。冬の肥料を用意しているのです。」

「バラ…………。」

「以前、舞踏会で付けていたあのメルヘン・ケニギンのことです。バラは基本的に肥料が多く必要ですから。」

「幻想が壊れる。言わないで。」

「？ 植物が肥料で育つのは自然なことなのに…………。」

「ロティ。もう許して。」

「あ、でもハシバミはあまり肥料とか必要ありません。あれはむしろ土に養分を与えるような樹ですから。」

「ほっとした。ありがとう。」

『夏のロテシアその4』

「（いい加減、他のところで魔法練習してくれないかな……。）」

「な、なによ！ 練習しているのがそんなに变？」

「いいえ、そんなことはありません。」

「そ、そう。なら見ても構わないわ！」

「あの……。でも、わたし、これからこのツバキの世話をしなきゃならないんですけど。」

「わかったわ。ちよつと休憩しましょう。」

「助かります。あ、それと差し入れです。これ、お父さんがお昼に持ってきたパイなんですけど……。」

「クックベリーパイだわ！ ありがとう！ ロテシア。」

「いえいえ。それじゃ外ではなく部屋で食べるのはどうですか。」

「そうね。行儀が悪いと言われたくないもの。」

「ならお疲れ様です。」

「《手を振りながら塔に戻る》ありがとう。これを食べてからもつと頑張るわ！」

「（しないでください）」

虫取りより、面倒です。ヴァリエール取り。

『夏のロテシアその5』

「ミス・メルフォゼ。お願いがあります。」

「何でしょうか、ミス・ロングビル。」

「以前、あなたから貰った花の鉢植を見てもらえませんか？最近、元気がないように見えます。」

「あ、あのアジサイですね。」

「はい、持ってきました。」

「どれどれ……、ちょっと水が欲しいみたいです。ロングビルさんは土のメイジですから土の状態には敏感ですよ。」

「はい、でも、どれくらいがいいのかは分らないもので……。」

「土の中で均等に水が行き届いているなら、やや湿っぽくてもいいですよ。」

「そうですか？」

「春に肥料もやりましたし、剪定もしておいたからその辺りは気になくていいです。」

「はい、でも本当に詳しいですね。土の状態も一触りで分っちゃうし。」

「修行の産物です。」

「くすくす。そうですか？」

「あゝ。いま、わたしが幼いからって笑いましたよね！」

「そんなことありません。でも、園芸ばかりじゃなく学院のカリキユラムにも精を出して下さい。」

「うっ。」

「学院のトップですよ？下から。」

「だって面白くないもん。勉強。」

『夏のロテシアその6』

「はあゝ、夏は疲れます。」

「ロテシアさん。お疲れ様です。」

「あ！シエスタさんだ。こんばんは。」

「今日も元気だったそうですね。なんか、門みたいなアーチ形の骨組を作っているって聞きました。」

「はい。ちよつと綺麗な散策のコースを作つてみたいと思つて……」
「もしかして蔓バラ？」

「うわ！ わかりますか？ 本当すごいです。」

「いえいえ、すごくありませんよ。だつて先週、トリスタニアに出かけた帰りに蔓バラの苗を買つて来たんじゃないありませんか。」

「シエスタさんはわたしのことを何でも知っていますね。」

「なんでもは知りません。知つてることだけ。」

「とにかく、完成したら一番最初に見せてあげます。バラの庭でお茶会、どうですか？」

「まあ、豪勢ですね。でも、初めてのゲストが私でもいいですか？」

「あの、シエスタさんにはいろいろ世話をしてもらつて……」

お姉さんみたいな人ですし。」

「あら、ならロテシアさんはわたしの妹ですか？ ふふ、悪くありませんね。」

「てへへ。でも何で頭を撫でるのですか。」

「何となくですよ？ それではお休みなさい。明日もいい一日になるように。」

「はい。シエスタさんもお休み。」

「夏は虫が多いから、窓は締めて下さい。分りました？（窓から夜這いに来る男が多くて困ります。）」

「はい。」

小話一 初めての夏の話（後書き）

「草むしり」

茅つても、茅つても、次々と生えてくる雑草は悪魔のようです。夏は朝早く起きて、朝ごはんを食べる前まで草むしりをやるのが日課です。

「牛糞」

なれば平気です。そんなに臭いしません。発酵の後の肥料はもう土とあまり変わりません。でもロティは発酵を自分でやっているからあなるのです。

「なぜ発酵？」

そのままいたら雑草が大変なことに……。牛糞は重い肥料ですし、即効性ではないのでちょっと工夫しなきゃ。

「なんかルイズ出ているけど？」

出会いの話はルイズの回想でやろうとおもって。いまはカメオ出演です。

「アジサイとロングビル」

『美しいけど冷淡そうなあなたに』by ロティ

「トップのロティ」

普通、魔法ができないなら座学でも頑張りますね。（cf ルイス）

でもロティは頭の出来が悪いので、そんなことできません。そして、忙しいし。

「蔓バラの門」

いつかやってみたい。

「何でもは知らないよ？知ってることだけ。」

言わせたかったのです。

「夏は虫が多いので窓を閉めましょう」

舞踏会の副作用です。

一時はひどかったのですが、今は落ち着いてきています。

女性会員限定『ロティを守る会』が頑張ってくれています。

八話表 扉をくぐりし者（前書き）

我を過ぐれば憂ひの都あり、

我を過ぐれば永遠とこしへの苦患なやみあり、

我を過ぐれば滅亡ほろびの民あり……。

（神曲、第三曲、山川丙三郎訳）

八話表 扉をくぐりし者

三面鏡に映るわたしは前髪で顔の左半分を隠しています。

キュルケさんがしていると格好いいのに、わたしがやると何処となく陰険に見えてしまつて不思議です。

「うゝん、いまいちです。」

「でも、仮面は隠すべきです。幸いツエルプストーさまも前髪を下ろしていらっしゃいますから違和感ありませんし。」

シエスタさんは手に持っていた櫛で軽く頭を叩くのです。

まるで子供をなだめる、お母さんみたいです。もう、妹を乗り越えて娘になつた気分です。

「うゝゝゝ。でも、もうこれしか残ってないし、我慢します。」

「後ろ髪を結いあげてみますか？ ちょっと涼しい感じになります。」

「首筋も駄目ですよ。」

「あら、そうでしたね。」

わたしは後ろ首を撫でてみました、ごつごつです。

痛々しい火傷の傷跡を晒して歩くほど、わたしは心臓が強くなりません。

これは今年の春に治す予定ですのでしばらくは我慢です。

「はあ、フードを脱げたのはいいのですが。」

「友達も増えたのでしょうか？ ほら、これ位、へっちゃらですよ。」

「顔の火傷を晒すのがへっちゃらですか。」

「はい。」

シエスタさんは化粧台の上に置いてある木彫りのマネキンヘッドから白いマスクを取り、わたしの顔をのぞき込みます。

この時のシエスタさんの顔はきらいです。悲しみに満ち、涙を堪えているような表情ですから。

でも、いくらわたしが反抗してもシエスタさんはこの事——マスクを被らせるこの事だけは絶対に譲ってくれません。

マスクを被らせる前にわたしの顔をさすり、そのごつごつし左頬にキスをします。

くすぐったいですけど、あまりにもシエスタさんの顔が真剣だから、わたしは目を閉じてされるがままじっとしています。

そしてシエスタさんは軟膏を顔に塗ります。こんなの要らないって言ったら、『そんなことありません！いくら火傷で感覚が消えたとしてもマスクに一日中、刺激されるのではありませんか！』と怒られました。

その時は、わたし、殴られるかと思いました。

「くすぐったいです。」

「いいことです。感覚が残っている証拠ですから。」

「そうかな……。」

そしてシエスタさんはわたしの顎をちよつと引いて上向きにし、顔を覆っている髪の毛を優しく後ろに退かします。そしてマスクを被らせます。

被らせた後、シエスタさんはわたしの頭を抱きしめて撫でてくれます。

なんか、これは好きです。温かくて、優しくて。

それが終わったら、シエスタさんはまだ優しい笑顔に戻ります。わたしも解放されます。

「あ、そう言えば！ マルトーさんからの伝言です。ちょうど香辛料が足りなくなっただけ。」

「わたしに言うあたりから、よほど手に入らないものなのでしょうね。なんですか。」

「サフランです。」

「すごい。あれを要求するなんて。あるけど。」

わたし、スクスクの力を借りて『春咲きのサフラン』を作り出したのです。

そして、偶然の産物ですけど、その花はなんと！雄しべがなく、雌しべだけが六つです。

もう、革命と言っても過言じゃありません。

「まあまあ、鶏肉のパエリア、好きでしょう？」

「好きですけど。そもそも春にあんなものを学院生に頼むとか、絶対間違っています。」

「なんでも、マルトーさん昨日、よるに眠れなくて庭を散策していたらしいですけど、その時満開しているサフランの花を見かけたみたいです。」

「しまったのです。」

やはり、あれは学院の外側の秘密の庭に置くべきでした。

「まあ、わたしは花を咲かせるのが目的で、売るためじゃないし。」

「そうですね。ロテシアさんがその気になれば直ぐにもお金持ちになれるよね。」

「否定はしません。」

わたし、実は恐ろしい植物を作り出したことが有ります。

ただ蔓植物の情報が東から伝わったので、作ってみたら…、寒さと湿気に強くて、植え付けたその年から収穫できる胡椒でした。

わたしは——それはもう吃驚して——すぐお父さんに駆けつけて相談しました。

結局、あのおきお小遣いに余裕が有った二人はその胡椒を燃やしました。

変な奴に盗まれたら目も当てられない惨状になるかもしれませんからです。

わたしはあまり胡椒が好きじゃないし、お父さんも辛いのが苦手なので惜しみなく処分しました。

お父さんがその火で豆を焼いてくれました。ちょっと辛味が有って美味でした。

「それで、ロテシアさん、わたしも池の菖蒲ショウブをもらっていいですか？」

「なぜですか？」

「最近、雇用人の宿所にしらみが出来て……。」

「ああ、菖蒲の湯で洗えばしらみも消えるしね。」

池、そうです。わたしはついに学院で小さな池を作りました。

生徒たちの安全の問題もあつたから学院の城壁の外側に堀のように作りましたが、なかなかいいです。

「今日は使い魔の召喚です。どんな子が来るのか興味津々です。」

「ロテシアさんはスクスクさんでしたね。あの鉢のまま？」

「いいえ、ドングリでした。」

「くすくす。さすがです。」

□ □ □ □ □ □

使い魔の召喚は屋外で行われます。

その理由は簡単です。どんなものが来るのか分らないからです。

もし全ての使い魔がわたしのスクスクみたいなら自室でやってもいいでしょう。

でも、その中にはすごく大きな使い魔を呼び出す人もいるって聞きました。

大きな使い魔か。見てみたいです。

「ルイズ。期待してるわよ？」

「ふ、ふん！ み、見てなさいよ！ 凄い使い魔が来るはずだから！」

「どこからそんな自信が来るのかしら。わたしなら恥ずかしくてもう家に逃げたわ。あんたは凄いのよ。」

「むっきー！！！」

そして、今朝もキュルケさんは絶好調です。

キュルケさんが散々いじっているあの子は、この学院で最も名前が長いド・ラ・ヴァリエール公爵家の三女、ルイズ・ド・ラ・ヴァリエールです。ミドルネームはなくて覚えていません。

えっと、二つありました。ソフラン？ルフラン？まあ、そんなものが一つで、フランシス？フランチェスカ？そんなものがまた一つあります。たぶんそうかも。

とにかく長いので、わたしはヴァリエールさんと呼んでいます。

「ねえ、タバサさん。」

「……。」

「なぜ、ほっとくの？」

「関心がない。そして、もう日課。」
「そうですよね」

最近、キュルケさんはこのヴァリエールさんをからかう事に夢中になっていきます。

その所為か、キュルケさんは生き生きしています。やはりキュルケさんはいじる対象がなくては気が沈むようです。なんかわたしには遠慮しているみたいだから……。

べ、別にさびしくなんかないよ！ キュルケさんとは友達ですし！
これが普通です！

「ロティ、背が伸びた。」

「あ、分ります？ いまは151 سانتです。」

「うらやましい。」

「タバサさんも直ぐ伸びますよ。タバサさんも昨年から3 سانت伸びたじゃありませんか。それって、タバサさんの成長期はこれからも続くとのことです。」

「でも、ロティは6 سانت伸びた。」

わたしは、まあ、特異体質ってことで勘弁して下さい。 火傷のせいで仕方ありませんでした。

「とにかく二人を止めてきます。」

「……。お節介。」

「え？ 違いますよ。タバサさんがシークなんですよ。」

「そんなことない。」

キュルケさんがちよつとくらい——すごく、ちよつとくらい言葉を選ぶようになった以後、その代りタバサさんはおしゃべりになりました。いまではわたしの言葉にいつも返事します。

『二度とないかもしれない大事な時間だから。』とか言っていたけど、どんな意味でしょう。

「あの、キュルケさん、ヴァリエールさん。おはようございます。」

「あら、ロティ。おはよう。」

「ふん！ 使い魔もいるのに、なぜ来たの。冷やかしはごめんよ！」

「本当に、どうしたの？ ロティは今日、部屋で休んでもいいって許可も貰ったじゃない。」

ツンツンしていますね。ヴァリエールさん。

でも話しかけてくれないと、夜のアレが大変うるさいので気配り必須です。

「でも、皆さんの使い魔には興味もありますし。」

「そうそう、ゼロが何を呼び出すか知れたかったのね？」

「うっ！ なによ！ ロテシアだって『欠如^{ラック}』……。」

こちら、ヴァリエールさん。キュルケさんの前でアレは禁句ですよ。

ほら見なさい。キュルケさん構えました。すでに顔が笑ってません。すぐにでも攻撃しますって構えですよ。

ほら、ヴァリエールさん。昨年、キュルケさんの前であの二つ名を使った生徒がどんな目にあったのかもう忘れちゃったか？ 五日も欠席する羽目になったんじゃないませんか。

でも、ヴァリエールさんはキュルケさんとは別に、自分が言ってしまったことに自分が驚いているみたいです。

「ご、ごめん！ わたし今日はちょっと変なの。ロテシア。許して

くれる?」

「いや……。わたしはそんなことで怒ったりしませんけど。」

「ロティ。嫌がりなさいって言ったでしょ? あたしの言うことがきけないの?」

「だって、なんか格好いいし。」

「あなたには『虹花^{イリス}』ってちゃんとした二つ名があるじゃない!」
「ださいよ……。いかにも自称っぽいよ。」

二つ名の問題になるとキュルケさんはすぐ怒ります。

事実、『虹花^{イリス}』はキュルケさんから作ってもらったものです。わたしの花壇には一年中、いろんな花が咲いているのをみて思いついたみたいです。

思いついてからには直ぐわたしの部屋に入ってきて来て、着替え中だったわたしを押し倒しながら、『これからあなたは虹花^{イリス}のロテシアよ。わかった?ちゃんと使うのよ!』とか言っていました。

まあ、そんな状況で『いやです』とか言えませんよね。

……。弱いですね、わたし。

それに反して『欠如^{ラック}』は自然に出来たものですけど……。でもみんなキュルケさんが怖くて『欠如^{ラック}』を使いません。しくしく。

「まあ、あたしもゼロとか言い過ぎたみたいだし、ここは許してあげるわ。」

「な、なんだって! なぜ私があんたみたいな野蛮人に許して貰わなきゃならないのよ!! 私はロテシアに謝ったの!」

「あら、やる? いいわよ。掛かってきなさい。燃やしてあげるわ。」

「うわ……。タバサさん助けて……。」

「無理。」

□ □ □ □ □ □

「すごい！サラマンダー、サラマンダーです！」

「まあ、当然の結果よ。この尻尾の炎を見なさい。火竜山脈から来たのよ。」

「キュルケは優秀な火のメイジ。このサラマンダーはその証拠。」

「ありがとう。タバサってば褒めるのが上手よね。でもあなたのその風竜こそすごいよ。」

「えっへん。きつと速い。」

二人の使い魔召喚はすぐお終わりました。でも、出てきたのは凄い使い魔ばかりです。

まずキュルケさんはサラマンダーを呼び出しました。燃える尻尾もキュルケさんのイメージにそっくりだし、とくにその不敵な表情がもう似合いすぎます。

そして、タバサさんの風竜。全長6メートルの大きな使い魔です。今年の使い魔の中で一番大きい使い魔です。でもそんなことよりこの風竜はパステルブルーのその色がタバサさんの髪の毛と似合ってます。

「フレイム、ロティに挨拶してね。」

「きゅるる（よろしくな）」

フライムさんが頭を下げて挨拶します。なんていい子！それにしても挨拶はどうやって分ったのかな。

やはり主人と使い魔の間には見えない絆が有るに違いありませんよ。

スクスクは……。通じ合ってはいるけど感情とか、思考とかがありませんから。

「いえいえ、こちらこそお願いします。熱帯植物を育てたいと思っていたので。」

「きゅ、きゅるるる。（熱帯植物が、故郷に多かつたな）」

「あ、こっちはわたしの使い魔のスクスクです。言葉は出来なくても仲良くしてください。」

「きゅる？（ぬ？）」

わたしが鉢植えを出してフレ임さんに挨拶をさせました。でもフレ임さんが頭を傾げます。

そうですね、植物と仲良くしてくださいって言ったら誰でも困りますね。

フレ임が後ろを向きキュルケさんになんか言いたそうです。

「本当よ。まあ……。信じがたいけど。」

「きゅ……。（本当ですか……）」

どうやら、納得いかないみたいです。

それならスクスクになんか見せていただきましょう。

「スクスク、踊って。」

そしたらスクスクが風もないのにゆれます。

どうですか！すごいでしょ！植物なのに動くのですよ！

拍手することによると動くヒマワリの人形が有りますよね。

ちょうどそんな光景です。

「きゅ、きゅるるる。（おお、動く！）」

「おお、分つてくれました？」

「きゅる。（ああ。）」

隣のキュルケさんとタバサさんにはこれを幾度が見せたことがあります。

「いつ見ても変な光景ですわ。」

「でも何の役にも立たない。」

「それ言っちゃ駄目です。」

スクスクはわたしの庭番をしている時にもっともその能力を披露出来るのです。

スクスクは、思考能力はなくてもほぼ無限の記憶力を持っているので、わたしがどの子にいつ何をしたのかも一々記憶してくれます。そして自分の弟（株分けしたもの）を使ってその影響地域にある植物の状態をモニタリングし続けます。

まあ、コンピュータみたいですね。

「シルフィードも、挨拶。」

「きゅい、きゅい、きゅゝゝゝ（トレントなのね。トレント。すごいね！）」

「いいえ、スクスクは自我がありません。平凡なクヌギです。」

「きゅい？きゅきゅ！（そうなの？でもよろしくなのね！）」

「はい、こつちらこそよろしくです。」

シルフィードさんはかわいらしい方です。なんだかいい友達になれそうです。

「それにしても、よく会話が成立するわね。ロティって、もしかして動物とも話せるの？」

「いいえ。なんとなくです。」

「なんとなく？」

「はい。なんとなく……」

——ドカン

爆発する音とともに凄い砂風が吹きます。

入学して一年が過ぎています。さすがにもうなれました。ヴァリエールさんの魔法ですね。

「ヴァリエールさんの番でしたね」

「分りやすいわ。どれどれ、そんな使い魔かしら。じつは昨日の夜から気になって眠れなかったわ。」

「キュルケさんって、人をいじるのが生き甲斐ですね。」

実はわたしも興味ありました。

そしてわたしからヴァリエールさんの事を聞いたお母さまはもっと興味が有るみたいです。

手紙には『あの子の事はなんでも書きなさい。これは大事なのよ。』とか書いていました。

わたしと同じく、魔法が致命的に苦手なヴァリエールさん。

毎晩、わたしの部屋のすぐ隣で爆発音を作り出している張本人。でも座学は学園主席から外された事のない才媛です。

ツンツンして、プライドの塊ですけど、悪い子ではない。

そんな彼女の使い魔に興味が湧くのは自然でした。埃が静まり、やがてその使い魔の姿が現れました。

「あんた誰？」

……。

人でした。

黒い髪の毛、青いパーカー、右手にはリュックサック。

あはは。これってあれですね。どう見ても同郷の人ですね。

「誰って……。俺は平賀才人」

それも、日本人ですか！

可哀そうに……。この来た以上あの便利な生活にサヨナラですよ？

いつそ貧しい国の人だったら、よかったのに。

よりによってあの世界ではばトップクラスの豊かな生活を享有する日本の青少年ですか……。

まあ、そのあとヴァリエールさんが怒ったり、キスしたり（きや）、ギャラリたちも各自の使い魔都の親睦のため戻ったりいろんな事が有りました。

キュルケさんとタバサさんも使い魔たちの寝屋を用意するため戻り、ここではもうわたしとヴァリエールさんと彼女の使い魔さんしかありません。

「お前こそなんなんだ！　ここはどこだ！　お前たちはなんなんだ！　なんで飛ぶ！　俺の体に何をした！」

不憫な。

まだ状況を理解できないみたいですね。

仕方ありません。ここはわたしが一肌脱ぎましょう。

もう悪夢でしかない『蓮の世界』。その残滓みたいな人に触れるのは嫌ですけど……。

「こんにちは、平賀さん。」

「ああ。君はなんか話を通じそうだ。ここはどこなんだ？」

「ここは、ハルケギニアです。これから、あなたは这个世界で生きることになるでしょう。」

「ハルケ……、ギニア。」

「ようこそ、平賀さん。わたしはあなたを歓迎しますよ。」

それより炭酸ありますか？ 久しぶりに飲みたいです。

八話表 扉をくぐりし者（後書き）

「この扉をくぐるもの、全ての希望を捨てよ」

かの有名な一句『Lasciate ogne speranza
a voi ch'intrate』、ダンテの神曲です。

「ファントムの仮面」

顔の左を隠す半仮面です。オペラ座の怪人の仮面を思い出して下さい。

でも髪の毛を下ろして仮面を隠しているので仮面は見えません。キュルケさんのヘアースタイルですね。

「サフランの雌しべ」

高い香辛料の代名詞。

なにせ一つの花に香辛料として使えるものが紅い雌しべの三つしかないからです。

「パエリア」

スペインなべ料理。サフランが要る。でも味よりは着色に意味があるので、必ずサフランが必要ではない。

「菖蒲ショウブの湯」

菖蒲には駆虫の効果があります。その湯で洗うとしらみとかが死ぬと言われています。

「豆焼き」

芋はありませんよ？ジャガイモもありませんよ？でも豆を焚火で焼いて食べると意外においしいです。

「ロシアの体」

現在15歳。身長151、体重42、スリーサイズ79/55/80、Bカップ。バランスのいい体。

ルイズ曰く「なんで私より背も低いのに胸はおおきいのよ!」

「虹花^{イリス}」

イリスはギリシャ語で『虹』の意。

この言葉からアイリス（あやめ）という名前が出ました。

「欠如^{ラック}」

ルイズさんが説明します。

「によるよろスクスク」

それほど多く動けません。ただ枝が変な方向に揺れます。

「筆者」

なんか、これ違う。こんなはずじゃなかったのに。

七話の片付けがまだだから？ 調子がまいちです。

次の話はるいず&さいとです。

ルイズさんはちよつと柔らかくなる予定ですが……。

サイトさんはこれから凄く嫌な役回りになるかもしれないので…。

とにかく、ヴィリエみたいな犠牲者を増やしたくはありませんから穏便に書いていきます。

八話裏 最後の一葉（前書き）

「スー、この最後の一葉が落ちたら私も死んでしまうのです。」

「ロティ、何のコント？」

「ええ、乗ってくださいよ。もう、つれないな。」

（最後の一葉（？）、オー・ヘンリー）

八話裏 最後の一葉

「なあ。ルイズ。」

「ご主人さまと呼びなさい。いい加減にしないとまた蹴るわよ。」

「それよりな……。あのロテシアって子は誰なんだ？」

「蹴るわ。」

「うわっ！ 蹴りながら言うな！ 宣言かよ！」

「うるさい。避けないでよ。あんたのような平民が勝手に呼んでいい人じゃいいのよ、私もロテシアも。」

ロテシア・ド・ラ・メルフォゼ。

あの奇妙な女の子を説明するためには相当長い時間が必要でしようね。

少なくとも——私が知っている範囲では——彼女は他の誰と違う特別さが有ったの。

そう、はじめての出会いから、彼女は特別だったのよ。

□ □ □ □ □ □

入学してから、私は魔法の練習に全てを賭けていたの。

希望。それが私を動かす最大の原動力。

公爵とは貴族の頂点よ。

その地位は偶然や血統だけで維持できるものではないの。

高い地位にはそれにふさわしい能力あるべし。プライドが有るなら当然の考えだわ。

だから、公爵家の人は凄い人でなくちゃダメ。そういう決まりよ。

でも、私は何もできない。

ラ・ヴァリエールの娘なのに、烈風のカリンの娘なのに、私は普通どころか、メイジとしての最低条件である魔法の行使すらできない。

だから、私は貴族である同時に、貴族ではないの。

でも、希望はあったの。

学院で学べば、もしかしたら私の系統を発見できるのではないかなと思っていたの。

だから、私は抗い続けていたの。——他でもない自分自身から。

でも、あの不名誉な二つ名がつくには、多くの時間が必要なかったわ。

『ゼロのルイズ』

心のどこか、自らも納得していたかも知れない。

だからこそ、死ぬほどこい。

その二つ名のせいで、まわりの友達——友達だったのかは今でも疑問だけど——は消えてしまったの。

それからよ、私がつと自分に過酷になり始めたのは。

だって、誰も止めてくれないもん。ならば、一人で頑張るしかないでしょ？ 手綱が外された馬の如く。

その頃だったわ。『欠如』の話を聞いたのは。

「『^{ラック}欠如』？」

「あら、やだわ。あなたは『舞踏会の悪夢』の事件を知りませんか？」

「常識もゼロなんですわ、きつと。」

「本当、生徒一人が死にかけて、一人はが心神喪失、一人は失踪したという大事件なのに。」

曰く、片親が平民でメイジとして半人前だとか。

曰く、魔法が全然使えないとか。――爆発もしないらしいよ。

曰く、理解力の不足で授業ではいつも恥ずかしいめに遭っているとか。

曰く、すごく美しいのに酷い火傷を負って、もう一週間も授業に出てないとか。

「いろいろ残念な子だわ。だから欠如よ。」

「本当、残念よね。舞踏会ではまるで天使のようだったのに。」

「わたくしもそう思っていますわ。可哀そうに……。やはりガラスの靴は一晩限りの魔法だったわ。」

貴族で人々の同情を誘うなんて、そんなの間違っているって。

気がつくと、どうしようもなく腹が立って、私はこんな事を言ってしまったの。

「全ては自業自得よ。それで同情を引き出そうとしているなんて、とんだ落ちぶれよね！」

何でそんな事を言ってしまったのかな……。

夜、部屋に戻ってもずっと心に引っかかって……。

結局、眠れなかったの。

なんで？ どう考えても可哀そうでしょ？

みんなが口を揃えて褒めるほど綺麗だった子が、今ではひどい火傷で学院にも来られなくなったのに。

なんでそんなことを言ってしまったの、私。

まわりからの無神経な中傷の辛さを一番よく知っている私が、なんでそんな事を……。

その夜は眠れなかったの。今思えばアレが運命よね。

私はこのもやもやする心を静めたくて庭に出たの。

人の少ないヴェストリの広場に行って、魔法の練習でもしようと思っていたからよ。

力を尽くして練習すればこの嫌な気持ちも消えると思ったわ。

でも、先客がいたの。

私は全然やましくないのに、まるで盗みの現場で見つかってしまった泥棒のように身を隠したの。

だって、泣いていたのよ？ 気まずいじゃない。

「どうして……、どうして！ こんな目に会わなきゃだめですか！」
(ツバキが枯れてしまったことです)

彼女は花壇の前で泣き崩れていたの。

子供みたいにひつくひつくとしやくりあげながら土を握っていたわ。

「どうして……、だれもこうなる前に助けくれなかったのですか……。」(ツバキの事です)

「わたしが悪い子だから？ だからですか！」

胸がせつなくて、息苦しかったの。

月光に照らされた彼女はもうこれ以上なく包帯に巻かれていたわ。顔は勿論、薄着のワンピースの隙間から見える足も、腕も、そして左目まで……。

「回復の望みはないって。もう希望すらないって。」（相変わらずツバキの事です。）

気晴らしでもしようとして出て来たのに、胸には大きい錘が一つ増えたわ。

私、全然知らなかったの。あれほど酷い火傷だった事を全然知らなくて……。

それなのに、何も知らないくせに、酷い事を言っちゃったわ。

「もう……。いいです。疲れました。」

逃げて部屋に戻ったの。

あ後はベッドで泣いたわ。もらい泣きよ。

□ □ □ □ □ □

彼女の部屋は水の塔の一階。

中庭に向かつて窓が出されている唯一な部屋だったの。

その窓には大きなクヌギの影が懸かり、哀愁を呼び起こしていたわ。

窓の下には花壇が有ったのよ。

あのあと聞いた話では、彼女は花壇の手入れをするのが好きで、彼女の部屋の窓下の花壇は特に美しかったそうよ。

でも、今では何もかもが無残に枯れていて、まるで主人の痛みを分け合っているみたいだったわ。

「ねえ！ 聞いてる？」

「……」

「わたし！ 今日から魔法の練習をするわ！ 毎晩、ここですよ！」

「……」

それまでも練習はしていたのよ。部屋でこそそと。だって恥ずかしいじゃない。成功できないのに。

「あなたも分っているでしょ！ 私がゼロだって！」

「……」

「でも、諦めたくないわ！ 私は諦めたくないの！」

「……」

「見てらっしゃい！ 私は自分を救って見せるわ！」

「……」

「ゼロの絶望から！」

窓越しからは何の答も帰ってこなかったけど、私はロテシアがこの言葉を聞いていたと確信したわ。

理由も無く、ただの予感だけ。

私はこの杖を握ってから初めて、運命という言葉を自ら受け入れたくなったの。

□ □ □ □ □

あれからは毎日、彼女の部屋の前で練習をしたの。毎晩だわ。一度も欠かさず。

体調が良くない日もあったけど、練習したわ。
本当によくあんなに頑張ったのね。私。

でも、一度も彼女は窓を開けなかったのよ。
相当うるさかったはずなのに。三階の生徒から皮肉言われたのに。
そんな彼女がはじめて窓を開けたのは、私の練習もそろそろ一カ
月になってきた頃だったわ。

「もう、やめて下さい。（すっかり、寝不足です……）」

包帯に包まれた頭の隙間から髪の毛がはみ出していたわ。
女の子にとって、あの傷がどれくらいのものか想像できる？
多分、私もあの状況になってみないと分らないわ。

眠たそうな、力の抜けた表情だったの。
窓枠を掴む手からは何の気迫も感じられなかったの。
まるで生きる屍のようだったわ。

「いやよ。私は諦めないよ。」

「近所迷惑です。もういいからお休みください。（いやがらせ？い
やがらせですよね！）」

「見てなさい。必ず成功させて見せるわ！」

「……。分りました。頑張ってください。（ふえん）。キュルケさ
ん助けて〜。いじめです〜）」

そうやって窓は再び閉じられたの。

「もちろん、頑張るわ！」

□ □ □ □ □

「お疲れさま。差し入れです。今日はこれを食べてもうお休みにしましょう。」

「ありがとう！ でも、もうちょっと頑張りたいわ。」

「ほどほどにして下さい。体を壊したら本末転倒です。（それよりうるさいのもうお休みください〜）」

「分っているの。」

あれから、彼女は私の魔法練習を見始めたの。

最初はただ窓を開けて見ていただけなのに、夏休みが始まってからは花壇の手入れをしながら練習を見たわ。

時々、差し入れでお菓子も持ってきて、すっかり親しくなったわ。

そして、ある日。

彼女は今までの『包帯にワンピース』の姿じゃなくマントを着て来たわ。

かなり分厚いマントで、体の事を隠していたの。フードも被っていたわね。

『やはり傷痕が残ってしまったのね。』

それからまた幾らかの時間が経ち、夏の猛暑が極まったある日。

彼女はフードを脱いで、私の前に現れたわ。

マスクに隠された左半分の顔。

そこにあるべきの目穴は塞がれていて、そのかわり悲しそうな眼まなこだけが彫りつけられていたわ。

「左目……。」

「見えませんし、ちょっと醜いので隠しました。」

「そうだったの……。」

その言葉を口に出す彼女の表情には何の悲しみも無かったわ。だからこそ、私は悲しかったかも知れないの。

「ヴァリエールさんが気を病む必要ありません。」

「でも、でも！」

「眼は一つ残っているし、生活上の問題はないはずです。」

「う、う……。」

「過ぎた事は変えられません。私は忙しいです。荒らされた芝生を元に戻さなきゃならないしね。」

彼女はそう言いながら、私の魔法でえぐられた庭のあちこちを指差したわ。

そして、とっても綺麗な笑顔で、こう言ったわ。

「ほどほどにお願いしますよ？ 私はまだ患者ですから。」

一人の人を助ける。

それは比べようのない達成感で、乾いた心を潤す春雨のようだったわ。

そう、彼女を立ち直らせるのも出来たの。

だから、きつと魔法だってできるはずよ！

「ご、ごめん！ わたし今日はちょっと変なの。ロテシア。許してくれる？」

「いや……。わたしはそんなことで怒ったりしませんけど。」

でも、言うことをきかないこの舌はなかなか治らないのね。

□

<>

□

<>

□

<>

□

『へへへ、姉さんが知ったらばくの人生は終わりだぜ。』

『そうか！ すまない！ いつか埋め合わせするから。』

『くれぐれもネットなんか流れ出されないようにしろよ！ 姉さんに迷惑だからな。』

『ああ！ わかった。』

ついてないな。

今朝、立花からあの画像も貰ったし、これからは家に戻ってあれを見たかったのに。

楽しみにしていたのに！ ノートパソコンも直したのに！

「ここはどこだ！ お前たちはなんなんだ！ なんで飛ぶ！ 俺の体に何をした！」

やはりアレだな！

あんな怪しいものなんて無視すればよかった！

好奇心は猫を殺すって言ったけど、俺が猫だったのかよ！

ああもう駄目だ！

こんな怪しげなところに連れて来られたし、人は飛ぶし、変な刺青は出来たし、それと、それと……。

「こんにちは、平賀さん。」

その時、俺の耳はさっきまで怒鳴っていた目の前のピンク頭のやつ
の声ではないもう一つの声を拾った。

振り向いて見れば、厚いマントで身を隠した少女がいた。

銀髪つて、すごいな。

ただ灰色だと思っていたのに、全然違う——あれは本当に銀の色
だったんだ。

この状況に面喰っている俺が返事できるまで、彼女はゆっくり待
ってくれた。

なんか、まともそうな子だ。綺麗だし。

綺麗と言え……、さっきいきなりキスをしやがったこいつも
げえ可愛かったけど、こいつはなんか野良猫みたいで危険そうだ。

それに比べて、この子は……。

うん、ウサギばいな。草食動物です——って全身で主張している
みたいなふわふわな子だし。

「ああ。君はなんか話が通じそうだ。ここはどこなんだ？」

俺が返事をしたら彼女は華奢な頬笑みを浮かべながら答えてく
れた。

「ここは、ハルケギニアです。これから、あなたは这个世界で生
きることになるでしょう。」

「ハルケ……、ギニア。」

ハルケギニア……。聞いた事のない地名だな。

それにしても、なんかすごいこと言われなかったか？

この世界で生きるって、俺は家に帰りたいんだ！

「ようこそ、平賀さん。わたしはあなたを歓迎しますよ。」

でも、この笑顔をみるとそんな事は言えなくなるな……。
それはともかく……、なんで君は俺のリュックサックを漁っているんだ、おい！

「いえ、珍しいカバンですから。なんか不思議なものが入っていないかなって。てへへ。」

笑うなよ！ 許してしまいそうじゃないか！

「でも、勝手に漁らないでくれ。貴重品だってあるかもしれないだろう？」

「ありますかあ？」

「ないけど。」

「ならいいですよね……。あつた！」

彼女はペットボトルの炭酸飲料を取り出した。
そしてうれしそうにそれを俺の前に持ってきた。

「これって！」

「うん？ スプライトじゃないか。珍しいのか？ 飲み物だよ。」

「下さいー！」

「え？ まあ、うん。いいけど。」

「やった〜」

「こっちに出してみる。開けてあげるから。」

俺は彼女からペットを取り、そしてキャップをあけてはまた彼女に返した。

彼女はそれを両手に掴んで（リスみたいだな）飲んだ。

そして顔をしかめて身ぶるいした。目もとには涙まで浮かんでいた。

なんだ、この可愛い生き物は。萌え殺す気だな、俺を！

「喉ぐいたい」

「あ、初めて飲むなら、喉が痛いかな。」

「なにになに？ 私にも飲ませてよ。」

「はい、ヴァリエールさん。」

彼女は眼もとに浮かんだ涙を拭きながらそれをルイズとやらに渡した。

そしてルイズも……。

「なにこれ！ 喉がちくちくするじゃない！」

「元から、そういう飲み物なんだよ。」

ちょっと楽しくなってきた俺は流されやすいのか？

□ □ □ □ □ □

「ほんとに、別の世界から来たっていうの？」

「ああ」

ロテシアって子は自分の部屋に戻ってしまった。残念すぎる。そのあとはずっとこの腕白ご主人とのいざこざだった。

「なんか証拠を見せてよ。」

「さつきスプライト飲んだじゃないか。」

「考えてみたら、祝日とかで飲むシャンパンもあんな感じだったわ。」

「って、そうか。」

ここ、酒とか大丈夫なところだったな。

なら、貴族としてシャンパンを飲んでいたとしても何の違和感もないな。

仕方ない、アレを見せよう。

ここの科学技術が中世だったら、アレこそここでは絶対にあり得ないものだし。

「なにこれ」

「ノートパソコン」

修理したばかりだし起動はばっちりだった。

背景の画面には綺麗な城が映っている。修理した人が勝手に張っておいたやつだ。

まあ、変なものじゃないし。家に戻るまでそうして置こうと思ったのだ。

「綺麗ね……。何の系統の魔法で動いてるの？ 風？ 水？」

「科学だ」

あんな非論理的なものに比べられてたまるかよ。

「説明は難しいけど、とにかく魔法じゃないんだ。」

「へえ。まあ、いいわよ。信じてあげる。」

「はあ。ありがとうって言えばいいのか？」

「この小さい絵たちは？ 何かのシンボル？」

ルイズはこの綺麗な画面が気に入ったようでそこに浮かんでいるアイコンを手で触ろうとしていた。

やめろよ。画面から取りだそうと思っっているんじゃないだろうな？

「まあ、電気がないから長い時間起動しておくわけにもいかないんだ。そろそろ消すよ。」

「いいわよ。これより大事な事はいっぱいあるし。」

ルイズとはいろんなことを話した。

俺を家に戻すような魔法はないってことも。

なにやら、俺は『使い魔』として召喚されたってことも。

そして、使い魔としての俺の仕事は雑用であることも。

「なあ。ルイズ。」

「ご主人さまと呼びなさい。いい加減にしないとまた蹴るわよ。」

「それよりな……。あのロテシアって子は誰なんだ？」

可愛い女の子。

もちろん、このご主人もすごくかわいい。

背は低くて155センチほどにしか見えないけど、すらりと伸びた足も、その先にある細かい足首も人形みたいに思えるほどだ。

顔も見事無いほどに可愛い。俺の世界にもこんな子がいるとしたら、その子のいる場所は間違いなく放送局だ。いや、テレビでもこれほど可愛い子は見たことがない。

そして、あの子は体も何も見えないけど——俺のこの可愛く憎らしいご主人と同じく印象に残っていた。

「あんたのような平民が勝手に呼んでいい人じゃないのよ、私もロテシアも。」

「やっぱり偉いのか？」

「少なくとも、私を除いて彼女より位くらゐが高い人は生徒の中でいないわ。」

「そんなに？」

やけにフレンドリーだから、田舎に住む没落貴族かと思っていたのだが。

「女だけど伯爵継承候補者よ。あんた爵位は分る？」

「ああ、公爵、侯爵の次だろう？ 総理大臣の伊藤伯爵みたいに。」

「イトウって人は知らないけど……、そうよ。」

「伯爵ってどれくらい偉いんだ？」

「……。この国に公爵は王家の血を引いた私の父様しかないのよ。侯爵はないわ。」

「うん、それでもなんかしつくりこないな。」

でもこのご主人って凄く偉い人だな。

それはしつくりきた。

言わば公爵っていうのは親王で、ならこのご主人は女王だろう？

……。くらくらしてきた。

このちっちゃいのが女王なんて。この世は間違っている。

「なら、いい方を変えるわ。メルフォゼ伯爵は宮廷貴族の筆頭よ。」

「ますます分らないぞ……。」

「馬鹿だわ。ここに馬鹿がいるわ。」

「むっ。そこまで言わなくてもいいんじゃないのかよ。」

宮廷貴族？

なら宮廷に住んでいる貴族ってことか？

フランスのベルサイユに住んでいた貴族たちみたいに？

「はあ。もういいわ。でもこれだけは覚えておきなさい。メルフォ
ゼ伯爵はこの国で唯一お父さんに面を向かって暴言を吐いたひとよ。
あなたなんて人間として見られてない可能性もあるのよ。」

「最初からそう言えよ！直ぐ納得したじゃないか！」

「ひっ！　なによ！　吃驚したじゃない！」

公爵に暴言吐ける人ってどれだけ偉いんだよ、おい。

あれで、なぜ伯爵なんだ。

「それは、王家の直属だからよ。王家の下に伯爵以上の位が有った
ら、貴族と王家との間の力のバランスが崩れるでしょう？　だから、
王家直属はいくら偉くても伯爵よ。」

「そうか？」

「なんでこんな馬鹿な使い魔を引いたの、私。不憫だわ、私。」

こいつ……。

本気で俺の事を馬鹿だと思ってやがる……。

俺の住むところでは貴族なんてなかったから仕方ないだろう？

「とにかく、変な態度を見せない事。位はともかく、私にとって凄
く大切なひとなの。」

「ああ、わかった。この歳で夭折なんて、まっぴらごめんだしな。」

「一応、信じてあげるわ。」

そう言ってルイズは杖を取り出し、マントを身にまとった。

「夜も遅いのに出かけるのか？」

「ロテシアの部屋。」

「夜這い？」

そして目にも見えない速度で、彼女の足がちょうどその辺りにあった俺の頭を蹴っ飛ばした。

「蹴ったわ。」

「ごはっ！ ごほごほ……、って事後報告かよ！」

「あ、あんたが、へ、へんなことを言うからじゃない！」

ルイズは顔を真っ赤にして怒った。

そこまで怒るような事を言ったか、俺。

なんにせよ、女の友達なんていなかったから分らないな。

「とにかく、俺もつれて行ってよ。な？ 言う事はちゃんときくら。」

「はあ……。分ったわ。ついてきてもいいよ。」

「よっしゃ〜！」

□ □ □ □ □

「ロテシア。いる？」

「はい。待っていました。」

「うん。それじゃ入るね。」

「わたしが開けてあげますよ〜」

ロテシアの部屋は、一階だった。

それも一番外側で、入口に近い場所。

普通の寮なら、あの場所って寮長とかが住むんじゃないかと思えた。いわゆる管理室みたいな位置だった。

そして扉が開き、部屋の中からロテシアが出てきた。

「いらっしやい……、え？」

出てきたロテシアが俺の顔を見て固まってしまった。
なんだ、俺ってここに来ちゃだめだったか？

「ごめん、ロテシア。こいつがどうしても連れて行きなさいってうるさいから。」

「あ……。はあ、分りました。使い魔ですもんね。メイジの傍に
いるべきよね。」

「ありがとう、ロテシア。」

「いいえ、気にしないでください。こんばんは、平賀さん。」

彼女の後をついて部屋に入った。

さっきのルイズの部屋とは違い、まるで深い森の中にでも来たような香りが部屋に満ちていた。

でも、小さい鏡台とか、女の子の部屋って感じだった。

そして印象深かったのが、窓の隣に置いている鉢植えだった。

そこには、名は知らないけどいろんな花が咲いていて、一つ一つがしっかり手入れされていた。

テーブルには小さな剪定ハサミ——爺さんが盆栽の手入れする時に使っていたのを見たことある——があって、開かれていた本には可愛い字面で——読むことは出来なくても——何かが書かれていた。

花を育てるのが趣味かな。いかにも女の子っぽい趣味だな。

「なあ、メルフォゼ……さま？」

「平賀さん、慣れない言葉は使わないほうがいいですよ。名前でいいです。」

「あ、ああ。なら、ロテシア。」

「はい、平賀さん。」

かわいいな！ もう！

ツンツンしている主人とは大違いだ！

これこそ、男の子が女の子に望む全てって感じよな！

「俺が来て迷惑か？ 正直に言ってくれ。」

「それを聞くの？ それとも、あんたの所の男は淑女の部屋に入るのが当然？」

「いいえ、遠慮なくくつろいでいて下さい。言ったではないですか。歓迎するって。」

「そうよな！ はは！」

「ロテシア、甘くしないで。悪癖が出来るわ。」

もちろん、俺も完全に馬鹿ではないぞ？

これが社交辞令である事くらいは、分っているんだ。

でも！ 嘘でも可愛い女の子に言われると気持ちいいだろう！ そうじゃないか！

「テーブルの椅子に座ってください。お茶を出します。」

「いいわ。ロテシア。あなたはまだ患者なのよ？」

患者？ 風邪でもひいたのか？

「でも、お婆さんではないのですよ？ これくらいはできます。」

「はあ、本当にロテシアって貴族らしくないわ。」

「ありがとうございます。」

「その態度もそうよ！ 貴族は威厳を持ってこそ貴族だわ。」

「いいだろう、別に。女の子だし物腰が柔らかくて何が問題だ。」

ひいつ！ ルイズ、まだ脚に力を入れたな！ 蹴ろうとしたな！
まったく憤みがないな……。君こそロテシアを見習えよ。

「いいえ、平賀さん。それは間違いです。」

「なにが間違いなんだ？」

「貴族として正しいのはヴァリエールさんの方だと言っているのです。」

「そうか……。」

「ロテシアがちょっと特殊なだけよ。」

□

< >

□

< >

□

< >

□

「うまい……。」

「昼の飲み物のお礼です。遠慮しないで食べてください。」

「おいしいわ！ これは何？」

「これは、ライチのゼリーですよ。」

甘くて酸っぱい、すごくおいしい。

ロテシアは、『これが元の実ですよ』って赤い苺みたいな実を出したの。

ロテシアはその皮を綺麗に剥いたあと私の口に入れてくれたわ。
涼しくて、甘い。清涼感が漂う果物だったの。

「ちいねえさまにも食べさせたいの。ちょっと分けてもらえない？」
「ごめんなさい。この果物は傷みやすくて普通の方法じゃ運べませ

ん。」

「どんな方法ならできる？」

「凍らせたら数日くらいは持ちますけど……。それでも、風味は落ちます。」

「そうなの……。残念だわ。」

ロテシアはまるで自分の失策のようにすまなそう表情だったわ。優し過ぎるのも問題よね。こんなことを商人でもないロテシアに頼んだ私の間違いなのに。

話が長くなればきつとロテシアの負担になるし……。

ここに來た目的を先に果たしてからにしよう。

「ロテシア、それじゃ脱いで。」

「はい。」

「つぷ！……！！！」

後ろから変な声が聞こえて來たわ。

不肖の使い魔からだったわ。食べていたゼリーを床に吹いていたのよ。

「汚いわ。マナーも知らないの？　こんなおいしいものをご馳走して貰ったのに、あんたそれでも人間？」

「ヴァリエールさんいいですよ。どうせただの果物にすぎません。」
「けほけほ！　あんたたちそういう関係だったのか！」

そう言う関係ってどんな関係よ。

言葉も確実に言えないなんて、あたまが壊れたの？

「黙っていらつしゃい。本当に追い出されたくなければ。」

「平賀さん？　ごめんなさい。ちよつとヴァリエールさんを借りま

す。」

ロテシアはそう言いながら、マントを脱いでベッドに置いたの。そうしたら彼女の全身に巻かれている包帯がその姿を現したわ。これは、いつみても切なくなるよね。」

「そ、それは……。」

「黙っていなさいって言ったでしょ。」

彼女は包帯を毎日変えなくちゃならないの。爛れた皮膚は汗の出が悪く、膿も出てしまうからよ。」

普通は、あの黒髪のメイドがやっているみたいだけど……。今日はどうしても外せない仕事があるらしくて、私がかわりに来たわ。」

すごいよ。あのメイド。」

公爵家の娘である私にこんな仕事を押し付けるなんて、並みの肝じゃ出来ないわ。」

『この事が出来るのは——メルフォゼ様の肌に触れる資格が有るのはミス・ヴァリエールしかありません。』

あの気迫は怖かったのよ。母さまのようだったわ。」

『普段よく一緒にいるキュルケと青髪の小さい子では駄目？』

『あの方たちにこの傷の手当てをさせるのは酷な事でしょう。そして、きつとメルフォゼ様が反対します。』

『なんで？』

『申し訳ありません。わたしにはその質問に答える権限がありません。いつか、直接に聞いていただけないでしょうか。』

このメイド、シエスタは有名だわ。

貴族を恐れず、丁寧且つ慇懃無礼なメルフォゼのガーディアン。メルフォゼ伯爵から派遣された工作員出身の付き人って話もあったくらいだわ。

でも、ロテシアが絡まないところでは普通にメイドやっているみたいだし、評判がいいの。

『わかったわ。私が行くわよ。』

『はい、ありがとうございます。メルフォゼ様も大変お悦びになるでしょう。』

『そ、そうかな。』

『もちろんです。』

それが昨年の秋の事で、今ではちよくちよく私がやっているのよ。

「でも大分よくなったじゃない？」

私のドレッシングの实力はもうかなりのものよ。

慣れた手つきでハサミを使い、包帯を切ってからは強いウイスキーに濡らしたガーゼで傷を洗浄・消毒するの。そして新しい包帯を使って素早くドレッシングするわ。

最初は目を開けて傷を見る事もできなかったし、そのほかでも色々あったわ。

でも、そのあと一人でいろいろ調べたし、下町の医者呼び出して修行もしてもらったから……。

ふふふ、もうあのメイドより上手かもしれないわ！ 自分の才能が恐ろしいわ〜

「はい、世話になってもらっているし……。早く治りたいです。」

「焦らないで。火傷は患部を綺麗に維持できれば治る可能性が多い

って言ったわ。」

「誰がですか？」

「平民の医……。ほ、本だわ！ 本で見たの！」

腕が終わると足。足はそれほど酷くないから直ぐ終わるの。

ロテシアがスカートをたくし上げれば、私は彼女の太もも辺りに巻かれている包帯を換えるの。

「そうですね。ヴァリエールさんは勉強が得意ですもんね。」

「そうよ！ ふふふ、なんでも直ぐ習えるわ！」

「羨ましいな。私は筆記のテストでまた赤点を取ってしまいました。」

「私が教えてあげるって言ったのに……。強情だから。」

そして、それが終われば胴体に行くわ。ワンピースは完全に脱いでもらうの。

いつ見ても、この火傷はへんな形だわ。まるで蛇が這いつくばったように見えるもの。

「聞きたいですか？」

「言わなくても結構よ。人の過去を探るのは下品な事だわ。」

「ヴァリエールさんこそ、強情です。」

全身のドレスシングを終えて、彼女はまだワンピースの寝巻を着たわ。

いつも見ているけど、彼女の体は彫刻みたいに完璧よ。

背は私よりちよつと小さいけど、む、胸は私より大きいし。全体的に私より肉つきがいいのよ、この子。

「うん。おわり。綺麗になったわ！」

「もう、専門家ですよ。ヴァリエールさん。」
「当然よ！ 私はヴァリエールのルイズよ！ 何でも出来るのよ！」
「わいゝ、ぱちぱち。」

それにしても、あの使い魔はなぜあそこで間誤付いているのかしら。

□ < > □ < > □ < > □

「ルイズ。」
「疲れたのよ。蹴りたくないからいい加減にしたら？」
「ああ、ご主人。」
「それでなんのこと？」
「あんた、すげえよ。」

最初はあの子の素肌を想像して浮かれていた。
でも、すぐに視線を逸らしてしまった。ただ見る事すら出来なくなった。

俺はこいつを自分勝手に怒りっぽい奴だなんて思っていたけど、こいつはあの酷い——爛れて膿だらけの肌をなんの戸惑いもなく素手で触れたんだ。

俺だったら、きっと痛々しくてふれる事すらできない……。

「毎日やっているのか？」
「普段はメイドがやっているわ。」
「メイド？ ここつてメイドもあるのか？」
「なら、私に掃除・洗濯をなさいつていつの？」
「はは……。そうだな。」

俺は、やれと言えば掃除・洗濯は出来るかも知れないけど、あれは出来ないんだ。

「ごめん、ついに行くって軽く言ってしまった。」

「はあ、分つたらしいのよ。そして、ロテシアも言ったでしょう？ 使い魔はいつもメイジの傍にいたべきだわ。」

「うん。」

この子の横顔がなんだか輝いているように見えた。

「あんた、これで分つたでしょう。」

「うん？ なにを？」

「ロテシアに触れる事は許されないのよ。あんたには他愛無いスキンシップでも、彼女には苦痛になれるの。」

そうか、それで俺が付いてくる事を許したな。

それを見て彼女に痛い思いをさせたいと思うやつなんていないだろうから。

もしそんな奴がいれば、それは本当にクズか、頭の中がおかしくなつたやつだな。

「ああ。わかった。」

「それに、直接的にあんた自身にも危険だわ。」

それは何の事？

彼女って実は凄腕の魔法使いなのか？

でも、彼女は自分がいくら痛くても平気で笑える人に見えるぞ？

「彼女を大切にしているのが私だけだと思わないことよ。一歩間違

うと、彼女たちにどんな事をされてもおかしくないわ。」

「前例、あるのか。」

「私は、ミスタ・ローレーヌが失踪したなんて信じないわ。」

ローレーヌか。

こいつがミスタなんて付けている以上、あいつもメイジだな。そいつが彼女を痛めたのか？ でも、今失踪って。まさか！

「あれは、殺されたのよ。きっとそうだわ。」

背中に冷たい何かが流れた気がした。

そして頭にぼんやり浮かぶのは、この世のものとは思えない美しい花。

それでも人を必ず破滅に導く黒い花——黒い蓮華を思い出したのだった。

八話裏 最後の一葉（後書き）

「最後の一葉」

オー・ヘンリーの短編。若いジョンシーのかわりに老いたベアマ
ンを殺す話し。

二人とも助かってもいいのでは……。芸術に命をかける人の心境
はちょっと分りにくい。

「舞踏会の悪夢」

フリッグ舞踏会の夜に起きた一連の事件

被害者：メルフォゼ令嬢―火傷、シャラント令嬢―心神喪失、ロ
レー又令息―失踪。

調査官：首都保安司令官、ジェローム・ド・ラ・メルフォゼ伯爵。

調査結果：三人の被害には関連性なし。

1・メルフォゼ令嬢の火傷は事故である。

2・シャラント令嬢の精神異常状態は失恋の影響と見える。

3・ロレー又令息はその夜トリスタニアに出かけた以後、復帰し
ていない。名門家の嫡子としてのストレスによる家出と思われる。

事件状態：終結

「^{ラック}
欠如」

片親が平民で貴族として欠如。魔法が使えなくてメイジとして欠
如。

習いごとが遅くて欠如。美しいのに火傷が有って欠如。
すぐく残念とされています。とくに蔑称ではありません。

「シャラント嬢の生活」

家に戻って療養中。生活は自分の力でできるが、何かをしようと
する意志が薄い。

時々、壁のベチ力を見つめながら『助けて、あの子を助けて』とつぶやく。

「ツバキ、その他諸々」

ロテシアはそのあと一週を寝込みました。だから特別に注意が必要な植物はみな枯れています。

ツバキはただ、風土が合わなかったからです。ちょっと勉強して後から改良種を作り出せました。

来年では綺麗な花を見る事が出来ます。

「見えない左目」

網膜が火炎にやられました。それで瞼が溶け込んでしまってもう特殊な方法でしか治りません。

「立花 堅^{けん}」

ブラックロータスファンクラブ会長。事件担当だった立花恋とはいと同じ士。

平賀君とはクラスメイトで、最近親しくなった。

従姉の恋の資料を勝手に拝借しているが未だばれてない。

恋さんが抜けているんじゃない。堅くんが凄腕のハッカーなのだ。

「スプライト」

コーラよりこっちが好き。炭酸はそんなに強くありません。でも初めて飲めば多分喉が痛いと思うはず。

ロテシアの場合、その体では初めての事だから痛い。

「ルイズ、偉い」

そうです。ルイズさん偉いです。

「ジェロームは口が悪い」

問題のセリフ。その時はカリヌさんが若かった。

『あんなじゃじゃ馬と過ごせる公爵の被虐嗜好なんて僕の知ったことじゃありません。カリヌさんの手綱を手放しちゃだめでしょう？ 業務がどれくらい止まっていたか分りますか？ 次やったらアレだからね？』

「王家直属貴族」

王家に禄を貰って生きる貴族たち。

メルフォゼ家はちよつと特殊で、領地もある。王家の下にいるのは禄のためじゃなく忠誠のため。

「患者？ 土仕事しているのに？」

ルイズさんは過保護。

そして未だにロテシアの土いじりを納得してない。それは庭師の仕事だと思っている。

「ライチは熱帯植物」

学院では一日中オーブンに火が入られている。だからその熱を拝借して作った温室で育っている。

これからフレイムさんが頑張ってください。

「ルイズのドレッシング実力」

かなりすごい。熟練した看護婦さんの実力。

ルイズさんは頭がいいから、なんでもすぐ慣れてしまうのです。だから、その気になればなんだって出来てしまいます。

「包帯換え」

消毒の薬が発達していればここまで頻繁に包帯換えをする必要はない。

でも、ここは医学がほぼ発達していないので、とにかく患部を綺麗

麗にするしかありません。

抗生剤が有るわけでもないので……。

「筆者」

ルイズさんは人の過去を探るのが本当に嫌です。

だから、これ以上は動きません。

でもサイトさんは好奇心の塊なので結局全てを暴き出してしまいます。

舞踏会の悪夢の真実も、もう一つの秘密も。

なんか長くなってしまいました。

その割には設定とかばかりでストーリーの進行はありません。

それにしても、この主従、設定の解説にもってこいです。

次の更新はちょっと遅くなるかもしれませんが。

もう、適当に進めるような段階が終わってしまったので、フロットの構成を見直さなければなりませんよね。

九話表 変化の風

「お母さま、私は、元気です、お母さまは、元気、ですか」

今朝は部屋で食事をしました。それからずっと一人で部屋にいます。

もうすぐお客さんが来るから、学院には行けません。
その代り、お母さまへの手紙を書くことにしました。

このすべすべな手触りの良質の紙は、先日トリスタニアの羊皮紙ギルドに遊びに行ったとき見つけたものです。

ユーテライン・ヴェラムと言うらしいですよ。すべすべで、ペンもよく走ります。ギルド長からは『伯爵さまによりくって伝えて下さい。』といい笑顔で頼まりました。

まあ、こんな経験も一年になるとさすがになれてしまつて、わたしは『今度の進上品査閲さえつでは優秀ギルドに選定されるよう、言つて置きます。』と返事をするのです。

そしたら、奥の部屋でおいしいお菓子とか食べられるのです。

えっへん。これが生活の知恵というものですか？
↑違います、

権力乱用です

「手紙を書いているのか？」

「はい、お父さん。」

お客とはお父さんでした。

実はお父さんがわたしの担当医ですよ？

まあ、当然と言えば当然ですね。良家の娘である私がそこら辺の人に肌を任せるはずもないし。

なにより、わたしの治癒には特別な方法が必要だからです。

「どれどれ、うん。いつ見ても綺麗字面だな。どうだ、今度ゲルマニアに送る親書の代筆の仕事してみないか？」

「ええ、お小遣いまだ残っているのに。」

「遊んでばかりだと、人は怠け者になるんだ。そして、最近このあたりの土地を買い取ろうとしているんだって？ 金は足りるか？」

「はは……、仰る通りです。学院の庭の引き継ぎも終わったし、このあたりで私だけの庭を作りたいと思って。」

そうです。

ここが学院で公共施設である事は厳然たる事実です。だから、これ以上学院の敷地を占有するのはいけないことです。

今では、大抵の花壇をメイドさんたちに引き継がせました。もともと、私一人で管理できるものでもないですね。

もう残っているのは水の塔の辺りの窓下の花壇とその隣のツバキ一本くらいです。

「それなら僕が支援してあげよう。もちろんその代りに王家のため、場所提供をもらうが。」

「それは、関係ありません。どうですか、わたしの薔薇園は？ あれの所有権も買い取ってくれませんか？」

「管理者付きで？」

「もちろんですよ。そろそろ金が掛り過ぎて維持不能です……。」

その代りに学院の脇戸の近くで土地を買いバラの園を作りました。学院生の間では『秘密の花園』という名前で呼ばれるらしくて、虚無の曜日は一般公開しています。

爆発的な反響でした。幾らかのクラブからは場所提供のお願いが来て、月に四日ぐらいは貸し切りです。

あれのおかげでパトロンも一人が出来ました。

自分もお小遣いが厳しいのに、本当いい人です。あまり助けにはならないけれど。

とにかく、もう一介の生徒では維持しきれないのです。

一年中、花を咲かせ続けるのは並みの費用ではかなわない夢ですから。

果物とか香辛料で金を稼げばいいって？

世の中、そんなに簡単じゃありません。金って言うのは水のように流れるものです。

それを止めたり、導いたりするためには専門家が必要です。即ち商人です。そこまでやってしまったら、わたしはもう振り向く事の出来ない身になってしまいます。

何よりメルフォゼは商人であってはいけません。商人を導く立場にいる自身が金を稼いでしたら、みんな疑心暗鬼になってしまいますよ……。

「まあ、それは今度お姫様に話してみよう。あの方はまだ幼いからちよろいもんだ。」

「お父さん、今のうちに勘当お願いします。反逆罪の連れになるのは御免です。」

「そんな！ これもみんな君のためにやっている事なんだぞ？」

「それ、断頭台の前では絶対言わないでください。」

お父さんが来ると、部屋が明るくなったように感じられます。陽気な人。メルフォゼの伯爵とは思えません。

考えて見れば、お父さんは凄くいい男です。

背もちょうどいいくらいで、顔もいいです。体もたくましくて、戦闘能力もすごい。

そしてそんなことより、お父さんは心の力があります。

決めたら振り向かない。惚れたら疑わない。陽気のようで沈着だし、頭も切れて、性格は穏やか。

お母さまが選んだだけの男です。

「正直になります。お父さんではなかったら惚れていました。」

「なんだ。現金か？ 危ないところの負債でもあるのか？」

このようにとぼけてくれるところも実はかなり好きです。

「それじゃ、今日の治癒をしよう。」

「よろしくお願いします。お父さん。痛くないように……、は無理ですね」

「そうだ。これをくいしばれ。」

「はあ。気が滅入ります。」

おとなしくお父さんから貰ったリネンのタオルを口に入れ、噛みます。

うっ、痛いのは嫌なのに。

「相当慣れて来たから、今日は両腕をいっぺんにやるぞ。」

「うっう（怖いです）」

それで袖なしの薄着姿で待機とか言っていましたよね……。

□ □ □ □ □

治癒とは、移植手術みたいなものです。

でも、ちょっと違う所があるとしたら、スキルニルと呼ばれるコ
ピー人形が用いられている所です。

私が椅子に座っていると、お父さんはわたしの手の先から血を出
し、スキルニルに塗ります。

そうしたら、わたしと全くおなじ顔をしたもう一つの私が出来ま
す。

そのあと、お父さん呪文を唱えます。眠りの魔法ですけど、麻酔
用に改変したらしいです。

麻酔効果はうすいです。手術の間、わたしは感覚の確認をしなき
やならないからです。

そして、もうひとつ。わたしが苦痛で暴れ出さないようにしっか
り縛っておきます。

って、お父さん、何でそんなに縛るのが上手ですか？ 娘は怖い
です。

お父さんがブレイドの魔法を使い丁寧に人形の皮膚を取り出しま
す。

目の前であれをやらされるのも相当きついですけど、もう慣れま
した。

そして、取り出しが終わるとわたしの爛れた皮膚をとりだします。

「うつうつ！！！！！」

お父さんは瞬く間にわたしの腕の肉を切って取りだします、そし
て直ぐ魔法を使い患部を軽く凍らせます。

そして人形から取り出した皮膚を付け、その上から水の秘薬を惜
しみなく注ぎます。

水の秘薬の効果で凍結が解き、肉と肉がつながります。それに加

え、お父さんは治癒の魔法を連続に打ち込み、傷口を塞ぎます。そうしたら、一箇所の手術が終わるのです。

「う……、うつつ！」

この時の痛みは気絶したいくらいですけど、わたしは気絶が出来ないので見えるしかありません。

でもお父さんの顔を見れば痛いのも耐えられます。

真剣なまなざし、わたしと同じ緑の瞳。

「終わりだ。感覚の確認をするぞ。」

手術は十五分でした。でも、私には一時間のように感じられました。

お父さんは手術で新しく移植された肌に冷たい針のようなものを当ててみます。

びりびりつと痺れのような感覚がありました。手術は成功に終わったようです。

ここまで終えたお父さんの顔は滝のような汗で酷い有様です。きつとわたしもそうです。

「う……。ふえん……。」

「よく耐えてくれた。もう泣いてもいい。」

痛みで泣くのは恥ずかしいです。でも、しかたありません。

痛いもん！ 生の肌を取り出したり付けたりするんだもん！

だから、お父さんに抱かれて泣き続けます。それはもう一時間も泣きます。

「なあ、この発想は確かに凄いけど、いささか問題があると思わないか？」

「他に、火傷が残らない方法あるの？」

「はあ……。娘の生身を切り刻む僕の心境も理解してくれ。悪夢をみるんだ。」

「ロティもみる。悪夢。痛い夢なの。」

撫で撫でしてくれました。大きい手です。

この世に生れてきてよかったなんて思わせる手です。

わたしを欲情じゃない慈愛で撫でってくれる唯一の男の手です。

「ここまでして、学院生活を送りたいのか？」

「うん。」

「はあ……。全てをあのロレーヌの小僧の所為に出来るんだ。この僕にはその力がある。望めば、学院全体に『ギアス』でもかけられるぞ。」

本当に出来るから冗談ではありません。

いまは、『そよ風』とか自称しているけど、二十年前では『深淵のジェローム』だったから。

「ロティはいや。友達是人形じゃないもん。」

「またそれか、自由意思？」

「うん。自由意思。ロティは本当のロティを好きになってくれる人がほしい。」

お父さんはため息ばかりです。

実はあの無茶な事件処理のせいで、お父さんに弱点が出来ました。いままでは誰もそれを突いて来なかったけど、弱肉強食の政界では小さい傷でも致命傷になり得るのです。

分っています。

わたしがどれだけお父さんに愛されているのか。
だからこそお父さんはわたしの願いを聞いてくれました。
誰ひとりにも『ギアス』を使わず、事件をもみ消してくれました。

「パパ、ごめんなさい。」

「いいんだ。娘の無茶なお願いを聞いてあげるのが父の役割だし。」
「パパ、ロティはもうちょっと頑張りたいの。」

タバサさんも、キュルケさんも大事な友達です。

そんな大事な彼女たちを『人殺し』にするなんて、絶対認めません。

そのレットルは彼女たちに似合いません。わたしが息をする限り、
そんなことはさせません。

「だから、助けて。パパ。」

「分った。僕の姫。なんなりと言ってくれ。」

「それ以前に勘当の件は考えておいてください。お父さん。」

「変わり身が早すぎるだろう！ もうちょっとサービスしてよ！」

□ □ □ □ □ □

もうちょっとお父さんに甘えていたかったけど、お父さんは忙しい身です。そのあとすぐ帰りました。

わたしは『虚無の曜日』は昼と一緒に食べましょう。』ってお願いして、お父さんは『なら、いつものように城の衛兵所で待っている。』

『つてうなずきました。』

いつも言っていますが、わたしは別にお父さん子でもなんでもありません。

これは……、そう！ ご褒美です。手術を耐えて見せたから、ご褒美をもらってもいいはずですよ。

なんですか、その疑いの眼は。

本当ですよ！ この歳で『お父さん好き』とか『お父さんのお嫁さんになる！』とかあり得ないんですからね！

とりあえず、今日は無理な仕事が出来ないし、薔薇園で水やりでもする事にしました。

コルベール先生のおかげで、水やりは凄く簡単です。

まず、コルベール先生に作って頂いた揚水機を使って2メートルくらいの高さに設置されている水タンクを満たします。それから、バルブを開くだけで水やりができます。すごいでしょ？

ただ……。

「キュルケさん、お疲れさまです。」

「いいわよ。よそよそしい態度はやめて頂戴。」

「てへへ、そうでした。」

「もう、あなたって子は……。タバサがいなくなつて退屈なのに、あなたはあなたで付き合いが悪いし、刺激が足りないのよ、最近。」

揚水機は火のメイジでなくては使えません。それもドットでは全く無理です。

結局、コルベール先生が自らタンクを満たすか、キュルケさんをお願いするしかありません。

あ、タバサさんも『わたしも出来る』とか言って頑張りましたけど、失敗でした。その時のタバサさんのむくれた顔は本当にレアで

した。ご馳走さま。

とにかく、一度タンクを満たせば後はただバルブを開けておくだけです。

ホースを通し、その全体に水が行き届いた後は自動で締められるので、後片付けもありません。

その時でした。

「決闘だ！ 決闘！ 青銅のギーシュとゼロの使い魔の平民が決闘をするんだ！」

学院の方から人々のざわめきが伝えてきました。

薔薇園の給水塔は城壁にくっついていてるので、脇戸から聞こえる音を直ぐ聞く事が出来たのです。

「決闘……。」

「ロティ。大丈夫？ 顔色が真っ青よ……。」

「いいです。あのような事が二度起きるはずもないし。」

「止めてほしいの？ そうならあたしが両成敗にしてあげるわ。」

キュルケさんは決してただの我がままじゃありません。むしろ人の心に機敏です。

キュルケさんがなぜ多くの男たちに人気があるのか。

それは簡単です。キュルケさんはいつも男が欲しがらる言葉の言つてくれるからです。

恋とは一人でするものじゃありません。

恋のスペシャリストのキュルケさんは、人の心を見抜く事にもスペシャリストなんですよ。

そんなやさしいキュルケさんだから、わたしはそれを信じて本当のわたしを見せたのでしょね。

「行きましょう。とにかく、見てから考えます。」

「飛んでいくわよ。あたしにきゅつと抱きついて。」

「はーい。へへへ。キュルケさんの抱っこ。」

キュルケさんの胸、また大きくなりやがりました！

すごい。これで体重『ピ——』なんて信じられない！
それなのにこのウエスト！細かいよ！

「あなたって、時々すごく子供みたいわ。」

□ □ □ □ □

また、この広場ですか！

本当にここはいい記憶がありません。

いつそ、ここに闘技場を建てましょう。みんな、ここでは戦うばかりだから広場である必要はないのでは？

ヴェストリ広場にはもう多くの観衆たちがあつまってわいわいと騒いでいます。

そしてその人集りの中心には、昨日召喚された平賀さんがいました。

傷だらけでした。

右腕は骨折。左目は瞼が腫れて見えないようです。鼻も折れていて鼻血が垂れています。

客観的にみて、もう闘う状態ではありません。

でも、幽鬼のように起き上り壊れた視線でグラモンさんをにらみ続けています。

「あら、もう完全にリンチだわ。これは決闘じゃないわよ。」

「痛いでしょうに。馬鹿、男って本当に馬鹿。」

「でも、いい女は見守るのよ。そんなバカな男たちの無意味な殴り合いを。」

「……。グラモンさんを説得します。」

「無駄だわ。血がのぼった坊ちゃんほど理性がないのもそうそういないのよ。」

でもやってみるのです。

無駄に血が流れるのはあまり好きじゃありません。

「こんにちは、ミスタ・グラモン。」

「うん？ おお！ 君か！ ミス・メルフォゼ。」

「今日も綺麗にブロンドですね。散髪なさったのですか？」

「分るかい！ さすがミスの審美眼にはかなわないな。」

「いえいえ。格好いいですよ。」

グラモンさんはわたしの薔薇園のパトロンです。

自分もお小遣いが大変なのに、『美しいバラには高貴な人の支援が必要なもの』とか言って金を出しています。微々たるものですが、その志が気に入って薔薇園の出入りを許可しました。

それ以来、グラモンさんとは時々薔薇の話をしながら過ごしています。

とはいっても、この人は根本的に調子者で頭が弱いのです。だから、わたしが一方的に薔薇の知識を教えるだけですよ。グラモンさんはその知識を女たちに自慢しているみたいですけど……。

それくらいは『可愛い』の範疇です。問題なしです。

「それで、グラモンさん。この決闘、もうお止めになってももらえませんか？ 彼を助けて下さい。」

「助ける？ それは無理だ。出来る事があれば、彼が勝手に一人で助かるだけさ。」

「なぜですか？」

「彼の被害者面が気に食わないってことだよ。今でも、ぼくに謝ってさえくれば、この茶番劇はそこで終わりだよ。ミス。」

「俺は間違った事をしていない！」

平賀さん、なぜ未だに叫ぶ気力が残っているのですか。

振り向いたわたしの眼に、殴られ過ぎて壊れかけている体を引きずりながら近づいてくる彼の姿が映ります。

その隣にはヴァリエールさんが泣いています。平賀さんにはね退けられて倒れた姿勢のままです。

「平賀さん。ここは引き取り下さい。あなたのご主人さまが泣いているのに、自分のプライドを優先するのですか？」

「……。すまないとは思っている。」

「なら……。」

「でも！ 下げたくない頭は、下げられねえ！ これからこの地で生きていくため、俺は自分の存在を証明しなくちゃ駄目だ！」

広場に沈黙が広がります。

さっきまでの揶揄、嘲弄。そのすべてが消えてしまいました。

彼の気迫に当てられたのかもしれませんが。もしかしたら、共感している人がいるかもしれません。

でも、わたしは……。

「平賀さん。手を出して。」

「こう……、か？」

「はい。」

わたしはマントの中から『アレ』を出し、彼の手のひらに置きます。

「これは、なんだ。」

「『あゆ』といいます。わたしはこれで枝を切ります。」

「剪定刀かよ。」

あれは、故郷の城の庭師のお爺さんにもらったもので、流線形で魚みtainな形をしたナイフです。

刃渡り20センチの小さいナイフですけど、その硬さは相当なものです。

その気になれば丸太だって切れます。その前に、人が疲れてしまっうけど。

「でも、これはもう一つの使い道があります。」

「なんだ。それは。」

「人も切れます。」

そして、わたしはマントを脱ぎます。

あちこちからざわめきが伝わってきます。そう言えば、大勢の前でマントを脱いだのは初めてのことです。

包帯って恥ずかしいのに……。でも万が一のことがあったらヴァリエールさんが悲しんでしまいます。

わたしはそうやって脱いだマントを平賀さんに着けてあげます。

背の小さいわたしには膝まで来るマントですけど、サイトさんはわたしより背の高いのでちょうどいい長さになります。

「かなり丈夫なマントです。これを着ていれば死ぬことはありません。」

「ありがとうございます。」

「勘違いしないでください。『死なない』だけですから。」

わたしが出来るのはここまでです。残りは全部、当事者の間の問題です。

彼らがそう望むなら、わたしの考えを無理やり押し付けるのはいけないことです。

平賀さんがこの世界でメイジに抗いながら生きたいと言うなら、そつとしておくべきです。

「抗いたいですよね？ この世界のルールに。」

「そうだ。メイジとか貴族とか、認めねえ。」

「でも、世界は脆くありません。それに勝ちたいなら、もっと強くならなければなりません。」

「あ、ああ……。」

でも、今度だけにして頂きたいのが本音です。

ヴァリエールさんの悲しむ顔なんて見たくありません。

「グラモンさん。最後にしましょう。これで彼は戦士です。手加減無用です。」

「分ったよ、ミス。今度で彼がなにも見せてくれないなら、そこまでするよ。」

ひゅー。ため息ばかりです。

この馬鹿な男たちに付き合っていられません。

マントもないのに外にいるのは危険だし、わたしは部屋に戻る事にします。

キュルケさんはどうやらこの勝負に興味があるみたいだからそっ
としておきます。

「わたしは、帰ります。グラモンさん。後片付けをお願いします。」
「任せてくれ。土のメイジであるぼくには簡単な事さ！」

そうやってわたしは人々の視線を振り解きながら自分の部屋に帰
って行くのでした。

□ □ □ □ □ □

「え？平賀さんが勝ちました？」

「はい！グラモンさまの青銅戦士を一撃で切り刻みました！」

「や……、やけに興奮気味ですね、シエスタさん。」

「だって！戦闘で貴族に勝つことが出来る平民って素敵だと思
いませんか？」

じつはちつとも思っていないせん。

平民も貴族も結局は血と肉の塊にすぎません。刺されば死ぬし、
殴られても死ぬ。

もちろん、一対一の状況で貴族に勝つのは難しいです。でも、敢
えて真正面から挑んで勝たなければならぬ理由があるのですか？
寝込みを襲うとか、毒を盛るとか、殺せる方法は無窮無尽ですよ。
だからこそ、力に意味なんてありません。

闘わずに相手の心を従わせる事が出来てこそ、本当の意味での強

さであると思っています。

でも、シエスタさんは憧れの彼を見つけられたって感じですし……。水を差すのは気がひけます。

そして、せっかく健闘してくれた平賀さんを褒めるのにやぶさかである必要ありません。

「素敵ですね。勇気ある方でした。」

「そうですよね！ はあ、格好いい！」

「（シエスタさん……。戻ってきて……。）」

わたし……、シエスタさんの口から誰かの褒め言葉を聞くのは初めてです。

いい気持ではあ・り・ま・せ・ん・ね！

「あら？ ロテシアさん。何でそんな顔ですか？」

「知りません。彼は泥棒猫です。シエスタさんを取られちゃいました。」

「ふふふ。そんなことはありませんよ。ただね？ ちょっとだけ格好いいかって……。」

「わたし、シエスタさんが結婚してしまったら多分泣いてしまいました。」

あの入学式の日、わたしを初めて見つけ出してくれた人。

一年を通して、わたしを守ってくれた人。

最初の時にはそばかすもあって、少女の感じがしたけど……。おどどしていた時もあつたし。

最近はずっかりおとなの女になってしまいました。

家で働いていたメリルさんを思い出してしまいます。

あの人は本当にわたしを可愛がってくれました。
変な子供であつたわたしに振り回されながらも、最後まで付き合
ってくれました。

わたしが八歳のとき、メリルさんは輝くほど真っ白なウェディン
グドレスを着てお嫁さんになりました。

その時、わたしは『フラワーガール』でした。赤いカーペットが
敷かれたアイルを歩きながら薔薇の花を撒きました。

わたしの相手役の男の子はなかったので、わたしは花を撒いた後
やる事がなかったのです。

だから、祭壇の傍に立ち、彼女が入場するのを見守りました。

彼女の眼は伏せていて——ベールもあつたから——表情は分らな
かつたけど、不安と期待が混じつた独特な香りが漂いました。その
時の花嫁の嬉しいようで悲しい表情は今でも鮮やかに思い出せます。
それはとても不思議な感じでした。

『ブーケ、ありがとうございます。お嬢様』

『幸せにならなきゃ駄目です。分りますか?』

『はい。子供が出来たら、お嬢様、遊んでもらえますか?』

『うん。きつと、メリルに似て可愛い子のはずだもん。』

『ロテシアさん? なにをそんなに考えていますか?』

『ちよつと、複雑です。素直に応援できません。』

『なんだ、そんなことですか?』

シエスタさんが笑います。天真爛漫な笑い方です。ちよつと恥じ
らいも混じっていて頬がほんのり赤い。

そういえば、シエスタさんの少女のような頬笑みははじめて見る
気がします。

この様に爛漫な頬笑みをくれた平賀さんには素直に感謝すべきで

しょうか？

「いいですよ。結婚しても、ロテシアさんは私が育てるから。」

「子供じゃないし！」

「養育権はあるはずですよ！」

「ありません！ 全然ありません！ そんな概念すらありません！」
「おかしいですね……。」

ひゅう。

まあ、ヴァリエールさんが自分の持ち物を他の人に易々と渡すはずありません。

たぶん、ずっと先の事になるでしょう。シエスタさんがわたしの傍から離れるのは。

わたしはシエスタさんを縛りたくありませんから、彼女の恋も応援しなきゃならないです。

でも、平賀さんの恋愛能力はあまり高くなさそうですし……。

「平賀さんは、多分ヘタレです。」

「？ 何のことですか？」

「シエスタさんはこれから苦労するって事です。」

閑話休題。

そして、その後はどうなったのかな？

「それで平賀さんはそのあとどうなりました？」

「それが……、倒れてしまって……。」

「さすがに疲れましたか。」

「まだ、気が付いてないみたいです。」

お見舞いに行くべきですね。これは。

ヴァリエールさんが心配です。言うことの聞かない使い魔のせいで心労が凄い事になっているかも知れません。

「あした、平賀さんのお見舞いに行きます。後で水の秘薬を持ってきてください。」

「はい。」

□ □ □ □ □ □

「お母さま、お元気ですか？」

こっちは春爛漫で、日々に花が美しく咲き誇っています。

わたしは元気です。今日もお父さんが腕の治療をしてくれました。信じられないくらい綺麗に治っています。治療の手段にはいささか問題があるけど、効果は抜群です。

一度治療するたびに一月の休憩を置かなければならない事以外は順調です。

そして、ミス・ヴァリエールの話ですね。

実はすごく後ろめたいです。ヴァリエールさんすごくいい人なのに、わたしはそんなヴァリエールさんの好意を自分の都合のために使っています。

いつか、真実を語れる日が来るのでしょうか。わたし、最近は心苦しいです。

あ、お母さま。

ミス・ヴァリエールは男の少年を召喚しました。

お母さまの言うとおりでした。凄いです。お母さまは本当に天才です。

なら……、これから、ヴァリエールさんと距離を置く方がいいですか？

わたしは嫌です。ヴァリエールさんと呼ぶのも疲れます。ルイズさんって呼びたいです。

気高く、美しいです。ヴァリエールさん。

わたしみたいに裏がある美しさではなく、本当の美しさがあります。

真っ直ぐな鳶色の視線はいつも希望を見つけ出す。人の闇のなかでも光を見出します。

ねえ、お母さま。

道を示す友達って、ヴァリエールさんの事じゃないでしょうか。

彼女といれば、わたしは答を見つけられる気がします。

この嘘にまみれた人生の答。彼女ならその答えを分っている気がします。

話が長くなりました。それでは夏休みに帰郷しますので、それまで体に気を付けて下さい。

それでは返事をまっています。

お母さまを愛する娘より

P S . あ、この紙いいでしょう。ただでもらいました』

九話表 変化の風（後書き）

「ユーテライン・ヴェラム」

死産した牛の皮で作られた犢皮紙^{とくひし}。かなり貴重なもの。

見た事はぜんぜんないから、どんな感じなのかは想像でしかない。

「進上品査閲と優秀ギルド」

トリスタニアの王宮御用達のギルドは半期に一度査閲をします。

品の質が落ちてはいないか検査するためのものです。

一つのギルドに二日も使って、制作工程、完成製品とかを検査します。さらに財務とか人事とかも監督するので、とにかく受ける立場では面倒くさいです。

だが、優秀ギルドになるとそれが一年に一度となり、かなり負担が減りますので、ギルドとしては喉から手が出るほど欲しいものです。

「ロテシアの字は綺麗」

自分に出来ないものを主人公に求める……。基本ですね。妄想の。

「ロテシアの庭の事情」

鉢とか、肥料とかもただではありません。

そして忙しい時には人を買って使うのでとにかく金のかかる趣味になってしまいました。

ロティは商売事をしたら駄目な立場なので、金を稼げる手段がありません。

「アンリエッタとジェローム」

アン：「本当に頼りにしています。伯爵。」

ジェ：「誠心誠意を尽くし、禄ほど働きます。」

アン：「まあ、冗談も上手ですね。」
ジェ：「（冗談ではないんだが。）」

「スキルニル移植手術」

スキルニルとは血を使って、特定の人とまったく同じ姿が出来る魔法道具。

この手術は、12歳ごろのロティ自らが提案した治療方法です。でも、『誘い』によって魔法との親和力が桁違いなロティにしか使えません。

「手術中の痛みについて」

擦り傷をあら塩でこするのような痛み。麻酔のおかげで耐えられる段階になりました。

「現在ロティの中の男の順位」

お父さん＞越えられない壁＞コルベール先生（手伝いしてくれた）＞グラモンさん（志が気に入った）＞深い谷＞平賀さん（一応ヴァリエールさんのモノだし。）＞他の男子生徒

「給水塔と水やり」

揚水機を使って給水塔を満たします。それからはバルブを開いておくとホースを通し水が出ます。

ホースは花壇の地面近くに設置されていて土を均等に濡らします。ロティにとっては簡単です。タンクを満たすのが大変なだけ。でも、一度満たすと数日は使えます。

「いなくなったタバサさん」

『おなかですいたの——！——ごはん——！——』
『最強呪文！ 風棍棒！』

『いたいっ！ なんてほんとに当てるの！ ばかーッ！』

すごく楽しそうですね。実は使い魔とじゃれ合っています。

「ギーシュとロテシア」

ギー：「君はアーティストだ！ この園は芸術だ！」

ロティ：「（語彙が足りない……）ありがとうございます。」

ギー：「ぼくはこの美を守りたい！ どうだい、ぼくがこの薔薇園のパトロンになりたいのだが。」

ロティ：「（金あるのかな？）本当ですか？ どれくらい支援可能ですか？」

ギー：「あゝ、そう！ 1カ月に10エキューを出そう！」

ロティ：「（ないよりはましかな）ありがとうございます。きっと薔薇たちもよろこびますよ？」

「私が考えているエキューの価値」

平民一人の平均生活費（一か月）：10エキュー

日本人1世帯の平均生活費（一か月）：276,494円。

この数値は統計局の『平成22年6月家計調査報告 二人以上の世帯』に基づいています。

だから、1エキューは1万2千円くらいに考えてもいいのでは？
とか思っています。

「換算表」

金ぴか剣（直ぐ折れる）：2400万円

ペンダント（祭りで買った）：4万8千円

セーラー服（1着）：4千円

惚れ薬（モンモン）：840万円

「ははは、平民くん。元気いいね。何かいい事でもあったのかい？」
書いておいて何だが、似合わない。

「剪定刀『あゆ』」

木の枝を切るのに重宝されている刃渡り二十センチの短刀。刃末は普通の刃だが、刃元の5センチは鋸の刃になっています。

「ロテシアのマント」

物理攻撃にもある程度たえられます。

外部から魔力を吸い込んで着用者に還元するから回復の効果も少しありますよ？

「フラワーガール」

新婦の入場の前に入場し、花をアイル（和製英語ではバージンロード）に撒きます。

ドレスを着て花を撒く少女は絵になります。普通は10歳下の子供にやらせます。

これの相手役は『リングベアラ』。すなわち指輪の運搬人です。白い枕（？）の上に結婚指輪を乗せてアイルを歩きます。

でも、指輪って失くすと大変だから本物の指輪の代わりに、枕に指輪の刺繍を入れる事になっています。

「メルルさんのために作ったブーケ」

白いポインセチアを主役にして、黄色いサンダーソニアを添えたブーケ。

花ことばは「あなたを祝福する」。

「筆者」

話が面白くないから、自分でも書きながら疲れてしまいます。次は、書きやすいサイト君だし、ちょっと頑張ってみます。

九話裏 トレイター（前）

こんなに朝早く起きられた事に一番驚いているのは他で見ない自分自身だった。

薄い桃色のカーテンを開きながら見た窓の外の風景は壮観だった。テレビで見た地中海の青い海みたいな空に一筋の光が垂直に延ばされて、まるで闇を切り裂くように見えた。

黎明。その広大に広がる世界には畏敬さえも覚えた。

「東京ではこんなに広い空き地なんてなかったからな」

ねどこが悪かった割に体も痛まなかった。寝ようとした時は心配だったけど、この麦藁のベッドもそれなりいいものだった。ちよつと顔がちくちくと擦れる事だけが不満だと言えば不満だった。

アンチック家具——そうは言ってもこの世界ではこれが普通の家具だろう——で設えられたこの部屋に、この動物の巣のような麦藁束が元々置かれていたとは思えない。たぶん、自分が召喚するはずの使い魔の為に用意しておいたものだろう。

わくわく期待に満ちたルイズがこの巣の支度をする光景が、不意に頭をよぎる。俺の失策でもないのに、妙に後ろめたい気分になってしまった。

「ちえ。連れて来られて迷惑しているのは俺なのによ」

でも、昨晚のあれを見てからはどうしてもルイズを憎めない。見直したって言うか、『根はいい子だな』と思うようになってしまっ

た。それで、どうも調子が出ない。

「これが……、ストックホルム症候群って言うやつか？」

まあ、そんなはずないよな。まだ一日過ぎたばかりだし。

よく考えて見れば、こいつ俺の事を全然人間扱いしないし。

昨晩なんて、俺にパンツを投げながら『綺麗に洗濯しておいて』とか言いやがったぞ？ 『羞恥プレイかよ』って叫びたくなっただじやないか。

ああ、もう！ 調子狂うな！

そうだ！ このぐうすか寝ている生意気な魔法使いをびっくりさせよう！

そうして憎まれ口でも聞いたらペースを取り戻せるかも知れない。俺は拉致されたんだから、素直に言うこと聞いちゃ駄目だろ。

だから、俺は彼女のベッドにそっと近づいては寝ているルイズの毛布をはいだ。

「な、なによ！ なにごと！」

「朝だよ。お嬢様」

慌てて起き上るルイズの顔には本当に満足した。すごく驚いてしまったようで、周囲をきよるきよる見回し始めたんだ。それが、どうにも友達が育てているハムスターみたいで可愛かった。

「ああ、使い魔ね。そうね、昨日、召喚したんだっけ」

「そうだぞ。もう忘れていたのか。」

「寝込みを襲われて気が動転しただけよ……。それより服。」

椅子に掛つていた制服を御彼女に渡した。まあ、投げて渡してもよかったんだが……。さすがに女の子にモノを投げるとか紳士のやる事じゃない。

「下着」

「勘弁してくれ」

「そのクローゼットの一番下の引き出しに入っているの」

「はあ、分った！ わかつたから！」

トボトボと力抜けた足取りで引き出しまで行つた。高そうな引き出しだなんて思いながらそれを開けた。なんかひらひらした下着がいっぱいあつた。

そう言えば俺は女の子の下着を見るのが初めてだつたな。妙に恥しくなつてきた。俺はその一つを適当に選び彼女の傍に置いた。

「つて！なんで全裸なんだ！」

「…、あんたは自分のご主人が制服の下にネグリジエを着て登校したらしいの？」

「憤みつてもものがないのかよ！ おれ、男だぞ！」

「あんたが？ おとこ？ は！ 笑わせないで。あんたは使い魔でしょ？」

一時でも、この生意気なやつをいい子だと思つてしまった自分に腹が立つ。そんな朝だつた。

でも、新生活の始まりとしてはなかなか悪くないものだ。そんな気もした。

「それより、早く着せてよ！ 私を遅刻させる気？」

「自分で着ろっつの！！！！」

□ □ □ □ □ □

「おはよう。ルイズ」

「おはよう。キュルケ」

お、おっばいだ。

いや、違う。胸の大きい女子生徒が現れた。

寮の構造は一つの通路の両端に窓が開けられていて、階段がある。そしてその通路には両側にそれぞれ三つずつの部屋がいた。

だから、今の状況と言うものはルイズがドアを開けて廊下に出て来たその時、向こう側でもう一人の女子生徒がドアを開けて現れたんだ。

その女子生徒は、背が低くて体の起伏に乏しいルイズとは全く対照的なスタイルで、胸は大きいし背も高く足もすらりと伸びていた。一言で言うと、豊満な体つきだった。

それにしても、なぜルイズはしかめ顔なんだ。まさか体の事でコンプレックスを？

「見て、あたしの使い魔よ！ フレイムと言うわ」

「うわ！ なんだ！ 尻尾から火を吹いているぞ！」

キュルケって子の傍には大きいトカゲがあった。急に現れてすごく吃驚してしまった。

急に現れなくても吃驚したかもしれない。

何より、そのトカゲは俺が今まで考えていたトカゲとは全然離れていたのだ。

口からは火を吹くし、尻尾は灯のように燃えていたのだ。

ゲームなんかでよく登場する火トカゲらしかった。でも、その顔の何処かに愛嬌が有るように思えた。

なんだ、可愛いじゃないか。こいつ。

「サラマンダーか？　すごいな。」

「あなた、これがわかる？　そうよ。　素敵でしょう！」

「あんた『火』属性だもんね。」

「ええ。微熱のキュルケですもの。」

胸を張りながら話すのは結構だけど、その凄く開放的なブラウスを念頭に置いてくれ。　胸元のボタンが取れそうだぞ？　全くけしからん胸だな。

「そして、あなたの使い魔って、それ？」

「はあ、そうよ。不本意ながらね。」

「おい、聞こえているんだが。」

「なら耳を塞ぎなさい。」

ルイズは疲れ切った顔だ。

キュルケはもう俺の方に視線を移した。

そして興味深そうに顔から足までジロジロと見た。

「本当に人間を呼び出せるなんて……、変わっているわ。ロティに劣らずの変わり物よ。あなたも。」

「でも、スクスクに比べて使い道がなさそうだわ。」

ロティに劣らず？ ロティってロテシアの事だな？

彼女も特異な使い魔持ちか？ でも、部屋では見かけてないぞ？
なら、大きいのか？

ちよつと、興味がわいた。

「うん？ ロテシアも変わった使い魔を召喚したのか？」

「『ロテシア』？」

ひいつ！ なんて、睨むんだ！ この、お、おっぱいが！

怖いじゃないか！ 目が全然笑って無いぞ！

「ロテシアが直接許可したのよ。だから、私の使い魔を脅かせないでちょうだい。」

「あら、そう。」

ルイズが宥めると、キュルケは目に入れた力を抜き、またニツコ
り笑った。

そうしたら今まで心を縛りつくような空気は嘘のように消えてしまった。

ひゅー、たすかった。

「あんたはちよつと過保護よね。少しくらいいいじゃないの。」

「だめよ。ロティに近づく男はあたしが一通り目を通しておかなく
ちやね。ロティは純粹だから、騙されやすいわ。」

「それは、同意するけど……。」

「なあ、それよりロテシアの使い魔って変わったものか？」

ふたりの眼がこっちに向いた。そしてルイズはため息をついた。

「何でもかんでも質問すれば答えが返されると思わないで。ましてやここにならない人の話を聞くのはよくないの。」

「へえ」。でもこのあなた、ちょっと面白そうな男ね。いいわ。あたしが教えてあげる。」

「あ、サンキュー。」

キュルケは機嫌が良くなったのか。終始笑いながら話してくれた。

「ロティの使い魔は、スクスクと言う名前のクヌギよ。」

「クヌギ？ 樹？ 植物なのか？」

「そう。この寮の入口に高さ2メートルくらいの立木が有ったでしょ？ それがスクスクの弟だわ。」

「へえ……。ちよつと。そしたら、俺ってその立木より使えないのか！」

いくらなんでも酷いだろう！ 動きもしない立木と比べられる俺の身にもなってみろよ！

俺が怒るとルイズの手が頭を殴る。

「いてえ！ 事実だろう！ いくらなんでも俺は人間なんだ。植物に負けられるか！」

「スクスクは学院全ての植物に命令を出せるの。だから悪口言わないで、空気が悪くなるわ。」

「負けた。植物に負けたく！」

「ほっほっほ！ あなたたち、本当に面白いわ」

くそ！ 俺のガラスハートはもう壊れ寸前だ！

いくら魔法の世界でも、一介のクヌギが地域のボースなんかやっていいのか！

「ねえ、あなた。名前は？」

「平賀才人。」

「ヒラガサイト？変な名前。」

「やかまし。」

「じゃ、お先に失礼。」

キュルケはそれだけを言い残して颯爽と去っていた。
キュルケが居なくなると、ルイズは拳を握り締めた。

「くやしー！　こんどこそ、あの余裕満々なキュルケに一矢を報いて見ようと思ったのに……」

「まあ、元気出せよ。いいじゃないか。使い魔くらい」

「よくないわよ！　メイジの実力をはかるには使い魔を見ろって言われているくらいよ！」

「悪かったな。人間様で。でも、お前らだって人間じゃないかよ」

「メイジと平民じゃ、オオカミと犬ほどの違いがあるのよ」

メイジ、メイジ！　もうなんだよ。それ。そんなに魔法使いが偉いのか？

ただ、魔法が使えるだけの人間じゃないか。それなのに貴族とか平民とかふざけた事を言いやがるし。

見ている。いつかメイジたちにぎゃふん言わせて見せるから！

□ □ □ □ □

食堂は六つの塔の中でも一番背の高い本塔にあった。

だから、庭が見渡せる渡り廊下を通して本塔に行くことになったのだが、その廊下は庭に咲いている色んな花を楽しめるようになっていた。

特に廊下の直ぐ隣には観葉植物で生け垣が作られていて無機質な壁より趣が有った。

俺が『さすが貴族さまたちはこんな事にも気が効くな』と言うと、ルイズは謎の頬笑みを見せた。

まるで自分がやったことを褒められたみたいな表情だった。

そして到着した食堂も見た事のなくらいすごかった。

「すげえ…、ここまで豪華な食堂は見た事無いぞ。」

「ふふん… すごいでしょ？」

素直に『うん』と返事してしまうほどだった。

フルーツが盛られた籠とか、すごく大きなシャンデリエに電球じゃない本物のローソクが使われているところとか。輝かしい豪華さであふれる食堂だった。

そして準備されている食べ物も朝食とは思えないほど重いものばかりだった。

だから、俺の驚きは肯定的なだけのものでもなかった。

「ぼうつとしていないで椅子でもひいてちょうだい。気の利かない使い魔ね」

「うん。あ！ そうだな！」

映画とか見るとそんな感じだったな！

俺が椅子を引いてあげると、ルイズは優雅にその椅子に座った。

『貴族みたいだな』なんて馬鹿なことを考えた。

そりゃ貴族だからだろう。それも王家の血統のロイヤルファミリ―だしな。

そして俺もその隣に座った。まあ、家ではこんな重い朝食なんてありえないけどな？ 食べ物に罪はないし、ここはおいしく食べるのが礼儀つてもんだらう？

「そこは貴族の席よ。立つて。」

「え？ なら、俺は何処で食べるんだ。」
「床。」

そう言いながらルイズは床を指さした。そこには素朴な朝飯が用意されていた。

拳くらいの大きさのパンが二つ。そしてスープが一皿。スープは見るからにして薄そうだ。

「なあ。格差社会ってひどい言葉だと思わないか？」

「はじめて聞くけど、いい言葉ね。感動してしまったわ。」

「ちくしょー」

おれは涙を呑みながら床にすわった。

そして恨めしそうにルイズを見上げる。なんだよ！ 肉食べたいんだぞ！ 俺は。

「一般的な平民の献立のはずよ。不満は言わない。」

「でもな？ 君たちの献立と比較してしまうんだよ。どうしても。」

「いやならあんたが稼いで食べなさい。」

「へへへ、これもおいしそうだな。お嬢様。」

「よろしい。」

そう言いながら、ルイズは肉がついた鳥の足をさりげなく俺の献立の傍に置いてくれた。それだけで俺の朝飯は輝きを増したように思えた。

なんだか、涙が出そうだった。

「本来こんなことしちゃダメなの。マナー違反なの。だから今日だけ特別。わかった？」

「ああ、うまい。うまい。泣けそうだ」

俺は今まで不肖の息子を何も言わずに養ってくれた親に感謝しなくなった。

□ □ □ □ □ □

「なあ。ご主人。」

「なに？ 食べながら話すのはよくないわ。」

「ロテシアがないぞ？」

俺の食事はほぼ一瞬で終わった。スープは飲み込んだし、パンはほぼ二口だった。鶏肉も食べ終わるのに時間がかからなかった。今では残った骨を持って遊んでいる。

そして、暇だった俺は周囲を見渡してみた。さっきのおっぱい、ではなくキュルケも見えた。なんだか、同じ学年の生徒は一つのテーブルで食べているみたいだ。二年生は黒いマント。真っ中のテーブルだ。

でもいくら見渡してもロテシアの姿が見えなかった。銀髪だしきつと見つけやすいと思っていたが、いくら探してもいない。だからちよつと疑問だった。

「ロテシアは部屋にいるはずだわ。」

「寝坊か？」

「あんたと一緒にしないで。彼女は日が昇るまえから起きて働くの。」

「（はたらく？）ならなぜ？」

「今日は、主治医が来るから部屋でいると言ってたわ。だから、登校しないの。」

「そうか。」

不便そうだな。その傷を抱えて生きるってことは。

「まあ、主治医っていつでも彼女の父である、メルフォゼ伯爵だけど。」

ルイズは食事を終えたのかナプキンで手を拭った。その仕草も様になっていた。

でも、父が主治医なんて変わったもんだ。

「特殊なマジックアイテムが必要だと言ってたから、多分魔法での治療よ。」

「医者か？ 彼女の父親は？」

「うっん。違うの。変だけど風のメイジのはずよ。」

「？」

「普通、治療の魔法は水が司るのよ。」

彼女が立ちあがったので俺もそれを追って立ちあがった。彼女の食事速度は遅めだったから、食堂には人がほぼ残っていなかった。俺たち二人はやけに静かな食堂を後にして廊下を歩いた。

「今日も時間さえあつたら挨拶に行きたかったわ。そよ風のジエローム。」

「そよ風？」

「彼の二つ名よ。二つ名の通り気性穏やかな美男だわ。」

美男？　おいおい、相手は学友の親だぜ？　いくら低く見積もっても35じゃないか。

おやじ趣味か？　ご主人は？

「違うの。あんたも見たら分ると思うわ。ロテシアの男版なの。」

「それはさぞかし美男だろうな。」

「飴、いつも持って歩いていてね、挨拶すると一つ貰えるの。それが凄くおいしいわ。」

ルイズは何かを思い出したようにくすくすと笑った。

こうしていると普通に可愛い女の子のにな。なぜこつもメイジとか貴族とか階級に厳しいんだろう。

「そうか。俺も食べたいな。今度話しかけて見ようか？」

「怖い事いわないで。相手は伯爵よ！　あんたなんか容易く話しかけたら死刑よ。」

「話しかけたくらいで死刑されてたまるかよ！　そんなはずがないだろ！」

これだ、すぐこうなってしまう。
むかむかするぞ。メイジがそんなに偉いのか？

「ああ、惜しいわ！ 忙しい人だから会える機会があまりないもの。」

「へえ。 ミス・ヴァリエールの呼び出しならいつも駆けつけるけどな？」

「うわ！ だれだ！ あんた。」

直ぐ隣から声が聞こえて来た。 驚いた俺は格好悪くも叫んでしまった。

でも、足音は勿論、人気も感じられなかったぞ？ どの殺し屋なんだ。

「メ、メルフォゼ伯爵！」

「え？ この男が？」

「おはよう。 ミス。 いい陽気だね。」

ゆっくり見ると――なるほど、美男だった。

すこし、優柔不断そうに見えるけど、それは逆に言うと優しそうに見えるってことだ。

銀髪の総髪、髭は綺麗に剃ってあって、瞳は緑の色だった。 何処からどう見てもロテシアの父だった。

ただ、30にしか見えないどころを除くと。

「おはようございます。 メルフォゼ伯爵。」

「えっと、おはよう？」

「あ、あんた！ そんななれなれしく！！」

「いいよ。 ミス。 それで、君は誰かな？ 少なくともこの学院で僕が知らない人がいたなんて吃驚だよ。」

なんだ、話しやすそうな人じゃないか。

ルイズは過敏だぞ。見ろよ、こんなふうにはフレンドリーじゃないか。

「私の使い魔の平民です。気にしなくてもいいです。」

「俺は、平賀才人。平民は名前じゃない。」

「ぶははは！ いきがいい少年だな。でも、その態度はよくないぞ。」

「しかたないじゃないか。貴族とかよく知らんし。」

そう言いながら持って遊んでいた鳥の骨を口にくわえて惚けたふりをした。

涼しい風が前髪をかすったのはその時だった。

そして、俺が啜えていた鳥の骨は見事に俺の口の直ぐ前で無くなっていた。

汗が出た。

ゆっくりとまたメルフォゼ伯爵のほうを見た。伯爵はニッコリ笑った。

「知らないなら、教えてあげよう。」

背筋が凍るような感じがした。生まれてきてこれほど怖かった事が有ったか？

多分ない、そしてこれからもない。確信した。

「は、伯爵！ こ、これは私の責任ですわ！ 賤の不足ですわ！」

「ああ、いいよ。ミス。」

前を塞ぐルイズをそっとのけながら近づいてきた彼は俺のすぐ前に立った。

そして、彼は俺のくちに残った鳥骨を取り出した。

顔が近かった。瞳に映っている俺の怯えた顔が見えるほどだった。

「貴族は、社会の安定のため、自惚れて自分の立場を忘れた平民を切れるんだ。」

「あ……う……。」

「心しろ。それがルールだ。いやなら、もっと強くなれ。」

彼の顔が離れると、体の全身から力が抜ける感じがした。

「申し訳ありません。後で私がきつくしつけておきますので。」

「いいって。本当、ミスは真面目だな。」

そう言いながら彼はマントの裾から飴玉を二つ取り出して一つはルイズの手に、もう一つは俺の手に入れてくれた。

「少年、悪く思うな。でも、ご主人を悲しませなくては身持ちに気を付ける。」

「はい！」

「よし。これから僕を見かけた時には『おはようございます、メルフォゼ伯爵』と挨拶するように。分ったかい？」

「はい、わかりました！」

そ、そうだな、

いくらメイジを認めないと言っても、友達の親に無礼を働くのは行き過ぎた行動だったな。

「じゃ、ぼくは娘の所にいくぞ。学業、頑張れよ。」

「はい。今日も一日、始祖ブリミルのご加護が有りますように。」

「すみませんでした！これから気をつけます！」

「うむ。」

メルフォゼ伯爵はそうやって去っていた。

「あんた。本当、これからは主意してね。寿命が縮むかと思ったわ。」

「ああ。これからはもう少し気を付けることにする。」

ルイズの言った通り、飴はすごくおいしかった。

ふと、飴と鞭って言葉が頭をよぎったのだが、飴玉が溶けてなくなる頃には綺麗さっぱり消えてしまった。

□

< >

□

< >

□

< >

□

私が教室に入ると生徒たちが一斉に振り向いたの。そして聞こえてくる声——くすくす笑い声。

ああ、そうね。後ろに使い魔がいたわ。それでみんな笑ったのね。

もう過ぎてしまった事だし心の整理も終わったと思っていた。でも、こんなふうに笑われて悲しくなるのはどうしようもないことだわ。それなのに、サイトは私の気持ちも知らないで他の人の使い魔を見て面白がっていたの。

ロテシア。今日はあなたが恋しいの。私はいま、ここで一人ぼっちみたい。

キュルケは相変わらず多くの男たちに囲まれていたわ。

キュルケはちょっと分りにくいところがあるの。私をからかったり突いてきたりするけど、決して私が本当に嫌がる行動はしないわ。だから私は彼女にどう対応すればいいのか未だに迷っているの。

それに比べ、ロテシアは分りやすいわ。こんな状況に彼女がいたら、まず私に走ってきて話しかけてくれるの。

そして楽しい事とか、不思議な事とかを話してくれるの。それで私が『楽しいね』というと、彼女は笑うの。彼女の笑い声は綺麗だわ。このいやな笑い声も消し去ってくれるはずよ。

でも、キュルケは違う。どんな状況でも助けてくれないの。私の反応を楽しんでいるようにも見えるの。だから凄く苦手な人だわ。もちろん代々積み重なれた感情もあるかも知れないの。

「あの目の玉のお化けはなに？」

「バグベアー」

視覚の共有に特化された使い魔よ。

体が軽いから高く飛べるし、そこから見える景色を主人に伝えられるわ。

幾らかの精神系の幻術を使うことが出来る種もあるって聞いたの。

「あのだこ人魚はなに？」

「スキュア」

水の属性の魔物だわ。

水の中でモノを探すならもってこいだわ。真珠を探し出せるように命令するメイジも多いと聞いたの。

でも、戦闘でも活躍できる節が有るし、ぬるぬるして生臭い所を

除くと人気があるわ。

なんで、こんなに詳しいかって？

それは、調べたからよ。使い魔の召喚でどんなモンスターが来ても対応できるように。

でも、出たのは平民だったわ。さすがにそれはモンスター図鑑になかったわよ。だから、その時の私の取り乱しは凄かったわね。

それほど、私は使い魔を楽しみにしていたわ。ロティも成功させたもの。五歳だったのに。

まあ、スクスクが彼女じゃないとまともに使役できない使い魔である事は確かだわ。そう考えれば使い魔が自分の属性を表すって言葉も真理よ。

なら、平民を引いた私は？ やはりゼロ？

「もう、うるちよろしないで。ここに座りなさい。」

「ああ。って。まだ床かよ。」

「自分で稼いで授業料払える？」

「やはり、日本人は床座生活だな。椅子なんて邪道さ。」

この使い魔は凄く陽気ね。でも、ちょっとくらい私の心も分ってくれたらって思うの。

本来、使い魔とご主人の間には見えない絆が出来るから、コントラクト・サーヴァントをした主従はお互いの過去とかを分るようになるって言われているわ。

理解するのよ。使い魔は主人を、主人は使い魔を。

だからこそ、一生を共に生きていけるの。

しかし、主人がこんなに憂鬱なのに、この陽気さ。
呆れたわ。何がそんなに面白いのよ。

「皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズ、こうやって春の新学期に、様々な使い魔たちを見るのがとても楽しみなのですよ」

授業はすぐ始まった。教師はミセス・シュヴルーズだわ。

今年の基礎魔法実習を担当しているの。土のトライアングルメイジで理論家のタイプらしいわ。

彼女の著作は私も読んでみた事があるのよ。特別な新理論が書いているわけじゃないけど、体系がしっかり組み込まれている——教科書タイプの本だったわ。

でも、同じ内容の話を繰り返し述べて記述するのは悪癖よ。本は高いのに、そんな事をされては紙がもったいないわ。

予想はしたけどやはり使い魔の話になるわね。こっそりと私の使い魔を見ると『へえ』とか口をあけてぼうつとしていたの。もう、恥ずかしくなるわ。

「おやおや。変わった使い魔を召喚したものですな。ミス・ヴァリエール」

無視してくれればよかったのに。なぜ私を指名するのよ！

そうやって教室中がまだ笑いでいっぱいになった。唇がぶるぶると震えてくるわ。もちろん怒りで。

「ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺歩いてた平民を

運れてくるなよ！」

「違うわ！ きちんと召喚したもの！ こいつが来ちゃっただけよ！」

「嘘つくな！ 『サモン・サーヴァント』ができなかったんだろう！」

それにしても、知ってるの？ 人の笑い声ですごくうるさいの。とくに自分一人が笑って無い状況では、やけにその笑い声がうるさく感じられて……。まさに暴力よ。

なにより、あのデブに悪口を言われるとすごくむかつくわ！

「ミセス・シュヴルーズ！ 侮辱されました！ かぜっぴきのマリコルヌがわたしを侮辱したわ！」

「かぜっぴきだと？ 俺は風上のマリコルヌだ！ 風邪なんか引いてないぞ！」

「あんたのガラガラ声は、まるで風邪も引いてるみたいなのよ！」

尊大な二つ名だわ！ あんたみたいなデブにはかぜっぴきで十分よ。

きつと心のどこかでは『おれが本気出すと、凄いだ』とか思っているはずよ。馬鹿みたい、お菓子食べる事にしか興味なくて勉強も出来ない馬鹿なのに！

知ってる？ 2年生の生徒の中で他の人から二つ名を貰ったのは三人しかないのよ。即ち、こいつらは全部自分勝手に名乗ってるだけだわ！

貴族としてのプライドもなんもなく、自分を持ち上げる事にだけに熱心だつてことよ！

「おやめなさい。お友達をゼロだのかぜっぴきだの呼んではいけま

せん。わかりましたか？」

「ミセス・シュヴルーズ。僕のかぜつぴきはただの中傷ですが、ルイズのゼロは事実です」

ゼロ。二つ名としては最悪だわ。本当に嫌い。

可能性も希望も全て放り投げて、ただ自分を慰める事でしか生に意味をなさない二つ名よ。

「では、授業を始めますよ」

□ □ □ □ □ □

「ルイズ」

「なによ。授業中よ」

あまり、身のない授業だけどきちんと受ける。それが生徒としての義務だわ。

でも、色々足りてない使い魔の世話をするのもまたメイジとしての義務。だから、質問は受ける事にしたわ。

「スクウェアとか、トライアングルとかって、どういうこと？」

「系統を足せる数のことよ。それでメイジのレベルが決まるの」

「はい？」

分らないでしょうね。これだけは仕方ないと思っているわ。

平民はこう言う教育を受けてないだろうし。魔法は学問だから、門外漢がすぐ理解してもこまるのよ。

「この世の五つの属性があるわ。その一つ、一つを^{エレメント}元素と呼ぶの。」
「ふむふむ。」

「その一つを用いて使う魔法を『ドット魔法』と呼ぶ。」
「そうか？」

「でも、氷はどうかしら。あれはただの水かしら？」

「え？違うのか？」

「はあ。でも出来の悪い学生のために崩した説明をするのもいい教師のしごとだわ。」

「水は確かに『冷』、『湿』の性質を持っているけど、これでは冷と言う性質が特定されにくいでしょ？だから、もう一つの『冷』の元素を使うの。何だと思う？」

「えっと。火…は論外だな。土？ これもしっくりこない。風かな？」

「そうだわ。風は『冷』、『乾』の性質をもっているから、この二つを重ねる事で湿と乾は相殺されてしまい、冷だけが強調されるようになるの。」

土は『温』、『湿』。そして火は『温』、『乾』。

だから、火を強化するために、しばしば土が用いられることがあるわ。『鍊金』で『火球』よね。

「それで、水に風を足すと氷になるのか？」

「そう、こんなふうに二つの元素を使う魔法は『ライン魔法』と呼ばれる。もちろん、一つ種類の元素を重ねる事もライン魔法って呼ばれるわ。それは各元素の強度を高めるの。」

「なら、それ以上もあるだろうな。」

適切な質問だわ。案外にそれほど馬鹿な使いまではないかもしれ

ないわ。

「理論的に一人の人が制御できる元素は四つよ。だから、それぞれ『トライアングル』と『スクウェア』ができるってこと。メイジの格はこれで決められるの。」

「ドットメイジとか？」

「意外だわ。理解が早いじゃない。もしかしたらその頭蓋骨のなかに脳みそが入っているかも知れないわ。」

「あたりまえだろ。」

これ位で図に乗っては駄目よ。魔法って言うのはもっと複雑で、分らないことだらけだもの。

「なるほど。つまり、あそこでくっちゃべってる先生メイジは『トライアングル』だから、強力なメイジというわけだね？」

「そのとおりよ」

「ルイズはいくつ足せるの？」

胸がちりつと痛む。無知とは残酷だわ。
私は黙ってしまったの。言えないわね。

「ミス・ヴァリエール」

「は、はい」

「授業中の私語は慎みなさい」

「すいません……」

教師に指摘されたわ！もう恥ずかしくて穴にでも隠れたいわ！

「おしゃべりをする暇があるのなら、あなたにやってもらいましょう。ここにある石ころを、望む金属に変えてごらんなさい」

「ご掲名だろ。行つてこいよ」

くっ……。知っていてこう言うのかしら。

もしそうなら相当愉快的性格しているわね。この教師も使い魔もでも、こうなつたら仕方ないわ。呼ばれたからには逃げ出したいもの。

多分成功はない。でも、初めから失敗するって決めつけることは死んでもいやなの！

「やります」

「ルイズ。やめて」

キュルケが横から蒼白な顔で言った。

そうでしょうね。『爆発』はガード不能だし。キュルケにはいつも爆発のあと怒られたわね。

「先生。ルイズを教えるのは初めてですよ？　ならやめさせて下さい。危険です。」

「やるわ！　キュルケ、邪魔しないで！」

「この！　意地っ張り！　巻き込まれる身にもなってみなさいよ！」
「だから！　最初からあきらめるのは死んでもいやなの！」

そう言いながらも、キュルケはいつでも机の下に身を隠せるよう準備しているの。本当にそういうところ機敏だわ。どうせ止めても聞かないはずだからあらかじめ用意するのね。

でも！　今回は成功よ！　成功させるのよ！
いまさら失敗なんて痛くもかゆくもないわ！　挑戦あるのみよ！

私は席から立って、ミセス・シュヴルーズに近づいたの。

目の前には三つの小石。私は静かに息をしたわ。
深呼吸をする。深く吸い込み、ゆっくり吐き出す。

大丈夫よ、ルイズ。頑張れ。あなたは出来る。

「ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を、強く心に思い浮かべるのです」

「はい……、イル・アース・デル……。」

お願い。成功して！

使い魔の前にはちよつとくらい格好付けてもいいでしょ？ お願い！

「錬金！」

それでも、爆発してしまうのはなぜかしら。

——ドカン！

爆発だったわ。

練習を重ねてくる内に、その命中力と破壊力まで増してきる爆発だったわ。

錬金をしようとした石ころは勿論、机まで消えたの。

そう——消えたのよ。塵さえ残らず消えてしまったわ。

そして、その余波は教室の全てのガラスを壊し、隣で監督していたミセス・シュヴルーズまでも飛ばしてしまったわ。私の後ろの席の一行もぶっ飛んでしまったの。

「もう！ ヴァリエールは退学にしてくれよ！」

「俺のラッキーがヘビに食われた！ ラッキーが！」

「はあ、こうなるって予想してはいたけど、心臓にわるいわ。ルイズ、勘弁してよ！」

こっそりと使い魔の方を見たわ。

机の下に座っていた為か全く無傷だったみたいよ。でもその顔は茫然としていたわ。

失望した？ そうかもね。私自身も少しはそうだから。

でも、もう日常茶飯事よ。挫けないわ。

ううん、私はくじけてはならないわ。私は誰かの希望だもの。

その夏の日から、私は自分自ら彼女の最後の希望になるって決めたから！

私は煤で真っ黒くなった顔を裾で拭いたわ。

そして、笑うの。憂鬱が吹き飛んでいくように。これも自分で決めたことよ。

「ちよつと失敗みたいね」

あはは！ そう、笑うのよ。

これ位でくじけないもん！ なんともないように笑うの！

ロテシア以外の人からの慰労なんていらさないわ。

私はルイズだから、誇り高き戦士だから。犀の角のようにただ独り歩むの。

「ちよつとじゃないだろ！ ゼロのルイズ！」

「いつだって成功の確率、ほとんどゼロじゃないかよ！」

ロテシア、これからあなたの治療の時は私も休んでいい？

□ □ □ □ □ □

憂鬱な気持ちの中、片づけが終わったのはほぼ昼休みの事だったの。

罰として魔法を使わず修理する事が禁じられたけど、どちらにせよ魔法が使えない私には無理な話だわ。

そして、自分もちょっと悪い事をしてしまった気もするもの。魔法を使う先にミセス・シュヴルーズに離れるように言って置くのだったわ。彼女、二時間も気絶していたらしいの。

私の気持ちが悪くない事は魔法に失敗したのも、クラスの生徒たちに笑われたのもないわ。

それはみんなこいつのせいよ。

「ゼロのルイズ。なるほどねえ。言いえて妙ですねえ。成功の可能性ゼロ。それでも貴族。素晴らしい」

なんで？ 使い魔は主人の味方になってくれるんじゃないの？

ロテシアがなくて、だれも慰めてくれなくて、それでも頑張ってる平気な顔して、それで、それで！

「鍊金！ あ！ ボカーン！ 鍊金！ あ！ ボカーン！ 失敗です！ ゼロだけに失敗であります！」

それなのに！ こいつが今どんな事をしているかわかる？
ふざけた真似をしながら私の周りをまわっているの。ボカーンっ

て両手を上げて、まるで二流の劇団の演技みたいに大袈裟な身ぶりをしているの。

信じられない。なんで使い魔にこんなことをされなければならないの？

「ルイズお嬢様。この使い魔、歌を作りました」

「歌ってごらんなさい。」

「ルイルルルイズはダメルルイズ。魔法ができない魔法使い。でも平気！ 女の子だもん……」

そうして、はらを抱えながら笑うの。

むかつくわ……。ひとを怒らせるのも才能と言ったら才能よね。

でも、私は疲れているの。疲弊しているの。だから無視よ、無視。

そのあと、昼食を頂くために食堂に行ったの。

席につくと、こいつは椅子を引いてくれたわ。でも、全然うれしくないの。

「はいお嬢様。料理に魔法をかけてはいけませんよ。爆発したら、大変ですからね」

轡くちわを買いましょう。ええ。それがいいわ。

いつそ口にはめた後、溶接しちやいましょう。それが精神健康にいいはずよ。

こいつは私をからかったあと、満足したようで、床に座り食べ物を前にしたわ。

「さてと、頂きますか。でも、食卓のうえのものと比較してしまうな……。」

こいつがスープを食べようとスプーンを取り上げた瞬間、私はその皿を奪ったわ。

「なにすんだよ！」

「へえ。『何すんだよ』なんだ。自分が何をされてるのか分らないんだ。」

「へ？」

私はよく耐えたわ。ええ、それはもう聖女のように耐えたわ。でも、ここでこいつを放置したら、驕の不足でなにをやらかすか知らないわ。

きつと、そうよ、なにかのトラブルを起こせるにきまっているわ。

「なら、考えてみなさい。飢えながらね？」

「いや。ごめん。いいすぎた。俺のエサを返して」

「駄目よ！ ぜえーったい！ ダメ！」

もう、許してあげないんだから！！！！

「ゼロって言った数だけ、ご飯抜きよ！ これ絶対！ 例外なし！」

人は何日を飢えれば死ぬのかな。多分一週は耐えられるはずよ。

よく知らないけど。

九話裏 トレイター（前）（後書き）

「ストックホルム症候群」

人質が犯人に共感して、同情的態度を表す事を指します。

「ルイズさんって実は優しい？」

この小説のルイズさんってきつい事は言うけど、ツンテレ属性はうすくなりました。

平民と貴族の役割と義務に関して凄く厳しい。でも人情が豊かで、つつい自分以外の人は甘えさせてしまいます。

「ロティの食事」

昨年の冬以後は食堂で食べています。あまり食べられないので、いつも果物ばかりですけど。

「深淵のジェローム」

『そよ風』は結婚してからの自称。

その前は『深淵のジェローム』と呼ばれていました。20年前、トリスティンの暗部で活動していた人は皆知っている事実。

特技は『ギアス』と『フェイス・チェンジ』^{制約}_{変顔} 当然の如く水のスクウェア。

ただし、ルイズが分るはずありません。

「ジェロームの好感度」

ルイズ：格好いいおじさん。

キュルケ：ロティのお父さんじゃなかったら……。危ない雰囲気がある。たまらない。

タバサ：すごく怖い。でも、いい人。

ロテシア：馬鹿な父。親ばか。冴えない人。でもお父さん好き。

「切捨御免」

社会の秩序を守るためにはこの様な特権が有るかもしれないので、入れてみました。

とくにこの国々は平民に人格を与えないようで、もっと酷いかもしれません。

「魔法理論」

オリジナル全開です。でも、大体こんな感じじゃないかと思って
います。

四元素説が基本なら、こんな感じになるはず。

「犀の角のようにただ独り歩む」

好きな文句。孤独の中でも進むルイズさんに似合う文句だと思います。

九話裏 トレイター（後）

「しまった、からかうと可愛い顔するからつい」

ひもじい思いをしながら、俺は猛烈に後悔していた。やはり教室でやめておくべきだった。

魔法に失敗した後の彼女は笑っていた。

でも、あれが本当に笑っているとは思えなかった。こいつ多分強がっている。そんな感じがした。

だから、黙々と机を運んでいるのが可哀そうでちょっと気晴らしでもさせようかと思ったのが事件の発端だった。

少しからかえば殴るだろう？ なら、すつきりするだろう？ こんな短絡的な思考だった。

でも、案外にルイズは俺を殴ってこなかった。いつも強気で一言も負けなかったこいつが、今では『そうね』とか『歌ってみなさい』とか言うからな。ついつい図に乗ってしまったんだ。

結局、気晴らしさせようとしたのが、逆に落ち込ませてしまったのか俺は。

「だって、直接に『元気出せ』とか言うの、恥ずかしいじゃないか」

とにかく、今は食事の事を解決しよう。

ざっと考えて十回以上はゼロって呼んだぞ？ 十食を抜いたら俺、死んじゃうぞ？

「はあ、腹が減った……。くそ……」

「どうなさいました？」

その声に気付き、振り向くと大きな銀のトレイを持っている素朴な感じの少女がいた。彼女は心配そうに俺を見つめている。

黒髪だった。顔なりもどこことなく東洋人みたいな感じだった。

一日も経ってないのにノスタルジアの切なさが湧きあがる。俺ってこんなに感傷的なやつだったのか？

「いや、なんでもないから。気にしないでいいんだ」

「そういえば、もしかいいいてミス・ヴァリエールの使い魔になったって言う人ですか？」

彼女は俺のことを知っていたようだった。

いや、これは違うな。単に俺の左手の使い魔のルーンに気付いただけか。

「知ってるの？」

「ええ、なにせ学院創立の以来、初めての出来事だって噂になつてますわ」

そう言いながら彼女はくすつと笑った。手をそつと口に当てる仕草がかわいらしかった。

それにしてもこのメイド服は凄くいいな。

シックな感じを出しながらもしっかり可愛く見えるように出来ている。靴のすぐ上まで来るスカートの裾は風に揺れるたび彼女の綺麗な足筋を仄めかした。

「君もメイジか？」

「違いますよ？ あなたと同じく平民です。ここではメイドとして働いているだけです」

「そうか……。おれは平賀才人だ。よろしく」

「変わった名前ですね。私はシエスタっていいいます」

——ぐう

うわ！ なんだよ、この空気読めない音は。

恥ずかしいじゃないか！ せつかく人が爽やかな初対面を演出しているのに。

恥ずかしくなってこっそりと彼女の表情を窺った。面白かったよ。うだ。くすくす笑っている。

「腹がすいているみたいですネ？」

「ああ……。恥ずかしいながら、主人からご飯抜きを刑を受けてしまったんだ。それも十食以上も」

「ミス・ヴァリエールが？」

シエスタは何かを考えているみたいだった。そして、俺にうれしい提案をしてくれた。

「なら、こちらにいらしてください。なにか食べそうなものをもらってきますので」

「おお！ 本当かよ！」

「はい。（あの人は自分で言った事を曲げられない人だし……。さすがに十食はだめですよ。）」

俺は彼女の後について厨房に行った。食堂のうらにあって、貴族たちの入口の正反対だった。

「ついさっき、昼食が終わったと言っのに、多くのコックとメイドたちが忙しく夕食の準備をしていた。」

「貴族の方々にお出しする料理のあまりもので作りました。よかつたら食べて下さい」

「いいのか？」

「ええ。これくらいは出来ます。賄い料理ですし」

「うつつ！ そんな優しい眼差しで見つめないでくれ！

これは俺の不始末だったんだ！ ルイズを怒らせた俺が悪いんだ。」

「ありがとう……」

「ど、どうしたんですか？」

「い、いや。なんでもない。なんでもないんだ。これは心の汗なんだ」

「はあ……？」

□ □ □ □ □ □

『出来る事をしよう！ なんでも言ってくれ！』

『なら、デザートを運ぶのを手伝ってくださいな』

『おう！ 任せとけ！ ただ飯食ったとか言われたくないからな！』

『いいって言ったのに。サイトさんたら』

成り行きだが、俺はシエスタの手伝いをする事になった。

でも、トレイに小さな皿を一杯載せて運ぶのは俺の想像以上に難しい作業だった。

トレイを水平に維持出来なければ小さい皿たちが自分勝手に動い

てしまうんだ。

それでも、シエスタは淀みのない足付きで庭を闊歩しているんだ。左手でトレイを支えて、右手でデザートのカークを一つずつ配る。メイドってすごいな。感心してしまう。

でもすこし心境複雑だった。

シエスタほどの可愛く器用な子が、ただ平民の出身だと言う理由だけで一日中働いているんだ。

それに比べてこの貴族たちはただ貴族で生まれただけで優雅な生活を享有しているんだ。

「不公平だな」

「何がですか？」

「報われるべき人に正当な評価がなされてない事が不満だ」

「なんだから、難しそうな話ですね。サイトさん、もしかして凄く頭いいですか？」

俺たちはそんな他愛無い会話をしながらカークを配っていく。

おいしそうだけど、食べる訳にもいかないんだ。シエスタに迷惑かけてしまつかも知れないからだ。

「ギーシュ。このゝ おまえ、いま誰と付き合っているんだよ？」

「つきあう？ 僕にそのような特定の女性はいないのだ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲くのだからね」

金髪の軽薄そうな奴はギーシュって名前らしい。趣味悪いひらひらシャツを着ていた。

その口に薔薇をしゃぶる行為はなんの宗教儀式なんだ。やめてくれ、さつき食べた貴重なシチューが口から逃げ出そうとしているじ

やないか。（訳：正直に吐き気がするからやめなよ）

「あのキザは？」

「ミスタ・グラモンですね。有名です。恋に移り気な方ですよ」

「移り気って……、ものは言いようだな」

女たらしだな。一言で言うと。

でも、なんでああいうやつが好きなんだ、女は。

顔は、まあ……悪くないな。でも見た目から軟派に見えるし、セ
ンスも最悪みたいだけど？

「人は褒められたいのです。だれかに」

「え？」

「だから、誰かに褒めてもらうと、それがたとえ社交辞令だと分つ
ていても嬉しくなります。そしてその人にも好感を持てます」

「ああ。なんかわかる」

「誰でも同じです」

『口だけは凄く達者でいらっしやるって』と微笑むシエスタの顔
は俺より大人に見えた。

その時、彼のポケットからキラキラと輝く何かが地面に落ちた。
紫の色をした何らかの液体が揺れた。

「おい、ポケットから何が落ちたんだ」

俺はその壘を拾った。

壘はガラスで作られた小さいものだった。中身は香水のようだ。

「落ちたって言うているだろう？ 無視すんな」

「……」

「落し物だよ。えっと、そう。グラタン」

「グラモンだ！」

「なんだ、聞こえていたじゃないか。そう。グラモン。落し物だ」

俺は親切にもその壇をあいつに投げて返した。

人は自分に飛んでくるものを反射的に受けてしまっただ。そして彼もすっかりそれを受けてしまう。

「おお？ その香水は、もしや、モンモランシーの香水じゃないのか？」

「なんだ、ギーシュ。それならそう言えよ。モンモランシーと付き合っているだろう？」

「いや！ これは、違っただ。彼女の名誉のため言って置くが……」

その時だった。椅子が倒れる音がした。

庭の人たち全部がそっちを向く。そこには茶色のマントを纏った可愛い少女が立っていた。

「ギーシュさま……」

「ちが、これは違っぞー！」

「わたしとは、遊びだったんですね……」

そう言いながら茶色の子は本塔に向かい走り去ってしまった。

みんなが事態に追いつけなくて面喰っている時、また一人の女の子が立ちあがった。

彼女は金髪のくるくるした髪の毛の少女だった。彼女は席から離れてギーシュの所まで来た。なんか俺を殴る直前のルイズみたいで怖かった。

「疑ってはいたけど、本当に一年生に手を出していたのね」

「いや、モンモランシー、これは誤解なんだ。話せば誤解は解けるよ！」

でも、彼女は止まらなかった。彼の手から壘を奪い、それでそのままギーシュの頭を殴った。

軽快な音と共にガラスの壘は割れてしまい、香水が彼の頭を濡らした。

ひどく臭かった。いくらいい匂いでもアレくらいかけられてはただの悪臭だ。

「うそつき！」

あらしのような一時がすぎて、彼女もまた塔のほうに向かい去ってしまった。

え？ 何この修羅場。もしかして、これ俺の所為か？

やめろ、みんなにしてこっちみんな！ ただ拾って上げようとの親切心だったじゃないか。

そして、ばたばた香水を垂らしてるギーシュとやらが俺をにらんだ。

「痛いじゃないか」

「痛そうだな」

「どうしてくれるんだ、これ」

「どうするんだ、それ」

いや、本当に怖いからその垂れている紫色の香水と赤い血を拭いでくれよ！

「ああ、失礼。見つとも無い姿を見せてしまったな」

「そうだよ。臭いし今日はみんなのため部屋に戻れよ」
「しかしその前にやる事が有ってね」

そう言いながらギーシュは俺を指差した。

「君が軽率に、香水の壺なんかを拾い上げたおかげで、二人のレディの名誉が傷ついた。どうしてくれるんだね？」

「いや、彼女たちを傷つけたのはどう考えても君の失策だろう？
二股をかけるとしてもうまくやれよ、君」

「そうだそうだ！おまえが悪いぞ、ギーシュ」

さすがにギーシュの肩を持つ人はなかった。でも、彼はその事実にもっとむかついて来たようだった。

「みんな！ 違うんだよ！ 元々平民が貴族の事に一々干渉してはならんのだ！」

「干渉してない！ 親切心だったんだ！」

「それでも、事件はこじれた。違うか？」

「それは横暴だっていうんだよ！ キザ野郎！」

あ……。またやつちゃった。

朝、メルフォゼ伯爵に主意されたばかりなのに。

「みんな！ みろよ。この生意気な態度。こいつがわざとあんな事をした可能性もあるんだぞ！」

ギーシュの野郎はもうのりのりだった。

雄弁家でもなったように大きい身ぶりを披露しながら叫んでいた。でも、こんなどうしようもない奴の言葉に多くの人が同意し始めた。

「そ、そうかもしれない。ギーシュの言葉にも一理があるぞ」

「言われてみればそうだな。貴族にあんな態度はよくないな」

「公衆のまえで貴族の面子を割るなんて。いきすぎよ」

なんだ。この雰囲気。

本当に俺が悪い事になるのか？　なんでこうなる。

ただ俺は壘を拾ってあげただけで、悪いのはあいつのはずだろう！

その時、隣からシエスタが前に出た。恭しい態度で、頭を半分下げたままだった。

「申し訳ございません。楽しい食後の休憩を乱してしまった事を謝罪します」

何…、だと？

なぜ君があのかザ野郎に謝るんだ。

「なにせ、この人は初めての仕事でこの礼法をよく知りませんでした」

「おお、シエスタ嬢じゃないか。君がそう言うならここは僕も大目に見てやるぞ」

「寛大なる処置に感謝します」

もうすっかり俺が悪者じゃないか。

そして、シエスタ。なぜあんな奴らに頭を下げているんだ。なぜ謝るんだ！

「シエスタ！」

「ここでは、最善策です。私たちは実利を、貴族の方には面子を」

シエスタの囁きはとっても静かで、動揺なんてまったくなかった。ギーシュの野郎はすっかり勝った当然の頬笑みだった。もうご機嫌だった。

悔しかった。

なんでメイジなんか有って、俺は平民なんだ。

なんでシエスタみたいないい子があの遊んで暮らしている奴らに頭を下げなければならぬのか！

それが、ルールか！　それが！

「いい。君はあのゼロのルイズの使い魔だろ？　その主人にその使い魔ありだ。出来そこないのもうなずける」

そして、頭の中が真っ白に漂白される感じがした。

『焦らないで。火傷は患部を綺麗に維持できれば治る可能性が多いって言ったわ』

ルイズは、凄いやつなんだ。

友達のためならドレッシングの特訓もするし、あの膿を顔一つ顰めず触れるやつなんだ。

『これは私の責任ですわ！　躰の不足ですわ！』

俺のためにあの剣幕のメルフォゼ伯爵の前に出る奴なんだ。

『最初からあきらめる事は死んでもいやなの！』

出来ない事を分ったけど、それでも敢えて挑戦して失敗を甘んじ

て受け入れたんだ。諦めなかった！

「メイドよ。次からは気を付けてくれたまえ。君の行動のなかでも目に余るものがしばしばあるからな」

「申し訳ありません。次からは注意します」

「なに、ぼくはそんなに多くの事を望まないぞ。ただこの平民が謝ってくれば……」

だから、あのキザ野郎が差し伸べた手を払いのける。

「だまれ」

もう、止まる事はできない。

メイジがなんだ。貴族がなんだ！

自分の罪を平民になすりつけるのが貴族のやり方なのか！

「は？」

「サイトさん！ 駄目です！」

なら、抗ってやる。

「黙れて言っただ！ クズ野郎が！ 君こそ俺の主人に謝れ！」

胸の中が熱くなるような感覚を覚えながら、俺は拳を力強く握りしめるのだった。

□ □ □ □ □

しかし、世界は理不尽だ。

あのひよる長いキザ野郎なんて、拳でぶつけ合えば俺が負ける訳ないのに。

「僕はリンチが嫌いなんだよ。いまでも謝罪の言葉の一つでなかった事に出来るんだ」

「死んでもいやだ……」

「君はなんでそんなに頑張るんだ。もうやめろよ、こんな事」

あの青銅の人形に殴られて、また殴られて…。

もう左目が腫れたまぶたのせいで見えない。腕が変だ。折れたのか？ 感覚もない。

「サイト！」

悲鳴のような叫びだった。

ルイズだった。震えていた。決闘の事が分ってからすぐ駆けつけてくれて、俺を止めた。

でも、俺はそんな彼女を無視して闘っている。

いや、ただ殴られていただけか。

『いやなら、強くなるんだな』

メルフォゼ伯爵。俺は強くなりたいんだよ！

多分、強くなってから抗っても無駄なんだ！ 抗っているから強いんだ！

ルイズもそうだった。出来なくてもやった。そして平気に笑って見せた！

だから、俺も強くなりたいんだよ。なあ、伯爵。俺は間違っているのか？

「……へへへ、お前、やっと俺を名前で呼んだな」

「もうやめて？ あなたは凄く頑張ったよ。これで分ったでしょう？ メイジの力は絶対的なよ！」

「そうだな。魔法ってすごいな」

「立ち上がらないで。おねがい！」

ルイズは結局決闘の場に飛び込んできた。

俺を掴む華奢な腕。もったいないけど、感覚がなくて感じられない。

「どうして立つのよ！ ばか！」

強くなりたい。

メイジとか、ルールとかそんなことから自由になれるべく、誰より強い自分でありたい。

だから、彼女を退ける。立ち上がる。

生まれたばかりのシカのようにぶるぶる震える足。それでも気合を入れる。

「今でも、ぼくに謝ってさえくれれば、この茶番劇はそこで終わるだよ。ミス」

「俺は間違った事をしていない！」

いつの間にか、ギーシュの隣にロテシアがいた。

決闘を止めようとしているみたいだ。でも、止めないでくれ。俺は闘いたいんだ。

「平賀さん。ここは引き取り下さい。あなたのご主人さまが泣いて

いるのに、自分のプライドを優先するのですか？」

俺を平賀さんって綺麗な日本語発音で呼んでくれる唯一な女の子。
あの怖いメルフォゼ伯爵の娘で、いつかその位を襲う女の子。
優しい瞳は、俺を試すようにキラキラ輝いていた。

「……。すまないとは思っている」
「なら……」

彼女の顔に一瞬、安堵の頬笑みが広がる。
でも俺はその頬笑みをまた奪わなきゃならない。

「でも！ 下げたくない頭は、下げられねえ！ これからこの地で
生きていくため、俺は自分の存在を証明しなくちゃ駄目だ！」

周りから音が消えた。

これが自分の体の問題なのか、本当に人々が静まったのかも判断
できない酷い調子だった。

そしてら、彼女は深いため息をしつつ俺に近づいてきた。
俺の状態を確認しているみたいだった。ボクシングのコーチみた
い。

「平賀さん。手を出して」

俺は彼女の言うとおりに手を出す。
そしたら、彼女はマントの中から何かを取り出し、俺の手に握ら
せてくれた。

ナイフだった。

それほど曲がってはいないけど、グルカ族のククリ刀みたいな感じのナイフだった。刃渡りはちょうど俺の手の長さと同じだった。長く使われていたのが直ぐ分るほど丁寧に研がれていて、研ぎ澄まされていた刃は触るのが怖いほどだった。

「『あゆ』といいます。わたしはこれで枝を切ります」

この物騒なナイフが剪定刀かよ。

それにしても妙に重たいし、女の子に扱えるものか？

「そして、人も切れます」

はは…、さすが親子だな。言ってる事が一々物騒だ。

そのあと、彼女は自分のマントを脱いだ。白い肌に白い包帯。彼女の体が昼下がりの光を反射し目がくらくらした。

近くで見ると迫力あるな。この包帯は。さすがルイズは凄い奴だ。

彼女は脱いだマントを俺に付けてくれた。かすかに残っている彼女の体温が伝わってきて、痛みが安らいだ。

礼を言いたくて彼女の顔を見ると、彼女は全然笑っていないかった。むしろ伯爵の姿を思い出させるほど怖い表情だった。

「抗いたいですよね？ この世界のルールに」

試験か。

元々テストは苦手なんだ。勘弁してくれ。決められている答を手探りで探すのは得意じゃない。

でも、俺はルイズを泣かした。シエスタの善意を無駄にした。そしてロテシアにも心配をかけた。だから、さぼれるわけがない。ただ、答えるだけだ。

「そうだ。メイジとか貴族とか、認めねえ」

そして、これがおれの答だ。

何点になるかは分らないけど今の俺にとって精一杯のこたえだ。

メイジはいつたいどんなものだ。それは人間の重要さを決める尺度なのか？

ルイズは魔法ができなくてメイジとして不完全だ。でも、俺がみたどの貴族よりも気高く凛々しい。

それなら、魔法って言うのもそれほど大したものではない気がした。

俺は証明したかった。ルイズは凄い奴だって。魔法なんて大したことないって。

「でも、世界は脆くありません」

でも、試験官はこの答が気に入らない見たいだ。未だに厳しい視線で俺を睨んでいた。

落第か？　ならしかたない。

だが、彼女の言葉はそこで終わりじゃなかった。

「勝ちたいなら、もっと強くなければなりません」

なんだ、落第じゃないのか。

強くなればいいんだな。ならなってやるよ。

俺はもっと強くなって、理不尽な世界を乗り切りたい。

「健闘を。平賀さん」

握りしめたナイフの重さは、いつの間に消えていた。

□ < > □ < > □ < > □

私は彼と離れて自分の部屋にいたの。

授業の失敗と、使い魔とのいざこざが重なって、もう人の前にいたくなかったからよ。

外が騒がしくなったのを知らなかったのはそのためよ。

私がそれを知った時にはなにもかも遅かったわ。

私の過ちな。朝、伯爵からきつく指摘されたし、トラブルを起こすとは思って無かったから。

「ギーシュ！ 生意気な平民に痛い目を見せてやれ！」

「あら、野蛮だわ。平民との決闘は品がないのではなくて？」

「もう、勝負はきまつたぞ！ ギーシュ！ 遊んでないでとどめをさせよ！」

私は急いで広場に出たわ。広場の人の集りは下町の市場を連想させたわ。

その人集りを必死に潜りぬけて、私の使い魔にたどり着いたの。

「サイト！」

ボロボロ。まるで高い所から落とされたからくり人形みたい。
もう地面に立っている事さえ不思議だったの。
よく見れば足の力はほぼ抜けていたわ。細かく震えている足、俯
いた顔、吐き出す荒い吐息。彼は闘う状態ではなかったの。

「……へへへ、お前、やっと俺を名前で呼んだな」
「ばか！ そんなのどうでもいいでしょ？ 何で勝手に決闘なんか
するのよ！」

私の顔を見つけ出したサイトは笑ったわ。
はじめて見た時から気になっていた綺麗な歯並びは血に濡れて赤
く染まっていたの。

鼻血？ いや、口の中も破れたみたいだわ。だって、発音が微妙
に湿っぽいもの。これって口から出る血の所為だわ。

そして、腫れて開けられない目。心が痛いわ。

気がついた時にはもう彼の腕を掴んでいたの。

「ねえ、やめてよ。メイジには勝てないの。恥ずかしい事じゃな
いわ。誰もその事であんたを攻めないのよ」

「そうか？ へへ、ご主人は攻めないのか？」

「私が攻める訳ないじゃない！ もし、誰かが攻めるとしても私が
庇ってあげるから！」

嫌だったけど。ううん、未だに人間の使い魔なんて認めたくない
けど。

でも、その血だらけの顔で、私の目の前で傷つかないで。私の前
で倒れないでよ！

「わかった？ 私がギーシュに謝ってあげるわ！ サイトは何も気にしないでいいよ！」

「それだよ。それ。それが一番不満だ」

「なによ！ なにが不満なの！ メイジには勝てないの！ 勝てないのよ！」

そうよ。

魔法には勝てない。魔法がないと勝てない。

だから、私は必死に魔法にしがみつくの。弱い誰かが私の目の前で泣かないように。

私が、公爵家の娘である私が、強い魔法の力を手に入れてその弱い人々の前に立つのよ。

魔法の杖を片手に、敵から逃げないで闘うのよ！

「でも、ごめんルイズ。俺だっていやだ」

彼の力はほぼなかったのに。

私は結局、彼を止められなかったわ。

彼の土垢ついた手が私を退かすのを、そのまま受け入れてしまったわ。

「最初からあきらめる事は……、俺だって！ 俺だって！ 死んでもいやだ！」

なによ。すこし格好いいじゃない。

□ □ □ □ □

「はああああっ！」

サイトの刃がまたひとつのゴーレムを切り裂いたの。

まるで、紙のように――ほば音も出さずに。サイトは猛獣みたいにゴーレムを破っていたわ。

「う……、うそ」

もう、何が何だか分らないの。

いきなりキュルケとロテシアが現れて、ロテシアは飄々した態度でギーシュとサイトを宥めて、サイトはそれでも聞かなくて……。

「こんなはずがない！　ぼくのゴーレムが、あんな小さな短刀に切り裂かれるなんて！」

そして、ロテシアは変な形のナイフをサイトに握らせて、マントも与えてしまって、自分は痛々しい体を人々に見せてしまって……。

「はっ――！　はあっ――！」

武器を持たせたロテシアを恨んで、それなのにロテシアは私を立ちあがらせて、ニッコリ笑って、『ヴァリエールさん。もう、心配しないで』とか言い残して去ってしまって……。

「おいおい！　ギーシュ！　何しているんだ！　平民に負けちゃうぞ！」

「変だ！　なんかこいつ変だぞ！」

今では、ギーシュがサイトから身を守るために必死になっているの。

サイトはモンスターみたいに破壊的で、エルフのみたいに素早かったわ。

ギーシュが顔を汗だらけにしながら懸命に作り出すゴーレムの波を、彼はいとも簡単に捻じ曲げてしまうの。

「こ、これはどうだ！　ワルキューレ！　列を組め！」

ギーシュは四個のゴーレムで隊形を組んだわ。

あのように密集隊形をなしたゴーレムは簡単に破られない。これは授業でも習った事だわ。その時はメイジを狙えと。

でも、サイトは違ったわ。

真正面から挑み、その鉈に似たナイフを水平に振り、ゴーレムの胴体を切ってしまったの。一つのゴーレムの胴体が真つ二つになったけど、当然、一切りでゴーレム二つを両断出来る訳がないの。サイトのナイフは二つ目のゴーレムの胴体の真中くらいで止まったの。

「よし！　ワルキューレ！　そのナイフををしっかり掴め！」

その命令を受けたゴーレムがそのナイフをつかまったわ。ギーシュの顔にも明るい光がさしたようだったわ。

でも、何もかも、無駄だったわ。

なぜなら、サイトはそれをねじ上げてしまったもの。その掴んだ手首さえ力で引き裂きながら。

「はあっ——！！！」

当然ゴーレムは頭が半分になって倒れたわ。そしてゴーレムが地

面についた時にはもう、残りのゴーレムも体の一部を失っていたわ。もう、一目瞭然だったの。ゴーレムは残ってないし、ギーシュはその無慈悲な暴力の前ですっかり怯えてしまったわ。

でも何の為か、サイトはギーシュに飛びかかってこなかったわ。

「グラモン。次のゴーレムとやらを出せ」

「も、もう出来ないんだ。今でもぼくの頭は爆発寸前なんだ！」

「出来ないのか？　なら、おまえは俺より弱いな」

俯いているサイトは低い姿勢のまま、荒い息をしていたわ。上下する背中では彼の披露を語っているの。

それくらい運動量だったわ。気絶してもおかしくなかった傷のまま、全力で走り、金属を切り裂いたから。

でも、その荒らしい気迫は依然としていた。むしろ俯いてる体が餌を獲得するために身をひそめる豹の姿に見えるほどだったの。

「なら、俺がルールだな。だろう？」

「う、うん！　君の勝ちだ！　認めよう！」

サイトはゆっくり姿勢を高くしたの。しっかり地面に立って顔を上げた彼は輝くように素敵にみえたわ。

そしてゆっくりそのナイフをグラモンに向かい構えたの。力なく垂れている右腕としっかりナイフを掴み水平で構える左腕。それが彼だったわ。

「あやまれ」

「謝る？　ああ！　そうか！　君にケチをつけてすまなかった！」

ギーシュは救いの希望を掴んだように、無我夢中で謝ったの。

腐っても、貴族の一員が平民に謝るのは凄い事よ。だから、それだけでも彼が本当に参っている事を分るの。
でも、サイトは構えを解かなかったわ。

なんでよ。もういいでしょう？

あんたは凄いのよ！ 魔法を使わず魔法に勝ったの！

「ちがう」

「い、いくらでもあやまるさ！ だから、もう勘弁してくれ！」

「対象が違うつて言っているんだ」

「対象？」

なんのこと？

「俺のご主人を出来損ないって呼んだ事を謝れって言っているんだ」

ああ……。

あはは、なんだ。そうだったの？

そうか。この馬鹿な使い魔、私のために戦ってくれたのね。
きちんと私の味方になってくれたんじゃない。偉いじゃない。

「だから、謝れ。俺はルイズを尊敬しているんだ。お前ごときに侮辱されてたまるか」

なんだか、この使い魔も全然はずれくじではなかったみたい。

□ □ □ □ □

「そのあと、倒れてしまった事を除くとね」

シエスタの助けもあって、サイトを私の部屋に運ぶのはそこまで難しくなかったわ。

部屋に戻ってからは直ぐ彼をベッドに寝かせて怪我の確認をしたの。

でも、怪我が見た目以上に酷くて苦労したわ。

右腕の骨折なんて、骨たちが自分の場所にいらなくてそれを合わせなくちゃ駄目だったのよ。

全く。主人の言葉を聞かないから罰が当たったのよ。

「……。まあ、でもご主人の名誉を守るため闘ったみたいだし、少しくらいは許してあげてもいいのよ？」

サイトは目を覚めなかったわ。

すぐ水のメイジが到着したから彼の様態を見せたけど、『しつかり添え木が当てられているし、骨折の件は心配なさらなくてもよろしいかと存じます』と言ったの。『後はゆっくり休むだけでよろしいかと』と言い残し、水のメイジは帰ったの。

細かい傷を治すために水の秘薬が必要みたいけど、今では学院の中に在庫もないし、それほど急を要するものでもないので明日する事になったわ。

「それよりどうしよう……」

私が悩んでいる事は他でもない餌の事なの。

これほどの傷よ。栄養たっぷりの食事を与えたいの。でも、困っ

たわ。

『ゼロって言った数だけ、ご飯抜きよ！　これ絶対！　例外なし！』

あう……、絶対とか、例外なしとか言わなければよかった。

この傷でご飯も食べなかったら体に悪いの。よくは知らないけど……。きっとそうだわ。

私も幼い頃、風邪で寝込んだ時には鶏肉のスープを食べたもの。食欲はなくても、それを食べるとお腹が温かくなって、すぐ気持ち良くなるの。

「そう！　薬よ！　食事に勝る薬なしって言うじゃない」

そうだわ！　これなら私は言う事を守れるし、サイトはひもじい思いをしなくて済むわ！

さすが私だわ！　これ程の名案を考え出すなんて。

……。はあ。

やめましょう。実は、そんな気持ちじゃないの。

「召喚。使い魔。魔法……」

そして、メイジ。

「複雑よ。ええ、複雑なもの」

犬とか猫ならよかった。

私が可愛がつてあげる自身もあるわ。餌もよいもので用意して、夜は抱きしめてベッドで同じ夢を見るの。

私はきちんとしつけるし、望みは何もかも叶えてあげるもの。

私は最初から人間の使い魔が猫や犬より劣るとは思って無いの。
ただ、人間を飼うなんて、私の手に余るの。

少し考えてもそう。

彼も家族が有るはずだわ。そして、私はそれをサイトに与えられない。

彼にも夢が有るはずだわ。そして、私はサイトと同じ夢を見れない。

「私も彼を家に返したいのよ。でも出来ないの」

いつの間にか、部屋にはサイトの寝息の音だけが満たされていたの。

私はついサイトの顔をじっと見てしまうわ。

憎まれ口を叩く時には気付かなかったけど、彼の顔は綺麗だったわ。

綺麗って言っても女の人みたいって事じゃないのよ。肌の事だわ。

健康的、それでいて世慣れしていない顔だと気がついたのよ。焼けてもいないし、肌にしみがないもの。

これみて考えられる事は一つ、彼が働く必要のない身分だと言うことだわ。

メイジではなくてもそれなりの生活をしてきたはずよ。

でも、私はその生活を奪ったのね。

そして、ここのルールに従い平民としての生活を強要しているんだわ。

それを分つていても、私は彼を貴族にすることも出来ないし、彼だけを特別に扱う事も出来ない。

私は、全ての人に公平じゃなくては駄目。ヴァリエールだから。ならば、私がこの使い魔のために出来る事は何もないのかしら？

「ロテシアに相談してみよう。今日はこれでおしまい！」

悩んでも仕方ないんだしね。

□ < > □ < > □ < > □

「カトリヌさま。お嬢様からの書信が届きました」
「ええ、こっちに頂戴」

書庫で一人、研究に没頭していた時、家のメイド長メルルは銀のトレイに手紙を乗せて入ってきた。

幼いころから傍に置いて、一緒に過ごした彼女ももう三十路の寸前。

今更、時の流れは残酷で早いものだと思う。

「見せてくれる？」
「はい」

トレイに乗せている四角い手紙を開けて見る。紙が凄く上質なもので少し驚く。

「ヴェラムね。首都のギルドの腕前はさすがだわ」

「……。僭越ながらわたくしの意見を申し上げますと、お嬢様がまたやらかしたんじゃないでしょうか」

「多分。いえ、おおかたそうね」

あの子はいつもそう。ジェロームの関心を引くためにわざと問題を起こす節がある。

これもジェロームの名義で手に入れた高級品みたい。

まあ、それはともかく。内容を読む。

「カトリーヌさまの考えが当たったようです」

「そうであって欲しくなかったのに……」

虚無。

私が半生を費やして研究してきた魔法の系統。

始祖ブリミル・ヴァルトリだけが使う幻想の魔法。

今では、存在自体が否定されている系統。

でも、私は確信している。

現代の不完全な魔法系統だけでは世界を表現できないと。だから、必ず虚無はあると。

「ジョゼフ1世の事を偶然知ったから、もしかしてと思ったけど……」

「いまでも、お嬢様を城に呼びもどしたらどうでしょうか。わたくしはお嬢様の身が心配で夜に眠れません」

「……。それは旦那と仲が良すぎるからだと思うわ。そして、庭でやらないで」

虚無魔法。それがどんなものか記憶していれ人は残ってない。 6

000年はそれほど長い年月だった。

私も伝説と口伝を集めて微かな輪郭を掴んだだけ。

攻撃魔法としての虚無の共通記録はこれ。

まず、その威力が強い。

湖を乾かしたとか、山をぶっ飛ばしたとかは除くとしても、全ての口伝は虚無の攻撃魔法が対人用じゃないと記述している。

そして、塞げない。

普通の系統は反対の属性の魔法を用いて塞げられるけど、この虚無は塞ぐ事が出来ないみたい。

最後に、多く使えない。

いつも、始祖は戦闘の最後に出て、一度の魔法を使った。逆に言えば多く使えない可能性が大きい。

そしてそのほかでも共通陳述を総合してみれば幾らかの魔法の姿の輪郭が浮かぶ。

でも、その一つがどうしてもロティに危険だった。

「^{解除}デイスペル」

「本当にありますか？ そんな出鱈目な魔法が」

「これはほぼ確実よ。聖典にも四か所にこの魔法を使ったと予想される節があるから。ブリミルがいくら天才でも、瞬間的に人にかけられた呪いの全てを解析できたとは考え難いの」

ロティは、私の可愛い娘はもう純粋な人間じゃない。その殆どがスキルニルで構成されている。

だから、デイスペルを受けた時には……。

「でも、見た事のない呪文の対策を練るのは不可能だわ……」

「カトリーヌさま。いっそヴァリエールさまにこの事を話すのは？」

「自分が虚無である事も知らないのに？ 急に『あなたは虚無です。私は純粋な人間じゃありません』と言ってもロティが馬鹿にされるだけよ」

娘の願いをかなえる事がこれほど難しいとはね。

「とにかく研究を続けて見るわ。次の虚無曜日からはフィールド調査に出るから旅の用意をして置きなさい」

「かしこまりました」

九話裏 トレイター（後）（後書き）

「学院内のルイズの評価（メイド通信）」

肯定的：凛々しい。聡明。なんでも早く習う。自分の言動に責任を取る。曲げない。

否定的：意地っ張り。堅物。貴族と平民の区別が厳しい。プライド高い。人生も手先も不器用。

「香水」

モンモランシーは多分、自分の男に表示をして置きたかったのでしょうね。

なぜみんな二人の關係に気付かなかったのか疑問です。柔軟剤の匂いだけでもその男の飼い主が誰か分るのに……。

「ククリ」

有名なナイフといえばククリを除けない。ククリの鉋に似た構造は生活にも有用です。

「なんで、ルイズ接骨出来るの？」

ルイズさんは有能過ぎて、ドレッシングと並列に記述されている添え木の当て方をマスターしてしまったのです。接骨は彼女の凝り性のせいです。

「ロテシアにとって最悪な魔法『ディスペル』」

体にはいつも血が流れるからスキルニルは形を維持できます。でも、ディスペルを使ってしまうとそれが人形に戻るけど……。その時くっついていた肉が裂けて即死する可能性が大きいです。

「没ネタ」

名前の件ですけど。

キユルケさんは『鳥』って意味ですよ。それなり格好いいじゃないませんか。

でもルイズさんは『有名な戦士』という意味です。女の子にはすこし変。

いつか使ってみたいけど、ルイズさんがね〜

「筆者」

更新が遅くなりました。すみません。

次の話は明るい感じのものを用意したいと思っています。

小話二 季夏の仲良し三人娘（前書き）

話し終わりました。

遅くなりそうでこれで勘弁して下さい。

小話二 季夏の仲良し三人娘

『仲良し三人娘 〵趣味編〵 その1』

（暖かい昼下がり。タバサとロテシアはロテシアの部屋でいる。タバサは本を読んでいて、ロテシアは観葉植物の世話をしている）

キュル （ドアを開けて急に入ってくる）「ねえ！ これ見てよ！ ついに完成したわ！」

（キュルケが額縁を見せる。その中には完成されたジグソーパズル風景画。）

ロティ （感嘆しながら）「すごい！ こんなに複雑なのに……。」

キュル （胸を張りながら）「二カ月もかかったわ！ 6000ピースもするのよ、これ。」

タバサ 「一日に72ピースのペース。」

ロティ 「本当にまめですね。キュルケさん。」

□ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘 〵趣味編〵 その2』

（パズルをロテシアの部屋の壁に飾る。ロテシアはご機嫌。）

キュル （椅子に座りながら）「次はちょっと易いのにする予定よ。さすがに今回は疲れたわ。」

ロティ（キュルケにお茶を出しながら）「キュルケさん、ジグソーパズルが好きだったんですね。」

キュル「何よ、もう。どうせあたしには似合わないとか考えているでしょ？」

ロティ「まあ、キュルケさんは細々した作業は好きじゃないと思っただけです。」

タバサ「同じく。」

キュル「でもね？ 恋って云うのはジグソーパズルと似ているの。長い時間をかけて、手探りで一つ一つを試す所がもうそっくりだわ。」

タバサ「でも、キュルケは恋に長い時間かけない。」

キュル「ふん！ いままではあたしが本気になる相手になかっただけだわ。」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く趣味編　その3』

キュル「タバサはやはり読書かしら？」

タバサ「趣味。時間は十分つぶせる。それに有益。」

ロティ「何を主に読んでいますか？」

タバサ（ちよつと考える）「……。なんでも。」

キュル「なんでもって、それなら小説なんかも読むの？ あたしは最近『若き青年の悩み』を読んだわ。」

タバサ（頷く）「うん。読んだことある。」

ロティ「なら、私が最近読んでいる『美しい北海沿岸の庭』も読みましたか？」

タバサ（頷く）「うん。絵が綺麗。」

キュル（感心する）「本当になんでも読むのね。」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く趣味編　その4』

キュル「参考に今読んでいる本は何なの？」

タバサ「えっと……、『意中の相手に告白して粉碎！玉砕！大喝采！く無間地獄編』」

キュル「恋愛指南書！？」

ロティ（引きずった笑顔で）「す、すごいタイトルですね……。」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く趣味編　その5』

（今日のお茶会のお菓子は干したイチジク）

タバサ「また違う果物。でも、おいしい。」

キュル「これはイチジクでしょ？　これならあたしも食べた事が有るわ。」

ロティ「はい。イチジクです。これは干したものですけど、生で食べてもおいしいです。」

（鉢を持ってくるロテシア。実を摘み一つずつ配る。）

キュル 「水が多いのね。それに大きいし。（乾燥イチジクを手に取りながら）もとかからこの大きさだと思っていたわ。」

ロティ 「玉ねぎよりちよつと小さいでしょ？」

タバサ 「園芸つてすごく実用的。ロティの趣味に助かっている人は多いはず。」

（皿のイチジクがなくなると残念がるタバサ。ロテシア、タンスから乾燥イチジクを持ってくる。そして小さい亜麻袋に入れてタバサにあげる。）

キュル 「一番助かっているのはあたしただけだね。」

タバサ （顔が赤くなる）「乾燥したから非常食になる。……はず。」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘 趣味編』 その6』

キュル 「ロティ。最近、モンモランシーとよく一緒にいるね。」

ロティ 「はあ。花の調達を頼まれてしまつてですね。」

キュル 「そして、ギーシュといるところも見かけたわ。」

ロティ 「バラのうんちくを教えてほしいと言われて。」

キュル 「他にも厨房に行く事が多いみたいよ？」

ロティ 「香辛料ですね。マルトーさんが創作料理を作っているらしいです。」

タバサ （真剣に見つめながら）「他人の願いを何でも聞いてあげるのはロティの悪いところ。直すの。」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く特技編　その1』

ロティ 「キュルケさん、知っていますか？　最近、幽霊が出るつて。」

タバサ （びくっ）「ゆーれい？」

ロティ 「はい、幽霊ですよ。寮生が見たらしいですよ。」

（タバサ、椅子を持ち上げてキュルケの傍に置く。そして服を掴む。）

タバサ 「怖くない。どんと来い。」

キュル （かわいい〜）「」

ロティ 「ある日。ある女子生徒は真夜中に外出したらしいですよ。」

タバサ 「なぜ？」

キュル （タバサの頭をなでる）「タバサは気にしないでいい事よ。」

ロティ 「そして、フライを使って城壁の上を通過するとき！」

タバサ （びくびく）「そ、それで？」

ロティ 「遠くからハープの音が聞こえるのですよ！　城壁の上には誰もいないのに！」

タバサ （ひいっと息を飲み込む）「——！！！」

キュル （何となくオチが読めた）「ああ……。そう言う事？」

ロティ 「え？　キュルケさん知っていたんですか？」

キュル 「うん。あたし知っているわ。その幽霊の正体も。」

タバサ （いやいやするタバサ）「言わなくてもいい！　むしろ言

わないで！」

ロティ（食いつくようにキュルケに迫る）「言つて下さい！　な
んですか？」

キュル「あゝ、期待しているとこ悪いけど、そんなもんじゃない
わ。その幽霊、あたしだもの。」

タバサ・ロティ「！！！」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く特技編　その2』

（最近練習していないからハープの練習をしたくて真夜中に出た事を
話すキュルケ。見えなかったのは城壁の下にあつたかららしい。）

キュル「まさか、そんな騒ぎになつていたとは知らなかったわ。」

ロティ「いえいえ、わたしもつい昨日メイド通信で受信したばか
りの情報ですから。」

キュル「そう？　ならいいけど。」

タバサ「キュルケ。ハープ引ける？」

キュル「まあ、それなりにね。憂鬱な時の気晴らしには丁度いい
わよ。ハープは歌の伴奏にもなるから好きだわ。」

ロティ「楽器使える人つて格好いい　きつとうまずたゆまず努
力したんですね！」

キュル（ちよつと照れる）「そ、そう？　ならいつか聞かせてあ
げるわ。」

タバサ「凄く意外な特技。キュルケって実は地味な事が好きなの
？」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く特技編　その3』

ロティ 「特技…、ですね。タバサさんはなんかありますか？」

タバサ （ちよっと考えて）「ない。しいて言えば魔法。」

キュル 「なんだ。つまらないわ。」

タバサ （ふと気がついたように）「あ。私、賭け事に強い。」

キュケ・ロティ （椅子から立ち上がる）「えええっ!？」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く特技編　その4』

（倒れたテーブルを起こし、二人はまだ椅子に座る）

キュル 「賭け事って……。博打のこと？」

タバサ （頷く）「うん。サイコロとか。」

ロティ 「よりによって運が強く作用するサイコロですか。そっち

が意外ですよ、タバサさん……。」

キュル 「どれくらい？」

タバサ 「本当に勝ちたいとき、負けた事は無い。」

キュル （言葉を失う）「……。すごいわ。あなたが輝いて見える

わ。」

□ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘 ｾ 特技編 ｾ その5』

キュル 「あたしって普通だわ。しいて言えば賭け引きが効くトランプが好きよ。」

タバサ 「そう。」

キュル 「ロティはどう？」

（キュルケとタバサの視線がロテシアに集まる。ロテシアは頬をかきながら苦笑いする）

ロティ 「ある意味強いかな……。」

タバサ 「ある意味？」

ロティ 「はい。『絶対負ける』から。」

キュルケ・タバサ 「え？」

□ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘 ｾ 特技編 ｾ その6』

キュル 「ちょっと。どういう意味よ。『絶対負ける』って。」

ロティ 「言った通りですよ。見せてあげましょうか？（テーブルのスプーンを取り上げながら）これから賭けをします。私はこのスプーンを空に投げます。」

キュル 「それで？」

ロティ 「このスプーンが床に落ちて立つとキュルケさんの勝ち。」

これが倒れると私が勝ちです。」

キュル 「その理不尽な賭けは何よ。それほど勝ちたいの？」

ロティ 「とにかく投げます。せーのー。」

（スプーンが空に舞う。床に落ちるスプーン。丁度その辺りにある窪に挟まれてスプーンは立ってしまふ。三人、なにも言えなくなる。三分間沈黙。）

キュル 「……。あなた、器用だね。」

タバサ 「ロティは不思議でいっぱい。」

ロティ （顔を両手で包み隠しながら）「言わないでください……。」

「

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘 ｝特技編｝ その7』

（タバサがスプーンを回収する。そして仕掛けがないのか観察する。その間キュルケはしゅんと落ち込むロテシアを宥める。）

キュル 「いつもそうなの？」

ロティ 「大抵そうです。」

キュル 「『大抵』なら、『絶対』ないだよね？」

ロティ 「意図的に負けたい時には勝ちます。例えば、ルーレットでわたしが黒にコイン一つを賭けます。そしてキュルケさんが赤にコイン全てを賭けます。なら黒に玉が止まりますよ。」

キュル 「……。なんて使えない特技なの。」

ロティ 「結果的に私が大きく負けてしまいます……。」

□ □ □ □ □ □ □

『仲良し三人娘　く特技編　その8』

（面白い事を思い出したキュルケ。ロティの悪運とタバサの強運の内、どっちが強いを試験する。）

（キュルケがサイコロを投げて二人が奇数が偶数が当てる。ただし、お互いのコインを使う。そして同じレートをしては駄目。計算しても駄目。残りのコインを数えても駄目。お互い答を隠してキュルケだけみる。コインの代わり小石を使って一時間やった。）

キュル　「……。すごいわ。あたしは今、奇跡を見ているわ。」

（正確に元通りになったコインを見てキュルケ驚く。）

タバサ　「強い。私が勝てなかったことは初めて。」

ロティ　「タバサさんこそ強いです。私も負けなかったこと、初めてです。」

小説二 季夏の仲良し三人娘（後書き）

「若き青年の悩み」

すごく有名なあの小説。

自殺ネタが社会的にあまりよくない事を証明した大作。

「粉碎！玉砕！大喝采！」

ま、最低でも一万回振られてから声をかけてくれよ…。フッフ

「無間地獄」

終りなき苦痛。それが無間地獄のモットー。

「イチジク」

意外とよく育つ植物。ここでのイチジクはトルコ原産の白イチジク。乾燥イチジクにはこの品種が多いですね。

「筆者」

前話でサイト君は最低点数を取りましたよね。これからはルイズさんが強かったり、ロテシアが強かったりします。

夏が過ぎるのが憂鬱です。幼い時は夏休みが終わるのが憂鬱だったけど、最近は下半期の仕事ラッシュが怖いから憂鬱です。

十話― 使い魔の一日（前書き）

サイト君が召喚されてからもう一週が過ぎました。
そんな彼の生活を書いてみます。

十話― 使い魔の一日

） ルイズ起床：七時半 ）

「ルイズ！ ルイズ！ いい加減に起きろよ！！」

「少しだけ、もう少しだけ……」

「ああ！ もう！ 朝食が食べられなくなっても知らないぞ！」

万事に対して厳しく凜々しいルイズだが、朝にだけは弱い。

低血圧な彼女はいくら起こしても起きてくれないし、起きたとしても相当の時間をぼうつとベッドに座っている。

今まではどうやって一人で起きられたのか不思議なくらいだ。

そう考えれば最初の日、毛布をはいてルイズを起こしたのはある意味正解だったのだ。

「ルイズ！ おい、ルイズ！」

「ほつといて……。」

一度は本当に放置してみた。

まあ、後は予想した通りだった。ルイズは一人で起きられなくて遅刻したし、俺はご飯抜きにされたし、おまけに失敗魔法も一発食らった。

ほつといてくれて言われてその通りにしたただけなのに。本当に理不尽だった。

でも、ルイズにしてみれば入学して初めての遅刻。

ショックを受けて落ち込んでしまったルイズを見ると、なぜか後ろめたくなってしまうんだ。

……女の子は卑怯だ。

あ、ちなみに寝ていたルイズを起こしてくれたのはロシアだった。

今日は辛うじて起こすことに成功したみたいだ。

もう俺はルイズを起こすコツと言うものを習得した。

そのコツとは、心を鬼にして——とにかくしつこく、休む暇を与えず起こし続けるのだ。

一応、起きてくれたルイズは渋々ベッドから降りて服を脱ぎ始めた。

「下着はテーブルにあるから一人で履け」

「使い魔のくせに主人に対して命令調？ まったく偉くなったわね。」

こいつはまず全裸になってから服を探すタイプだ。

だから初めから服を全て用意しておかないと全裸で服を要求する。

そこ、狂喜乱舞するな、鬱陶しい。

君たちも俺の立場になってみる。全然いい事では無いと気付くはずだ。

……ごめん、うそだった。かなりいい思いして貰っている。ルイズ、かわいいし。

とにかくだ。アレはまずいんだ。

健康な思春期男子にとってはかなり目の毒だ。まず俺が自身の理性を信用できない。

だから、最低下着だけは一人で履いてもらわないと駄目だ。

女の下着を見たこともなかった俺が下着姿の女の子になれるなんて、人生は何が起こるか分らないな。

ルイズが寝巻を脱ぎすてて下着を履き替える。

脱いだ服は絶対自分で整理しない。だから俺が洗濯籠に入れる。

特にポケットとかもないし大事なものが入っているか確認する必要もない。ひとまず洗濯しとけば問題ないのだ。

「ルイズ、こっち来いよ」

「ふうあゝ。分ったわ」

「腕、上げるよ」

「うん」

下着をはいたルイズにブラウスを着せる。

この時のルイズはおとなしい——って言うか、まだ寝ている——から気が楽だ。

目の前に女の子の胸がある事を除くとだけど。

「ボタンは自分ではめろ」

「やってちょうだい」

「心臓に悪いからいやだよ！」

「小心者……。まあ、勘弁してあげるわ。」

だって、このボタンは全部力メオだぞ？

公爵家の紋章が精緻に彫刻されているんだよ。壊れそうで俺には無理だ。

くそ！ これだからセレブって奴らは

「右」

「うん」

「反対側」

「うん」

スカートを着せる時、ルイズはベッドの天蓋を支えるポールを掴んで立っている。

そして足を上げると俺がスカートを着せるんだ。ついでに黒いストッキングも。

メイドたちの言葉によると、本来の着付け役はメイドの中でもかなり経験を積んだ人だけが出来る仕事だと言う。

だが、それは女子の服が複雑だからで、ブラウスとスカートだけの制服の着付けなんて妹の服を着せるのと同じらしい。とにかく楽な仕事だそうだ。

服を着ると、ルイズは鏡台の前に座る。髪を梳くためだ。
ルイズの髪はウェーヴが効いていて、軽く梳くだけで形を整えられる。

でも、絶対俺に任せない。下着まで俺に履かせようとしたルイズだが、髪だけは必ず自分で整える。

『なんでだ。女は『髪>素肌』なのか？』

『甘く見ないでよ。髪を整える事はこんな軽装の着付けより百倍は難しいことだわ。だから、あんたには無理よ』

『髪は女の命みたいなものですから。平賀さん、もしかして女の髪の毛に興味ありますか？ もしそうなら風呂場の下水口から集めてプレゼントします』

『君は俺を変態にしたいのか』

俺が見るには、ただ梳いているだけなのにな。

まあ、男の俺には理解できない世界つてのがあるらしい。

そう言えば学校のクラスメートの女子たちもよく髪の話をして
いた。

あまり変わってないのに『いい出来』だの『さいあく』だのうる
さかったものだ。

「眠いわ」

「きみが夜更かしするからだ」

ここの夜は長い。

多分、現代文明の恵みを受けた人ならみんなそう思うはずだ。

ここにはランプか、魔法の光しか照明がないから、日が沈むと外
を歩く人は誰ひとりいなくなる。みんなが自分の部屋に帰って眠る
んだ。

月明かりだけが夜を照らす風景を見たことあるかい？

すごいんだぜ？ 星が車のヘッドライト並みに輝いて見えるんだ。
もう降り注ぐとか、そんな陳腐な言葉でしか表現できない。とに
かく感動してしまうんだ。

「魔法の練習が長くなったわ。反省しているのよ」

「（成功もできないのによくやるな）これからは零時以前に寝て
もらうからな」

いずれにしろ、この人たちにとって日が暮れた八時以後は夜だ。
九時くらいになるともう深夜なんだ。

だからほぼ零時まで活動するルイズは少数派に当たる。ルイズの
平均的な就寝時間は俺の腕時計で一時くらいだ。その時には使用人
も寝るって言うのに。

もちろん時計はここにきてから正しい時刻に合わせたんだ。日が

一番高い正午を十二時にして合わせた。

こそも一日は二十四時間らしい。一日が経ったあとの十二時はまた正午だった。

でもこの時計は正確度があまり良くない。だから一日に一度はゼンマイを巻きなおして、そのとき時間も合わせ直すと聞く。

話を戻して、ルイズの夜の生活だったな。

なんだか響きが変になったけど、まあ、いいや。

一言で言つと魔法の練習をする。真つ暗な世界で、ルイズは一人で黙々と魔法の練習をするのだ。

派手に魔法を打ち込む練習と言うより、射撃の練習に似た練習だった。

城壁の前に石ころを置いて、ちよつと離れたところから——およそ五十メートル——その石に魔法を中てる練習みたいだ。

俺には暗くて石自体が見えないのにルイズはそれを中てている。

もちろん魔法は失敗するから石は蒸発してしまうが、とにかく命中率は7割を切っている。

もはや軍人のレベルだ。どこの特殊部隊の人だ、お前は。

『なんでこんな練習をするんだ？ これじゃ爆発の制御練習じゃないか』

『……。非常に不本意ながらそれで合っているわ』

『なぜ？』

『違うところに魔法を当てるとロテシアの仕事が増えるんだもの。庭の芝とか花壇とかが傷んだらロテシアが夜更かししても直すのよ。だから、まずは失敗してもよその所に被害が及ばないように命中力を鍛えているわ』

『お前の世界はロテシアを中心に回っているな』

迷惑と思うなら魔法の練習をやめれば済むことだろう？　よくわからない思考構造だった。

それ以外にも、静かに魔法を使う練習もしている。うるさくてクレームが入るからやり始めたんだって。

『おいおい。それほどできるならなぜ教室は吹き飛ばしたんだ』
『それは……、私も失敗する時つてあるでしょう？（あんたが見ているから力を入れ過ぎたのよ……、恥ずかしくて言えないわ）』

まあ、毎日こんな風に夜遅くまで練習をする。もうちょっと早く寝ればいいのに。

「あんたの腕時計は正確だもんね。いいよ。時間管理は任せるわ」
「ああ、零時に寝て七時に起きれば睡眠は十分なはずだ」

まったく。

家では母さんに散々言われたことを、今では俺が他人に言っているな。

「行くわよ。朝食を取らなくちゃね」
「分かった」

） 朝食：八時 ）

「いつ見ても足りない」
「つべこべ言わないの。なんなら給料を取り下げて飯をよくする？」
「いや。それはない」

給料。それはルイズからの提案だった。

いくら使い魔だとしても無報酬で人を使うのは間違っているらしい。

拉致はいいのかよって叫びたかったけど、よく考えればこの時代の平民の居住権は貴族にあったような気がする。だから、俺がいくら叫んでもこいつらには理解できないんだ。

カルチャーショックとはまた違う。

そう、パラダイムシフトだ。『神が死んだ』ように『天賦人権はない』。

くそ、俺を民主国家に戻せよ

『いくらもらえるんだ？』

『一週に1エキュー。メイド見習いの給料よ。』

『価値がよくわからないけど……』

『パンが120斤よ。多いでしょう？』

えっと、食パンが一斤百円だとしたら……、一万二千円だな。

それが八日となると一日1500円。一日八時間働くとしたら……、時給200円未満。

『メイドってそんな薄給なのか……』

『あんたにはこれも多いのよ。市場の呼売りの子供たちは一月に1エキュー未満で生活しているみたいだから』

『最低賃金制度はいつできるんだ』

『さあ？ 3世紀は後のことじゃないかしら』

長いな3世紀。俺の眼で見ることは叶わない。

ちなみにシエスタはメイドの中でも古参だそうだ。だから一週に

3 エキューをもらっているらしい。

俺の三倍かよ！とか叫びたかったけど、仕事をしているシエスタを見るとすごく納得がいく。だって俺の三倍は効率よく働いているんだ。

「買いたいものとかあるの？」

「それは、まあ、秘密だ」

「ふうん、全部女に貢いでなくなったとかはいやだわ。大切に使いなさい。」

金で何ができるかはよく知らない。でも武器くらいは欲しかった。メイジたちの理不尽な戦闘力はもう身にしてみるほど分かっている。それに打ち勝ったのは偶然だ。

もしかしたらロテシアのナイフが凄いものであっただけかもしれない。

だからこそ、どんな方法でもいいからメイジと同等になれる俺の力が欲しかった。

もちろん、こんな端金では高が知れている。それでも何もしないよりはましだ。

なにより、俺に気を使ってくれたシエスタとか、ロテシアとか、ルイズとかにあげるプレゼントは自分の稼いだ金で買いたい。

男としてヒモ呼ばわりだけはされたくないんだ。

「鶏肉くれ」

「いやよ。そんな行儀悪いこと」

「けち」

それに、お腹が減ったら厨房に行けばいいだけさ。

マルトーのおやじは『俺を太らせて何をする気だ！』とか言い
いほど食べ物をたくさんくれる。もちろん食べきれない。
そしてロテシアに遇えば果物をもらえる。メルフォゼ伯爵のア
メみたいなものだ。さすが親子だ。

「全部食べると太るぞ？」

「あまれば捨てるからいいの」

こんな会話をしながら、俺はパンを食べる。

俺のパンは食感があらい。カサカサ？ そんな感じだ。

ライ麦が殆どで色も黒に近い。膨らみもなく渋い感じだ。

でもそれなりうまい。むしろこれになれてから、ただの白いパン
は味気がなくて不味いんだ。

） 登校：九時 ）

今日みたいに朝食を早く済ませたなら部屋に戻ってお茶を飲む
らしいの余裕はできる。

まあ、ルイズは紅茶があまり好きじゃないから飲まないけど。

俺としては助かる。紅茶を運ばなくて済むから。

「準備して」

「もう出来た。インクの残りも確認したし、紙も痛んでない。」

とにかく登校は九時だ。

一度部屋に戻った俺たちは文房具が入っている小さな箱と本を持
って教室に向かう。

教室は授業によって違うけど、今日は『火の塔』だ。

アレは学院の反対側にあるから早めに部屋から出なきゃならない。

もちろん文房具が入った箱と本は俺が持つ。

そう重くもないし、女の子に持たせるよりは俺が持つ方が自然だ。

「落とさないでよ。インクの壺が割れたら大変だわ。」

「分かっているって。」

箱と言っても筆箱くらいの大きさだ。

高級感が溢れる光沢と繊細な浮彫で飾られた筆箱だ。

大きさはA4の半分くらいで、中身もインクと羽ペン二つと巻かれている紙四枚が全部だ。

それに比べて、本はちよつと厚くて重い。

教室に持つていく本だと言うから俺はてっきり教科書だと思っていたけど、どうやら違うらしい。

この本は魔法関連用語が簡略に叙述されているだけのもので、授業に出た言葉の中で知らない単語を引くための事典だ。

「ルイズ。昨日のあの教師は酷かったな」

「……。そんなことを言つては駄目だわ。あれでも一応、教師よ」

「もしかして、本気であるデブの初恋物語が魔法勉強に役立つと思つているんじゃないだろうな？」

「首にならないかしら、あの教師」

何より、この学院は教科書が使えるくらいカリキュラムが整っていない。

授業の内容はその都度、教師が恣意的に決める。中には雑談みたいな話ばかりしている教師もある。

俺が見た限り授業がうまいのは髪が薄いコルベールという教師と、

ルイズによつて吹き飛ばされたシュブルーズだけだ。

『よくこんな学院が維持されているんだな』

『実は反対派も多いですよ。特にモットー伯爵みたいな鷹派の貴族はいつも学院に無理難題を押し付けて弱みを握ろうとしているみたいです。』

『公爵令嬢のルイズが通っているのに？』

『威張りたい年頃らしくて……』

『うわ、手に負えないな』

『サイトさんも気を付けて下さい。スケベそうな顔のお方ですから、遠くからでもすぐ分ります』

適当な授業だからこそ、筆記が大事になる。

教科書もなく授業も滅茶苦茶なら、教師の言葉を出来る限り多く覚えてそのままレポートに書くしかない。

生真面目に筆記を取るやつがいい点を取れるような仕組みだ。

だから、自分に厳しくまじめなルイズが首席だ。

もちろん教師の話の篩にかけて、大事な内容だけを選び、それを素早く筆記するためにはかなりの理解力が必要だ。

理解力がない奴がいくら頑張っても、ルイズのように頭も良くて努力もする人間に勝つことは不可能だ。

……。もしかしてルイズのやつ、かなりすごい？

「私はそれくらいできて当然だわ。むしろできないと駄目よ」

「自信満々だな」

「自信じゃないわ。むしろ逆よ。私はいつも不安なの」

ルイズのことはよくわからない。

自信家のようで、小動物のように傷つきやすい。
上品ぶると思ったら、実は下賤な仕事も必要ならいやとしない。

俺は——ある意味、彼女の失敗魔法の被害者であってルイズを恨んでいる節が有るが、それでも心のどこかでこいつに同情している。理由はよくわからない。

なぜだろう……。魔法以外には何でもできるし家柄もすごいやつで、俺なんかより恵まれているのにな。

「もういいわ。教室には一人で入るの。あんたは部屋の掃除と洗濯をしないとちょうだい」

「わかった。もう行くぞ。授業、頑張れよ」
「言われなくてもそうするわ」

〈 厨房：九時半 〉

「おはようシエスタ」

「おはようございます、サイトさん」

メイドにも慣れた。

最初は『すげえ！本物のメイドだ！』と興奮したんだが、今ではただのスタッフの人に見える。

仕事を手伝ったり、手伝ってもらったりしているので、話す機会も多いし仲も悪くない。

特にシエスタにはすっかり好かれてしまったらしくて——言って置くが、ただの自惚れじゃないぞ——洗濯とか掃除とかを助けてもらっている。

ただ助けてもらっているより、家事の先生みたいな感じだな。

大体、俺はシツクなシテイボーイ（笑）だったんだ。ちょ、なん
で笑うんだ！ 本当だぞ！

とにかくそんな俺に家事能力なんてあるわけないだろう。だから
洗濯と言っても『水に浸してごしごしすればいい』と思ったんだ。

そこで現れた俺の救世主がシエスタなんだ。

姿も日本人な感じがして安心するし、親切だし、有能だ。

何もできない俺が有能と言っても説得力がないんだが……。

彼女の働き姿を見るとまるで身が二つ以上あるみたいに感じられ
るんだ。

えっと、どこまで話したか？

ああ、そうそう。シエスタに家事を教えてもらっていることを話
したな。

シエスタは何も知らない俺に家事を教えてくれるんだ。

灰汁の使い方とか、ベッドメイキングの仕方とか。

一括りにして家事と称してはいるんだが、内容は千差万別だし覚
える事が多すぎて覚えきれなかった。

もちろんメイドたちが使う掃除・洗濯用具も貸してもらった。

それだけじゃ無くて共同施設の利用時間も分けてもらった。いつ
も使えるんじゃないみたいだ。

こんな事ってルイズはよく知らないから、その分こっちに詳しい
シエスタの存在は貴重だ。

「マルトーさんが用意しました。気兼ねなく食べてください」

「なんか、余計に申し訳ないけどな」

「いえいえ、マルトーさんは貴族に一矢を報いてくれたサイトさん

のために何かしてあげたいんです。これくらいは当然です」
「そう言えばあのおやじ、この学院一の高給取りだったな」

……。聞いて驚けよ。

マルトーおやじの週給は20エキュード。俺の二十倍なんだ。そして賞与金が年に二度出るらしい。

「さあ、食べてください。今朝は七面鳥の丸焼きです」
「重そうだ……」

） 掃除：十時 ）

「今日は家具の磨き方を教えます」
「本格的だな」

「まあ、本来はサイトさんがしなくても私たちがやりますけど……」

学院での俺の位置づけはあいまいなものだ。

実は俺がやらなくても、メイドたちが全部やってくれる。

掃除もそうだし、洗濯もそうだ。洗濯はランドリールームに持って行くだけでいいらしい。

俺が仕事をするのはどちらかと言うと、俺と言う人物を遊ばせないルイズの所為だ。

「まず、このブラシで埃とか垢とかを落とします」

「こうか？」

「もうちよっと丁寧に、彫りの隙とか垢が溜まり易い部分を意識しながらやってください」

「ああ」

ブラシを使って引き出しをみがく。
よく触る取っ手とかに手垢が溜まっていた。

「終わったら、この家具用の磨き剤をこうやって布に付けて柔らかく塗ります」

「この白いクリームみたいなものか？」

「はい。塗り終わったら、もう一つの乾いた布を使ってつやつや磨きます」

シエスタがテキパキと引き出しを磨き始めた。

布を持った彼女の手が一度通り過ぎると色あせた家具が本来の輝きを取り戻す。

「後は毎日、乾いた布で磨けばいいです。絶対欠かせては駄目ですよ」

「俺がやった部分は艶がないけど……」

「磨き剤の塗り過ぎです」

「難しいな」

「最初からできる人なんていません」

彼女の言葉には重みがあった。

俺と同じ歳のはずだけど、もうメイドたちの中では監督や教育係をしているみたい。

今、シエスタが俺と掃除をしてくれるのも、実は俺がへまを仕出かさないか監督するためでもあるんだ。

「やっぱり、シエスタはすごいよ」

「…、私はサイトさんが凄いと思います」

「俺？ いや、俺なんかどこにもいる平凡な奴なんだ。こうして掃除も一人にできない」

「掃除なんて、だれでも一年やれば上手になります」
「そうかな……」

俺が引き出しの右側を磨くあいだ、シエスタはテーブルと机の磨きを終わらせた。

どれも俺がやっている部分より綺麗に仕上げられている。

「私は、臆病です。」

「ええ？ シエスタが？ 冗談だろう」

グラモンと俺の取り成しをしようとした時のシエスタを思い出してみる。全然臆病な気がしない。
むしろ格好いいと思うんだが。

「いいえ。それは違います。私は初めから諦めていたんです。『勝てないから交渉する』って」

「いや、君が正しいんだ。俺なんてボコボコにされたんじゃないか」
「でも勝ちました。そうでしょう？」

「それは……」

シエスタはいつの間にか使っていた道具をまとめていた。
もう全部終わったのかよ。まったく俺って邪魔なだけだな。

「挑めなければ勝てない。そんな気がします」

「むやみに飛びついても駄目だろう」

「ふふ。だからサイトさんは特別です」

シエスタの頬笑みに胸がドキッと高まった。

「サイトさん。これからがんばってくださいますよね？」

） 洗濯：十一時 ）

シエスタは忙しい身だ。一日中、付きっきりで教えてもらうのはむずかしい。

彼女は他のメイドの仕事を監督するために、本塔のハウスメイドたちのほうに行ってしまった。非常に残念だ。

とにかく俺は昼食前まで洗濯をして干さなきゃ駄目だ。

昼下がりから洗濯物を干したら多分夜まで乾かない。せつかくシエスタが水場の利用時間を割り当ててくれたのに無駄にしちゃ勿体ないし、俺は急いで水場に出た。

水場は閑散だった。

この時間帯はみんな掃除に忙しいから、洗濯するのは俺だけだ。その方が俺にとっちゃ都合がいい。いくらなんでもメイドたちに混じって女の子の下着を洗うのは無理だ。

でも、メイドたちがいない代わりに、この時間帯の水場にはあの子がいる。

「今日もがんばっていますね。平賀さん」

「授業はどうした、授業は」

「面白くないから抜け出してきました」

「毎日面白くないのか？」

「そうですよ」

いたずらっぽく舌をべろりと出すロテシアだった。

つばの大きい帽子をかぶり、手にはブリキのジョウロを持ってい

た。

貴族でメイジなのに杖よりこつちの方が様になる。

「ルイズが探すかもよ」

「ヴァリエールさんには事前に話して置きましたから大丈夫です」

彼女はそう言いながら花壇の水やりをする

いつまで雑談ばかりしても仕事は終わらないし、俺もさっさと洗濯を始めるか。

でも、洗濯は難しい。

特にルイズのひらひらする下着は倍に洗にくい。気を抜くと直ぐ破れる。

昨日だってそうだった。洗うのが面倒になった俺が力を入れ過ぎた途端、下着のレースが破れてしまったんだ。もちろん、ご飯抜きだった。

「ご飯抜きが辛い訳ではない。むしろどうでもいいお仕置きなんだ。食堂に行けば、マルトーのおやじに食べ物をつぶり食わせてもらえるからだ。」

でも、だからこそ申し訳ない気がしてこう言った。

「いつそ、下着代を払わせてくれよ!」

「……。あれ、10エキュよ」

「飯抜きでお願いします。お嬢様」

ははは……。高いな

いつか出世払いするから待ってくれ…。

「これが、給料三カ月分か」

「公爵家の愛娘が履くものですよ？　むしろ安いものだと思いますせんか？」

「そうかもな。君のも高いのか？」

「平賀さん。女と付き合ったこと無いでしょう」

メルフォゼ伯爵の一人娘、ロテシア。

輝く銀髪、いつも微笑んでいる優しい表情、彼女のトレードマークである厚くて大きいマント。

背はご主人より小さくて小柄だが、幼いと言うより清楚な感じがする。

「まあ、私の下着はコットンの安ものだし20スウ（1/5エキュール）です」

「結局、話すのか……」

「シエスタさんとお揃いですよ。安いからたくさん買ってしまった、シエスタさんと山分けしました」

「なにその微妙な情報、俺ってどんな反応すればいいんだよ」

「喜ぶ？」

「君が俺をどう思っているのかよく分った」

なによりこの子は他の貴族たちとはその基本思想が違うみたいだ。朝早くから起きて庭の手入れをするし、物腰も柔らかくて『女の子』って感じがするんだ。

厳しいルイズと生活しているから余計にこの暖かさが気持ちよく感じられるかもしれない。

何より、ロテシアは俺の事を平民とか言ってみ下したりしない。

「シエスタさんが直接編んでくれたレース付きです。今履いている下着もそれですよ。見てみますか？」

スカートの裾を掴んで少し持ち上げるロテシアだった。
左足の付け根くらいに巻かれている包帯が少し見えた。

「見せてくれるのか！」

「冗談ですよ。本当に見せる訳ないでしょう」

なにが面白いのか、ロテシアはいつも幸せそうに笑っている。
ロテシアといると俺もそれにつられて理由もないのに楽しくなってしまう。

「ふゝん。もしかして期待しました？」

「知らん」

「ああゝ、怒らないでください。後でシエスタさんを見せてあげますから」

「何気に酷いことを言っていないか？」

） 昼食：十二時半 ）

昼食にはまたルイズと合流する。

ここの授業は大概午前中で終わるから、普通はここからまたルイズと行動を共にする。

召使の仕事を午前中で終わらせたのもこのためだ。
でも今日はちょっとスケジュールが違うらしい。

「午前では何をしたの？」

「家具の磨きと洗濯だ」

「それじゃ午後は？」

「そつだな……。特にやることはない」

昼食を軽く済ませた俺とルイズは庭の花を見ながら紅茶を飲んだ。もちろん、俺は飲んでない。座っているのは貴族のやつらだけさ。

決闘の日、デザートを配っていたのもこの時間だったな。

あ、そうそう。決闘の後どうなったかここに記して置く。

まず、あのグラタンの事だが。本当に謝罪しにきた。

水の秘薬？そんな名前の薬を持って来た。『平民でも君は強かった。だから敬意を示す』と言っただけど、ルイズの云うことを信じると『あいつは小心者だから、あんたが怖くなったのよ』……、らしい。

とにかくあいつは今、ここにいない。

逃げたのかい……。本当にただの小心者かもしれないな。

「なら、ロテシアのお手伝いをしてきて」

「君は？」

「ミスタ・コルベールと話があるのよ。あんたが聞いてもつまらないだけだからロテシアの手伝いをしなさい」

「ああ、分った」

ロテシアの手伝いなら面白そうだし、なによりルイズがつまらないと言っなら本当につまらないんだ。

） 派遣：一時 ）

「へえ、それでそのまま追い出されたんですか？」

「うっ……。少しくらい褒めの言葉でも聞けると思ったんだ。」

「ヴァリエールさんはそんなに簡単な女の子じゃありません。」

ガーデニングと言ってもいつも花を愛でるだけじゃないんだ。
庭を美しく管理するためにはそれに伴う施設の構築が必要。言わば空間構成で、建築と同じものだ。

……、とロテシアが言ってた。

常々、言っけど……、ロテシアはお嬢様なんだ。

姿もこれ以上ないくらいお嬢様なんだ。

銀髪で、細かい腕で、小さい顔に唇なんかやわらかそうで……。ちよっとお茶目で、天然だけど、可愛いんだ。妖精と言ってもいい。

もしこの子に『わたしは露だけを食べて生きています』とか真顔で言われると信じてしまうほどなんだ。

そんな彼女が今、何をしているか分るかい？

壁ぬってるんだよ、壁。

左手にパレットを持ち、右手にはヘラを持ってセメントを壁に塗っているんだ。

なあ、俺って変なのか？ 元からお嬢様は壁塗りとか好きか？

「次の段を積んで下さい。まったく、どんくさいんだから」

「適当に積むと怒るじゃないか」

「当然ですよ！ 適当にやって壁が壊れたら大変でしょ？」

俺はレンガの持ち運びと積みをやっている。

山積みされているレンガを見て、俺は『ああ、これは確かに人手が必要だ』と納得してしまったんだ。

『外壁を生け垣だけでして置いたら冬の木枯らしで花たちが傷んで

しまったんです。だから今年はレンガでやりますよ」

「なあ、これは人を呼ぼうぜ。この広さを一人でやるのはどう考え
ても無理だ」

「お小遣い足りないのですよ！ 平賀さんが金出してくれるんです
か！」

お嬢様もお小遣い足りないんだ。不思議な感覚だ。
それで10枚2エキューのパンツ履いているのか。

所帯じみたお嬢様もいるんだな……。ちよつと泣けて来た。

「鍊金とかでやるのが早いんじゃないか？」

「平賀さん、『鍊金』は見かけだけです。固定化をかけないといつ
か戻ってしまいます。建築には何の助けにもなりません」

「魔法って使えないな……」

「全くです」

君もメイジだろう？

『魔法』を使えないって評したら駄目じゃないか。

「それで、ベッドから追い出された平賀さんはあの『鶏の巢』に戻
ったと」

「俺は間違つて無いぞ？ ちゃんと、『ごめん、心配掛けてしまつ
て』と謝つたんだ。むしろ紳士じゃないか」

「ちつつちつ、駄目ですよ。多分正解に近いのはこれですね。『
すみません！ 使い魔が主人のベッドで寝るなんて！ 今すぐ降り
ます。 うつつ！ くそつ！ まだ痛みが……』」

何の芝居なんだ！ それは！

「そしたら、ヴァリエールさんはこんな風に言うのです。『無理し

なくて結構よ。まだ本調子でない事くらいは察しているわ』でね」

「なんか、それっぽいな」

「ヴァリエールさんは厳しいですからね。その人に褒めてもらえるためには、先ず自らを貶す必要があると言っことです」

「難しいな……」

ロテシアとルイズはかなり親しい。

それは、ロテシアがルイズの心を理解しているからだと思う。

ルイズの意地っ張りな性格を理解して、なおそれに付き合ってくれるからな。

「そのあとでも最低二度は断っておきたいですね。いっそ、ベッドを諦めるのが好感度アップには最もいい選択です」

「結局ベッドに残れる方法はないじゃないか」

「でも、自分でベッドから降りると、追い出されるのとは雲泥の差があります」

〵 夕食：六時 〵

「ルイズ。疲れた」

「なかなか頑張ったみたいじゃない。ロテシアがお手伝いの賃金代わりに蜂蜜をくれたわ」

「きっちりしているな。友達なのに息苦しくないのか？」

「親しき仲にも礼儀ありだわ」

夕食は俺にも肉が与えられる。

なぜかはよく知らないがありがたくもらっておく。

「ルイズ、その髪薄のコールタール先生とは何の話をしたんだ？」

「ちょっとね。あんたの事で気になる部分があったから質問してたのよ」

「俺？」

「あんたは気にしないでいいことだわ」

「俺の事なのに気にして駄目か？」

ルイズの食事が遅いとは以前に一度話したことがあるな？

その通り、ルイズはかなり食事が遅い。

百回は噛んでるんじゃないかと思えるほどゆっくり食べるんだ。いつも俺が先に食べ終わる。

それで、やる事無い俺はルイズの椅子にもたれて貴族たちを見物しているんだ。

全体的に、男はデブだ。

グラモン？ そいつはかなりいい体をしてたんだ。

だから、他の奴らもそれくらいはすると思ったんだけど……。全然はずれだ。

グラモンの奴が特殊なだけらしい。

『彼の家は軍人よ。グラモン伯爵は現在陸軍元帥だわ』

『メルフォゼ伯爵より偉いのか？』

『メルフォゼ伯爵は内政関係で偉いの。グラモン伯爵は軍事系』

『それでお互い干渉なし？』

『使い魔が賢くなって、主人はとっても嬉しいわ』

そして、女は普通。

みんなして腰が細かいのを除くと、俺が通っていた学校のレベルとほぼ同じだ。

これも、期待はずれだった。最初に見たのがルイズで、そのあとがロテシアだったから、ここの女は美人ばかりだと思ったのに……。

でもキュルケは綺麗だし、時々可愛い子もいるんだ。ただ、それ以外が普通なだけ。

「綺麗な子はないな……」

「ここにいるじゃない。使い魔のくせに主人をほったらかして他の女を物色しているの？」

今は生活だけを考えよう。

ちよつと落ち着いてきたらまた色々考える。

家に帰る方法とか、今の俺にはそれを調べる力もない。

だとして、ルイズが俺を素直に放してくれるとも思えない。

そして、ちよつと視点を変えて見ると、可愛い主人とのエキゾチックな生活はなかなか貴重な体験だろう？

いい方向に考えようぜ。

） 魔法の練習：九時 ）

「2時間だけだからな。今日こそ零時に寝てもらうぞ！」

「うるさいよ！ あんたは私の乳母にでもなつたつもり？」

「それは一人で起きられる奴の言うことだろ！」

夜間射撃の時間だ。

俺にはよく見えもしないし、面白くのなんもない。ただぼうつとしているだけだ。

話しかけると『狙いが乱れるから黙って』とか言うし、無視して話すと俺に撃ちやがるんだよ。

空を見上げると二つの月。

青白い月と赤い月。時折銃声に似た爆発音だけが響く真夜中。見ると、なぜか今日はロシアの部屋の明かりがない。もう寝たのかな。今日の作業が疲れたのだろう。

男がやることをしたんだ。それくらい当然か。何といっても、俺も今日は疲れたから……。

） 就寝：0時 ）

ちよつと居眠りしたみたい。気がつくと11時だった。ちよつどいい時間だったので駄々をこねるルイズを部屋まで連行してきて浴室に押し込む。

どんな仕組みかは分らないけど、ここの浴室には水道があつて蛇口をひねれば湯が出るんだ。

とにかく反抗するこいつを湯船に入れてカーテンを下ろす。

あ、その以前に寝巻を渡すのを忘れてはいけない。でないと全裸で出てきて寝巻を要求するんだ。

十分くらいか？ 俺が鶏の巣で寝転がっているとルイズが体からぽかぽか湯気を出しながら出てくる。

「本当生意気だわ。使い魔のくせに…、使い魔のくせに…。」

暖かい湯に浸っていたからか、ルイズの顔は上気して赤くなっていた。濡れたまつ毛が何となく色っぽい。

ルイズは背が低いだけで、子供体型ではないから薄着を着ると色々すごい。

そしてこの結いあげた桃色のブロンドとか、血気が回って薄紅色

になっている首筋とか見せられるとかなりつらい。

本当に勘弁してほしい。

ルイズって他の事では気がきくのに、こう言う所は全然気を使ってくれない。

信じているのか、誘っているのか分らない。もしかしたら本当に俺を男として認識していない可能性が高い。

「今日は俺が疲れたんだよ。早く寝たいから君も寝ろ」

「世の中を探しても主人に命令する使い魔なんてあんたくらいよ…」

…」

「起こすのめんどいんだ」

「主人を面倒って言うなんて！　なんて使い魔なのかしら！」

そう言うルイズも自分のベッドに横たわる。テーブルのランプの光も消える。

午前中で塗ったワックスの匂いは部屋の吐息みたいに感じられた。甘くて、暖かい。

ルイズはまだ寝付けていないのか、彼女のシルクの寝巻と毛布が擦れてバサバサと音をだす。

その音が、俺の孤独を安らげてくれる気がしてきた。

家。

帰りたいな。お母さんも見たいし。

まだ十日だって言うのにこれ。この十日はこれから幾度、繰り返されるんだろう。

次の十日には帰れるのか？　その次には？　その次の次は？
月は変わり、季節が廻る。

春が過ぎて、夏が来て、秋を眺めて、冬を迎える。
そしてまた訪れるはずの春には、帰れるのか。

ああ、これが夢なら、一晩寝て起きるとまだ俺の部屋なはずだ。
そして食べ飽きた味噌汁を涙しながら食べて、見飽きた友達と会
う。

そうだったら…、この全てが夢なら…。

「サイト。もう寝たの？」

「いや。この巢、不便すぎて眠れないんだ」

嘘だ。これはこれで心地いい。

「自分の給料でベッドを買つと、部屋に置くくらいは許してあげる」

「泣ける気遣いだな」

「不満なら野宿もいいわ」

憎まれ口をたたく、ルイズ。

でも、その声を聞くと理由もなく心が落ち着く。

不思議だ。これってあり得るか。会って十日の女の子の声で落ち
着くなんて。

俺が使い魔だからか？ それでこいつの言葉に一喜一憂するのか？

「……、そう。答えないなら私の部屋でいいのね」

「……、野宿が嫌なだけさ」

「本当……、一言も負けないんだから……」

「急に連れられて来て、戻してもらえないんだ。この反応は当然だ
ろっ」

なんだか眠くなってきた。

気が緩んできたのが分る。彼女の声を聞くたび俺の意識が床の底に引き込まれていく感じた。

眠る。ルイズの傍で。ルイズの声を聞きながら。

「へえ、当然ね。まあ、そうかもしれないわ。」

「も…う、寝る。お休み。ご主人さま」

「お休み。サイト」

こうやって眠るとまた新しい朝が訪れる。

その日は、今日ととっても似ていて…、そして新鮮なはずだ。

眠りに落ちる音。それは多分、綿の塊が落ちる感じ。

〈 起床：八時半 〉

新しい朝。

「あんた！ 何で、私より遅く起きるのよ！」

夢はまだ続くそうだ。

目の前に鬼の形相でにらむルイズがいた。

レンガは運び疲れたから寝坊したみたいだ。

「すまん！ それより、早く用意しろよ！ 朝食はなしだ」

ジタバタしながらルイズに服を着せて本と筆箱を用意する。

ルイズは焦るだけでほぼ何もしてない。こいつは非常状況に弱いんだ。女の子らしいだろう。

「ほんとっ！ 使えないわ！！！」

ルイズの声が寮に響く。俺の頭もじんじんする。

こうして、俺はまたこの世界を生きる。

十話― 使い魔の一日（後書き）

「全裸のルイズ」

強がっています。

恥ずかしいけど、自分がサイトを男として見ていないことを主張したくてワザとやっています。

「着付け」

アレはどう考えても男がやる仕事じゃない。一々、やることがエロいです。

考えて見てください。ちょっとしたつめのコルセットでも着たら、こんな会話になりますよ？

「ケツを上げるよ、ルイズ。足当てにくいだろ」

「分ったわ。でも靴くらい脱いでよ。」

「力を抜け。すぐおわるから。」

「ひいっ！ うっ！」

「よしよし。息吐いて〜そのまま締めろ」

「ああ！ あっ！」

「よし、終わった。もうスカート着てもいい」

無理だ〜、これどう考えても無理だ〜

「ルイズさんの爆発」

制御可能になりました。ルイズさん、虚無なしでも結構強いです。

「週給12000円」

寝食提供だからこそ可能です。

「最低賃金制度」

1896年ニュージーランドが最初。ヨーロッパは1909年イギリス。

「レースは手編み」

だから高いです。機械編みが出来るようになったのは1808年のイギリス。

直接に編んでしまえば安くなるけど、時間が掛るから……。

「なんで、ロテシアがサイトを怖がらない！」

……。次の話にパス。おいおい書きます（万能呪文）

「コルベールとルイズ」

『なら、彼を家に戻す方法は全然無いのですか』

『残念ながら』

『他の図書館で調査すれば……』

『ミス・ヴァリエール。ここは世界一の魔法学院だ。ここには本はアカデミに行って探すしかない』

『……、わかりました。調査してくださいありがとうございます』

「錬金は一体どんな魔法なんだ？」

そうですね。多くの二次創作ではこの魔法を有用に使っていますね。

それほど、この魔法には色々な可能性があると言うことです。逆に言うとそれくらい出鱈目な魔法です。

「筆者の弁明」

遅くなりました。

筆が止まって、書いては消すことを繰り返していました。

仕事が忙しくて纏まった時間を作れなかったのが理由と言えば理由でしょう。

多分、これからも一週に一話のペースになると思います。

ちよつと話が溜まったらまだ頑張つてペースを上げたいです。

十一話 虚無の曜日（上）

） 発端：ロティ部屋にて （

休日が嫌いな人っているかな？

歳の割には人生経験が少ない私ですけど、そんな人はいままで見たことがありません。

少なくともこここの学生たちは休日——虚無の曜日を首を長くして待っています。

それは、単に授業がないからじゃありません。

って言うか、貴族たちにしては授業も遊んでいるのとあまり違いがありません。ただ友達と駄弁りながら魔法を使っているだけです。私見ですけど、魔法の勉強のため学園に入学した人はたぶん一人です。

もちろんヴァリエールさんのことですよ？ 彼女は本気で勉強のために来たのです。

だったら、なぜみんなは休日を待つのでしょうか。

それはですね？ 外出の許可をもらえるのが休日だけだからです。

これは使用人にも適用されます。

だから彼らにとって休日は無いのにもかかわらず——さすがにパトが分けられているので半分は休むけど——、虚無の曜日を待ち兼ねています。

考えてみてください。この時代の娯楽は何があると思いますか？ 全然ないですよ？ だからこそ、トリスタニアへの外出はみんなの数少ない楽しみです。

学生たちはトリスタニアに行って買い物したり、おいしいもの食べたり、演劇をみたりします。

ませた男の生徒は密かに酒場とかに行くらしいけど、もちろん禁止されています。

でもですね、そんなことは発覚されにくいのです。

『誰かを酒場で見た』と言うのは『自信も酒場にいた』と言うのと同じですから……。

えっと、とにかく今日はそんな、誰もが待ちかねていた休日です。虚無の曜日です。

でも、わたしにとっては虚無の曜日も平日と変わりません。

植物たちに休日がない以上、わたしにも休日なんてないのと同じです。

それに、トリスタニアに行くとしたら大勢の人波に向かい合わなければならぬので、負担が大きいです。

それ以外にも、わたしは必須授業の以外の授業を免除させてもらっている、平日もサボり放題です。

その代り、コルベール先生の補習を受ける事になりますが、他の面白くもない授業を延々と聞くより随分ましです。

あ、皆さん。コルベール先生は分りますか？ 火のメイジなのに、とても落ち着いた雰囲気の穏便な先生です。

ただオウムみたいに定説を述べている他の教師とは違い、自分なりの学説に基づき、わかりやすい講義をする凄い先生です。

普通は『基本魔法実習』と『儀式魔法概説』の講義をしています
が…

時折に特別講座として『魔法工学』という変わった科目を開設する事があります。

あれは凄く面白いです。

からくり人形とかを紹介して、その原理を説明するのです。

いつかしら紅茶を運ぶ人形が紹介されましたが、あれがすごく可愛くて一目ぼれしました。

それで、授業のあと、コルベール先生にお願いして譲ってもらいました。

今でもその人形はわたしの紅茶セットと一緒に置かれています。

でも、使ったことはありません。

アレを使うためにはトライアングル級の火のメイジが必要ですから……。

制御が難し過ぎて誰も使いませんよ。自分の手で紅茶を入れるのがはやいからです。

コルベール先生にそのことを話したら凄く落ち込んでしまいました。

ああ。ちょっと雑談が多くなりましたね。

それじゃ閑話休題して本論に移りましょう。

で、虚無の曜日で休日な今日。

わたしはベッドで寝転がっています。

一昨日と昨日、無理してレンガ塀を作ったせいかな、とっても体が重いですよ。

もちろんいつものように朝早く起きたし、早朝の仕事も日の昇る前に終わらせました。

でも、こんな日ってありますよね。

ちゃんと起きられたのに、ベッドから降りるのは億劫になって、そのまま座っていたら休日の倦怠感が雪崩れてくるのです。

それで『ああ、今日は何もしたくないな』とか考え始めたら終わりですよね。

気がつけば休日 もう残りわずか。

まあ、そんな状態に置かれているロテシアです。

このまま時間がスキップして夜になるかも知れませんか。

危険です…。このままではベッドで休日を過ごしてしまいますよ……。

でも抜け出せません。とっても危険ですう……

そんな時でした。

——コンコン

窓から小さな音が聞こえます。

ノックの音みたいにも聞こえるし、小石が何かを投げられているようにも聞こえます。

ヴァリエールさんが魔法練習で壁を壊しているのかな？

もちろん、ただの冗談ではありません。

本当に城壁をぶっ飛ばしてしまって、その破片が部屋の窓ガラスを割った事件が過去にあったのです。

さすがのヴァリエールさんもその時だけはびっくり仰天したみたいです。わたしが出ていくと逃げてしまいました。

えっと、とにかく外を確認の方がよさそうですね。

わたしは何気なくベッドから起きて窓を開けました。

そしてある人と目が合いました。

深く深いウルトラブルー。それは人を魅了する魔法の呪文。

聖なる悲しみに耐える聖母の青を取ってきたのかな。

長い旅程の果て、遂に見つけた希望の鳥の青から取ってきたのかな。

神々しいターコイズブルーのショットヘアーの上からは暖かい春の日差しが砕け散っていました。

そうです。

わたしの大切な友達。空色の君、雪風のタバサさんです。

思わず抱きしめてしまいたいくらい愛しい、大事な親友です。

だが……。

なんか石を持っていますね。

そして投げるポーズですね。

狙いはどう見ても私の部屋の窓ですね。

瞳が合ったわたしたちは何も言えずにお互いをじっと見つめています。

わたしは混乱してぼうつとしていますけど、タバサさんは何かを思い出していそうな気がします。

たぶん何の目的があって窓に石を投げていたのでしょうか。やっているうちに楽しくなって本来の目的を忘れたんですね。

あ、タバサさんがそのなにかを思い出したみたいです。

「ロティー。あゝそゝぼ」

「……、はい？」

……。

「ロティー。あゝそ〜ぼ〜」

「えつと……、よろこんで？」

わたしが返事をする、タバサさんは凄く満足した表情になりました。

そして横から聞こえてくる痛快な笑い声。

「あははは〜！ 実際に見たの初めてだわ！」

そうですね。タバサさんの奇行にはいつもキュルケさんがいましたね。

今日はなんだか見えないな〜と思った、すっかり窓から見えない角度に隠れていたんですね。

キュルケ・ツエルプストー！。

タバサさんのイメージを天藍石ラピスラズリに喩えるなら、キュルケさんのイメージは石榴石ガーネットです。

単純にその燃え上がるような赤髪に囚んだものではありません。むしろその内面です。

このバラの化身のように輝かしい美しさを誇るキュルケさんは、実はとっても愚直です。

ガーネットが練磨石で使われるように彼女もまた然り。人のために自分の身を見向きません。

それと同時にどこまでも自分の気持ちに忠実で、瞬間のために永久とこしえをも犠牲に出来る人。

だからこそ、彼女には努力と抵抗を意味するガーネットが似合います。

そのキュルケさんはなにがそんなに愉快なのか、声高らかに笑い声を上げています。

「キュルケ。遊んでくれるって」

「そう、よかったね」

「うん」

タバサさん……。キュルケさんの満悦の笑顔はあなたが思うそんな意味じゃありません。

もうちょっと人を疑いましょうよ。

いや、疑っても結局はキュルケさんの思い通りに事が進んでしましますね。

そしてそれに付き合うタバサさんも、分ってやついてる節があるので、もうわたしのツツコミだけでは足りなくなってきました。

いっそ、タバサさんのように疑わなければ——あるいは無視すれば——楽かも？

「信じれば救われるのよ？」

「うわ……。宗教作りましたか？」

「今ならただで入門だわ。枢機卿にしてあげる」

「間に合っています。お引取りください」

「つれないね」

キュルケさん、ギャグが全く笑えませんが。

それにしても、なんだかタバサさんとうとうして会えるのはずいぶ

ん久しぶりな気がします。

……、数えて見たら一週間ぶりですね。いいえ、使い魔を召喚してから全然会ってませんから十日くらいです。

なんですか。愛が冷めたんですか？　かわいい使い魔ができて、わたしはもう用済みですか？

まさか！　もう捨てられポイですか！？　捨てられるのですか！

「いいです、わたしは元から日陰の女でしたから……。奥さん使い魔が出来たら用済みだもんね（ほろり）」

「ち、違う、ロティ。これには訳が……」

「所詮、好きなのはわたしでも、大事なのは奥さん使い魔ですよ。しくしく」

「なにに？　不倫ごっこ？　あたしも混ぜてよ」

タバサさんのおろする姿がまだ堪らないですよ

皆さんは分りますか。普段は冷静沈着なタバサさんが慌て涙ぐんでる姿の破壊力を。

「そんなこと言わないで。私も会いたかった。ロティを捨てたりしない」

「でも、最近あってくれませんでした。」

「あの馬鹿女がしょっちゅう呼ぶから……（キリキリ）」

「えっと……、仕事大変だったみたいです」

タバサさんはすごく悔しそうに歯ぎりしています。

目がヤバイです。『それ、殺やっちゃうぞ』な顔です。

わ、分かりましたから、もうやめてください。もう二度とタバサさんの愛を疑いませんから

それにしても馬鹿女ってあの従姉のことですね……。

「もしかしてタバサさんはあの人のこと嫌いですか？」

「それほどではない。でも、あまりしょっちゅう呼ばれるとロティと一緒にいられない」

タバサさん真剣です。

でも、わたしと遊べなくなるのはそんなに大変なことでしょうか。あんな仕打ちをやらされているし、もっと普通に怒ったり嫌ったりしてもいいと思いますけどね。

「タバサはあの子には全然関心がないのよ。云わば空気——害を及ぼすと言ったことを考えると悪臭ね——みたいなものだから、言っても無駄よ」

「でも、空気は無理難題を押し付けたりしません」

「災害。人間の力ではどうにもできない」

「あの子の迷惑さ加減ってそんなレベルですか!？」

でも、よく考えるとあの子はあの子なりにタバサさんの関心がほしいだけかも知れません。

なんだか嫌がらせにしては頑張りすぎです。

決定的には、あれですね。返り討ちをされたのに懲りないところ。もう確信できます。あの子、タバサさんに構ってもらいたいのです。

「迷惑なのは変わりない。そして……」

「いつか憎しみは逆転する、ですね。わかりました。もういいません」

「うん。そうしてほしい」

タバサさんを救いたいののは、わたしも、キュルケさんも同じです。でも、何もしてあげられません。できることならただ元気付けるくらいですね。

「それで今日は何しましょうか？」

「シヨッピング」

「あたしのね」

キュルケさんはニコニコ類笑みながら自分を指差します。

ああ、そう言えば……。

「そう、すぐフリッグ舞踏会」

「一年だわ」

「もう、そんなになるのですか」

いろんなことがあつた日でしたね。

キュルケさん・タバサさんと友達になったうれしい日で、私の身が焼かれた悪夢の日で……。

「ロティ。あたしずっと考えて見たわ。でも、やはりあたしはもう一度あなたと共に——あなたと舞踏会に立ちたいのよ」

「ロティが行かないなら、私も行かない」

「でも……」

傷は治っていません。むしろ治ってはいけません。

わたしは学院を通う間、ずっと『被害者のふり』をしなきゃ駄目です。

事件の被害者として事件を抑え込んでいる以上、その事件は闇に眠るままです。

なにより、わたしはもう怖いです。

人々の前に立つのが。怖くてたまりません。

その日から、幾つかの舞踏会があって、祝日もありましたけど、わたしは出席しませんでした。

友達もいるし今の生活も好きです。

毎朝シエスタさんに着付けして貰い、ヴァリエールさんと授業を聞いて、キュルケさんとおしゃべりして、タバサさんと一緒に遊ぶのです。

長年の夢でした。

前世の私が自分の名前を覚え始めた時から、ずっとこの瞬間を夢見ていました。

みんなが笑い飛ばすような小さい夢ですけど、わたしには生まれ変わってでも叶いたい夢でした。

殺さなくていい場所、殺されなくていい場所。

人を抱き締めたかった。人に触れられたかった。

その全てがかなえられて、わたしはもう満足です。

願わくば、このわたしの幸せの箱庭が永遠のその先を辿れるように。

「行って来てください。その日はわたしの部屋に来てドアを開けてあげませんかからね？」

変化は嫌いです。このままがいいです。

幸せって言うのは一度認めてしまつと指から零れ落ちる砂のように消えてしまいます。

わたしは怖がりです。この幸せを何かに攫われ消えてしまうことを恐れています。

誰かが、まだ誰かが訪れて、わたしの幸せを壊してしまうんじゃないか。

……、わたしは臆病でいいです。

「さあ！ それよりトリスタニアに行きましょう！ 遅いと暗くなってしまうですよ？」

） 始め：トリスタニア到着 ）

わたしたちはそのあとすぐ外出許可を得て——今日の当直はコルベール先生で助かりました——みんなと一緒にトリスタニアに向かいました。

そして、学院を出発して三十分あまり。私たちは今、トリスタニアの城壁の前に到着しました。

それよりですね！

ここに来る途中シルフィードさんの背中に乗せてもらいました！空を駆けるなんて、誰が考えた表現でしょう。ぴったりで。もうこれ以上ないくらいぴったりです。

景色が流れる川のように、雲に乗った気持ちでした。

実は、前世でも飛行機なんて乗ったことはありません。

……なにせ身分が怪しいものですから。香港に行く時も変な密航船を使いました。

「タバサさん。わたしは生涯この日の感動を忘れません。泣いていいですか？」

「大袈裟。言ってくればいつでも乗せてあげる。」

「きゅいきゅきゅきゅい」（ロテシアはお気に入りだからいつでも乗せてあげるの）

惜しいことですけど、シルフィードさんは市内に入れてもらえませんでした。

だからシルフィードさんには申し訳ないけど、ここで待ってもらうことになります。

心なしか、シルフィードさんはすごく怒っているみたいです。

「きゅいきゅい（お腹すいた）。おいしいもの買ってくれるって言ったのに」

「おとなしく待っていて」

「きゅきゅ！（お肉！）」

「……わかった。」

「きゅい（やった）」

「会話していますね」

「ええ、アレは確実に会話しているのだわ」

「竜族の言葉を研究してみようかな……」

手（？）を振っているシルフィードさんを後にして、城門を潜りました。

そこから小さい建物たちが並んでいるトリスタニアの街並みが広がります。

そして大勢の人たちが溢れんばかりに満ちていました。

「手を貸してね。あたしが握ってあげる」

「ありがとうございます。素直に白状すれば、この人波を無事に潜りぬける自信がありません」

「後ろには私がいるから……、安心して」

なんだか、RPGゲームのパーティ行列みたいですね。

先ず、キュルケさんは前衛です。

耐久力もあるし、攻撃力あるので突撃して道を開く姿が似合います。

タバサさんですか？ タバサさんは後方支援火力です。

155？カノン砲みたいなものです。溜め時間は長いけど一発必殺です。

弱いのは私だけですよね

むしろわたしは縛りプレイ用のペナルティーキャラです。

わたしだけでクリア出来る人がネットとかで崇められるのです。

「ロティ。なんでしょんぼりしているの？」

「いいえ、なんでもありません。ただ私って弱いな……って思ってしましまして。トホホホ……」

「なにをいまさら。あたしがずっと一緒にいてあげるから気にしなくてもいいのよ」

わたし、果報者です

でも、情けない自分にはやはりしょんぼりです。

「 タバサさんといえば本ですね：先ずは本屋 」

「まずは何処に行くのですか？」

「本屋。私の買いもの」

「え？ タバサさんも買いものでしたか？」

意外です。タバサさんが何かを欲しがるなんて……。

「なんだかの蔵書票付きの貴重本が入庫したらしいわ」

「字が素敵なトレドの修道院写本」

「へえ、そうなんですか」

この時代の本は全て筆写本です。だから、本はすごく貴重です。高いです。

その観点からみれば、タバサさんの趣味はわたしやキュルケさんよりも金が掛る趣味とも言えるでしょう。

それで、本のお話をしますね？

本は筆写ですから、たとえ同じ本だとしてもどこで筆写したのかによって価値が全然違いますよ。

写字生によっても大分違うらしいけど、そこまではよく分りません。

いいところの筆写本は挿絵も綺麗に描かれています。

文字にも金箔が貼ってあったり、高い顔料が使われたりするので、一種の芸術品と言っても過言ではありません。

逆に粗悪な筆写本は誤字が多くて読みにくいし、紙は安もので腐るし、装丁が劣悪で閉じれなかったりします。

「見えてきた。あそこ」

そのうちに本屋へ着きました。

幅が5メートルしかない細い建物です。

二階には窓が一つあって、そこから本屋の象徴であるペンと巻物が描かれている旗が垂れ下げられていました。

その建物に入ると、中は薄暗くてすこしカビ臭かったです。

「いらっしやいませ。どんな本をお探しになるのでしょうか」

鉄格子の向こうからお爺さんの声が聞こえました。

ここの主人さんですね。随分歳をとったようでその手が微妙に揺れていました。

本屋だと言ったから、本がたくさん陳列されている店を予想していたけど、全然ちがいますね。

むしろ質屋の雰囲気です。『罪と罰』の冒頭の一ページが思い浮かびます。

「トレドのエクスリブリス付きの本。入庫したと聞いた」

「おお！ あれですね。あります、ありますとも。」

お爺さんは椅子から立ちあがって店の奥の方に行ってしまうした。

屋内が薄暗い所為か、まるで消えてしまったように感じられます。若干の時間が経って、お爺さんは蓋の部分がアーチの形になっている宝箱を持ってきました。

「これでございます。先日、亡くなったスフォルツァ公の蔵書が公開されて、こちらでもやっと一冊を手に入れた所です。」

「確認する」

「すこし、お待ちください」

爺さんは胸のポケットから鉄の力ギを取り出し、その宝箱を開けました。

宝箱を開けると紫のベルベットのシートが敷かれていて、その上に茶色の本が一冊置かれています。

爺さんは骨つばい手で本の装丁の金具を外しました。

お爺さんは本の最後のページを開き郵便切手のようなものを指しました。

始祖ブリミルが杖と槍を持っている姿が描かれている、親指くらの切手でした。

え？ 槍？ なんで？

「確かに」

「よろしいでしょうか」

「うん。私が引き取る」

「まいど、ありがとうございます」

爺さんは再び本に金具を掛けて、宝箱の中に入れ戻しました。そして、鍵をかけてその力ギをタバサさんに渡します。

「本は学院にお届けしましょうか」

「そうして。いつ、届く？」

「明日の朝に学院行の郵便馬車があります」

「それでいい」

宅配便なんてない時代ですからね、

こうやって買いものしたら——自分の手で運ばない限り——定期馬車に載せるしかありません。

定期馬車がないと一週も二週も待つしかありません。

もちろん人を買って運ばせることも可能です。でも高いです。わたしも先日、ある植物の種を届けてもらいたくて調べて見たけど、運賃が馬一頭に付き15エキユーもしました。なんでそんなに高いかって？ 保険料です。

「それでは、ここにサインを……」
「うん」

タバサさんは店主のおじいさんから渡してもらった契約書にサインをしました。

二枚があつて、お互いが持つようになっていくみたいですね。徹底しているなと感心しました。

タバサさんが本を買う間、わたしとキュルケさんは席に座って待っていました。

教会などに置かれていう長椅子です。粗雑なつくりで安物な感じですよ。あまり稼ぎがよくないかもしれません。

「ねえ、キュルケさん。あれいくらだと思えますか？」
「さあ？ あたしはよく知らないわよ」

そのときタバサさんが鍵を持って戻ってきました。
タバサさんは満足した表情で鍵をウエストパウチに入れます。
そのウエストパウチ、可愛いな　わたしも欲しいな

「500エキユー」

「はい？ なにがですか？」

「あの本『カノン・メディキナエ』の価額」

キウルケさんの方を見るとやれやれと頭を横に振っています。
タバサさん……、いくらなんでも高すぎると思いませんか？

「むしろ安い」

「安いんですか?!」

500エキューですよ？ シュヴァリエの一年の年金じゃなかったんですか？

もしかしたらタバサさんお金持ちだったんですか？

「そして、私のお金ではない」

「どうということなの？」

「学校図書館が引き取る。私は渡り役」

「あゝ、図書館の資金で本を買ったのですね」

うちの魔法学院の図書館は有名です。

ほとんどの図書館が500巻くらいの本を所蔵していることに対して、学院図書館には2000巻くらいあります。

少ないと思いますか？ でも、そんなものです。

活字と紙が補給されない限り、本っていうのは奢侈品です。

もうそろそろ活字が出てもいい時代なはずなのに、なんだか誰もそっちには興味を示さないのです。

平民の識字率もひどいものですし、本を読む人なんてほとんどないから金にならないみたいです。

「本とは資産になるから、これも投資と思わなくもない」

ふむゝそうかな。私は本なんて事典を含めても五冊しかないし、

よくわかりません。

あれ？　なんか引つかかることがあるような……

「ねえ。タバサ？　ちょっと聞きたいことがあるわ。答えてくれる？」

「なに？」

「昨年、焼かれた本つて全部いくら？」

「ああああ！！　それですう！！！」

それです！

タバサさんの部屋には本棚が壁に並んでいて、ざっと見ても100巻はありましたよね！

「……、考えたことなかった」

考えてくださいよ！

いや、わたしのせいですね。

色々あり過ぎてそんな所じゃなかったもんね。

「それで？」

「ちよつと待つて、計算する」

タバサさんが指を一つ一つ折りながら本の値段を数えています。

「百、五百……」

「どんどん上がっていくのね」

「千、千二百……」

「あの……、そろそろ変な数字になってますけど」

「三千、三千五百……」

「いい！　それでいいの！　もうわかったわ！」

本って、高いな」

でも、タバサさんは値段を気にしないみたいですけどどうしてですか？

タバサさんはあまり金が多くないと聞きましたが。

「あれは、たいてい借りた本」

「弁償は？ 借りたなら弁償しなきゃならないでしょ？」

「屋敷にあった本をあげた。それで手打ち」

「うわ……、屋敷の本も値段高そう。ちゃんと計算してからやってください」

「でも、それは読まない本ばかり。痛くも痒くもない」

タバサさんはいい意味でも悪い意味でも高貴な人です。

だから金にまったく関心がないのも頷けます。

金でいちいちうるさいのは下賤な人々の考えですね？ わかります。

「タバサはもうちょっと世間に慣れてもいいと思うのよ、あたしは」

「私にとってはあれでいいと思いますけど」

「駄目よ。いつかは食事もできないくらい貧乏になるかもしれないのよ？」

「まさか、風と水のトライアングルが飢え死にしたなんて、未だに聞いたことありません」

実力あるメイジは貴重です。

特に二つの属性のトライアングルなら引く手が多いんです。

いいえ、きつと奪い取りになるはずです。

「速断は駄目よ。最近有名な盗賊の話をしらないの？」

「盗賊？」

有名な盗賊って……

どうやったら、こつそり物を盗む盗賊が有名になるのでしょうか。

……、盗賊も自己PRの時代でしょうか。世知辛い世の中になったんですね。

「『土くれ』のフーケの事よ。もしかして本当に知らない？」

「ああ、知っています。知ってます」

シエスタさんから聞きました。

そのために城内の刃物の値段が跳ね上がったらしいですね。

でも、包丁まで値段が跳ね上がる必要なんてないのに……。

きつと商人たちが陰で細工をしているのですよ。

「あの盗賊は土のトライアングルなのに盗賊をしているのよ？ 最

近はメイジと言っても就業がたいへんなのかしら」

「それはちよつと違うと思いますけど……」

ゝ わたしの用事：鍛冶屋って一つしかないですよ…… ゝ

「ちよつと寄りたいたところがあります。仕立屋の所は午後でお願いできませんか？」

「あら？ ロティ、なにか買いたいものがあつたの？」

いいえ、買いたいものというよりは……

わたしは腰に下げていた『あゆ』を取り出しました。

「あら、ナイフね。以前サイトに貸したものでしょ？」

「はい。そうですけど……」

「刃、完全に欠けている」

そうですよ。

サイトさんがどんな戦い方をしたのかは分らないけど、丈夫な『あゆ』をこんなにボロボロにするなんて…

「馬鹿力ね」

「怪力」

「本当ですよ、もう」

ちょっと恥ずかしいので人の前では言えないけど、わたしも相当な力持ちです。

子供のころから鶴嘴とかを振り回してきた所為ですね。そこら辺のひよろりとした男子と腕相撲をしても負けることはないでしょう。

そんなわたしが一年も二年も使って、全然問題なかったのに。サイトさんは見かけによらず力が強いみたいです。

「研いだら使えます。愛着も付いて捨てたくありません」

「でも、一回りは小さくなるかも知れないわ」

「元からただの剪定用ナイフだったし…」

うう、でもわたしが貸したものだし、『弁償して！』とか言えませんよ。

『すまねえ！ 絶対新しく買ってあげるから！』

『あはは…、いいですよもう…。どうせ剪定刀だったし…』

『本当にすまない…』

『いいです、いいですから』

はつきり物事を言える人になりたい

もう姿は完全に欧米人ですけど、肝心なところは結局前世のままです

「ロティ。あまいわ。甘味所『モンフィュー』のキャラメルクリーム掛け蜂蜜練乳ワッフルDXより甘いわ」

「聞くだけでも胸やけしそうな菓子ですね。いくらなんでもそこまでは甘くないです」

その菓子、お父さんにあげたら喜びそうです。

一応、トリスタニアにまで来たのだし、差し入れに行つて来ましょうか…

「えっと、見えてきました、あちらです。剣の看板」

わたしたちは店の中に入りました。

まだ午前だと言つのに店の中はとても暗くてランプが燈されていました。

壁や棚には剣とか、槍とか、甲冑が飾られていて、ランプから放たれる黄色い明りを反射し鈍色に輝いていました。

雰囲気があると言えばそうですね。女の子三人が入るには拒否感を覚えるインテリアです。

「以前は、もうちょっと武器より農具とかがあつたんですが……」

「最近では武器の方だけを売ってますんで。なにせバカ売れしです」

奥からパイプを啜えた店長が出てきました。
ここに来たのは昨年の秋以来初めてですが、その間にすっかり老
いてしまった感じです。

「店長」 久しぶりです。ちょっと頼みたい事があります。」

「何でも行ってくだせえ。飾ってはおらんが、物は揃えていますん
ですぐにでも取り出せます」

「いえいえ、買いものじゃありません」

わたしは『あゆ』を渡しました。

店長にも以前見せたことがあったと思いますが…

「へえ、あの時の変に頑丈なナイフですね」

「ええ、そうですよ」

「……。これで洞窟でも掘ったんですか？」

「言わないでください」

店長は『あゆ』を棚に置いてまだパイプを啜えました。
安物の葉を使っているみたいですね…。煙がとても辛くて臭いで
す。

「そんで？ これを研げばいいんですかい、言つとくが元には戻ら
んですぞ」

「それでもいいです。ペーパーナイフになってもいいですから」

「はあ、頑張ってみるんですけどね。来週くらいに送ります」

まあ、本当に駄目だったら諦めますけど。

それより、アレはもう売ってしまったのでしょうか。

いつもならここ辺りで口出しをする剣が一口あるはずですけど、

「娘っ子だな、まだ来たか？」

なんだ、まだ売れてませんね。

「こんにちは、デルフさん」

わたしは飾られた商品の棚の下に放り出されている一口の剣を持ち上げました。

刀身がすっかり錆びてしまったこの剣は誰にも見向きされないから飾られていませんね。

鰐もガタガタしているし、まるで演劇の小道具のために作られたみたいです。

「おう。そつちも元気でやってるみたいだな！」

「もちろんです。元気だけが取り柄ですから」

「はは、おめえは愉快でいいな。」

「いえいえ、それほどでも」

名前はデルフリンガーです。巡洋戦艦です。凄く強そうです。名前だけは。

「どうだ。今日こそ俺を買いに来たか？」

「え、気持ち悪いし嫌ですよ」

鰐がガタガタする剣なんて要りません。

よく切れそうもないし、何よりわたしには剣なんて要らないのです。

「ぐわ、相変わらず可愛げはないな。人の心がないからか？ そ

「なんじゃ男もつかないぞ？」

「そちらこそ全く失礼な剣ですね。あと、男はこちらから願ひ下げているだけですよ」

「^{ツルギ}剣って言うのは元から失礼するための物だぜ。人を刺す礼儀つてのがあつたらまた違うけど」

さすが、^{嘲る者}ザ・フリンガー。よく分っていますね。

「店長」あれ用の口輪はまだですか」

「それが…、はめても勝手に外してしまうから…。一応鞘に入れておくと黙らせます」

手もないのに、どうやって？

「器用な剣ですね。いつそ溶かして『あゆ』の足しにしてくれませんか？」

「やってみる！ どうせこの世にやもう、飽き飽きしてたところさ！」

「あはは、出来ないと思ってますか？ キュルケさん、ちょっとこっち来て下さい」

まあ、買うつもりはないけど、もし売れていなくなったらさびしいかもしれません。

末永く、このまま店の看板剣(?)をやってもらいたいです。

「あかんべえ、テルフさんのなまくら。一生、蔵でカビの友達と住んでいなさいな！」

「はん！ 今日はなんかいい感じがするのさ！ 使い手に買ってもらってこんなところ、さっさとサヨナラしてやらあ！」

まさか、だれも買わないって

デルフさんを買いたいと思うモノ好きがいるはずないでしょう？
だから、ずっとそこでわたしを待っていて下さい

十一話 虚無の曜日（上）（後書き）

「外出許可」

当直の先生に申請すれば貰えます。

外出許可書がないと馬屋から馬を出してくれません。

使用人たちはマルトーさんに貰います。

こっちはみんなが集まって一つの馬車に乗ってトリスタニアに行きます。

「聖なる悲しみ」

ピエタ《慈悲》。即ち慈しみ、悲しむ。

十字架から下ろされたキリストを抱きしめる聖母マリアの絵の名称です。

泣かない彼女の代わりにその青い服が泣いているみたいに感じてしまいますね。

「希望の鳥」

メーテルリンクの『青い鳥』

チルチルミチルが探していた幸福は家の中にありました。

「被害者のふり」

ロテシアはヴィリエが狂ってしまったことを含めて全てが自分の体質の所為だと思い込んでいる。

「やりこみ用キャラ」

どうせ真冬は、お姉ちゃんが加入したら即座に馬車に送られちゃうようなキャラなのです。

「トレド」

スペイン南部の都市。現在世界文化遺産。

12世紀の翻訳グループによって多くのアラブ、ギリシア語の本が翻訳されました。

「カノネ・メデイキナエ」

かの有名なイスラムの哲学者、イブン・スィナーの『医学典範』のラテン語タイトル。

トレドで翻訳されました。翻訳者はゲラルド

「始祖が持つ槍」

その本の翻訳者であるゲラルドはノルマン語で『槍で支配する』という意味です。

「山葉堂のキャラメルクリーム掛け蜂蜜練乳ワッフル」

茜さんが絶賛したあのワッフルのアレンジバージョン。

菓子のミルフィーユはフランス語で『千葉』。モンフィーユは作者の造語です。

「デルフリンガー」

言って置きますが巡洋戦艦の『DERFFLINGER』の発音は『デアフリンガー』です。

でも綴字が同じだし、使ってもいいじゃないかなと思って…。

えっと、この言葉はドイツ語です。

『DER』は『THE』に当たる冠詞で、『FLINGER』は『嘲る人』を意味します。

もちろん自己解釈なので…、『FLING』は光などを放つという意味もあるのでもしかしたら『光を放つ剣』かもしれませぬね。そうだったら格好いいな。

「筆者」

本当に一週も掛けてしまいました。

皆さんは元気に過ごしてましたか？

私は雨漏りする屋根を修理しました。何せ古い家なんで手が掛ります。

えっと、量も多くなかったですよね…。

でも、しばらくはこんなペースで更新していきます。

日曜日の午後五時には投稿しますのでこれからもうかがいます。

十一話 虚無の曜日（下）（前書き）

「デルフリンガーってぼろいな……」

「今はボロ剣になっているが、昔は凄かったぞ？」

「そうか？」

「そうさ！ 昔の俺の四刀流は恐怖の代名詞だったのさ。俺の手に生を終えたゼダイ騎士が……」

「ストーリーッブ！！」

十一話 虚無の曜日（下）

今日は俺がこの世界に来て迎える三度目の日曜日——違った、虚無の曜日だ。

ここの暦によると一週は八日になるので、休日も八日に一日だ。少し損している感はないが…。

でもここ最近毎日がとても忠実しているし、そこまで辛くはない。正直に白状すると、ここの生活ってすごく面白いんだ。

昨日なんてランドリールームでアイロンかけの仕方を教わったんだ。

もちろん電気のアイロンなんかここにはいない。だからランドリーストープを使ってアイロンを温まるんだ。

洗濯とアイロンかけをするランドリールームにはずっとストープに火がつけられっぱなしで、夏になると蒸して気絶するほど暑いらしい。

それにもう一つ辛いことがある。それは蒸気だ。

作業台の横にはボールがあつて、そこにいい香りがする花と水が入っている。

それに手を浸して、濡れた手を服の上から軽く振り、水を撒くんだが——そうしないと服が焦げてしまうらしい——アイロンをかけるとそれがそのまま蒸気となって部屋の湿度をあげるんだ。

部屋の真ん中のストープもあつてサウナの雰囲気だ。

まだ春で涼しいはずだけど、その蒸気には参ってしまった。

長風呂でのぼせた感じになって、へろへろと外に出れば、森から吹いてくる風が気持ちよくて叫びたくなった。

時々にはかやらない俺には面白く感じられる作業だけど、あれが仕事となつて毎日やらされるとさすがに辛くなるはずだ。

そんなことを考えればそのメイドたちには感服する。

今日は休日だし、ランドリールームの人たちも今日くらいはあの灼熱地獄から解放されるのだろうか。

そうであつてほしいな。俺よりあの人たちが休むべきだ。

それはさておき、最初はこの日――虚無の曜日が休日である事をしらなかった。

授業がない休日は、朝食時間も平日より遅くなるし、皆も起きるのが遅くなるんだ。

でも、当然の如く、俺がそんな事を知ってるはずもなく、いつものように朝日の昇る頃には起き、制服を用意してルイズを起こした。この時に気づくべきのルイズは寝ぼけていたらしくて俺にされるがまま登校の支度を終えて朝食を食べに食堂に向かつたんだ。

『あら、虚無の曜日だつて言うのに早いわね』

『あ………』

そこにはキュルケがいた。

よく知らないけど、トリスタニアに外出しなければならいらしくて早起きしたみたいだった。だから広い食堂で一人、メイドの給仕を受けながら食事をしていた。

ルイズは『そ、そうよ！ 規則的な生活が大事だわ！』とか言つて誤魔化そうとしたけど、結局寝ぼけていたのがばれてしまい、恥ずかしい思いをしたのだ。

そんな時のキュルケは本当に容赦がない。気の毒に思えるほどからかい転かすのだ。

『えっと？ ルイズ、俺は本当に知らなかったんだ。消して恥をか

かせたくてやったんじゃ……』

『分ってるわ……。あんたがなんも知らないってことに気付くべきだったのよ……』

部屋に戻っては、ベッドに潜り込んでしまったし、俺が謝っているのにもかかわらず目もあわせてくれなかったな

言葉では自分に非があるように言っただけど、アレって確実にすねていたのだと思う。

とりあえず、話し合いで機嫌をとろうと——とばかり受ける前に——布団をはがしたけど、蹴られた。そして床に倒れて悶える俺をほったらかして不貞寝したルイズだった。

あいつの右足は世界を狙えるぜ。息が止まると思った。いや、一瞬本当に止まった。

横隔膜のところに後ろ蹴りが決まると、息ができなくなるってことを学習した日だった。

でも、今度の休日はちょっと違う。

ルイズ曰く、俺は見聞を広める必要があつて、その一環としてトリストニアを見に行くらしい。

ついでに必要なものを買って、俺の剣もかってくれるみたいだ。

生まれて今まで銃刀法があつた国で生きて来た俺には『自分の剣を持つ』という思考さえ無かったわけだし、これはルイズの意見だった。

なぜそうなったのかを説明するためには、話を昨日の夜までに遡らせなければならない。

□ □ □ □ □ □

夜のことだった。

いつものように魔法の練習を終えた——あくまで終わらせたのは俺であって、ルイズはもつとやりたいと駄々をこねたけど——ルイズはネグリジエ一枚でベッドに腰を掛けていたんだ。

窮屈らしくて下着は履かない。

ルイズとは少し離れたところにいた俺だけど…、女の子って何でそんなにいい香りがするんだろう、目の前がくらくらした。

風呂上がりのルイズはオープンから出したスポンジケーキみたいに甘いにおいを漂わせていた。

その香りと、適度に温められたルイズの体から伝わる暖かさの所為で無性にときめいてしまう。

アンニュイな感じの半閉じ目で足をジタバタしているルイズに背を向けて、俺は習字の勉強に余念がなかった。

ごめん。雑念はバリバリで、むしろ静めるべく勉強していました。嘘、よくないね。

習字って言っても、学校の英語勉強のような難しいもんではなかった。

日本人って基本的に漢字混じりと云う超々難しい文字生活をしているじゃないか？

それに比べて音素文字の三十個はとっても単純だ。何せ小学校の一年生が覚える常用漢字の数の半分もない。

問題はそこじゃない。

字だけは簡単だけど…、発音と表記の違いが想像を絶するんだ。歴史の長い言語に表記の揺れがあるのが当然だけど、ここはそれ

を正す作業が行われてないから歴史的な文字使いがなされていて難し過ぎるんだ。俺、学校でも古典は嫌いだった。

幸い、俺は何となく話を理解しているから——なぜかは聞かないでくれ。俺も知らん——それを基にして字の書き覚えをしているんだ。

『あなた、ちょっとすごいわ』

『急にとうした？』

『一週でほぼ全ての字を覚えただじゃない。「学校」に通っていたことが本当かも知れないわ』

『紛れない事実だ』

実はただ字面を覚えただけだが。作文とかはできないし、そしてスペルがあっているかも分らない。

『スケベそうな顔しているから、馬鹿だと思ったわ』

『すげえ遠慮なくズバリと言っただな！』

『主人が使い魔に遠慮してどうなるの？』

俺が使っている練習帳は…、砂だ。

四角い容器の中には細かくさらさらした砂が入っていて、それに木のペンを使つて字を書いては消すことを繰り返していた。

『ねえ、サイト？』

『やかましい、今は忙しいんだ。後にしてくれ』

『…、尊大な使い魔に蹴りと鞭、どっちがいいと思う？』

『すみません。調子に乗ってました。何なりとお申し付けください』

練習帳に蓋をして、教本と共に藁束の下にしまった。

ルイズも改めて何か言いたいことがあるみたいだし、ふざけるのもほどぼとにしないとな。またすねたら困るし。

一度つんつんするのが最早、約束になってきたな。新鮮味もないしこれからはやめよう。

『サイトは、剣士でしょ？』

『何でそう思うんだ？』

『だって、ギーシュと戦ったとき本当に凄かったから……』

『残念だがはずれだな。剣なんて持ったこともない。正直に言っとあの時のことだってよく覚えてないんだ』

『覚えてない？』

不思議なことだ。

でもあまり覚えていないのは事実だ。

俺はあの戦闘について詳しく思い出せないのだ。

思いだそうとしたら、急に記憶がぼやけて来て……。

あ、そうだな、ロテシアの質問に答えた後からはほぼ記憶がごちゃごちゃだ。

——健闘を。平賀さん

あの場面からの記憶はまるで夢の名残みたいだ。

外から莫大な量の感情が俺の心を壊す勢いで雪崩れて来たんだ。

体全体は海の底に沈んだようになって、無慈悲な暴力の象徴たる青銅の戦士たちも揺れてみえた。

体は自分の意志を超えて動く。

闘って、勝つ。それだけのために、自分の感情が全て力に変わっていく感じだった。

『ルイズ。ロテシアって精神魔法が特技だったりするか？』

『ちがうわ。今の所ロテシアが使える魔法は『ロック』くらいなの。まして水のトライアングル以上の実力を持ってても難しいと言われている精神干渉なんてできないわ』

『変だな…。ロテシアからナイフを貰って、ロテシアの声を聞いた途端力が暴走する感じだったけど…。』

とにかく戦闘が終わったら、闘う前に抱いていた貴族に対しての劣等感とか、遣る瀬無い鬱憤とかが全部消え去ったんだ。カタルシスといってもいいな。すっきりしてしまった。

だから、ギーシュの奴も凄く可愛く感じれるな。女に振られて気が動転していたんだろう。

他の人に八つ当たりしたくなるのもうなずける。

迷惑だしあまり感心した行動ではないが、まだ俺たちは思春期で難しい時期だし許容の範囲だ。

うん？ 俺つてもとからこんなに寛容な性格だった？ なんか違和感を覚えるが…。

『使い魔として契約したときに、特殊能力を得ることがあるって聞いたけど、それなのかしら』

『そんなのってあるのか？』

『ええ、普通よ。ロテシアのスクスクは『作り出す』能力を持てるようになったと言うし』

『作り出すって、何を？』

『生物が自然で作れる成分はなんでも作られるみたいよ』

何が凄いかよく理解できない。

『……、見本だけあればどんな秘薬の材料でも作り出せるの。魔法の薬なんかすごく高いじゃない？でもロテシアはそれをほぼ日用品のように使っているでしょう？』

そう言えば、ロテシアは消毒薬代わりに水の秘薬を使っていたな。俺はただメルフォゼ伯爵がお金持ちだと思っていたんだが、違うらしい。

『それは凄い。毒も作り出せるかもな』

『ばか、あの大人しいロテシアがそんな物騒なモノを作るはずないでしょ？ まったく野蛮な使い魔だこと』

『まあ、そうだな』

ロテシアは花を愛でる姿が似合うな。

邪気なく笑う彼女が誰かを毒殺するなんて…、

あれ？　なんか似合いそうだ。

何処かで聞いたことのある話みたいな気がするんだが…、なんだかよく思い出せない。

『剣を買ってあげるわ。もしかしたら使えるかも知れないでしょう？』

『……、高くないか？』

『いいのよ。主人を守るのも使い魔の大事に役目だから、必要な装備は主人が用意するべきだわ』

□ □ □ □ □

乗馬？ そんな事できるわけ無いだろう。

だから一つの馬にルイズと二人乗りしてトリスタニアまで来たのさ。

自分よりも背の小さい女の子にしがみついているのは恥ずかしかったが、余裕なんてなかった。

「腰がいてえ……」

「歩いてきたら丸一日はかかるわ。我慢しなさい」

「馬車に乗ったらよかったじゃないか」

そうだ。

俺が不満に思っているのはルイズが馬車じゃ無くて馬を選んだことだ。

でも、そんな事を言ったらルイズが呆れたようにため息を吐いた。

「はあ…、ねえ？ 私はトリステイン唯一の公爵家であるラ・ヴァ

リエールの娘なのよ。あんな馬車に乗れるはずないでしょう。」

「でもな…、そこまで悪い馬車には見えなかっただろう？」

「獅子は犬の餌を奪わないのよ」

「なんだそれ」

「理解できないなら、それもいいわ」

トリスタニアはあまり大きい都市ではなかった。

でも、その異国的な町並みは——まあ、俺が異邦人なだけさ——俺の興味を引くには十分だった。

まるでテーマパークのようで、並んでいる幅の狭い建物の白亜の壁は正午の光を反射して輝いていた。

それはいつかテレビで見たエーゲ海に浮かぶサントリーニ島の街並みを連想させるものだった。

広場には呼び売りの子供たちの声が響き、ワゴンに積もれた商品を売っている商人たちもいた。

果物が多かった。林檎とか、なんか変な形の梨とか、赤い苺とかがあった。

日本では屋台と言えばお菓子の類だったが、ここでは火を使うのが難しいし、砂糖も高いから甘い果物が人気あるみたい。

休日を満喫している大勢の人々があまり広くない広場を溢れんばかりに埋め尽くしている光景はダイナミックに感じられた。

中世だから暗い雰囲気だろうと、先入観を持っていたから驚いたかも知れない。

「道が狭くて歩きにくいな…」

「文句は言わないで。これでもこの国では一番大きい都市だわ」

「そうか。ならしかたない」

「それより、引ったくりに気をつけなさい。財布は大丈夫だよな？」

財布とは金貨がぎっしり詰まっている袋のことだった。牛皮で作られていて——ルイズから聞いた——丈夫だそうだ。現在、この中には二百個の金貨が入っているけど…

「二百エキュートていくらだ。俺が二百週を働いたら出来る金額だろう？ えっと…」

「4年だわ。だから気をつけなさい。私にも大金なのよ」

「ああ、でもこんなに重いのにすられる訳ないだろ」

「魔法があるわ」

魔法？ それって貴族だけ使えるんじゃないか？

「貴族が平民になることはしばしばあるわ。貴族の世界も厳しいわ」

「へえ…、そうか？」

「没落した家門もあるし、勘当された人だっているの。貴族の枠はある程度決まっているから、それ以上に貴族が増えたら自然に淘汰すると思えばいいわ」

「ならば、メイジの犯罪組織だつてあるかもな…」

「なにそれ」

ルイズは失笑した。

だつて考えてみるよ。メイジが隠密行動をし始めたら誰が止められるんだ。

魔法つて攻撃にはいいかもしれないけど、防御には向いてない気がする。

メイジは基本的に貴族だから、警戒任務とかを進んでは思えないし…

「少年の言葉も全然間違いない。最近は色々物騒なんだ。」

「ほらみる、メルフォゼ伯爵も…、っていつの間…！」

驚いた俺たちは後に振り向いた。

そこには飄々した雰囲気伯爵が立っていた。

「「こんにちは、メルフォゼ伯爵」」

「うむ。挨拶は礼儀の始まりだ。きつちりこなせばいいことがある」

そう言つて彼はマントの中から白い飴を出してくれた。

べ、別にこれを期待して挨拶したんじゃないからな？

でも、貰つたものだし？ 食べ物に罪はないし？ ここは素直に食べるのが自然だろう。

俺は口に飴を入れた、不思議な香りと甘みが口の中に広がった。

「伯爵。これの材料ってなんですか？ 不思議な味がするけど…」
「うん？ ああ、それ？ アヘンなんだ」
「ぷぷっ！」
「冗談だよ。ちょっとしたジョークじゃないか。そんなに睨まなくても…」

ロテシアの天然ボケはこの人からの遺伝かよ！！
振り向くと、ルイズはそんなことはどうでもいいみたいで——もしかしたらアヘンを知らないだけかも——飴を美味しそうに食べていた。

「いくらなんでも、そんな事をするはずないだろう。頭を使えよ」
「メルフォゼ伯爵ならやりかねないと思ったんで……」
「うん？ なんか言った？」
「いいえ、別に……」

またあの時の恐怖を味わうのは御免だぜ…。

□ □ □ □ □ □

「犯罪組織のことだが…、その兆候があっちこっちで露見してね。僕も調査しているんだ」

「へえ…、やはりそうだな」
「メイジが犯罪組織なんて！ なんて愚かな者たちなのかしら！」

ルイズは珍しく興奮しているみたいだった。
よくは知らないけど、ルイズにとってメイジは国と世界のためそ

の力を使うべきだと思っているらしい。

理想論だが、俺は嫌いじゃない。

ルイズなら自分の思いに嘘をつかないで、本当に人々のためその力を使うと信じている。

まあ、そのためには魔法を成功させるのがさっきだけど。

「まあ、まだ確実じゃないんだ。ただ、君たちは僕のかわいいロテシアの友人だろ？ だから注意しておきたくてね」

「友人だなんて！」

「おいおい、なんで驚く。違ったのかい？ 僕はヴァリエール嬢がうちの娘の友人だと思っていたが……」

「いいえ！ 全くそんなことはありません！ 友人です！ 親友です！ ラブラブです！」

ルイズはロテシアの事が好きみたいけど……、彼女の周りにはいつもキュルケがいて容易く近づけないと言うか、微妙な関係なんだ。なにせ、ロテシアはルイズのことを『ヴァリエールさん』って呼ぶし……。

それに比べてキュルケ——あのけしからんおっぱいの持ち主のことだが、ロテシアは彼女を『キュルケさん』って呼んでいるんだ。それを聞くと、ルイズは複雑そうな表情になる。

必要なのはきっかけかな。

お互い遠慮している所があるみたいだし、なによりロテシアには一年前の事件の秘密をルイズに話していないんだ。ルイズも素直に聞けばいいのに……。

いつそ俺が調べて二人の仲を取り成してみたら？

おお！ これは名案だな！ 久しぶり点を稼げる機会が来たのか？

緋色の獣

「『ベスティア・コキネア』って名乗るみたいだが…、とにかく君たちも巻き添えにならないように気を付けたまえ」

「はい。分りました」

「任せとけよ。ルイズは俺が守るから」

「ははは！ その勢いだ！ 男はそれくらいでなくちゃ駄目だ」

メルフォゼ伯爵は俺の答が非常に気に入ったようで景気よく笑った。

「あんたが私を守る？ 無理だわ、そんな事。伯爵、自分の身くらいは自分で守れます」

「ちえっ、ちよつとくらい格好つけさせてくれよ。いいだろう？

使い魔が自分の主人を守るって言っているんだ」

「放置したらまた勝手なこととして傷つくでしょ？ もうゴリゴリだわ」

「もう、あんなことはしないって！ ちよつとくらいは信じて見ろよ！」

正直に言って少し傷つくな。

あのとときだつてグラモンと戦って勝って見せたじゃないか。

ボロボロになったけど、ロテシアの力を借りての勝ちだけど、でも勝ちも勝ちなんだ

「あれは偶然と思いなさい。私は別にあんたを闘わせたい訳じゃないの」

「そりゃ…、闘わないに越したことは無いけど…」

「いい？ 剣を買ったから試し切りしたいと言っちゃ駄目だからね？ 貴族は勿論、平民も切っちゃ駄目だからね？ あくまでも自

衛のためよ！」

「俺って通り魔かよ！」

絶望した！ ルイズの俺に対する平価の低さに絶望した！！

「少年、落ち込むなよ。公爵なんて結婚して三十年も経っている末だにいびられてるんだ」

メルフォゼ伯爵が肩を叩いてくれた。なんか心にしみた。
公爵ってルイズの父親のことだな。

「もしかしてルイズって……」

「驚くほど母親似だ。まさにそっくりだ、特に性格」

「公爵ってもしかして聖者とか？」

「僕から見たらマゾなだけだが」

□ □ □ □ □ □

紆余曲折を経て、遂に剣屋に着いた俺とルイズは——伯爵はすぐ何処かに消えてしまった。まったく掴み所の無い人だ——その薄暗い店の中に入った。

「いらつしゃいませ……って貴族の旦那じゃねえか！」

「あんたがこの店の主人？」

店主は古いパイプをかじっている初老の男だった。

煙草を吸い過ぎたせいか痰が絡んでせいぜいする声で、いかにもワイルドに見える人だった。

ただの店主じゃ無く鍛冶職人かもしれない。そんな雰囲気の人だった。

飾らなくても華奢に見えるルイズとのツーショットはまるで美女と野獣——美女は無理か、美少女にしよう——みたいな感じだった。でも、ルイズ特有の尊大な態度のおかげで微妙にバランスがとれている気もする。

「剣が欲しいの」

「おったまげた…。もの好きがまたいたな」

「はあ？ 何のこと？」

「いやはや、とんだ御無礼を…。実は、貴族のお嬢様の中でお客様のような方がありまして…」

「私みたいな人？」

「かなり変わったお方で、農具やらを買いによく来ます」

ああ、なんだかこの店に来て『小さいショベルをひとつ下さい』とか言うあの子の姿が目には浮かぶのだが…。

「それってもしかして…」

「ロテシアでしようね。農具を買う貴族なんてこの辺りじゃあの子しかいないわよ。」

「おめえら、あの娘を知ってるのか？」

——シーン

ルイズは周りをきよろきよろ見回した後、店主に向かっていとも真剣に言った。

「店主。いくらなんでもお前らは度が過ぎるわ。ちゃんと敬意を表しなさい」

「いや！ これはオラの言葉じゃねえですって！」
「ルイズ、本当だよ。店主は何も言っていない」

店主は慌てて『とんでもねえ！』といいながら両手を前に出し恐縮した。

でも、本当に店主の口は動かなかつたし、声も店主の方じゃ無くて剣が飾られている棚の下から聞こえて来た気がする。

棚に近づいてその辺りを見渡す。

そこには剣がいっぱいあって、飾られている剣以外は蓋の無い樽のなかで垂直に立たされていた。

1メートルくらいの剣から、俺の背より長くて太いやつもあった。映画なんかでよく登場する有名な形の剣もあつたし、はじめて見る形の奇妙な剣もあつた。

でも、誰もなかった。

「こつちだよ。おめえらの眼は節穴か？」

「…剣？」

その代り、ガタガタと鏑が動きながら話をする剣があつた。

すっかり錆びついてしまって、ボロボロだったから全然使えそうにない剣だ。

「ルイズ、ルイズこの世界の剣は普通喋るのか？」

「インテリジェンスソードって珍しいものだわ」

「そうさ！俺はデルフリンガー様だ。よく覚えとけよ」

へえ。面白いな。

でもなんで剣がしゃべる必要があるだろう？

剣ってよく切れればいいもんじゃないのか？

俺は剣を使った事が無いからよく知らんけど。もしかしたら戦いの解説とか？

「その通りです。全くこいつとしたら客に失礼なことばかり言うし、おらも困ってしましてね… 最近こいつの所為で商売も調子が悪いですな。」

「売り上げがよくねえのはこの品揃いが悪いからだろ！ 俺に責任転嫁するな！」

「だまれ！ この駄剣。 さっきもメルフォゼのお嬢様にあんな無礼な態度を取つといて！ あのお方に目をつけられるとこのトリスタニアで商売出来なくなるんだ！」

父がほぼ市長みたいな感じだからな…。

でも、ロテシアに限って無礼とかの理由で人を憎むことはあり得ないと思う。

「面白そうだな。ルイズ！ これ欲しいぞ！」

「店主。あれ、おいくら？」

「百エキュで結構さ。なにせ厄介払いですからね。」

「あら、随分安いね」

俺にしては百エキュも普通に働いては先ず手の届かない価額なんだけどな。

それを安いと言うところ、ルイズとの階級の格差を感じる…。
ちよつと疑問があるんだが…、ルイズってお小遣いいくらもらっているんだろう。

「へん！ 剣にも主人を選ぶ権利つてのがあるさ！ おめえみたいな貧弱小僧に買われたら一生を鞘の中で過ごすに違いない！」

「うるさい剣だわ。主人、この口を黙らせる方法はないの？」
「鞘に入れば一応黙るが…」

店主はデルフリンガーが何かを言ったび寿命が縮むらしく汗をダラダラ流していた。

可哀そうだからもうさっさと買ってここからサヨナラした方がいいんじゃないか？

このままだと、この店主は胃薬を買いに行くはめになりそうだ。

ルイズは店主の言葉を聞いてちよつと考えては、こう言った。

「鞘に入れて溶接してくださいな」

「それじゃ俺が使えないだろう！」

さすが、ルイズだ。考え方が破天荒だな。

俺はこのしゃべる機能が気に入ったのに、そんなことしちゃ二度とこいつと話せないだろう！

「…、さすがそんな事をされちゃ困る」

「安心しろ。俺がちゃんと手入れもして長く使ってあげるから」

「おめえでは…、うん？ おめえ。俺を握ってみろ」

「こっつか？」

俺はデルフリンガーを握り構えて見た。

見た目はボロボロだけど、なんだか手に絡みつくような感覚だった。

まるで俺のために作られたみたいにグリップが手になじんだ。

「おでれーた。見損なってた。てめ、『使い手』か」

「え？ 使い手？」

「くくく。ついに出会ったぞ！ あの蓮の娘にからかわれる日々ももう終わりだ。ついに俺も主人が出来たんだ！！！」
「な、なんだか知らないけどおめでとう…」

デルフリンガーは怪しいオーラを漂いながらけらけらと笑った。

「もうちょっと綺麗なものにしてもいいのよ？ 本当にあれでいい？」

ルイズはなんだか気にいらなみたいだ。
平民でも貴族でもないデルフリンガーにどう接すればいいのか迷っているのかも知れない。

確かに、剣としてしゃべる機能は全く無駄だけど、俺にしちゃ気軽に話せる相手が欲しい訳だし。

「ああ、なんかしっくりくるんだ。これにする」

「よし！ これからよろしくな！ 相棒」

「ああ、こちらこそよろしく」

こうやって、俺はデルフリンガーという仲間が出来た。

□ □ □ □ □

「相棒はあの蓮の娘と知り合いか？」

「蓮？ ああ、ロータスで蓮か。 ロテシアの事だろう？」

「ああ。さっきは結局、聞いてなかったしな」

そのあと、ルイズと俺は色々買いものをした。

俺の服——さすがに十日も着ていたからか、キツイ臭いがするの
で服が必要だった。

買ったのは木綿のシャツが二着で、丈夫なズボンが一着だった。
それだけでも2エキュールはかかったし、俺の薄給がどれほど酷い
ものか思い知ることになった。

『ルイズ。平民って貧乏なものだな』

『平民は服を買わないの。作って着るから』

『そうか…、都市って言うのは貴族とお金持ちのためのものだったか』

『不満？』

『そうだな…、どうだろう。』

食事も、服も買ってくれるし、あまり自分で買いたいものは無い
し…。

そして、何よりこうやって街に出る機会自体があまりない気がする。
る。

『まあ、おいおい考える。いつまでもここに居座っている訳でもないし』

『……、うん。そうだよな』

服を買って、軽く食事をした。

食事と言ってもカフェテリアみたいなところでパイを食っただけ
だが。

ルイズは俺のために別の料理を頼んでくれた。お馴染みのライ麦
のパンだった。

…好きだし、構わないけど。十分お腹は膨れたけど。

『パイだけでいいのか?』

『案外にお腹いっぱいになるのよ。パイはバターが多く入るから熱量が高いの』

『で、実際は?』

『…、太るので我慢する』

そして、今はルイズと離れてデルフリンガーとしゃべっている。店の中までは付いて来たけど、さすがに一緒に選べる訳にはいかなかった。

ルイズは全く気にしてないみたいけど、ルイズ以外にも女子が大勢にいて視線が痛い。

「ああ、知っているぞ。同じ学院だし。それが?」

「そうか。ならいいや。別れの言葉もなく消えるのはちょっと気にかかっているな」

デルフリンガーの声は抑揚が不規則で器械みたいな感じだ。もちろん剣だから表情なんてない。

それでも俺には、いまのデルフリンガーが照れているみたいに感じられた。

「仲良しだな」

「今となつてはもういいことさ。『使い手』がなかったらあの子に使ってもらうのが一番だったし」

「ロテシアって剣を使えるのか?」

「使えるように見えるか?」

「まさか。全然」

「その通りだよ」

ならなぜ? 剣としては自分を完璧に使いこなしてくれる戦士の

方がいい主人じゃないか？

確かに口テシアと一緒にいたら気は安らぐかもしれないけど。

「あの娘は、俺と似ているんだ。『使い手』が無いと何もできない」

「え？ 何のこと？」

「俺は剣だからな、言葉ではうまく説明出来ねえ。言葉って言うのは人間が使うものだから。ただそう感じただけさ」

「そう言ってもな…」

「相棒も千年くらい生きてみれば分るようになるさ」

「その前に死ぬよ！」

思わず大声を出してしまつて周りからクスクスと笑い声が聞こえてくる。

これつてすごくつらい。デルフリンガーは剣だから、横から見たら一人でしゃべつてる痛い人だ。

それじゃ無くてもこの店は居心地が悪いつて言うのに。

「はあ…、何しているのよ。遊んではかりいなくてここに来なさいよ。これはどう？」

「下着は自分で選べよ！」

そうだ。ここは女の下着を売っている所なんだ。

いくら洗濯で慣れたとは言うが、これはつらい！

人々の好奇心の視線が痛い！　そしておばさんたちのひそひその声が怖い！

「私よりあんたが持っている時間が長いんだから（洗濯で）意見を聞いているじゃない。まったくもう…」

「紛らわしい言い方やめろよ！」

——ねえ、ねえ、聞きました？ 殿方に預けているみたいだわ。
——まあ！ 大胆。わたくしも五年若かったなら…

うわ…。周りのひそひそする声が大きくなった。

そして、後のおばさん。五年はいくらなんでも無理だろ。二十年は若くなれよ。

「まあ、いいわ。どうせ長く持たないでしょう？ あんたって直ぐ破るし（洗濯で）」

「やめろ！！ 俺のイメージをこれ以上悪くするな！！！」

——破るって！ まあ！ 素敵。若さって素晴らしいわ！

——最近はそんなプレイが流行しているのかしら？ 戻って侍女に聞いてみようかしら。

プレイってなんだよ！！

この時代にもそんな言葉があつたのか！

「何でそんなにツンツンしているのかしら！ 毎晩（寝る時に）下着つけないってうるさいから見に来たのに！」

「うわああああ！！！」

——あの殿方、分つてらっしゃる。通ですわ。

——わたくしはアレ、いやだわ。くっついてべたべたするし。気持ち悪くなるもの

今すぐ逃げたい！

いいや！ 今逃げる！ 回れ右して帰るぞ！

と、思つて後ろに回つたらそこにはなんだか懐かしい顔面が並ん

でいた。

「へえ…。毎晩そんな事をしていたんですね」

「ルイズ、やるじゃない…」

「何のこと？ 私よく理解できなかった」

「後でゆっくり説明してあげるからね？ それより今は…」

ロテシアに、キュルケ、見知らぬ小柄の女の子が一人…。

「「サイト（平賀さん）？ 説明してくれるよね？」（ください）」

「

十一話 虚無の曜日（下）（後書き）

「ランドリールーム」

洗濯室。ランドリーメイドの城。

部屋の真ん中にはアイロンを温めるためのストーブがあります。アイロンに炭火を入れるフラットは西洋であまり使われてないみたいです…。

「ボールの花と水」

森薫さんの『エマ』でみたものです。ラベンダーが入っているって。

そう言えば柔軟剤にはラベンダーの香りが多い気がします。

「みぞおちはだめだな」

痛いですね。もたえますね。

「はかないルイズ」

原作を読みなおしたら発見しました。（七巻の冒頭）ルイズが寝る時下着をはかないみたいです。

「練習帳」

粘土も考えたけど、アレは高そうなのでパス。

「ロテシアって魔法使えるの?！」

ロツクは使えます。コルベール先生の指導（小言）の賜物です。

「水の秘薬」

材料があっても、ロテシアは自分でそれを作れないのでモンモンとかに作ってもらっています。

「獅子は犬の餌を奪わないのよ」

サイトが見た馬車は平民たちがトリスタニアに出かける際に使うものです。

ルイズが乗ると、みんな恐縮してしまうから敢えて乗りませんでした。

「サントリーニ」

死ぬ前に行ってみたい。

「ベスティア・コキネア」

緋色の獣

Vulgate, Revelation, ch17.

「絶望した！」

解説の要らない先生のセリフ。

「筆者」

11500字って…、短くなったしまった…。

毎日少しずつ書いたのを休日で整理して投稿しているんですが、あまりにも没ネタが多くて量が半分になります。

そして前書きのネタって分かりづらいですね。ごめんなさい。

次の話は、フーケとモットーを詰め合わせて幕間にして水曜日に投稿します。もちろん短いです。

本編は予定通り日曜日更新になります。

—話— 終焉の始まり（前書き）

「そして君は見る事になるだろう、愛しのシンクレア。でもこれ
もまた何かの始まりでしかない。」

「——戦争が、はじまる。」

《ヘルマン・ヘッセの『デミアン』より》

—話— 終焉の始まり

（モット伯爵）

王都トリスタニアから西南街道を追い、馬で三日も走った所にその屋敷があった。

このツタに覆われている屋敷こそ、嘗て『西部のエメラルド』と謳われたシャラント子爵家の夏別荘である。

しかし、今ではその頃の面影はもうない。

屋敷は変わらぬままだが、雰囲気はすっかり変わってしまったのだ。

何が変わったか、それは笑い声が消えたことだ。

たったそれだけのことだ。

でも、それだけのことで、この屋敷はすっかりすたれてしまったのだ。

庭には新緑の芝の代わりにヨモギが根を張り、井戸の水は涸れて異臭を漂わす。

ツタの間をすり抜ける風の音は死を告げると云われているバンシ―のすすり泣きのように聞こえた。

かの有名だったシャラントのサロンはどうだ。

詩人、歌人、貴族の婦人、若き騎士たちの話し声が絶える事の無かったそのサロン。

文化の中心地と呼ばれたそのサロンには、独りで取り残されたチエンバロが過去の思い出を無音で奏でているだけさ。

思わず『没落』の二の文字を連想してしまう、そんな惨状だった。

だが、俺はこの屋敷に訪れるべきの理由があった。
客の足なんて絶えていたシャラント別荘では久しぶりの客になる
だろう。

おっと、自己紹介が遅れた。

俺の名前はジュール・ド・モット。

波濤の二つ名を持つ水のトライアングルメイジだ。

自慢ではないけど、俺の特技は流体を操ることだ。

流体を操るためには繊細な感覚が必要だ。

空中を泳ぐコイのように、自然に流体を動かすのは決して簡単じゃない。

トライアングルになってからの俺は、特殊な条件さえ揃えば体の中
の流体もある程度感知できるようになった。試したことはないけど、
直接操ることも出来るはず。

そして…

「シャラント嬢。こんばんわ。」

「……。」

トネー・シャラント。

シャラント子爵の正室から生まれた一人娘であり、魔法学院の学
生でもあった。

だが、今では心神喪失で人の言葉を失い、心を失ってしまった。

彼女には未来があった。

彼女自身は望んでいなかったが、婚約の相手もいた。

子爵は彼女の持参金でこの別荘と、美しい森、多くの貴族がうら

やむ狩場を用意した。

誰もが驚くほどだった。

彼には家督を継ぐ長男がいるって言うのに、自分の領地の一番いいところを他の家門に嫁ぐ彼女に与えるなんて本来はあるまじき行動だったのだ。

子爵はぶっきらぼうな父だったが、それなり娘に対する愛着があったかもしれない。

幼くして母をなくしたトネーに対して責任意識もあつたのか、さもなければ再婚してすぐ生まれた長男にかまってばかりだったことに対する贖罪だったかな。

子爵は娘がいいところに嫁いで、女として幸せな人生を送って欲しいと心から願っていたはずさ。

そんな普通で、どこにでもありそうな貴族の家庭だった。

多分、俺も若き頃に結婚していたらそんな家庭を築けたかもしれない。

でも、幸せと言うのはいつも突然に壊れるものだ。

「火を見つめているな。何か見えるのか？」

「……。」

トネー・シャラントは揺れ椅子に座っている。

その膝には暖かい毛布が掛けられていたが、血色の消えた白い顔はそれでも寒そうに見えた。

暖炉の赤い光を反射する金髪は銅の輝きを放っていた。

俺はそんな彼女に近づく。

そしてその心臓に手を当てる。

——最近の娘は発育がいいな。

そんな事を思いだすほどになかなかの胸だった。
でも、今は趣味活動に邁進する場合ではない。

俺は目を閉じ、彼女の体に意識を集中した。そして体の中の流れを読み始めた。

心臓が跳ね、躍動する血が頭の方に疾走する。力を失った血が体から心臓に戻る。

でも、心臓の奥深く、動かない何かがあった。

一滴の血の塊。

心臓の真ん中であって、一番力を受けるはずのその雫は微動たりもしない。

これだ、これがこの人形の情報の元。『本物のトネー・シャラント』の血だ。

「やはり…。スキルニルだな。史料でしか聞いたことないアイテムだったから、誰も気づかなかったんだろうな。」

「……。」

「ふっ、メルフォゼ伯爵。本当にすごい人物だ。トリスタニアの人の全てを誤魔化すなんて、人間業じゃない。」

「……、メルフォゼ。」

おっと、何の反応もなかったから、てっきり何もしゃべれないと思ったが……。

今まで何の反応も示さなかった彼女の口から言葉が出た。

長い間、沈黙してきたその喉はすっかり乾いていて、女の声には

聞こえないほどカラカラだった。

「この単語には反応するか。もしかしたらスキルニルはオリジナルの心理も受け継ぐのか？」

「……。」

「見れば見るほど、不思議なアイテムだ……。すっかり本人じゃないか。もしかしたら従来のスキルニルから改良したものかも知れないな。」

「……。」

俺はシャラント嬢の前に立った。

暖炉から放たれる光が遮られ、彼女の顔に影が懸かった。

そうしたら、シャラント嬢は顔を上げ、俺の眼を見つめ返した。

「ほかの単語はどうか。シャラント嬢。ロテシアという女の子は知ってるか？」

「ロテ……シア……。助けなくちゃ……。」

「ほう。何から？」

「火。」

「火傷のことを知っていたな……。やはり、そうなるか。もっと詳しく説明してくれないか？」

「……。」

「だめか。まあ、これで十分だ。かなり上出来だ。」

かなりいい情報を手にする事が出来た。

これだけでは足りないところが多いけど、少なくとも調査報告書の誤謬は暴けることが出来る。

「しかし……あの男は妙だな。どこからこんな情報を仕入れたのだろう……。」

「……。」
「なにより、トリステインでは風のスクエアなんて片手も余るのに……。」

風が盛んだアルビオンならいざ知らず、このトリステインでは風のスクエアなんてほばいない。

俺が知ってる範囲では、ワルド子爵くらいだ。

俺は先日訪れた奇妙な訪問者を思い出してみた。

とても危険な香りがする男だった。まるで地獄から這い出たみたいな……。

今から思い返してもぞつとする何かを持っていた。

その奇妙な招かざる客の彼は突然自分の部屋に現れた

偏在だった。それも恐ろしく精密な偏在で、存在感がほば人と同じだった。

伯爵が水のメイジじゃなかったら、もしトライアングルじゃなかったら、気付けなかったかもしれない。

「とにかくいい情報だ。これだけだと伯爵にもみ消され——命を消されるかもしれないが……。」

「……。」

「なに、方法はいくらでもある。まずはメルフォゼ嬢から落として見よう。」

伯爵はマズイ。

あいつを敵に回すのは、いくら俺の手がいいカードがそろっていても無理だ。

だから、もう少し易い相手を選んで攻略しよう。

メルフォゼ嬢か。

聞いた話では絶世の美人だったけど、火傷の事で包帯をしているみたいが……。

多分、偽装に違いない。一年も続く火傷なんてあるもんか。それほど酷かったら、彼女は『すでに死んでいる』はずさ。

「楽しみが増えたな……。先ずはおびき出すことから始めよう。」

小娘から情報を引き出すこともいいけど……。

いつそ、彼女を使い、メルフォゼを手に入れる事もできそうだな。若い娘を賞味できるし、権力も手に入れる。一挙兩得とはこのことか。

前から狙っていた貴重な本を先取りされてしまつて腹が立つていたところだったし、その憂鬱な気分を晴らされてもらつかな。

楽しみだ。ああ、楽しみだな！

「ロテシア・ド・ラ・メルフォゼか。ふふふ、待っていたまえ。俺が君の夫になつてやろう。」

「……、心せよ。」

「はあ？」

今まで口を固くしていたシャラント嬢だった。

でも、今までの受動的な語調とは違い、何かを訴えているみたいな力強い語調だった。

「心せよ。蓮華を摘もうと池に近づくものよ。」

「……メッセージ？」

メルフォゼ伯爵からか？ いや、彼が自分を特定できることをす

るはずがない。

なら、これは死んだトネー・シャラントからのメッセージか？

「潜む氷の獣。王者の氷牙が汝の喉を喰らい尽くす前に……。」

くロングビルく

最近、私には楽しみにしていることがある。

それは何処かの貴族の宝物でもないし、それほど多くない給料でもない。

それは他でもない、アジサイの花だった。

毎朝この鉢植えを窓辺に置きながら、花芽がどれくらい大きくなったのかを確認するのは最早日課になりつつある。

枝の先についている球状の花芽は、まるで青ブドウにみたいだ。

なんで、私がこんなに花を待っているのか不思議と思うかもしれない。

私も去年はこんなに楽しみにしていなかった。
でも、短い三カ月、その間アジサイと一緒に生活してからは考えが変わった。

「ふふ、どんな色の花が咲くのだろうね。」

そう。

このアジサイの花の色が気になってしょうがない。
多分ミス・メルフォゼは知っていると思うが、絶対教えてくれなかった。

本当に、これじゃ待ちきれないかも！

この花は不思議だった。

変な名前もそうだし、同じ株の花なのに、色が赤いのもあって、青いのもあるし、紫の色もあった。

本当に虹の花が咲いたみたいで、感動すらもおぼえた。

そして、花が散った時は…

『あの！ ミス・メルフォゼ！ アジサイが！』

不覚にも目に涙を浮かべながらミス・メルフォゼに走っていたのだった。

今でも恥ずかしかったけど、仕方なかった。

秋でも咲き続けていたので、すっかり一度咲いたら枯れないと思っていたのだ。

そして、もう一つ。

私は冬が始まるにあたって、妹の所に行って来たのだった。

休暇なんて使って無いから、オスマン氏も四の五の言わずに許可してくれた。

もことから、私は担当している教科がある訳でもなかったし…

夢のような旅程だった。

妹は元気だったし、偶にしか顔を出せない不良な姉でも笑顔で迎えてくれた。

子供たちもみんな妹に似ていい子だったし、一緒に迎える朝には妹の美しい歌声があった。

たっぷり幸せを味わってきた私は、ラ・ロシエールに着いてから初めてアジサイのことを思い出した。

そして、そこから学院に戻る間、ずっと不安だった。

色んな事が頭を過った。『どうしよう…、死んでしまったら？』

とか、『大丈夫よ、たった五日でしょう？』とか…。

それなのに、部屋に戻ったら床に青い花びら、紅い花びらが散らかれていて…

急に怖くなってしまった。失うのが怖かった。

その時、わたしが『喪失』と言う単語にどれほどの恐怖を抱いていたのか思い知ることになった。

『花は枯れるものですよ……、永遠の花なんて歌の中でしか咲かないんです。』

『ああ…』

どうやら、私は世界の摂理さえも忘れて生きてきたみたい。

花はいつか枯れる。当然だけど…、それでも心のどこかではこの人なら、枯れるべき宿命の花でさえ咲き続けさせることができるのではないかと期待していた。

『自然に逆らうのは決断していいことはありません。すべての物事には理由があつて、私たちはそれに気づいてないだけかもしれないよ？ だから、むやみに何かを変えてしまうと、そのうちどこかで問題が発生するのです。』

『でも、その自然は人間にとっていいものだけではないかも知れません。それでも従うのですか、ミス・メルフォゼ？』

『いいえ、そのときは抗います。人の名のもとで。でも、勝算のない戦いなんて、自殺願望といった何が違うのでしょうか。』

いつか彼女は私にこういった。

『園芸』とは『自然と人為の闘争』だと。

自然と闘う、その力強さに少なからずの感銘を受けたことを覚えている。

でも、今に思い返すと、それはただむやみに楯を突く事ではなかったみたいだ。

彼女の『闘争』とは私の考えたものより静かで、そして高度の頭脳戦だった。

出来る事を為す。それが彼女の基本原則だったらしい。
そう思うと…

『あなたは…、ほかのお嬢様とは違いますね。』

『そう見えますか？ あちやう、田舎ものに見えるなんて恥ずかしくすぎます。』

『そんな意味じゃ…、ふふ、そうですね。あまり都市の女には見えないかもね。』

『やはりですか…、でも面前で言われると傷つきます。しくしく』

彼女はハサミで、花が付いていた枝を切った。

何枚かが残っていた花びらが散った。

『何をしていますか？ その枝は…』

『一度花が咲いた枝を切り、新しく出た枝から花を待つ。これは剪定の基本概念です。古い過去にとらわれず、新しい希望を夢見る。』

そう言いながら、彼女はまだ小さい枝を指差した。

それは私が育てている間に新しく出た枝だった。期待していたのに全然花芽も付かなくて…。

『アジサイは二年枝に花が咲きます。この枝は今年に出て、まだ花

を咲かせていません。でも古い花が長く居座っていたら株の力が弱まって、この小さな枝は花を咲かせる機会を失います。』

『……、でもあなたは知りません。過去と言うのは簡単に切れる枝とは違って……。』

『同じです。ええ、同じですとも。世界のすべてはとても似ています。』

カチッ。

ぽた……。

『本来は、秋に入る前に花は切って置くものです。大きい花は美しくても、そのせいで枝は死んでいきます。ロングビルさん。何を悩んでいますか。何を苦しんでいますか。もしかしたら、それは今のあなたを縛りつける過去の栄華ではありませんか。』

カチッ。

ぽた……。

『ロングビルさん。何でロングビルですか？ そんなに自分が許せなかったのですか？ 何があなたをそんなに苦しめていますか。』

カチッ。

ぽた……。

そして、静寂が部屋を満たした。

『ミス・メルフォゼ。もしかして私が誰か分っていますか？』

『いいえ、何も知りません。わたしが知っているのはここで秘書の仕事をしている、ちよっとお茶目なお姉さんです。』

『そうですか。ふふふ……、なんだか不思議な人ですね。あなたは。』

『よく聞きます。』

ミス・メルフォゼとはそれからもよく一緒に食事をしたりする。驚きなのは、私より土に詳しいのだった。

匂いだけでも、何処から来たのかを予想できるほどだった。

さすが花園の魔法使い。毎日土と触れている彼女に勝る土のメイジは無いらしい。

「で？ そんな幸せな朝を邪魔するあなたは？」

「ククク…。人って変わるものだな。」

「どうでもいいから、消えてもらえないかしら。」

私の部屋に気配もなく侵入できるもの、すぐ近くでも人のぬくもりがないもの。

偏在だった。

でも、おかしい。ここはトリステイン。

伝統的に水が強い国であるはず。風のスクエアなんてそういないはずなのに…。

「フーケ、土塊のフーケ。なぜ働かない。」

「…。するわ。冬頃に。」

「このぼくがわざわざここまでしてあげたのに、何故動かない。なあ？ もしかしたら、このままここで居座るつもりか？」

思わず「そうよ」と答えそうになった。

ここの心地よさ、もう過去なんて捨てるべきじゃないかと思って
いた最近。

フーケである自分を消すことが出来るなら…。

「ははは！ これだから、女は甘い。すぐ幻想を抱く。」

「……、抱いちゃ悪いの！」

「愚かだ。愚かだ！ 罪の花に実りが出来るとしたら、それは猛毒でしかない。フーケ、虫は草を食べるべきだ。幸せを夢見ても辛くなるだけだ。」

「いつ！ 消えて！ もういなくなつて！」

「フーケ、ゆつくり考えればいい。だがこれだけは覚えていろ。時間はありません。学院の取り調べが始まったら君も無事では済まないだろう……。」

「消えなさいって言ったわ……！！」

わたしは手に持っていた霧吹きを投げつけた。

でも、そこにはもう誰もいなくて、私が投げた霧吹きが壁にぶつかり、水を垂れ流すだけだった。

楽しみだ。

もうすぐ咲くはずのアジサイの花が。

未来の希望が。私でも光で生きていけるって言う希望の色が。

いつか、妹と二人で支え合いながら生きていける、そんな理想的な未来が見えるように。

—話— 終焉の始まり（後書き）

「アンファング・フォム・エンデ《終焉の始まり》」

シンクレールは響きが良くないのでいやです。だから勝手にシンクレアにしてみました。

ヘッセはかなり好きです。ドイツ語をやったのは全部この人の所為。

「Who killed Miss Charente」

まあ、ここまでしたら分りますよね。

でも、彼女とって殺意があったのではなかったのです。

これは事故にちかい。

「アジサイ」

枯れます。そりゃ勿論ですね。

でも、夏花にしては長く持ちますので勘違いしやすいです。

でも枯れます。アジサイが咲き誇る8月くらいになったら花を摘み取り、剪定を行うのがいいと言われています。

「ロングビル」

シギって意味ですよ。

でも、西洋ではシギっていいイメージが全くないですよ。

フランスではシギって言えばベカジンですけど。これは『愚かな女』というふうに使われています。

ドイツ語ではシュネファーと言いますが、これは『売春女』として使われています。

英語でもシュナイプと言えば『煙草の吸殻』ですよ…。

シギがどうしたって言うんだ…。

「アジサイの七変化」

アジサイの色が土によって決まるのはある程度有名ですよ…。

「筆者」

皆さん、こんばんわ。筆者です。

今回は幕間の六千字余りの短文でした。
本編は日曜日で予定通りに更新します。

最近はずっかり秋雰囲気になってしまいました。（もしかして此処だけかな）

季節の変わり目と言うのは何故こうもさびしいでしょうね。

とにかく、あまり物書きに時間を割り出せなくて、クオリティが酷くなっていく一方ですが…。

仕事があるほど片付いたら、一話から見直してみるのもいいかも
って思っています。

それでは健康にお気を付けて、まだ日曜日の本編で伺います。

十二話 二人のラプンツェル（上）（前書き）

『蓮、よく聞いて？』

『絶対、復讐なんて考えては駄目よ。わかった？ この世界の何処かに、あなただけの人がいるはずよ。きっと探し出せるの…』

『息ある限り夢見なさい。希望を持ちなさい。』

『いつか、あなたも、他の誰かに言えるはずよ…。世——美——
——と…。』

「懐かしい夢すね、お母さま…。もう二十年も過ぎた事なのに…。」

十二話 二人のラブンツェル（上）

今日は本当に楽しかったです。

思い返してみれば色々ありましたね。

久しぶりにタバサさんとおしゃべりも出来たし、みんなで食事もできたし。

それにね、何と！ ヴァリエールさんとも偶然に出会ったのです。

なんだか、平賀さんとは楽しい夜の生活を送っているらしいですよ？ ↑違います

私は勿論、心の中で『私のヴァリエールさんを取って行くなんて！ こ、この泥棒猫～～！』とか言いたかったんですけど、仕方ありません。

私は彼女の選択を信じていますから。

ヴァリエールさんほどの人が認めたなら、私に不満なんてありません。

それに、私個人としても、平賀さんはかなりいい人だと思っています。

真っ直ぐな人みたいだし、物腰が硬いヴァリエールさんの態度を和らげるにはいいんじゃないかと思っています。

それでもこんなに悔しいのは私が嫉妬深いからです…。

それにしても、デルフさん！ 平賀さんに買ってもらったんですね。

平賀さんも相当ものの好きですよ……。 あんなボロ剣に百エキューも払えるなんて。

なんだか偉そうに『へへ、蓮ッ娘！ どうだ！ 今日はなんだからいい予感がするって言っただろ！』と自慢するデルフさんはちょ

つとウザかったのです。

とにかく忠実な一日を送った私は程よく疲れて部屋に戻りました。
で、なんだか帰ってみれば…。

「あら？シエスタさん。何でこんな真夜中に…」

「ロテシア…さん。」

「なんだか、酷い顔になっていますよ？ どうしましたか？」

シエスタさんはなんだか顔が真っ青になっていました。

例えば、すごく重い日だったのにマラソンなんてやらされたような顔です。

一言で言つと、死相です。死兆星を見てしまった顔です。

「今すぐ休みましょう、シエスタさん。今日はここで寝るのです。
私と一緒にこのふかふかベッドで寝て、明日は休みにしてもらいましょう。」

「……」

「何があつたのかは知らないけど……。私、力になりますから。」

シエスタさんは時々私と一緒に寝てくれます。

急にさびしくなつて誰かの温もりが欲しい時とか、私は枕を抱えてシエスタさんの部屋に行きます。

使用人の部屋は基本的に相部屋だけど、シエスタさんの部屋は屋根裏の小さな部屋だから——それでメイド長みたいな役職だから、一人で部屋を使っています。

だから、気兼ねなく——ごっそり使用人の宿に入つて、シエスタさんに会いに行けます。

シエスタさんは頑張り屋で、夜でも仕事をしている場合が多いで

す。

針仕事とかが主です。時々私も手伝いますけど、シエスタさんの速度には追いつけなくて、私が一着を終えてる間に、シエスタさんは二―三着は出来るのです。

『不思議と思いませんか？ 例えば、その服の主人です。普通は頭をあげて顔を見つめる事さえ許されない身分の伯爵令嬢の手縫い服を着れるなんて。本当に面白いですね。』

そのあとは、シエスタさんと一緒に寝ます。

私は人より体温が低いので、シエスタさんを抱きしめるととっても暖かいです。

逆に、シエスタさんは夏とかに、私に抱きついたらひんやりして気持ちいいらしいです。

事前にシエスタさんをお願いして私の部屋に寝てもらう時もしばしばあります。

その時はお揃いの寝巻と一緒に着て、ちょっと狭いけど湯船にも一緒に入って、髪の毛を洗ってもらったりします。

私もシエスタさんの髪を洗ってあげます。髪が短いから、そう難しくありません。

私の髪はくせ毛じゃないですか。だから、直毛で真っ黒なシエスタさんの髪は羨ましいです。

シエスタさんの髪はさらさらです。長くして結いあげても綺麗だと思います。

タバサさんの髪の毛も似たような感じですね。でも、タバサさんの髪の毛は細かくて、長く伸ばしたら多分痛むと思います。

そして、一緒に風呂に入るたび思うのですが、シエスタさんは

着痩せするタイプですね。脱いたら凄いです。胸とか、胸とか、胸とか。

「それで何を悩んでいますか？ 聞いてあげますよ？ どんと来いです！」

「ロテシアさん…。」

そして、シエスタさんが私を抱きしめました。
柔らかい胸、暖かい鼓動、心地よい何かが流れて来るような感じ
です。

ちょ！ ちよつと？ 一体なんですか？ なんで？ 今日って私の誕生日？

朝から仲良し友達とお出かけして、ヴァリエールさんとも出会え
たし、夜ではシエスタさんのお抱っこですか？ こんなにいいこと
が重なったもいいのでしょうか…。

うん？ なんかこんな日が以前もあつたような気が…。

「しえすた〜さ〜ん。きもひいいしゆ〜。ふみゃふみゃ〜」

「わ、私。ロテシアさんに…、うっ！」

「むにゅ？」

シエスタさんの腕に力が増してきました。
な…、なんだか少し痛くなってきました。

あの…、怖いので、もう放してくれませんか？

「ごめんなさい！ ロテシアさん！」

「え？」

「わたし、もう二度とここに来れないかもしれません…。」
「!？」

□ □ □ □ □ □ □

「モット伯爵？ 誰だっけ…、あ！ あの変なまゆ毛の人ですね？」

モット伯爵は、宮廷の仕事をしている貴族の一人です。

主に外交と広報です。宮廷の対外仕事を司る人で、偉い人です。
どれくらい偉いかって言うと…、お父さんの政敵と言える数少ない人です。

「……、はい。今日の午前、学院に訪れた時私を見たらしくて…。」
「シエスタさん。本当に行っちゃうのですか？」
「仕方、ありません。私はただの平民で、貴族には逆らえません。」

貴族が若い平民の女を屋敷に連れていくなんて、理由は一つしかありません。

気に入った女を妾にするための口実です。

よくあることですよ…。

若い女子が貴族の男に気に入られて、そのまま屋敷に連れられて男の慰みものになるのです。

それで殆どの彼女たちは子供が出来、屋敷から追い出されます。
金はそれなり貰えるみたいですけど、それじゃ何の助けにもなりません。

なんにせよ、これから彼女らは結婚も出来ずに一人で子どもと生きて行かなくちゃならないのです。

はっ！ 偉い貴族さまたちは汚い花柳の巷の女は抱かないらしいですよ！

だからご自分で汚れを知らない綺麗な平民の女子を探しているって！

本当に酷い。酷いです。あんなクズがいるから『蓮』は……。いや、思い出すのは止しておきましょう。『蓮』はもう死んでいるのです。その人は私じゃありません…。

とにかく、ハッピーエンドを迎えたとの話を未だに聞いたことがあります。

私の大事なシエスタさんを使い捨ての慰み者にしようとするなんて…。

許さない！ 絶対に許さない！

「私がモット伯爵と談判をしてきます。」

「そんな！ ロテシアさん、いいですよ！ 私はそんな事を頼みたくてここに来たんじゃありません！ ただ、もう会えないのが辛くて！ 悲しくて！」

「駄目です！ 私は認めません！ シエスタさんは素敵な人に出会えて、タルブの故郷に戻って、ブドウ園をするのです！ そのため頑張つて来たんじゃないやありませんか！ お金だつて溜めていたんじゃないやありませんか！」

「ロテシアさん…。」

「いやです。そんな不幸が待っているだけの未来なんて…。」

不幸を乗り越えたら、そしたら輝く何かがあるんじゃないかな。『蓮』はそんな考えをしていました。

だから、組織に戻ったし、復讐のために殺して、殺して、殺したのです。

でも、その先には何もなかったのです。結局、殺人鬼になっている自分の醜さに気付いただけでした。

もちろん、後悔はします。でも、私がその時に戻るとしたら、また同じ選択をすると思います。

だからこそ、シエスタさんはそんなくだらしない泥沼に落ちてもらいたくありません。

綺麗な未来を掴んで下さい。汚れを知らないまま生きて、陽だまりの中を歩んでください。

『蓮』のお母さまに出来なかった、『蓮』に出来なかったそんな理想の未来を見せて下さい。

「行きます。旅装を調べてください。」

「でも……」

「大丈夫です。それでも私は次代のメルフォゼ伯爵ですよ？ 話し合えば十分に分ってもらえるはずです。」

「あ。」

シエスタさん？

なんで『そうだったんだ』な顔しています？

「そう言えばロテシアさんって、偉い貴族でしたよね！ メルフォゼ伯爵令嬢でしたよね！」

「いままではどう思っていたのか興味あります……。」

「いつの間にか、ロテシアさんをただの妹と思っていました。」

「酷……って、むしろ喜ぶ場面ですか？」

とにかく行きましょう！

あの腐った根性を修正してやるのですよ！

□ < > □ < > □ < > □

マシユマロは子どもにとって魅力的な菓子だ。

それを食べる子供たちの顔はまさに『これ以上の幸せはあるはずがない』とでも言っているようだ。

何処かのある人はこんな実験をしたそうだ。

先ずはマシユマロを子供に一つずつ与えて部屋を離れる。だが、部屋から離れる前にこう言うのだ。

『これを食べずに待つてくれたら、私が戻った時、これの二倍のマシユマロをあげよう』と。

その実験の結果、子供たちは二つの部類に分けられたと本は語っている。

待つことが出来なかった子供と、待つことが出来た子供。

実験者は、こう結論を出したそうだ。

『待つことが出来た子は偉い！ こいつらはきっと成功するはずさ！』

でも、おれはすこし不満を感じた。

なぜなら、待つことは決して辛いことではないからだ。

何かを楽しみにしている時、それを待つのはまさに夢心地だ。至福の一時と言える。

俺は本を買う時も、決して自分で持ち運ばない。必ず後で配達されるようにする。

それによって俺は『待つ幸せ』を楽しめる。

だから、今の俺はその至福を味わっている。

「伯爵さま、学院からの連絡です。メルフォゼ令嬢がここに向かっているようです。」

「ふふふ。そうか。計画通りに動いているな。そのほかの人物は？」
「無かったようです。」

「そうそう。一人で来るなんて、予想した以上だ。愚かだな…、ここが獅子の口の中だと知らずに…。」

本当に、上手くいつている。

全てがああ男が言った通りだ。

メルフォゼ令嬢には寵愛するメイドがいるから、それを口実にすると、確実におびき出せると。

何物かは知らないけど、助かった。これで、彼女は自分の足でここに訪ねたことになる。

『貴様の狙いはなんだ。俺にこんな情報を与える意味は？』

『かははは！！俺はただ、愛しのロッテの苦しみに満ちた顔が見たいだけさ！』

『…、変わった男だな。』

『ふふふ…、あんたは真実の愛をしたことがあるのか？俺はあるさ！今でも現在進行形だ！』

月目の男。

深緑の左目がとても印象的だった。

まるで魔力を奪いとっているような、不思議な瞳だった。

そして、吸い込まれている魔力の代わりに、その狂気に満ちた感情が溢れだしている、そんな男だった。

「みんなに伝える。お客を迎える用意をする。分ったな？」

「はい。もうすでに兵力を回しておきました。」

「よし。雇われのメイジは？」

「火のラインが一人、水のラインが三人、風のラインが一人。詰め所で待機中です。」

「五日で全てが終わる。それくらいあれば世間知らずのお嬢様なんて直ぐ落ちる。ふふふ……」

あの男からは多くの情報を貰った。

正直に疑わしい。でも、情報とは本来、百パーセント確かなものなんてないものだ。

ハイリスクにハイリターン。そんなものだ。

『だが！ メルフォゼ伯爵が知ったらタダで済まないぞ！ あいつは化物だ。』

『それは僕が何とかしよう。五日くらいは足を止められる。』

『……、本当か？』

『彼は俺を殺したくて随分躍起になっているのさ。ちょっとぼくの存在を仄めかすとすぐ食いつくはずだ。』

全てはうまくいく。

そうだ、俺が玉座の後ろに立つその日も遠くないさ。

□

< >

□

< >

□

< >

□

「ロテシアさん。あそこに見えます。」

「へえ…、なんだか命の気配が少ないですね。不思議な屋敷ですよ。」

モット伯の屋敷は学院から歩いて一時間。馬車で来たから三十分も経ちませんでした。

夜中に馬車を出すのにちよつといざこざがあつて、御者の爺さんにチップをあげてから、ようやく出発する事が出来ました。

いざこざで何分間かつたし、用意するまで一時間もかかって、結局部屋から出てここまで来るのに二時間近くかかりました。

それで着いたモット伯邸でしたが…。

なんだか変な雰囲気です。中の様子を見たくて近所の植物とリンクしようとしたけど、なんだか誰も答えてくれません。

おかしいですね。普通は屋敷に庭とかあるはずなのに…。

「止まれ！ 御者は降りろ！」

正門に近づくと門番さんが誰何をします。

なんだか、軍のような誰何です。どこかで兵役の経験があるひともかもしれません。

「御者、顔が見えるところまで来い！」

「ロテシアさん…。なんだか警備が森厳と思いませんか？」

「最近は何騒ですか？ なんか怖いです。メイジの盗賊がトリスタニアの近郊で活躍しているとの話です。」

「協力に感謝する。屋敷の中ではこちらの御者が馬車を受け持つ！」

「へえ、徹底していますね。」

「ロ…、ロテシアさん。なんだか怖いです。」

「いまだき王宮でもないのにこんな誰何する所はありませんからね。」

でも、ちょっと我慢しましょう。」

それにしても本当に森厳ですね。

モット伯爵が軍の出身なんて聞いたことのない話ですけど…。やはり、物騒な世の中になってきたのかもしれない。

その時、馬車の扉をノックする音が聞こえてきました。

私が窓を開けて見ると、完全武装した一人の兵士がいました。

「何のことですか？」

「大変申し訳ないのですが、ここからはこちらの人が馬車を御することになりました。」

「いいですよ。うちの御者には休んでいなさいと伝えて下さい。」
「理解と協力、誠にありがとうございます。」

窓を閉めると、馬車がまた動き始めました。

カタカタと馬の蹄の音が静かな夜に遠くまで響きます。

「ロテシアさん。うまくいくのでしょうか。」

「大丈夫です！ うまくいきますとも。」

「変な胸騒ぎがします。ロテシアさん。」

「安心して下さい。モット伯爵とメルフォゼは同等な関係です。その娘である私が直に頼むとよほどのことがない限り、大丈夫なはずですよ。」

そういうわたしも、実は少し怖いです。

わたしは今まで一度もほかの貴族の屋敷に訪れたことがありません。

上辺では何でもないようにしているけど、実はかなり緊張しています。

広い庭を通り、馬車は建物のまえで止まりました。
なかから、さっきの門番さんのように武装をした使用人が出て来て、馬車の扉をあけてくれました。
シエスタさんが先に降りて、そして手を上げ私が馬車から下りるのを助けてくれます。

赤いカーペットが敷かれている玄関でした。
扉の両柱に油のランプが燈されていて、静か光が揺れています。

「メルフォゼ様。いらっしゃいませ。」

執事なのでしょうか。

でも、腰に杖をぶら下げています。

微かに感じられるマナの匂い、この人は水のメイジみたいです。

「えっと…、モット伯爵と会いたいのですが…。」

何で、メイジが執事の格好をしているかな？

「お館さまなら書斎にいらっしゃいます。」

「なら、そちらに案内して貰えますか？」

「はい、勿論です。」

腰に剣をぶら下げている使用人が前に立ち、みちを案内して、執事さんは私の右側で歩きました。

そしてその他でも後ろから二人の使用人が付いてきています。

「あの…、何で屋敷の中の使用人までみんな武装を？」

「最近フーケがトリスタニアの近郊で出没しているから、警備に万

全を期しております。」

「そうですか……。でもこんなでは、まるで連行させられているみたいで、不愉快です……。」

「申し訳ありません。昼は普通のメイドたちがいるのですが、夜では武装するように言われていますので。」

「はい……。」

周りを見回してみます。

でも、鉢植えはともかく、飾られた花さえありません。

一年間、頑張つて来たおかげで学院ではもう私に死角なんてありません。

でも、ここに来ると、何も聞こえないし、見えない。思わず体が震えてきます。

武装している使用人たち。植物一つない屋敷。

そして……。どう思っても待つていたとしか考えられない人々の態度。

……。もしかして、わたし罠に嵌まりました？

□ < > □ < > □ < > □

月曜日——違うか、ユルの曜日だった——はだるい。気が緩むからユルの曜日か……。

月曜病がここでも健在だ。そして、俺は昨日十分に休んでないから余計にだるい。

いや？　むしろ平日より疲れた一日じゃなかったか？

女が三人集まって姦しいと言うが、とにかく男の俺には疲れる一日だった。

もし家に帰って、友達にこんなことを言ったら多分『美少女三人を侍らせるなんて！　なんて羨ましい奴なんだ！』とか言われるかも知れないけど。

ああ、思わずあくびが出てしまったじゃないか。

「休日過ぎの朝は本当にだるいな」

「つべこべ言わない。剣も買ったし、よかったじゃないの。それで素振りでもしてみたら？」

それに比べ、ルイズはいつものように凜々しくて、偉そうだ。背はちっちゃいけど。

俺は馬に乗った後遺症で腰が痛くてたまらないのに、こいつはけろりとした顔だ。

俺としては戻る時、タバサ——あの青髪の小柄な女の子の名前だ——の使い魔の風竜に乗りたかったけど、ルイズが遠慮してしまったんだ。

『なんでだよ』とか叫んで抗議したけど無駄だった。

『俺だけでもあっちに乗せてくれ！』と哀願したけど無理だった。

『ルイズはそんなに俺と離れるのが嫌か？　もしかして君、俺のこと……。』は話が終わる前に蹴りをくらった。

こいつきつと魔法が出来ない代わりに格闘技を習ったに違いない。ほれぼれするほど綺麗な回し蹴りだった。その小柄の体の何処からそんなに力が湧いてくるのか知らないけど、蹴りをくらった時、

俺の足が地面から一瞬浮かんだのだ。

「……、いや仕事もあるし、遠慮するよ。」

「やはり、素振りではもの足りないかしら。でも人を襲ってはだめよ？」

「しつこいな、そのネタ。もうやめろよ。」

昨日一番俺を困らせた張本人であるルイズは疲労なんて吹っ切れたようだ。

君の所為で、下着屋では本当に酷いことになったと言っのに…。

ルイズ：『さつきもそう！（乗馬で）腰が痛いからって自分はまだ立っているだけだし！ 私だけ忙しく動いていたし！』

サイト：『最も大事な単語を省略するな！ もう卑猥にしか聞けない！』

ロテシア：『もうやめてあげて！ 平賀さんのライフはもうゼロですよ！』

サイト：『おい！ そのネタ何処から聞いた！』

キュルケ：『面白すぎ〜！！ ねえねえ！ あんたらいつもそんなことして遊ぶの？』

サイト：『君は笑い過ぎなんだよ！ そして、いつもこんなことやってられるか〜！』

タバサ：『（乗馬）なれないと腰が痛むのは当然。慣れてる人が頑張るしかない。』

サイト：『君も何にもないように話に合わせないでくれ！』

ミ・マドモワゼル：『こんなんじゃ、尻に敷かれるわ。しっかり

頑張りなさい。男の子！」

サイト：『うわっ！ 誰だ、このオカマは！！』

そんな具合のコントを延々と繰り返していたんだ。
こりゃ、疲れてもしょうがないだろう。なあ？

でも、ルイズはワザとそんな事をしているように見えなかった。
本当に性の知識が無いのかもしれない。その小柄の女の子もそう
だったし。

それにしても意外だったのが、ロシアだ。
てつきり何も知らない純粹少女だと思っていたのに、むしろその
なかでは一番耳年増だったみたい。

後になつては、おばさんサイドに行つてしまつてキュルケも顔を
赤くするほどの猥褻トークを楽しんだのだった。

本当…、女つて怖い。

「だって、あんたは貴族にも喧嘩を売る生粋の狂犬でしょう？ 主
人としては心配で、心配で…」

「もうしないって言っているのに…。もうちょっと信用してみろよ。」

「信用はしているわ。発情した雄馬の理性ほど。」

「全然信用してないじゃねえか！！」

□ □ □ □ □ □ □ □

「え？ シエスタさんが他の所に行った？」

「そうだ…。畜生、これだから貴族って奴らは…。」

食事のあと、シエスタに会いに来た。

厨房はいつものように賑やかだったし、人たちは忙しく働いていて、話しかけるような雰囲気ではなかった。

少しくらいぼうつと厨房の入口で立っていると、幸いにもマルトーさんが俺に気付いてくれて、厨房の中へと入れさせてもらった。

マルトーさんはすぐに人を使って賄い料理とは思えないほどの豪華な食べ物を用意してくれた。

まあ、今日も食べ物が少なくなつて腹が減っていたし、助かるけど。

「何処に？」

「王宮勤めのモット伯爵って人だ。」

「伯爵、偉い奴だね。」

「ひゅ……、この話はもう止そう。結局、私たち平民は貴族のいいなりに生きるしかないってことだ……。まあ、今回はどうにかなりそうだけど。」

マルトーさんはそれだけを言い残し、自分の仕事に戻った。
考えたよりはそつけない態度だった。

「シエスタ……」

俺は彼女の笑顔を思い浮かべた。

そして、親切丁寧に仕事を教えてくれた彼女を思い出した。

彼女はこの世界で一番私に気を使ってくれる人でもあった。

ルイズとは主従関係だった。もちろん、彼女はいい子だし、可愛いし、声を聞くと落ち着く。でも未だに打ち解けない何かがあった。ロテシアとはよく知らない。時々出会うけど、彼女は俺よりルイズに関心があるように感じられるし、そして何処となく大きな秘密

を抱えている。

その点から見ると、シエスタの存在は俺にとって唯一の同等な関係だったかもしれない。

何も知らない俺に色々な事を教えてくれた。綺麗な黒髪はノスタルジアを安らげて、その綺麗な瞳は自信を与えてくれた。

「会いたいな。行く前に挨拶くらいはしてほしかった。」

出会いと言うのは、いつか別れが訪れるってこと。会者定離。

でも、この別れは間違っただけだと思っただけで、もう一つの俺はこの別れを拒否したかった。

せつなく友達となれる人がいたのに、こんな形で別れるなんて…。

でも、この時点での俺はまだ事件の深刻性に気づいてなかった。

□ □ □ □ □ □ □ □

その日の夜、俺は朝厨房で聞いた話をルイズにした。

そしたら、ルイズは『そうだったの…』と言って何かを納得したみたいだった。

「相棒、そりゃあのメイドを妾にするってことなんだ。」

「妾って何だ？」

「馬鹿？ 馬鹿なの？ ねえ、馬鹿でしょう。」

「相変わらずの酷い言われようだな。」

「本妻以外の女、情婦の事さ。相棒はそんなことも知らなかったか？」

いや、知っている。

知識としては知っていたけど、理解できなかったただけだ。こんな時、俺はここが異世界だって事を想起する。

日本では、妾って言葉を使う場面ってドラマでしかない。だから俺は混乱していたんだ。

「じゃ！ シエスタは…。」

「多分モット伯爵の妾として生きるか、それじゃないと直ぐ捨てられる…。そんなはずよ」

「おい！ そんな事が許されていいのか！」

思わず大声でルイズに怒鳴ってしまった。完全に八つ当たりだった。

でも、誰かに吐き出さないと心臓が裂けてしまいそうだった。胸の中に火を灯されたような感覚。あるときギーシュと戦ったときに感じたそれに似たものだった。

「仕方ないのよ。そして、平民として貧乏に生きるより妾として裕福な生活を送るのも、まあ一つの生きかたじゃないかしら。」

「そんな……。」

「勘違いしないでちょうだい。私もその事に賛成しているのではないの。でも、あのメイドは私の私有物でもないわ。抗議したくても、名分がないのよ。」

「名分よりは人助けだろう！」

「はあ…、あんたの言ってることは理解しているつもりだけど…。」

ルイズはベッドに横たわった。

いつもの時間より一時間も早い時間だった。

「それにしても、今日一日、ロテシアを見かけなかったわね。」
「あ…、そう言えば。」

「多分、メルフォゼ伯爵の所に行ったのよ。あのメイドを一番取り戻したいと思う人は他でもない、彼女だし。」

「そうだったのか！　なら、シエスタは無事に戻るよな！」

「分った？　何故、私が——ううん、みんながそれ程心配していないのか。」

ルイズはおもしろくなさそうだった。

ロテシアの事が大好きなルイズだから、彼女と一日も会えなくなつたことが身に応えたのだ。

そして、メイドのために頑張るそんな優しい彼女が好きだけど、他の人に優しくするのはやはり気に入らなかったんだ。

「ごめん…、ルイズ。それを先に行ってくれれば…。」

「それを先に言っても、事実は変わらないのよ。もうおやすみになつて。私はロテシア分が足りから動きたくないの。」

「なんだ、そりゃ。」

「もういいでしょ？　結局、直ぐ戻ることになるの。だから明日からも頑張rinaさい。」

「おうよ！　それじゃさっさと寝るか！」

□

< >

□

< >

□

< >

□

「しぶとい嬢ちゃんだな。もう諦める。」
「いやです。」

私はシエスタ。

平民で、女の子です。

「考えて見たまえ。だれもが幸せになれる。ただ君が俺と夫婦の契りを結ぶだけでな。結婚してもこれまでのように学院を通えるようにしてあげよう。存分に友達ごっこを楽しめ。」

「けほけほ…。いやだと言ったでしょ？」

貴族はとっても強くて、平民は弱いです。

魔法の力は――始祖が与えたと言うその魔法の力が人々を二つに分けました。

私はその二つの中で、平民として生まれました。たったそれだけの事で、不満と思ったこともありませんでした。

「苦しいだろう、分るさ。水攻めは苦しいのだ。俺としても、俺の妻となる人をここまでいじめたくはない。」

「気が早いですね…。私はまだあきらめていません。」

「なら頑張ってみたまえ。」

「――！！！」

それが揺らぎ始めたのは、平賀さんが貴族の方に刃向かう姿を見てからです。

今まで当たり前だと思っていたことが、全てぶち壊されたみたいでした。

『下げたくない頭は、下げられねえ！』

『最初からあきらめる事は……、俺だって！俺だって！死んでもいやだ！』

そうでした。伝説イーヴァルデイのように格好良かったです。心地よい胸の高まり。『ああ、これが恋なんでしょうか』とまで

思いました。

私もあの人みたいに強い自分でありたいと願っていました。
メイジだけど、魔法が使えないロテシアさんの代わりに私が強く
ならなきゃ、って思いました。

「それにしても、君の体は治癒の魔法がよく効くな。もう綺麗に治
っている。」

「すごいでしょ…。私って不死身ですからね。怖いことなんて何
にもないですよ。」

「うぬぬ…。」

「もう一日ですね。でも、もうすぐ友達が助けに来てくれます。あ
なたの計画は失敗です。」

でも、無理でした。

私は平民です。サイトさんのようになれるって思っていましたけ
ど、それは勘違いでした。

サイトさんもまた選ばれた人だった。それだけのことでした。

私は弱いから、ただ見ているだけです。平民だから、貴族には逆
らえません。ただ、見ているだけ…。

「いい加減にしろ。この情報が大っぴらになると、君のお友達はこの
国から追放されるぞ！ それでもいいのかい！」

「あなたは、それを公表できませんよ。それを知っているから、こ
こまで私をいじめているでしょ？」

パン――

「痛いですね。平手なんて女々しいな…。」

「口だけは達者だ。ははは。」

「女が扱い易いって思っているその腐った根性を叩き直してあげま

しょう。モット伯爵。」

パン――

「口の中が切れてしまいました…。治して下さい。」

パン――

「左は卑怯です……。泣いちゃいますよ？　へへへ…。」

「大した娘だな。ここまで強がるなんて…。もう俺が手を揚げるだけでブルブルと震えるのに。」

「む……。武者震いです…。」

「まあ、いいさ。俺は少し休む。その間にじっくり考えて見たまえ。いつか君も結婚をするんだし、それは必ずしも恋愛によるものではないはずさ。そうなら、俺の所に嫁ぐのはそう不自然な事じゃない。」

「……。」

「それじゃ、ゆっくり考える時間を与えよう。わかったか？」

それだけを言い残して、モット伯爵は部屋からでした。

ここに残るのはもう、私とロテシアさんだけ。

ロテシアさんがわたしに向かって微笑んでいます。

「泣かないでください。あんな奴に負けては駄目ですよ…。ねえ？」

私は、無力です…。

□ □ □ □ □ □ □

ボロボロと泣いたシエスタさんは殴られ続けた私よりも腫れた目で私を洗ってくれました。

一時間も水攻めを受けているので体中水でびしょびしょです。時々、モット伯爵が私の体をもんだり、叩いたりしながら遊びましたけど、もう感覚なんて無くなったのでどうでもよかったです。

なんだか、変なこだわりがあるそうで、犯そうとはしませんでした。キスさえしてこなかったです。

やったら、舌を噛みちぎって、確実に殺せたけど…。ちえっ。

あゝあ。わたし、本当に弱いな…。いやになってしまいます。

「えうえう…。痛かったです…。怖かったです…。シエスタさん、なでなでして下さい」

シエスタさんはすぐ私をきゅっと抱きしめて、頭をなでくれました。

肩がふるえているのを見ると、また泣いているみたいです。何処からそんなに涙が出るのでしょうか。

あ……。懐かしい幸せ。

なんか、『蓮』の時を思い出します。

その時もお母さまはボロボロになった私を抱きしめてくれました。

今に思っても不思議なことに、私のお客はなんでそんなに加虐趣味の人が多かったのでしょうか。

特に二人で来て私一人を買う人。すごく嫌い。
貧乏なら、来なければいいのに。ケチな人ですね。

でも、痛いのはとてもいやだけど、それが終わったら与えられる
ご褒美が欲しくて——いつもは厳しくて感情を表に出さないお母様
の抱擁が暖かくて、『蓮』はいつもがんばりました。

いくら殴られようが、いくらひどく犯されようが、ぜんぜんよか
ったんです。

それだけが、彼女がお母様からご褒美をもらえる唯一の行動だっ
たから…。

歪な関係。

自分を弄んで終いには売り飛ばした人の子供を愛せるか。

難しい問題ですね。

人々はたやすく母性愛を待ちだして、それでも子供は愛されるべ
きだということかもしれません。

でも、親だつて人。超人じゃない。

大きくなるたびにあの人に似てくる子供を育てることは安くない
はずです。

でも、お母様はそれを克服するためにがんばりました。感情をな
くすことで、少しずつ憎しみを愛しさに変えながら、『蓮』とともに
生きました。

「でも、そろそろ危ないかもしれません…。シエスタさんだけでも
逃がしておくべきでした。」

モット伯爵は未だシエスタさんの重要性に気付いていません。
たかが平民のために私が屈すると、想像すらしてないはずです。

「シエスタさん。巻き込んでごめんなさい。」

タバサさん、キュルケさん。早く気付いて。そうじゃないと、私は…。

「モット伯爵が夫か。いやですね。私は基本的に浮気って事自体が嫌いですし。」

でも、そろそろ覚悟をして置くべきかもしれません。

伯爵の言葉を信じると、父さんは五日も首都を空けているらしいし…。

父さんって馬鹿。何で守ってくれないの。

いくら娘が不死身だとしても、気づかいが足りないです！！！
育児放棄で訴えますよ！

これからは頬にキスしてあげないからね！ 肩も叩いてあげないからね！ ふん！

……。虚しいです。

強がってもシエスタさんが笑ってくれません。

私は人の泣きが見たくて生きているわけじゃありませんのに。

「これから絶対動揺したら駄目です。モット伯爵がシエスタさんに気付いてしまうと、私の負けですから。いくら辛くても平気な顔していてください。」

シエスタさんはまだ泣き始めました。

激しく震える肩は、音もなく鳴咽しています。これはまた疲れる泣き方してますね。

実は私がお姉さんだから、妹を守るのは私の役目ですのに…。シエスタさんは本当に優しい…。

「大丈夫！ きつと私たちは助かりますから。分りました？ 希望を捨てちゃ駄目ですよ。絶望は人を死に導く疾患ですからね！」

だから、私はそんな優しいシエスタさんのために精一杯に強がるのです。

十二話 二人のラプンツェル（上）（後書き）

『死兆星』

アレは、ローマの兵役の身体検査のとき、視力を図るために使った星です。別に、見ると死ぬ星ではありません。

むしろ、ローマの兵はいい職業だったので、皆がやりたくて、見えると嘘をつくこともあったそうです。

「マシユマ口話」

有名ですよ。でも、なんか釈然としません…。

多分、私ならそのまま食べてしまうと思うからです。

「死に至る病」

これはほんの題目であって、キエルケゴールが直接こうだと叙述したわけではありません。

でも、この題目って、本当に傑作です。これほどの作名はそうそういません。

「筆者」

ロテシア、まだ酷いことされています。

最初はモット伯爵も穏便にやりたかったのですが、いまだに少しずつ狂い始めています。

R-18じゃないから、性的な拷問は出来ません。その代り、女にやるには酷い感じの拷問が為されています。そんな設定。

日曜日まで残業する羽目になるとは予想してませんでした。とにかく疲れる毎日です。それではまたいつかで…。

十二話 二人のラプンツェル（中）（前書き）

「だから、こつそり用意して当日に無理やり着せてしまつとロディも仕方なく参加するわ。」

「上手くいくの?」

「ほっほっほ、タバサ、上手くいく?じゃないでしょう?上手くやるのよ!」

十二話 二人のラブンツェル（中）

ロティ学園に送った後、キュルケと私はロティには秘密にしてトリストニアに戻っていた。

「違うわ…、もうちょっと胸の方が深くした方がいいのよ！ スカートも前がこうく開くように！」

「キュルケ、それは違う。多分これであっている。」

私たちはロティには内緒で、ロティのドレスを用意しようとしていた。

採寸は、キュルケが測ってきた。どうやったのかはよく知らない。私が聞いてみると、『いい体だったわ…。それに敏感でね？ 触るたびビクッて怯えるのがたまらなかったわ…。また欲情…、いえ浴場に行く時は誘うからね？』とのことだった。

無性に悔しかったのはなぜかな。

私はまだ自分の感情をよく理解してない。

「タバサってロテシアの彼氏みたいだわ！ 何でそんなに鎧みたいな嚴重な姿をさせようとしてるの！」

「うっ…。でも、そんなのイヤ。ロティをそんな姿で人前に…。」

「タバサは分つてないわ！ 舞踏会にはそれくらいの露出がないと不自然なのよ！」

そ…、そうかな？ で、でもこれじゃ下着が見えてしまう…。

「みんな着飾っているのに、ロティだけ鎧のような重装備で舞踏会に出るのよ？ 目立ちまくりよ？ そしてみんながこう尋ねるのだから！ 『戦にでも行くつもりかしら？ w w w』ってね！」

うう……。

私はどんな姿のロティでも綺麗だと思うだけなのに…。

でも、昨年の舞踏会でのロティはかなり大胆な姿だった。

ロティは小柄だけど、私と違ってしっかり胸もあるし、スタイルいいからこういう服装が好きかも知れない。やっぱり、私だけがお子様？

「だから、あたしたちはロティが恥をかかせないように、出来るだけ露出が多いドレスを用意すべきだわ！」

「そう…、かな。私はよく知らないし。キュルケに任せる。」

さすが、キュルケ。社交界の全てを知る女。

私は人との付き合いが苦手だし、ロティとキュルケ以外の友なんていないけど、ロティにはもっというんな人たちと楽しく生きてほしい。それなら、私の意見よりキュルケの意見に従うのがいい。

「お客様、あの方ならこれくらいは着こなせると思います。」

「昨年のロティのドレスを仕立てたのはあなただって聞いたわ。今度も腕を見せて頂戴。」

「はい。でも…、以前のドレスを持って下されば、それを仕立て直すのが一番良かったはずですが…。なにせ、アルビオンの最高級のウールですので、もうそんな布なんて見る機会もないと…。って、あの、お客様？」

不思議。

もう一年もなっているのに、まだ涙が出てくる。

キュルケの方を見ると、彼女もつらそうな顔になっている。

もし、あのとき私たちがもうちょっと周りに気を配っていたなら、

怒りに身を任せていなかったら……。

守れなかった記憶は、もう過去になっていた。
今からでは、いくら頑張っても変えることが出来ない。
そうやって時折、後悔と痛みだけが私を苦しめる。逃げて、逃げて、追いつく猟犬のように。

でも、そんな酷いことをされたロティ、本人は何も言わなかった。
治癒のために三日も会わせてもらえなかった私たちは面会許可が出るまで直ぐ彼女の所に駆けつけた。
何を言えいいのかは分らなくても、伝えたいことだけはいつぱいあった。

でも、それは彼女の姿を見た途端に消え去った。

蘇るのは、初めての任務での惨事の記憶。

包帯にくるくる巻かれている彼女の痛々しい姿はぞっとするくらいだった。

マントの隙間からちらついてたあの白い足も、いつも土の匂いがした小さな手も、微笑んでくれたその小さな唇も、優しい春風のような瞳も。

無事な所なんて無かった。

『あまりジロジロ見ないでください。はづかしい。痛たた……。』

…、もう思い出すのはやめよう。

気持ちが悪くなるだけ。いまは来週の舞踏会の事を考えよう。

「布は心配しないで。私はよく知らないけど、屋敷から貰って来たのがある。」

サテンとか言っただけ、恥ずかしいことに私はそう言うことには疎い。

でも、ペルスランから持って行きなさいって言われた。それほど悪い品ではないはず。

「これもまた、凄い…。お客様方って、織物の流通関係の方ですか？」

仕立屋が目丸くしている。

よかった、いいものだったみたい。

布の価値なんてどうでもいいが、ロティにあげるのだからそこら辺の物よりはいいもので作りたい。

「キラキラしてるね。これが好きな男ってかなりいるわ、ロティに彼氏が出来ちゃうかも知れないわよ？ タバサはそれでもいい？」

「……、仕方ない。」

「なになに？　なんでそんなに泣きそうな顔？　冗談よ、冗談。ロティはまだあたしたちの友でいてほしいしね？　彼氏が出来て何処か遠くに行つてほしくないよね。むしろあんたがロティの彼氏だよね。」

「わ、私は何も言つて無い／＼／」

キュルケは本当にいたずらっ子。困っちゃう、本当。

□ < > □ < > □ < > □

「ね、眠いわ……。こんなに疲れるまで針仕事したのは初めてだわ……。」

「お…、お客様方…。大丈夫ですか…。」

「寝たい、警戒任務五日に相応する疲労。」

「きゅいきゅい…、姉さまは意地悪なのね…。使い魔を酷使しすぎ！
もう訴えてやるのね…。」

夜更かしなんて肌によくないのに！

でも、仕方なかったわ。どうしても次の虚無の曜日まではドレスを仕上げたかったもの。

一着なら、まあ、この人たちに任せてもいいけど、今度はあたしのドレスと、タバサのドレスもあるから負担が多かったみたい。

一日中こんな薄暗い作業室で裁縫をしていたおかげかしら、目がかすんでよく見えないわ…。

「でも、お客様。これ以上は本人がいないと進めません。むしろ本人なしに仮縫いまで終えたのが不思議です。」

「……、やはりそうかしら？」

「はい。せめてダエグの曜日までは一度だけでもここにお訪ね頂きたい所です。」

「うん…、それまであの意地っ張りを説得しなくちゃならないのね？
難しいわ…。」

実は今の所、まだ一度も意地を張る彼女に勝てたことがないわ。

ロティって弱いイメージがあるじゃない？

あたしも始めてはこの子を引っ張っていいこうと思ったわ。

でも、一緒に過ごすうちにうすうす分って来たことがあるの。

ロティって、他人の言葉は全然聞いてないの。

いいえ、聞いてないと言うよりは、他人の言葉が効かないだけかも。

勿論、友達であるあたしたちの言葉は聞いてくれるけど…。

自分に不利な事とか、自分の意見がはっきりしている時などは絶対自分の意見を曲げないのよ。

特に、その放浪癖のことはいくら言っても全然治らないわ。

今まで田舎に閉じ込められた反動なのか、事あるごとに消えていなくなるの。

例えば昨年冬のことだわ。

ある日、突然何も言わずに一週も行方不明になったロティが帰って来た時よ。

あたしは、今度こそしつかり叱っておこうとロティの部屋に行ったの。

『ロティ！ まだ一人で遠くに行ったって！』

『いやはや、カニを食べてきました。お土産に持ってきましたよ？ ちょうど茹であがったところです。』

彼女は大きなカニをハサミで切っていたのよ。

人が心配して探していたのに、その本人は何ともない顔して戻っていたから、あたしはそんな呑気なロティに腹が立ったの。

『ロティ！ あたしは、あなたが心配で！！！』

『キュルケさん、知ってますか？ カニってとっても美味しいんですよ？ 殻は私が剥いてあげますからね、ちよきちよきですよ』

『ロテシア！ あなたって弱いのに！ いつも心配だけ掛けて、いつも傷ついたり、ボロボロになったり！！！』

『そう言えば、このタラバ蟹のことですけど、何で北海から取れるのでしょうか……。太平洋が原産地じゃ無かったかな？ あ！ 綺

麗に出来た。』

『……。』

全然効果なし。

気が抜けちゃうほど無邪気な子なのよ。

まあ、こう言うところはちよつとむかつくけど…、満面に頬笑みを浮かべてカニを差し出す彼女にどういえばいいの？

もう、一人で怒るあたしの方が馬鹿みたいになってしまうわ。

『はい、あ〜んして下さい。食べさせてあ・げ・る（はーと）』

『もう…、いいわ。あ〜ん。』

『美味しいでしょう！ そうでしょう！』

『…、美味しいわ。涙が出ちゃうね。』

それでも、あたしはいつも怒るわ。

あたしを置いて一人に消えてしまう彼女のことを。

無駄でも、あたしはいつも心配するわ。

いつも勝手に傷つく彼女のことを。

それが、ロティを友として受け入れてしまったあたしに課せられた義務だから。

最近はね？ あたし、ロティを見つけ出すのが上手になって来たわ。

そして、ロティが無事かも別れるようになったのよ。花たちの状態とか、スクスクの様子とかだね。

「眠らせて、連れてくるとか？」

「タバサ…。それは駄目でしょう？ 力加減を間違えば一週は眠り姫になってしまうわ！」

「（拉致はいいんだ……。）」

ああ、どうしようかしら。

きつと、いやだと駄々をこねるのよ。いつそタバサの言葉通りに眠らせて連れて来る？

「あたしたちはもう戻るわ。その日まではどんな事してもつれて来るから、それまでに他のことを仕上げて置いて頂戴。」

「かしこまりました。」

仕方ないわ。縛ってでも連れて来るしかないのね。

タバサも説得を手伝ってくればいいんだけど、タバサはロティに弱すぎるし…。

あ！ そうだわ！

ルイズがいたよね！ なんだかんだ言っても仲良さそうだし。

ルイズにも説得を手伝ってもらったらどうかしら。

そして、最後にはメイドよ。あのメイドが後押しをしてくれば、あるいは…。

□

< >

□

< >

□

< >

□

夢を見たわ。

一時間だけの睡眠で夢まで見るなんてどれだけ疲れていたのだよとか言いたくもなるけどね。

でも、そんな短い時間でも、私は夢を見たわ。

とっても不思議な夢だったの。

まるで自分の中で他の誰かがいて、それが遠くの所で起きている事を見せてくれるそんな感じだったの。

古い記憶をたどっているそんな懐かしさがあるそんな夢だったの。

広い丘に植えられた香柏の夢。

それはとつても高く、とつても美しかったの。

麗しき枝の影は全ての丘を覆い、その頂は雲に隠れて見えないほど大きかったわ。

その枝葉には鳥が宿り、その枝の下では全ての獣が子を生み、諸々の国々がその陰に住んでいたの。

楽園^{エデン}の木々さえも羨むその姿は、私を魅了したわ。

でも、私は気付いたの。この木は神に憎まれていて、もうすぐこの木は無残に切り刻まれる運命だと。

だって、遠くから、残酷な神の使徒が群がってくる姿が見えるの。

でも、私はその運命がいやだったわ。

だから、抗うことにしたの。その強面の異邦人の軍隊の前に立ち、両手を広げて彼らを止める。

『この木を切らないで！ 傷つけないで！』

でも、私の意識はそこで途切れてしまったわ。

夢の意味を反芻する暇もなく、私は夢の世界から現実へと引きずり出されたの。

「ルイズ！ 起きなさい！ ああ！ もう、こんな時に限って早寝してるなんて！」

「キュルケ、ちょっと退いていて。魔法で目を覚ませる。」

「だめよ！ 今のあなたは魔法の加減が出来ないでしょう？ ルイ

ズをぶっ飛ばしたらどうするの!」

体が揺らされて、私は眠りから覚めたの
目を開けて見ると、そこにはキュルケがいたわ。
その横にはクラスーの不思議少女タバサもいた。
二人とも目の下に大きなクマを作っているけど…、どうしたのか
しら。

「ルイズ! 起きなさい! ルイズ!」

「う……、うるさい。キュルケ。」

「寝ぼけている暇なんてないわ! 早く言って! ロティ、ロテ
イは何処? 何処に行ったの?」

でも、その様子はいつもと違い、酷く焦っている感じがしたの。
でも、私はついさつき眠ったばかりの頭はなんだかぼつとしてい
て考えがまとまらないわ。

ロテシア? あの子はシエスタを助けに…。

「ロテシア? 多分メルフォゼ伯爵の所にいるんじゃない?」

「そんなはずないわ! 彼は出張中よ! トリスタニアにはいな
いわ!」

「え?」

どういうこと? ならロテシアは何処にいるの?

「うそ! 虚無の曜日の朝だつて見たのよ?」

「だから、その道でガリアに行ったんだわ!」

「だって、あの黒髪のメイドがモット伯爵の妾になることになっ
て、ロテシアは…。」

「モット? 誰?」

あ、そうか。キュルケはゲルマニア出身だからトリステインの貴族についてよく知らないんだ。

実は、モット伯爵って印象が薄いから私もよく知らない人なのよ。派濤とかの二つ名を持つているけど、所詮水のメイジは治癒以外の分野で目立たないし。

「そうよ。昨日の朝から見かけなかったの。でも、ロテシアって何も言えずに消える事が多いじゃない？ だから…。」

「違うわ。これはちがうのよ！ ルイズ！ ロティが危険だわ！」
「なんでそんな事が分るの。」

ちよつと、むつとしたわ。

まるで、私はロテシアの身を案じないみたいじゃない。

私も心配はするの。でも、ロテシアを拘束したくないから、ロティが何処に行こうと止めたくないのよ。

それなのに、キュルケはいつも自分だけがロテシアの保護者でもなつたつもりでいる。

ちよつとむかつくわ。

その時、後ろのタバサから声が聞こえて来たの。

語調は平坦そのものだったわ。

「スクスクが泣いていた。」

泣く？ スクスクって泣くの？

そう言えばそんな光景をどこかで見たことがあるような…。

そう！ 昨年の頃だったわ。

私が初めてロテシアと話し合えるようになって、夜の魔法練習のあとに彼女の部屋にお訪ねしたの。

『ロテシア、なんであの立木は傷もないのに樹液が出ているの？』
『へへ、恥ずかしながら、私の使い魔は私に栄養を送り続けています。だからいつぺんに多くの栄養分が必要な時にはあのように樹液を出してですね、それで虫たちを誘き寄せて溶かすのです。』

スクスクの枝には琥珀の色の樹液が、実りのように丸くなって付いていたわ。

私がちょうど触ろうとした時のことだったから、私は慌てて手を隠したの。

『溶かすの？』

『はい、この樹液は粘つくし、強酸ですから虫たちがこれに触れると直ぐ溶けて栄養分になってしまいます。』

『怖いね…、触りたくないわ。肌が腫れるじゃない。』

『違いますよ。いつもじゃありません。私が大けがをしたときだけです。多分これからは見ることもないでしょう。』

そう言いながら、彼女は鏡に映る自分を指差したの。

『そう…、だったの。治療の一環だったよね。』

『えへん、スクスクが枯れない限り、私は絶対死ぬ事無いですよ。』

『ばか。そんなことは言うのではないの。』

だったら…、今のロテシアはあの時のように傷ついているってこと？

「キユルケ！ 私も連れて行って！ お願い！」

「寝ぼけている人にかまっている時間はないわ！ 一秒が惜しいのよ！」

「あんたらモット伯爵の邸宅を知らないでしょう？ 探すのに時間かけるくらいなら、私が案内するのがはいわ！」

□ < > □ < > □ < > □

塔から下りて、俺はすぐ自分の部屋に入った。

周りの景色がうまく見えなくて、幾度も家具にぶつかり、そのたび怒って周囲のモノに八つ当たりをした。

なんだ…、頭がくらくらする…。

喉はからからだし、目が痛い。眼に砂でも撒いたようだ。

部屋にも戻ると、そこにはあやつがソファアに座っていた。

自分のものであるように自然にあしをテーブルに乗せて本を読んでいた。

俺が部屋に入ると、彼は俺の方も振り向かずと言った。

「伯爵、君には失望したぞ。君ならいい声を聞かせてくれると期待したのに…。平気で笑っているじゃないか。」

なんだ？ こいつはいつから俺の上官になったんだ。

俺はトリステインの伯爵、モットだぞ！ 誰が俺に文句を付けれると言っんだ！

「仕方ないだろう！ これ以上は本当に後が危険だ。こんなことになったのだって、君が記憶を操れると言っからやったことだぞ？」
「全く…。意気地なしだな。わかった。君のくそつたれ塗れの脳にも理性はあったようだな。」

本を閉じ、彼は立ちあがった。

そして今まで見ていた本をまるでゴミのおように投げ捨てる。

「なあ。モット伯爵。ここまで来たのだ。振り返られない。君も分っているだろう？」

「でも、本当にこれ以上は…。」

「分った。いいから俺の目を見る。」

緑の瞳。これはあのメルフォゼ嬢の瞳と同じだった。でも、なんか違った。

メルフォゼ嬢の瞳からは憎しみが無かった。あんなに痛みつけても、彼女の瞳は何も恨んでなかった。

だが、この瞳は俺に狂気を強制する。目を通して侵入してくる狂気が頭に住み着き、こう叫び始める。

『母を苦しめろ。俺たちの生んだ母を苦しめろ。』

「うつ！ くはっ！！」

「そうそう。彼女を愛するんだ。伯爵、『彼女』を奏でてくれ。」

「――！！！！」

メルフォゼ嬢…、に、痛み、苦しみ、叫び、悲鳴。

「分っただろう？ そうなんだ。君の懐勘定なんて全くくだらないものばかりじゃないか。」

「俺は…、憎らしいメルフォゼに勝って、宮廷の実権を…」

「違うんだ。そんなのは俗物が望むものさ。君はこれから崇高なモノのために生きるんだ。分った？」

彼女、肌を刻み、骨を砕き、悲鳴を奏でる。

俺は…。

「僕を満足させてくれるなら解放してやろう。分ったかい？」

「……………」

「さあ、戻れ。塔の牢が君の帰りを待っているんだ。」

彼はそう言い残して俺の前から姿を消した。

そして、悪夢が終わったように頭の霧が晴れて来る

「俺って何しに帰った？ そうだ。まだ戻らなくてはならない。時間は無限じゃないからな。ふふふ……………」

□

< >

□

< >

□

< >

□

一時間後に戻って言ったモット伯爵は、十分で帰って来ました。私は慌てて彼女から退きました。

ロテシアさんがそう言ったからでしょうか？

でも、違うと思います。私はただあんな拷問を受けたくないだけです。

「そんなに私が恋しかったですか？ モット伯爵？」

「ふふふ…。その頬笑みがなんかイライラすると思ったら、今わかった。その頬笑みってジェロームとそっくりだったな。」

「……、なにがありましたか。」

「いつも、俺を見下ろして……。そんな頬笑みで……。」

でも、なんか違いました。

その雰囲気はなにかに惑わされているような濁ったもので、今までとは違い凶悪な殺意が伝わってきます。

「考えて見たか？ 答を聞こうじゃないか。」

「拒否します。」

「そうか。そうか！！！！ ははは！！！！」

哄笑。

耳が痛くなるほどの笑い声が部屋に響きました。塔の隅々まで響きました。

私は怖くなって部屋の隅に逃げてしまいました。

少しお漏らしをしたかも……。

でも、今のロテシアさんは、天井から垂れている鎖に繋がられているせいで逃げる事は出来ません。

ただ正面から吐き出される悪意の嵐を受けばかりです。

ロテシアさんは精一杯強がっていますけど、もう体の震えが目に見えるほどになっています。

「小娘が……。こっちが下手に出るから調子に乗って。」

「……。」

伯爵の手がロテシアさんに伸びました。

その手はロテシアさんの白いブラウスを掴み、そして力任せで裂きました。

「ひっ！」

「今の、君の状況を理解しているか？ 君はここで、伯爵令嬢じゃないんだ。ただのメスにすぎない。」

「あ、あの…。」

「黙れ。」

パ——ン

「あ……。」

「痛いだろう？ さっきは加減をしていたんだ。」

ロテシアさんはすっかり怯えてしまつて、ブルブル震えるだけです。

伯爵の手はそれから彼女の服に八つ当たりでもするようにびりびりと引き裂きました。

あっという間に、彼女は全裸になって、天上にぶら下げられました。

「肌が綺麗だな。肌理が細かく、柔らかい。」

「勝手に見ないで…。」

「でも、これじゃポイントが足りない。綺麗だけじゃつまらんだろう？」

そう言いながら伯爵は何かを懐から持ちだしました。それは鞭でした。

鞭って言っても乗馬用の短いモノではなく、あからさまに拷問用の鞭でした。

柄からいくつもの皮の紐が取り付けられています。

「……、なんで持っているのですか、そんな道具。」

「こんなこともあるうかと思ってな。くくく」
「変態。」

でも、彼の答は言葉じゃ無かった。
ただその怖い鞭を彼女の素肌に向かって振り下ろすだけでした。

「……………!!!」

言葉にならない悲鳴が、部屋を満たしました。
彼女の腹にはまるでミミズのような赤いはれがいくつも出来ました。

いつも、私が洗ってあげた綺麗な体。
赤ちゃんみたいに柔らかくて、湯船から上がった直後には薄紅色になる、その肌が…。

「そうだ！　これが正しい反応だ。」

「あ、ああ、あああああ！！！！」

「女は、こうだ！　女は男になり損ねた欠如品でしかない！　だから、家畜と一緒にさ！　殴れば素直になる！　かはは！！！！」

「いいっ！　いや！　うぐううう！　ああ！！！！」

空気を切り裂く破裂音を出しながら、伯爵の鞭が彼女の素肌を犯す。

ロテシアさんの声はもう、悲鳴にも聞こえない、ただの嘆きに変わりました。

白かった肌から血が滲みだしてきます。

シエスタ。どうすればいい？

待つだけ？　誰かが来るのを？

あなた、あの子が好きだったじゃない。

貴族なのに、まるで自分の子供みたいに懐いてくるあの子がいとしくてたまらなかったじゃない。

「はあ…、はあ。ふふふ。綺麗になつたじゃないか。」

「もう、やめて…。なんでこんなひどいことするの…。もうやめて…。」

「そうはいかない。さすが君の悲鳴は心地いいな。あいつが言った通りだ。うん？ あいつ？ 誰のことだ、それは…。」

ロテシアさんはもう泣いていました。

まるで子供のように泣いて嫌がる彼女を、伯爵は無情に打ち続け、もう鞭を振り下ろすたびに血が飛散し始めます。

私はめを閉じてしまいました。

でも、それじゃ余計にあの悲鳴と鞭の音が怖くなって、体の底から震えて来るのです。

シエスタ！

あの子をそのままでもいいの！ 本当にあれでもいいの！

仕方ないよ…。

私はメイドだもん。弱いから駄目です。

違うの！

あの子はあなたに被害がいかないように必死に自分が全ての痛みを受け入れているのよ！

あんな小さな子に守られているだけ？ それでもいいの！

仕方ないです…！

わたしも！ 私にも力があつたら！

「痛いです…。痛いです…。ふえええ…。」
「一言だけでいい。俺のものになるって誓え。」
「それはいやです…。おやじに嫁ぐなんて、いやです…。」
「本当に意地っ張りだな。ふっ！」
「――！」

糸目をしてロテシアさんを覗きます。
そして、すぐ後悔しました。

体中から血を流し、痛みにびくびくしながら打たれ続けている彼女…。

私は、失神しそうになるのを必死に我慢しました。

なにか、出来る事。
私が彼女を守る方法。
何か！ 何か！ 何か！

でも、私は気付いて無かったのです。
そう思っているうちに私の体は隣にいる何かを掴んでいた事を。
そして、これを伯爵の頭に…。ふりおろ…。

ドーーーーカン

その瞬間、轟音が外から聞こえてこなかったら、私は、人を殺してしまっただけかもしれません。

□ < > □ < > □ < > □

「な、なんだ！ この音は。」
「……、やっと来てくれましたか。」

轟音。

何かが砕けるようなそんな音が聞こえます。

そして感じられる寒気。

ドアの隙間から懐かしい風が吹いてきます。
希望の薫りを乗せた涼しい風は、傷から出る熱を冷ましてくれました。

「モット、伯爵。私の、勝ち、ですね？」
「ふう……。認めよう。俺の負けを。」

信じてましたよ。タバサさん。

私はお姫様ではないけど、あなたは王子様の資格がありますからね。

いつものように格好よく現れ、私をピンチから助けてくれると信じていました。

「そう、でしょ？ ざ、ざまあ……。見なさい。私が勝ったんですから。」

「でも、それが君の勝ちになる訳じゃないんだろう？」

「……。」
「こう言うことだよ。君の友達が君を見つけ出せないと俺は負けな
いうてことだ。」

ああ……。なんとなく分りました。
こんな階段もない高い塔の最高層の部屋に私たちを押し込んだ理

由がそれですか。

「俺はちよつと君の友達に会ってくる。それまで大人しくしている。わかったか？」

でも、あなたはまだなにも分つてません。
いくら私を閉じ込めようと、あなたの負けは確実です。

「ラプンツェルが大人しく塔に座っているだけとは思わないことです。」

十二話 二人のラプンツェル（中）（後書き）

「浴場の二人」

ロティ：「きゃあ〜何してるのですか〜」

キュル：「うん〜。値踏み？」

ロティ：（浴場から逃げ出すロティ）「さようなら、いままでありがと〜」

キュル：「冗談！ 冗談だから！」

「ハルカ姉さまが恥をかかないように頑張りました！」

ああ…。三人のキャラがめっちゃくちゃになっていく…。

「ほんしゅす」

キラキラする。

「裁縫の実力比較」

シエスタ：S + （トレビアン！）

ロテシア：B （練習あるのみです）

キュルケ：A （繊細な仕事が素晴らしい）

タバサ：B + （もう少し、仕上げに気を付けましょう）

ロングビ：A （よくできました）

サイト：C + （男だしいんじゃないでしょうか）

ルイズ：D （再受講禁止です）

「タラバ蟹」

原産地は北太平洋。

北海にもいるみたいですけど、それは人為的に放流したそうです。

「香柏」

Ezekiel, Chap 31.

「クヌギの樹液」

クヌギの樹液には多くの虫が集まります。

でも、それは集まる虫を獲ろうとするとある虫の所為だそうです。まあ、このスクスクは自分で樹液を出していますけど。

「緑の眼」

今のところ、自分の思いを相手に強制するって事だけが顕わになりました。

「鞭」

後で分ったんですけど、キャットオブナインテイルと言うらしいです

「筆者」

すみません。今度は9500字くらいです。

思つのですが、戦闘とか、盛り上がるシーンを上手く表現できる人ってすごいと思います。

時間も切迫していたんですけど、これ以上に緊張感ある場面を書けなくて遅くなりました。

さすが、話を広げすぎたかもしれません。

一巻の終りの辺りで全てをまとめるのがいいかもしれませんね。

追伸 09/28>

すこしロテシアの態度を変えて見ました。

あまり周りの空気と合わないと思いを貰いました。

私自分も痛感していた部分だったので、修正することにしました。
本来書きなおすのが一番ですけど、そんなことしたら今週は新しい話書けません…。

これから意見があつたら仰ってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5525m/>

蓮華はいつも泥沼に咲く

2010年10月10日22時35分発行